

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第136集

伽
羅
橋
遺
跡
Ⅲ

高石市

伽羅橋遺跡 Ⅲ

都市計画道路高石北線整備事業に伴う発掘調査報告書

二〇〇五年九月

財団法人
大阪府文化財センター

2005年9月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第136集

高石市

伽羅橋遺跡 Ⅲ

都市計画道路高石北線整備事業に伴う発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター



調査地遠景（東から）



平成13年度調査区（西から）



平成16年度調査区（南西から）



平成16年度調査区 第2面・第3面（東から）

序 文

伽羅橋遺跡は大阪府高石市高師浜に位置し、古来より、その風光明媚な景観が和歌に詠まれている高師浜から、少し内陸に入った羽衣砂丘上に立地します。本遺跡は1955（昭和30）年に発見されたのち発掘調査がおこなわれ、関西における中世遺跡調査の嚆矢となった遺跡です。

今回報告する調査は、都市計画道路高石北線の整備事業に伴い、平成13年度および平成16年度に当センターが実施したものです。平成13年度の調査では、中世のピット群をはじめ、井戸・土坑など多数の遺構が検出されました。また、土器も多量に出土し、中世集落における生活の一部を窺い知ることができました。

平成16年度の調査では、13年度の調査に引き続いて井戸・土坑などを検出し、これまでに見つかった中世集落の縁辺部の様相が明らかになりました。さらに、弥生時代の方形周溝墓を検出し、この周辺で当時の墓域の存在が判明したことも大きな成果といえます。

伽羅橋遺跡周辺は、近年の市街地化によって、かつての面影を見つけ出すことも困難になってきています。今回の調査成果が過去の記録を留めただけではなく、当地域の歴史を解明していく上で貴重な資料を提供し、地域史解明の一助となれば幸いです。

最後に、今回の発掘調査及び遺物整理事業の実施に当たって多大な御協力をいただきました大阪府鳳土木事務所、大阪府教育委員会、高石市教育委員会、地元自治会をはじめとする関係者各位に深く感謝申し上げますとともに、今後とも当センターの文化財事業に一層のご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成17年9月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は、大阪府高石市高師浜1丁目に所在する、伽羅橋遺跡の発掘調査報告書である。平成13年度と平成16年度の発掘調査が該当する。当センター既刊の第63集・第70集の続刊であり、伽羅橋遺跡の報告書としては、3冊目にあたる。
2. 調査は、都市計画道路高石北線整備事業に伴い、大阪府鳳土木事務所から財団法人大阪府文化財センター（平成13年度まで財団法人大阪府文化財調査研究センター）が平成13・14・16・17年度の4年度にわたり委託を受けた。委託期間は「伽羅橋遺跡発掘調査（その4）」が平成13年7月10日から平成14年2月28日、「伽羅橋遺跡発掘調査（その5）」が平成14年5月1日から平成15年2月28日、「伽羅橋遺跡発掘調査（その6）」が平成16年6月1日から平成17年2月28日、「伽羅橋遺跡発掘調査（その7）」が平成17年6月16日から平成17年9月30日である。調査期間は、平成13年8月8日から平成14年1月18日と、平成16年6月18日から平成16年8月31日である。整理期間は、平成14年5月1日から平成15年2月28日と、平成16年6月1日から平成17年2月28日、平成17年6月16日から平成17年9月30日である。平成17年9月30日、本報告書刊行をもって完了した。
3. 調査は、以下の体制で実施した。
 - 平成13年度 調査部長井藤 徹、南部調査事務所長瀬川 健、調査第一係長橋本高明、技師田中一廣〔現地調査〕、主任技師立花正治〔写真〕、調整課長赤木克視、調整係長森屋直樹、設計係長藤原秋利
 - 平成14年度 調査部長玉井 功、南部調査事務所長渡邊昌宏、調査第一係長橋本高明、（遺物整理）技師田中一廣〔整理作業〕、主任技師立花正治〔写真〕、調整課長赤木克視、調整係長森屋直樹、設計係長山口和男
 - 平成16年度 調査部長玉井 功、南部調査事務所長藤田憲司、調査第一係長岡本敏行、主任技師井藤暁子、技師河端 智〔現地調査・整理作業〕、主任技師立花正治〔写真〕、調整課長赤木克視、調整係長森屋直樹、主査山上 弘、設計係長山口和男、主査鈴木芳則
 - 平成17年度 調査部長赤木克視、南部調査事務所長藤田憲司、調査第一係長岡本敏行、技師河端 智〔整理作業〕、主任技師立花正治〔写真〕、調整課長田中和弘、調整係長芝野圭之助、主査山上 弘、設計係長松元政美、主査鈴木芳則
4. 調査の実施にあたっては、地元自治会をはじめ、下記の方々にご指導とご協力を賜った。記して謝意を表したい。

宇田川誠一（高石市教育委員）・神谷正弘（高石市教育委員会）・鋤柄俊夫（同志社大学）・辰巳和弘（同志社大学）・藤本史子（大手前大学）・堀内和明（大阪府立堺西高等学校）・森村健一（堺市立埋蔵文化財センター）・若林邦彦（同志社大学）〔50音順・敬称略〕

5. 本書の作成においては、整理作業担当の田中（平成 15 年度退職）に引き続いて、南部調査事務所調査第一係主査村上富喜子が整理作業に当たった。しかし、引継ぎの際に混乱が生じた為、遺構・遺物について確実なもののみ報告することとなり、平成 13 年度調査については橋本・村上が担当した。また、平成 16 年度については河端・井藤が担当した。執筆分担は目次に示したとおりである。なお、第 3 章 第 2 節 第 2 項 瓦埴については、当センター南部調査事務所調査第一係主査黒田慶一、第 5 章 分析については奥田 尚氏（奈良県立橿原考古学研究所）によるものである。
6. 本書の編集は、河端がおこなった。
7. 本調査に関する写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構図の基準高については、東京湾平均海水位（T.P.）からのプラス値であり、すべて m 単位である。
2. 遺構図の座標は、平成 13 年度調査については日本測地系、平成 16 年度調査については世界測地系（測地成果 2000）で表記した。それぞれ国土座標に則った平面直角座標系、第 VI 座標系に準拠し、表記はすべて m 単位である。
3. 遺構図に付した方位は、すべて座標北である。
4. 平成 13 年度調査については、旧（財）大阪府埋蔵文化財協会の『発掘調査規定』に則り、調査を実施した。平成 16 年度調査については、新たに作成した（財）大阪府文化財センターの『遺跡調査基本マニュアル』（2003.8）に則り、調査を実施した。
5. 土色に関しては小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』1998 年版 農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に準拠した。
6. 遺構番号は、それぞれの調査年度ごとに通し番号で設定している。これは、調査時に与えた遺構番号を基本的に踏襲するもので、必ずしも時代の新しいものから順ではない。また、平成 13 年度調査で使用した遺構の記号は OB：建物、OP：ピット、OW：井戸、OO：土坑、OS：溝、OF：柵・塀、OH：炉、OA：道路、OD：竪穴住居、OL：池・沼、OX：その他・不明である。
7. 遺物番号は、実測図掲載順の通し番号であるが、平成 16 年度調査については 2000 番代の番号を与え、別途設定した。図版にのみ掲載しているものは、それぞれ実測図の最終番号に続く番号を付した。
8. 本文中の用語、記載方法等においては、執筆者の考えを尊重してあえて統一していないところがある。
9. 図版の縮尺は統一していない。

目 次

序 文
例 言
凡 例

第1章 調査に至る経緯と調査の方法…………… (河端) ……………	1
第1節 調査に至る経緯……………	1
第2節 調査の方法……………	3
第1項 平成13年度調査……………	3
第2項 平成16年度調査……………	4
第2章 位置と環境…………… (河端) ……………	5
第3章 平成13年度の調査成果……………	7
第1節 遺構概要…………… (橋本) ……………	7
第2節 出土遺物…………… (村上) ……………	29
第1項 土器……………	29
第2項 瓦A…………… (黒田) ……………	78
第3項 土製品……………	86
第4項 石製品……………	89
第3節 小結…………… (村上) ……………	97
第4章 平成16年度の調査成果…………… (河端) ……………	99
第1節 基本層序と遺構面……………	99
第2節 遺構……………	101
第1項 第1面検出遺構……………	101
第2項 第2面検出遺構……………	106
第3項 第3面検出遺構……………	109
第3節 出土遺物……………	113
第4節 小結……………	119
第5章 分析…………… (奥田) ……………	121
砥石・根石等の石種と産地同定……………	121
第6章 まとめ……………	129
第1節 遺物からみた伽羅橋遺跡…………… (村上) ……………	129
第2節 歴史史料・資料からみた伽羅橋遺跡…………… (井藤) ……………	133
第3節 総括…………… (河端) ……………	138

挿図目次

図 1	調査地位置図	1
図 2	調査区位置図	2
図 3	平成 13 年度調査区	3
図 4	平成 16 年度調査区	4
図 5	遺跡分布図	6
図 6	1 トレンチ第 1 面全体図	9-10
図 7	1 トレンチ第 2 面全体図	11-12
図 8	1 トレンチ第 3 面全体図	13-14
図 9	2 トレンチ第 1 面全体図	15
図 10	2 トレンチ第 2 面全体図	16
図 11	遺構図 (1)	17
図 12	遺構図 (2)	18
図 13	遺構図 (3)	19
図 14	遺構図 (4)	20
図 15	遺構図 (5)	21
図 16	遺構図 (6)	22
図 17	遺構図 (7)	23
図 18	遺構図 (8)	24
図 19	遺構図 (9)	25
図 20	土器のタイプ分類	30
図 21	600・606-OW 出土遺物	39
図 22	615-OW 出土遺物 (1)	40
図 23	615-OW 出土遺物 (2)	41
図 24	616・658・665・696-OW 出土遺物	43
図 25	725・763-OW 出土遺物	45
図 26	745-OW 出土遺物	46
図 27	765・812・823-OW 出土遺物	47
図 28	824-OW 出土遺物	48
図 29	402～404・427・487・489・491・506・507-OO 出土遺物	50
図 30	513・515・583・584・595・619・620・653・667-OO 出土遺物	52
図 31	673・735・738・743・744・747・844-OO 出土遺物	54
図 32	821-OO 出土遺物	56
図 33	442・484・494・514・516～518・533・537・563・617・722・815-OP 出土遺物	57
図 34	505-OS 出土遺物 (1)	59
図 35	505-OS 出土遺物 (2)、845・846・852-OS 出土遺物	60
図 36	657・740-OS 出土遺物	62
図 37	860-OS 出土遺物 (1)	64
図 38	860-OS 出土遺物 (2)	65
図 39	731-OL 出土遺物 (1)	68
図 40	731-OL 出土遺物 (2)、840-OL 出土遺物	69

図 41	780・785・820・856-OX 出土遺物	70
図 42	770-OD、777-OO 出土遺物	72
図 43	512・778・779-OO、782～784-OS 出土遺物	75
図 44	705・781・822-OX 出土遺物	78
図 45	軒丸瓦（1）	80
図 46	軒丸瓦（2）	81
図 47	軒平瓦の成形技法	83
図 48	軒平瓦	83
図 49	丸瓦、平瓦	85
図 50	円板状土製品	87
図 51	土錘	88
図 52	サヌカイト	90
図 53	砥石他（1）	92
図 54	砥石他（2）	93
図 55	砥石他（3）	94
図 56	砥石他（4）	95
図 57	砥石他（5）	96
図 58	砥石他（6）	96
図 59	1 トレンチ南壁断面	99
図 60	2 トレンチ北壁断面	100
図 61	第1面平面図	102
図 62	第1面遺構図（井戸）	103
図 63	第1面遺構図（土坑）	104
図 64	第2面平面図	107
図 65	第2面遺構図	108
図 66	第3面平面図	110
図 67	第3面 17 溝	111
図 68	第3面 18 溝	112
図 69	7 井戸出土遺物	113
図 70	11 井戸出土遺物（1）	114
図 71	11 井戸出土遺物（2）	115
図 72	1 土坑出土遺物	116
図 73	19 土坑出土遺物	116
図 74	13 井戸出土遺物	117
図 75	14 井戸出土遺物	118
図 76	15 土坑出土遺物	118
図 77	10 ピット・17 溝・18 溝出土遺物	118
図 78	方形周溝墓配置図	120
図 79	伽羅橋遺跡出土遺物割合	130
図 80	他の遺跡出土遺物割合	131
図 81	高石正里復元図	135
図 82	遺跡概念図	139

図版目次

平成 13 年度調査

図版 1	伽羅橋遺跡周辺空中垂直写真	図版 15	瓦器椀 (5)	図版 33	弥生土器 (2)
図版 2	1 トレンチ 第 1 面 全景 1 トレンチ 第 1 面	図版 16	瓦器椀 (6)	図版 34	弥生土器 (3)
図版 3	1 トレンチ 第 2 面 全景 1 トレンチ 第 2 面	図版 17	瓦器椀 (7)	図版 35	弥生蛸壺 土師器蛸壺
図版 4	600-OW 検出状況 745-OW 検出状況	図版 18	瓦器椀 (8) 瓦器小皿 (1)	図版 36	円板状土製品 軒丸瓦 (1)
図版 5	606-OW 検出状況 615-OW 検出状況	図版 19	瓦器小皿 (2)	図版 37	軒丸瓦 (2)
図版 6	616・665・765・812-OW 検出状況 823・824-OW 検出状況	図版 20	土師質羽釜 (1)	図版 38	軒丸瓦 (3)、軒平瓦 (1)
図版 7	738-00 遺物出土状況 方形周溝墓状遺構	図版 21	土師質羽釜 (2)	図版 39	軒平瓦 (2)、道具瓦他 丸瓦 (1)
図版 8	2 トレンチ 第 1 面 全景 2 トレンチ 第 2 面 全景	図版 22	土師質羽釜 (3)	図版 40	丸瓦 (2) 平瓦 (1)
図版 9	土師器小皿 (1)	図版 23	土師質羽釜 (4)	図版 41	平瓦 (2) 埴
図版 10	土師器小皿 (2) 土師器大皿・椀・脚台	図版 24	土師質羽釜 (5)	図版 42	土錘 (1)
図版 11	瓦器椀 (1)	図版 25	土師質羽釜 (6)	図版 43	土錘 (2)
図版 12	瓦器椀 (2)	図版 26	土師質羽釜 (7)	図版 44	土錘 (3) サヌカイト他
図版 13	瓦器椀 (3)	図版 27	土師質羽釜 (8)	図版 45	砥石他 (1)
図版 14	瓦器椀 (4)	図版 28	瓦質羽釜、瓦質脚 瓦質羽釜、瓦質甕 (1)	図版 46	砥石他 (2)
		図版 29	瓦質甕 (2)	図版 47	砥石他 (3)
		図版 30	輸入陶磁器	図版 48	砥石他 (4)
		図版 31	黒色土器 須恵器		
		図版 32	須恵器蛸壺 弥生土器 (1)		

平成 16 年度調査

図版 49	1 トレンチ 南壁断面 1 トレンチ 第 1 面 検出状況	図版 56	2 トレンチ 第 1 面 12 土坑 遺物出土状況 2 トレンチ 第 2 面 全景
図版 50	1 トレンチ 19 土坑 断面 1 トレンチ 第 3 面 21 土坑 完掘状況	図版 57	2 トレンチ 第 2 面 10 ピット 遺物出土状況 2 トレンチ 第 2 面 13 井戸 羽釜検出状況
図版 51	2 トレンチ 北壁断面 2 トレンチ 第 1 面 全景	図版 58	2 トレンチ 第 2 面・第 3 面 2 トレンチ 第 3 面 17 溝 断面
図版 52	2 トレンチ 第 1 面 1 土坑 断面 2 トレンチ 第 1 面 2 土坑 断面	図版 59	2 トレンチ 第 3 面 18 溝 検出状況 2 トレンチ 第 3 面 18 溝 遺物出土状況
図版 53	2 トレンチ 第 1 面 6 土坑 断面 2 トレンチ 第 1 面 7 井戸 断面	図版 60	2 トレンチ 第 3 面 18 溝 遺物出土状況 2 トレンチ 第 3 面 18 溝 断面
図版 54	2 トレンチ 第 1 面 11 井戸 断面 2 トレンチ 第 1 面 11 井戸 大甕検出状況	図版 61	出土遺物 (1)
図版 55	2 トレンチ 第 1 面 11 井戸 大甕検出状況	図版 62	出土遺物 (2)
		図版 63	出土遺物 (3)
		図版 64	出土遺物 (4)

第1章 調査に至る経緯と調査の方法

第1節 調査に至る経緯

伽羅橋遺跡は、大阪府高石市高師浜1丁目に位置する(図1)。

当遺跡は、1955(昭和30)年に地元の学生によって発見され、その後、同志社大学の調査によって、関西における中世遺跡調査の嚆矢となった遺跡である。さらに、伽羅橋クラブや高石市教育委員会などによって発掘調査がおこなわれ、この付近には中世集落が存在することが確認されていた。

その地に都市計画道路高石北線の建設が予定され、平成10年には、大阪府教育委員会文化財保護課によって、路線予定地内にて試掘調査が実施された。その結果、本格的な調査が必要となった為、大阪府鳳土木事務所から委託を受けた財団法人大阪府文化財センターが、道路建設に先立ち発掘調査を実施することとなった(図2)。

過去の調査を概観すると、平成11年度には、「伽羅橋遺跡(その1)」(当センター報告書第63集:2001年)として調査が実施され、1100㎡の調査区では、砂堆上に形成された中世の建物跡や道路状



図1 調査地位置図 (S=1/25000)

遺構などの遺構が検出された。また、瓦等の出土遺物から寺院の存在が推定されたが、寺院に伴う遺構は明確には検出されなかった。

平成12年度には、「伽羅橋遺跡(その2)」(当センター報告書第70集:2002年)として調査が実施された。776㎡の調査区では、掘立柱建物をはじめ、井戸・土坑・落ち込み等が検出された。ここでは砂堆上に位置する中世の集落跡が検出され、その広がりを確認したといえる。調査区の東半では畦畔・溝等の耕作痕跡が検出され、生産域が展開したと考えられる。また、中世の遺構・遺物をはじめ、弥生土器も出土したことから、注目を浴びることとなった。

その後、平成13・14・16年度の3年度にわたり大阪府鳳土木事務所から当センターが事業委託を受け、平成13・16年度には、それぞれ発掘調査が実施された。本報告は、この調査成果に当たる。

平成13年度の発掘調査は、同年8月8日から翌年1月18日まで実施された。その後、次年度には引き続いて整理作業がおこなわれた。

平成16年度の発掘調査は、都市計画道路高石北線整備事業に伴う最終の調査にあたり、同年6月18日から8月31日まで実施された。その後、引き続いて整理作業をおこなった。

また、平成17年度において本報告書の作成がおこなわれ、これをもってすべての事業を終了した。

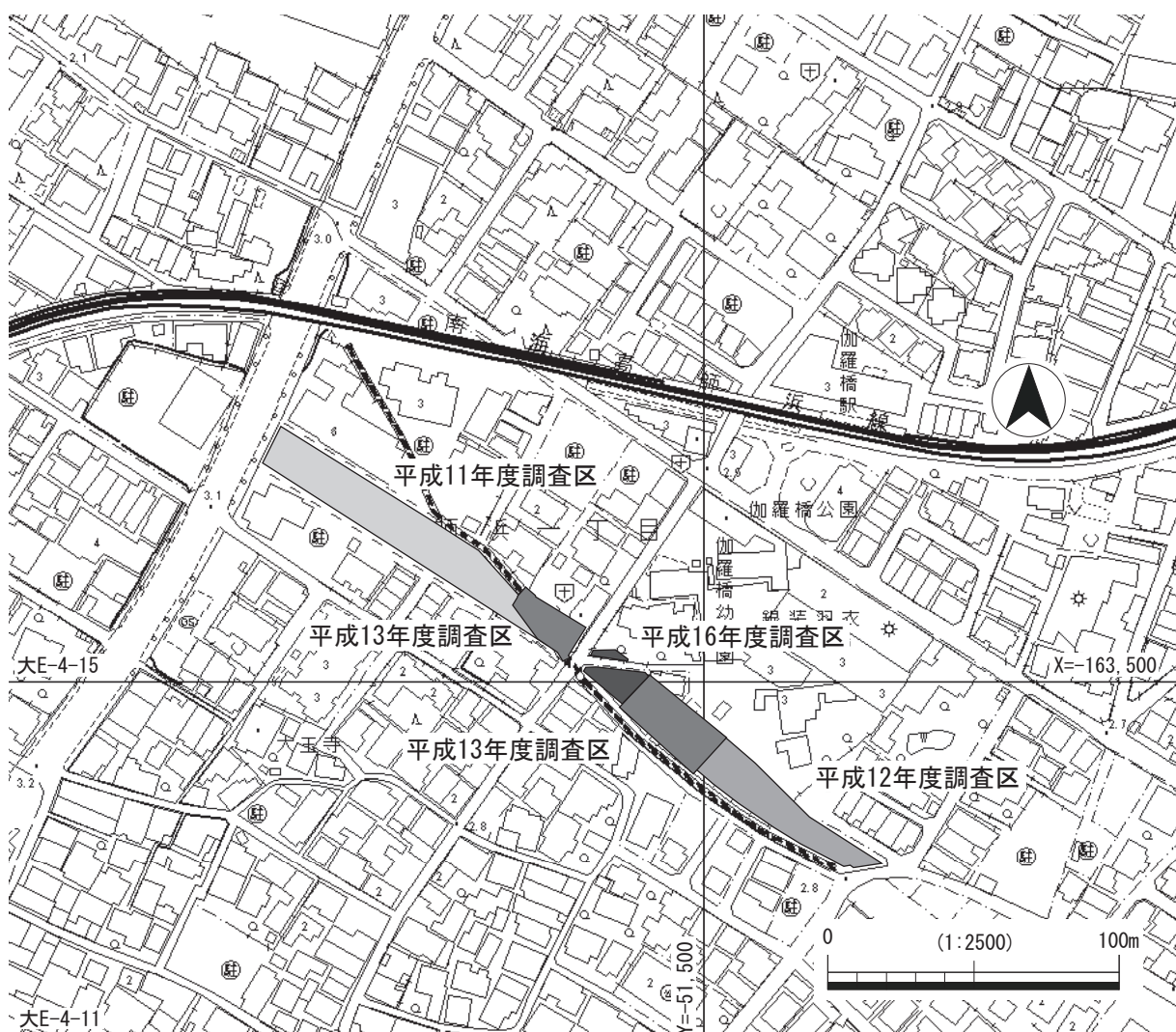


図2 調査区位置図(日本測地系使用)

第2節 調査の方法

第1項 平成13年度調査

平成13年度調査は、「伽羅橋遺跡（その3）」の工事名称でおこなった。調査区は、道路等を挟んで東側と西側に分かれており、合計2ヶ所にトレンチを設定して調査を実施した。そのうち東側を1トレンチ、西側を2トレンチと名称した（図3）。調査区の面積は合計745㎡である。

発掘調査実施に当たり、使用した測量座標は日本測地系による座標である。従って、調査成果の座標値は、いわゆる旧座標に対応するものである。

また、地区割の設定については、大阪府発行の地形図大E-4-11と大E-4-15を使用して実施し、最小一辺4mのグリッドを基本として設定した。

遺構番号については、平成13年度調査区内で通し番号を付した。遺構名称は、凡例に記載したとおり、旧（財）大阪府埋蔵文化財協会で規定した呼称法に従った。

遺物番号は、遺構番号と同じく、当調査区内で通して付した。

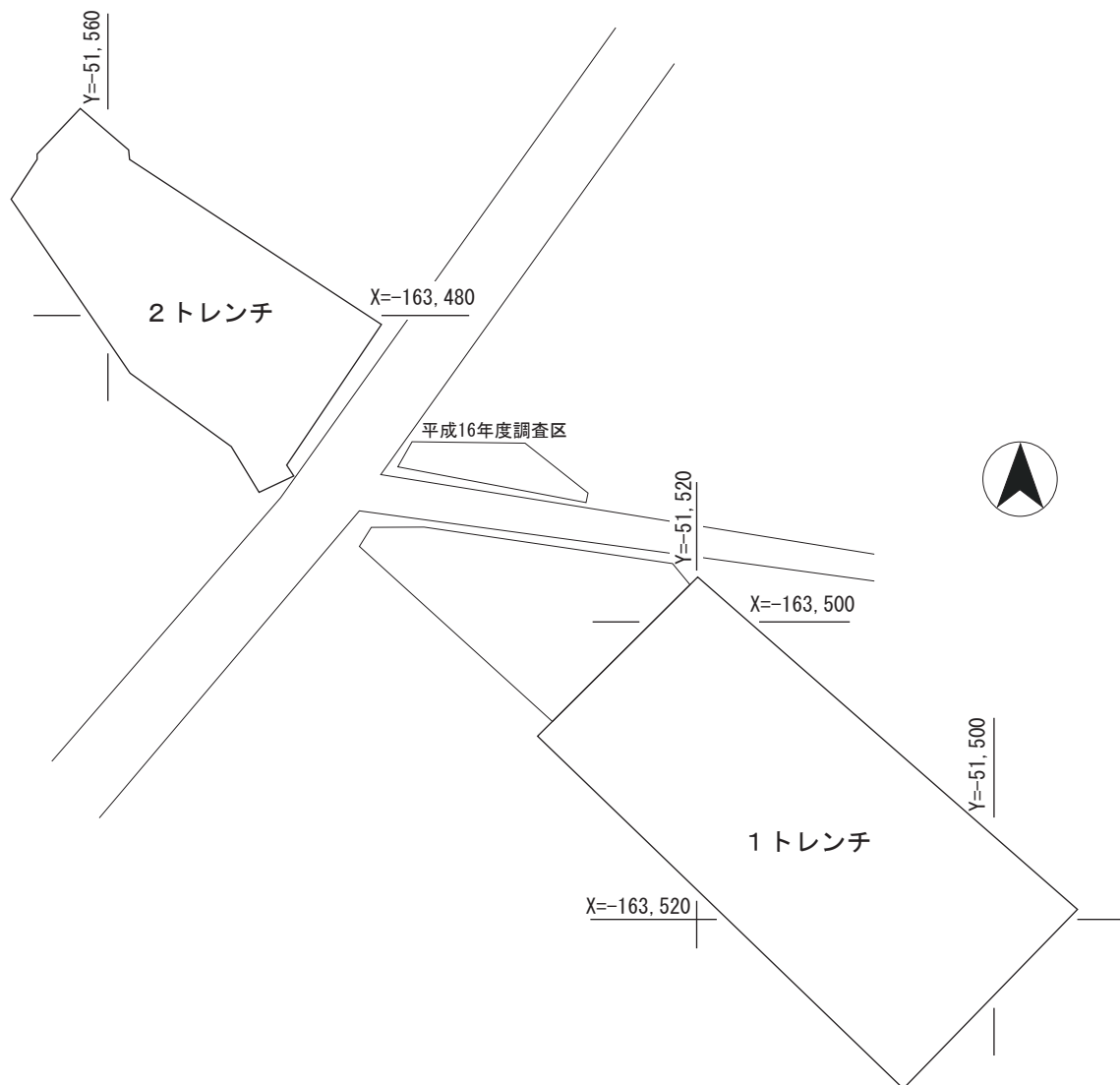


図3 平成13年度調査区 (S=1/500・日本測地系使用)

第2項 平成16年度調査

平成16年度調査は、「伽羅橋遺跡（その4）」の工事名称でおこなった。

調査区は、平成13年度調査区に挟まれたエリアに位置する。調査地内には私道が通っていた為、その北側と南側の2ヶ所に分けてトレンチを設定し、そのうち北側を1トレンチ、南側を2トレンチと名称して調査を実施した（図4）。調査区の面積は合計144㎡である。

平成16年度調査で使用した測量座標は、世界測地系（測地成果2000）による座標である。従って、調査成果の座標値は、いわゆる新座標に対応するものであり、平成13年度調査で使用した座標値とは合致しない。

また、地区割の設定については、大阪府の「大E-4-15」の図面に該当し、最小一辺5mのグリッドを基本として設定した。

遺構番号については、平成13年度調査とは別に、新規に通し番号を付し、それぞれに遺構名称を付けた。また遺物番号も同様に、前回の調査とは別に2000番代を使用することとし、2001番から通して付した。

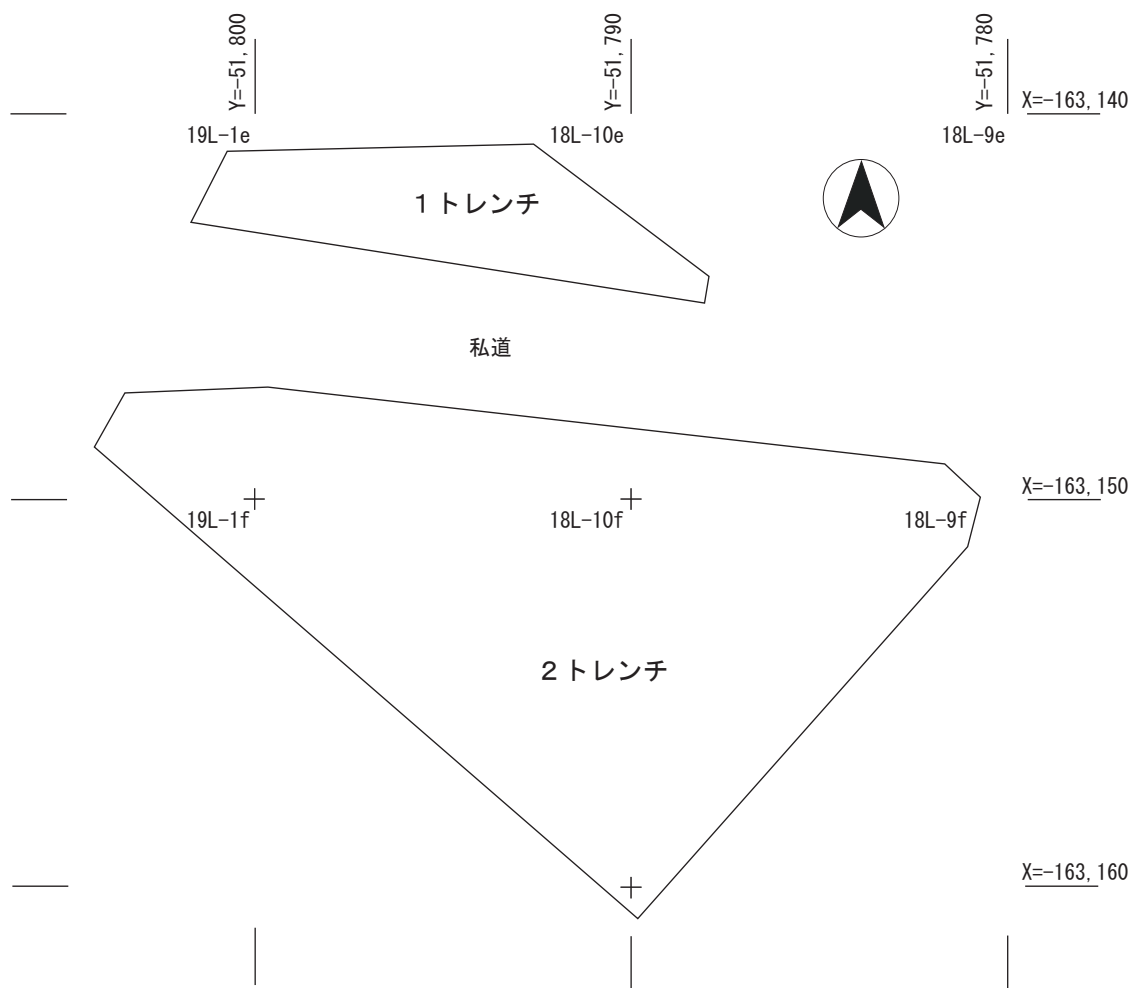


図4 平成16年度調査区（S=1/200・世界測地系使用）

第2章 位置と環境

伽羅橋遺跡は、大阪府高石市高師浜1丁目に位置する（図5）。現在、この周囲は大正期からの市街地化が進み、過去の面影がわかりにくい状況であった。

景勝地として知られる高師浜は、もともと砂浜と松原などの風光明媚な景観が広がっていたのであろう。紀貫之の『古今集』以来、そのすぐれた景観が和歌に詠まれている。

伽羅橋遺跡周辺の地形を概観すると、東には信太山丘陵が広がり、西には大阪湾が広がっている。その間に挟まれた、幅数キロメートル程度の狭い部分に平地が広がっている。さらに、その平地の間を数キロメートルごとに中小の河川が和泉山脈から大阪湾へと流入するため、平地がさらに細かく分断されてしまう。そういった地形環境によって、集落を営む土地が限定されることになる。

伽羅橋遺跡は、芦田川が信太山丘陵から運んできた土砂の上に、大阪湾から吹きつける西風によって浜砂が堆積して形成された低い風成砂丘上に位置する。この砂丘は羽衣砂丘と呼称され、芦田川と紀州街道が交差する地点の東側一帯に広がる。現在の地表面の標高は2.2 m～2.8 m前後である。弥生時代、この周辺の地形を概観すると、海岸線では浜堤の形成が進み、その内陸側には後背湿地が形成される状況であったと考えられる。

では、伽羅橋遺跡周辺の遺跡について、弥生時代を中心に概観する。

弥生時代中期には、四ッ池遺跡や池上曾根遺跡などの大集落を中心に、その周辺に小集落が出現してくることが注目されているが、小集落は小河川流域に集中し、小水系単位にまとまる傾向を示している。

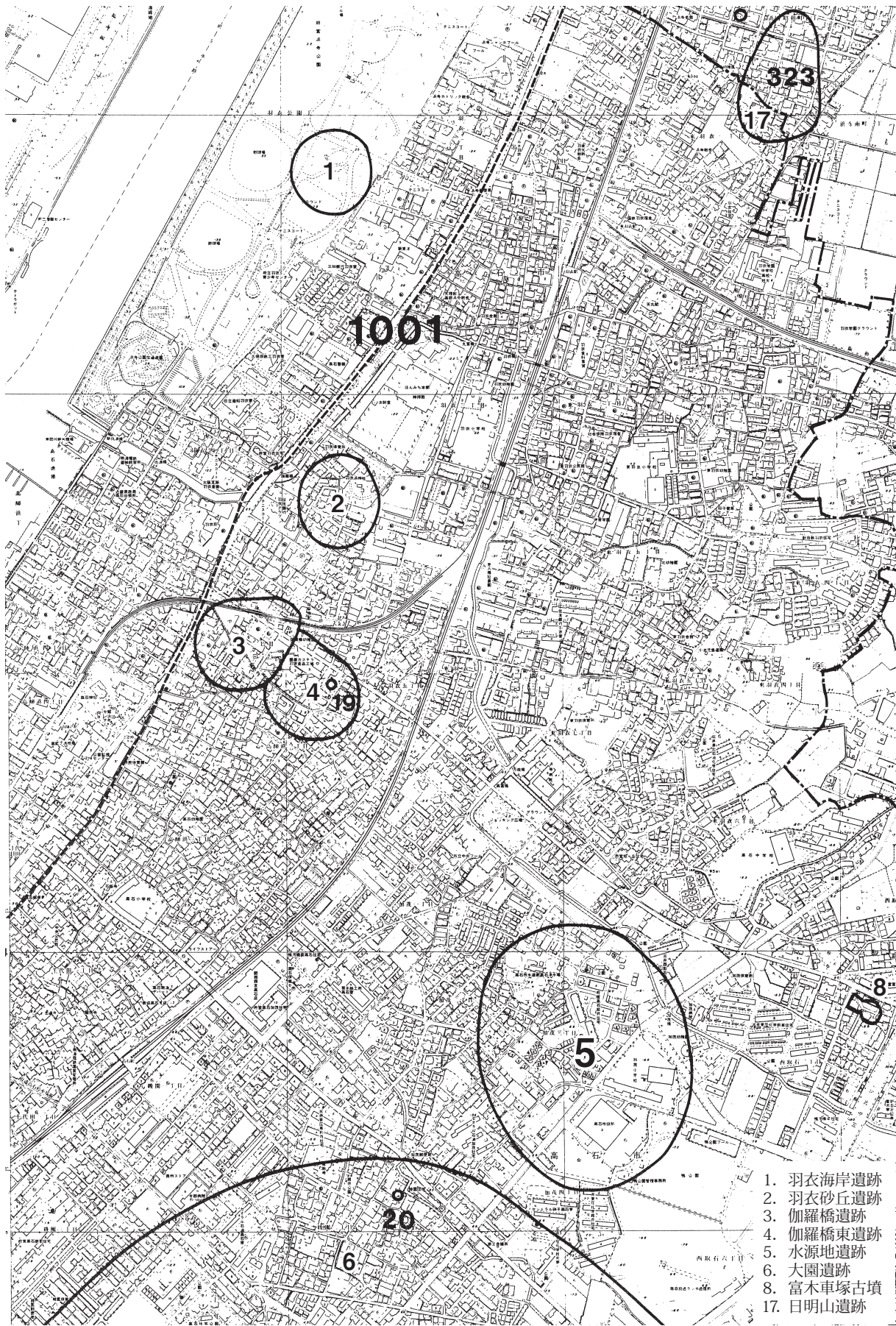
また、砂洲や砂丘上には、浜寺諏訪ノ森遺跡や日明山遺跡などをはじめ、墓域と考えられる遺跡が点在している。弥生時代後期になると、観音寺山遺跡などの高地性集落が出現し、弥生時代終末期以降には、大園遺跡や、水源地遺跡、伽羅橋遺跡、伽羅橋東遺跡や羽衣砂丘遺跡など小規模集落が平地に営まれることになる。

伽羅橋遺跡は、中世の寺院跡・集落跡として著名であるが、畿内第V様式の壺が出土するなど、弥生時代中期から後期にかけての土器が出土している。

伽羅橋東遺跡も同様に、飯蛸壺・土錘等をはじめ、弥生時代中期から後期にかけての遺物が出土しており、海岸近くの砂丘上に立地する集落遺跡と推測される。

また、これらと同じ砂丘上に展開する遺跡として、北側に位置する羽衣砂丘遺跡は、大阪湾岸に広がる標高3～4 m前後の砂丘上に立地し、大阪市住吉区の遠里小野遺跡をはじめ、海岸沿いの集落遺跡として注目されてきた。ここでは住居跡など集落に関する明確な痕跡は確認されていないが、漁撈を特徴づける飯蛸壺や土錘などが豊富に出土している。弥生時代後期～古墳時代にかけての集落であると考えられている。

さらに「日明山型土器」と呼ばれる和泉地域特有の大型広口壺が出土したことで知られている日明山遺跡は、海岸沿いに連なる低い砂丘上に位置する。この周辺の砂丘地帯は、明確な遺構は見られないものの、出土遺物からみて弥生時代には墓域として利用していたことがうかがわれる。また、日明山遺跡と同じ砂丘上では、弥生時代中期の墓域として知られる黄金山遺跡などがある。



1. 羽衣海岸遺跡
2. 羽衣砂丘遺跡
3. 伽羅橋遺跡
4. 伽羅橋東遺跡
5. 水源地遺跡
6. 大園遺跡
8. 富木車塚古墳
17. 日明山遺跡

図5 遺跡分布図 (S=1/10000)

第3章 平成13年度の調査成果

第1節 遺構概要

今回の調査で検出された遺構は、ピット、土坑、井戸、溝等である。基本的には中世の時期（1・2面）のものが大半であるが、下層より古墳時代、弥生時代（3面）に属するものも若干確認されている。ただし、砂堆上に立地した遺跡の特殊性から、各遺構の検出が極めて困難な点が多く、本来上層の遺構面において確認されるべき遺構が、下面において確認された部分もある。

調査区は市道によって東西2箇所に分かれている。東側を1トレンチ、西側を2トレンチとした。

1 トレンチの遺構（図6～8）

〔ピット群〕

調査区の全域にわたって検出したが調査区の中央付近に集中する傾向がある。直径20～30cm程度、深さは20～30cm程度、埋土は灰色あるいは黒灰色系の砂質土である。かなり集中して検出された部分もあるが、今回の調査区内では、建物としてまとまるものは確認できない。

〔土坑〕

中世の遺構面より数十基にのぼる土坑を確認した。調査区全域に見られるものの、調査区の中央付近に集中するピット群の東西両側に集中する傾向が認められる。したがって、今回検出したピット群からは明確には建物として復元できないものの、建物の地域に隣接して土坑群が認められると思われる。各土坑の平面プランとしては円形あるいは楕円形に近い不定形のものが多く、直径あるいは一辺が2m程度のものが最大で、ほとんどは1m程度の小規模のものである。

403-00（図6・11）

調査区の北端に確認されたもので、平面プランは直径2m程度の円形を呈する。深さは、約50cm、埋土は2層に分かれ上層は暗灰黄色砂土、下層は黄灰色砂土である。

595-00（図6・11）

403の東側に位置する。平面プランは南北1.2m、東西0.9mの楕円形を呈する。深さは、30cm程度、埋土は2層に分かれ上層は暗灰黄色礫混じり砂土、下層は黄灰色砂土である。

402-00（図6・11）

403の南側に位置する。平面プランは直径2m程度の円形を呈する。深さは、60cm程度、埋土は3層に分かれ上層から暗灰黄色礫混じり砂土、黄灰色礫混じり砂土、にぶい黄色礫混じり微砂土である。

404-00（図6・11）

402の南東側に位置する。平面プランは南北1.7m、東西1.5mの長方形に近い楕円形を呈する。深さは、50cm程度、埋土は2層に分かれ上層は暗灰黄色礫混じり砂土、下層は黄灰色砂土である。

605-00 (図 6・11)

平面プランは南北 1.1m、東西 0.9m の楕円形を呈する。深さは、30 cm 程度、埋土はにぶい黄色礫混じり砂土である。

419-00 (図 6・11)

平面プランは一辺 1.7m 程度の方形に近い不定形を呈する。深さは、20 cm 程度、埋土は暗灰黄色礫混じり砂土である。606-0W を切っている。

552-00 (図 6・12)

楕円形に近い平面プランと思われるが、調査区外に続くために不明。深さは、15 cm 程度、埋土は上層が暗灰黄色礫混じり砂土、下層がにぶい黄色微砂土である。

423-00 (図 6・12)

平面プランは一辺 1.0m 程度の方形を呈する。深さは、25 cm 程度、埋土は暗灰黄色礫混じり砂土である。

613-00 (図 6・12)

平面プランは南北 1.0m、東西 0.8m の楕円形を呈する。深さは、20 cm 程度、埋土は黄褐色礫混じり砂土である。

483-00 (図 6・12)

長方形に近い平面プランと思われるが、調査区外に続くために不明。深さは、30 cm 程度、埋土は上層が暗灰黄色砂土、下層が黒褐色砂質土である。

541-00 (図 6・12)

平面プランは南北 1.0m、東西 1.0m の卵形を呈する。深さは、15 cm 程度、埋土は暗灰黄色砂土である。

543-00 (図 6・12)

長方形に近い平面プランと思われるが、南部が攪乱されているために不明。深さは、20 cm 程度、埋土は暗灰黄色礫混じり砂土である。

447-00 (図 7・12)

平面プランは南北 1.5m、東西 3.9m の楕円形を呈する。深さは、50 cm 程度、埋土は上層からにぶい黄色砂土、黒褐色砂質土である。

470-00 (図 6・12)

平面プランは南北 1.0m、東西 1.2m の楕円形を呈する。深さは、20 cm 程度、埋土は暗灰黄色砂土である。

547-00 (図 6・13)

平面プランは一辺 0.9m 程度の方形を呈する。深さは、10 cm 程度、埋土は暗灰黄色礫混じり砂土である。

545-00 (図 6・13)

平面プランは南北 1.0m、東西 0.7m の長方形を呈する。深さは、10 cm 程度、埋土は暗灰黄色砂土である。

474-00 (図 6・13)

平面プランは南北 1.5m、東西 1.2m の楕円形を呈する。深さは、10 cm 程度、埋土は暗灰黄色

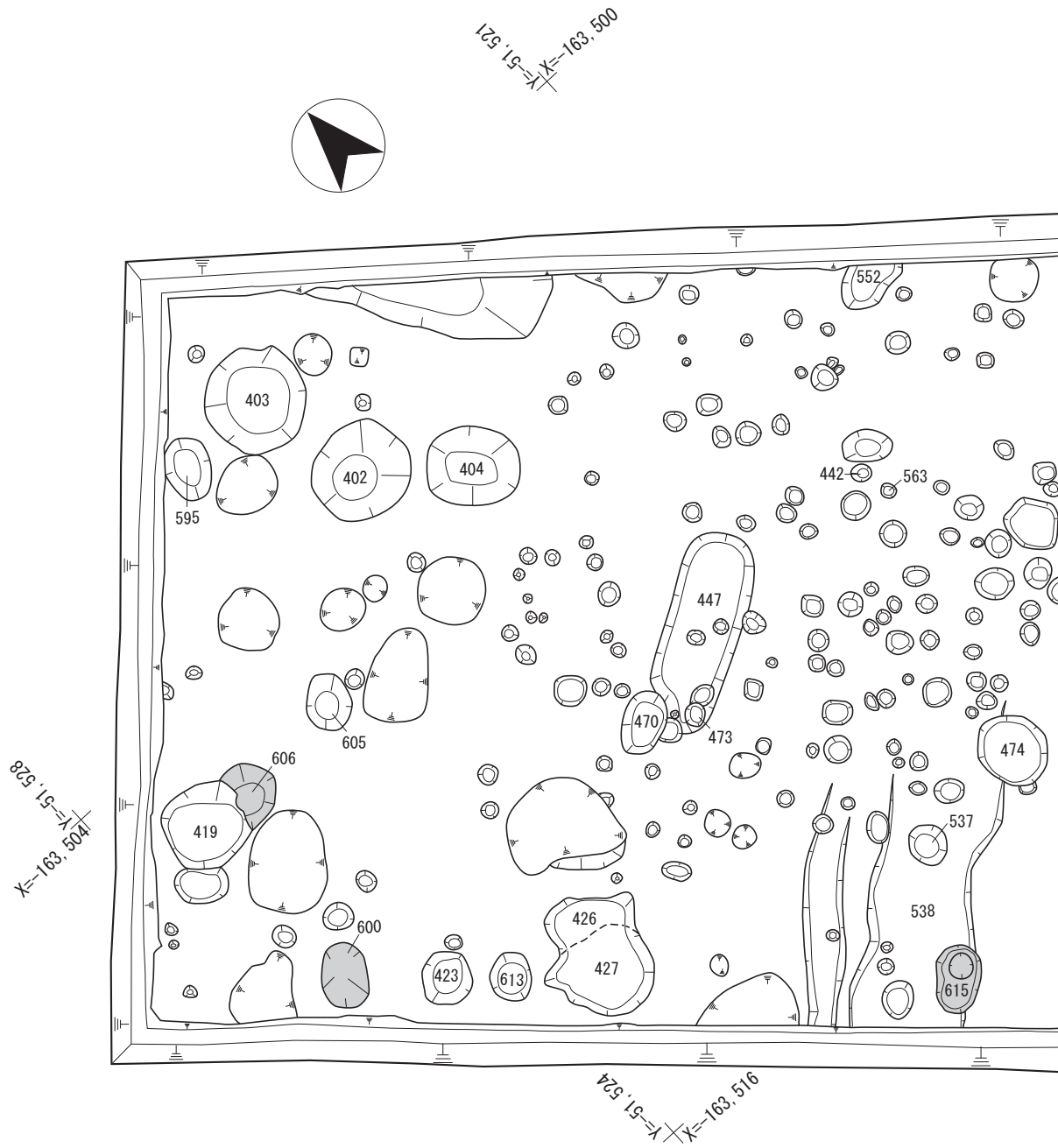
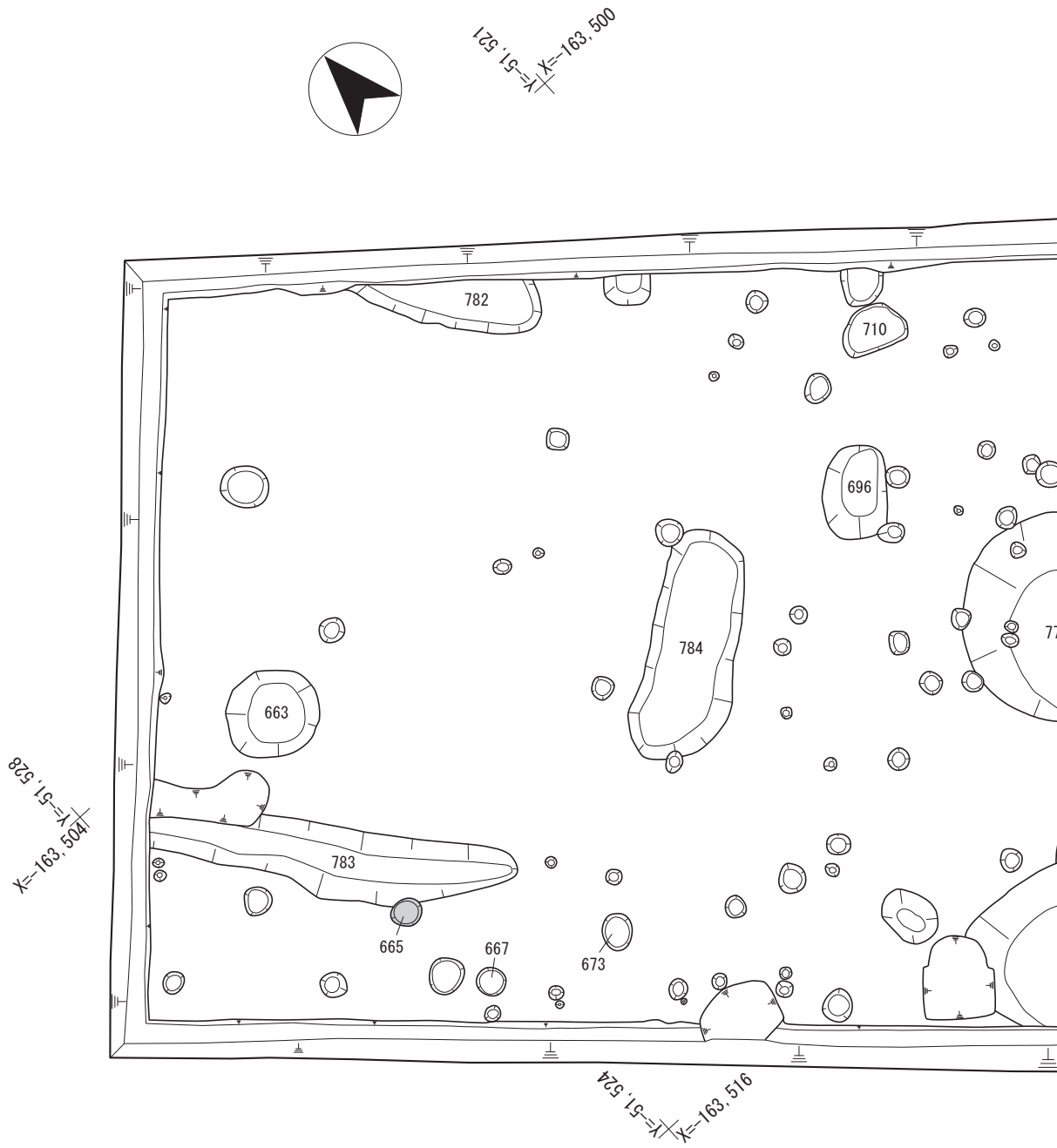


図6 1 トレンチ



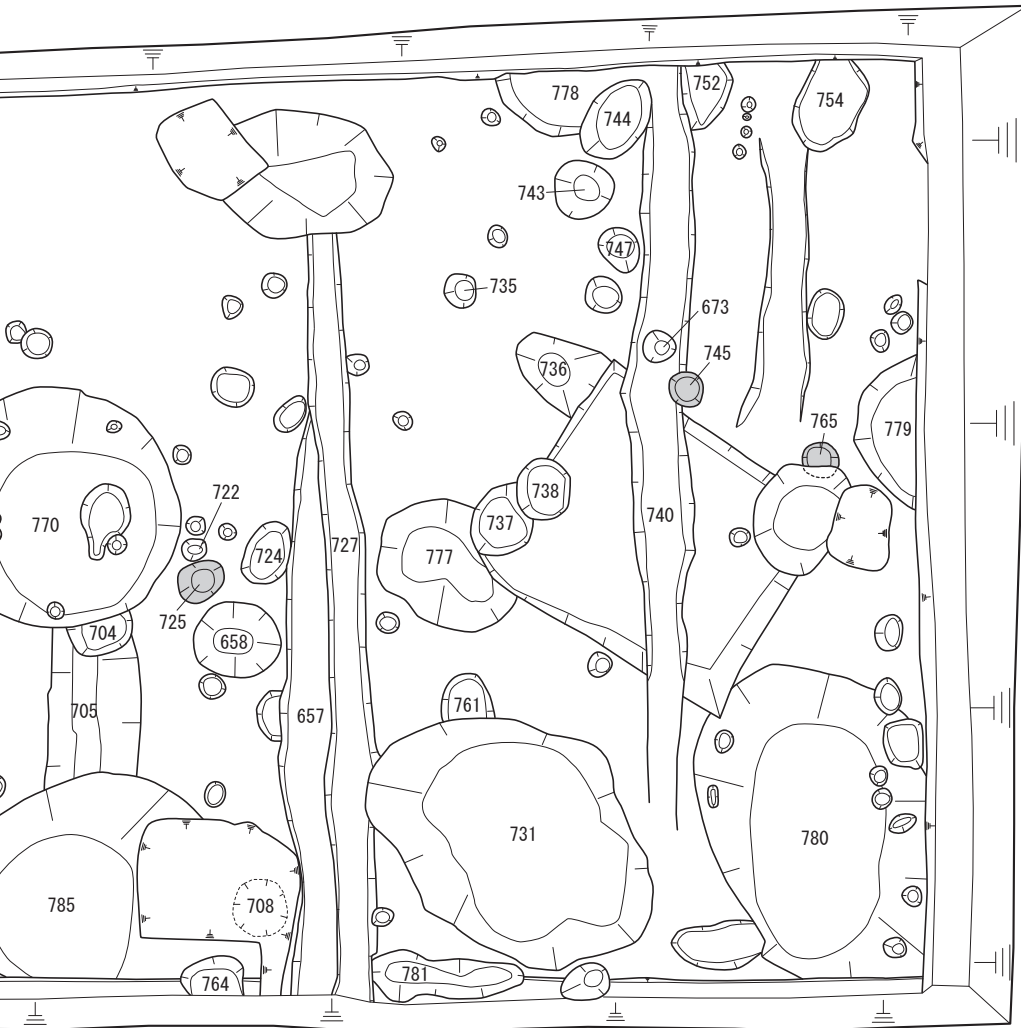
ンチ第1面全体図



※網部は羽釜等を利用した井戸

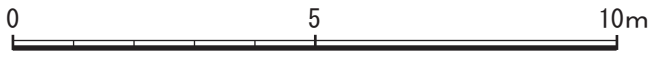
図7 1トレンチ

009'19=X-163,512

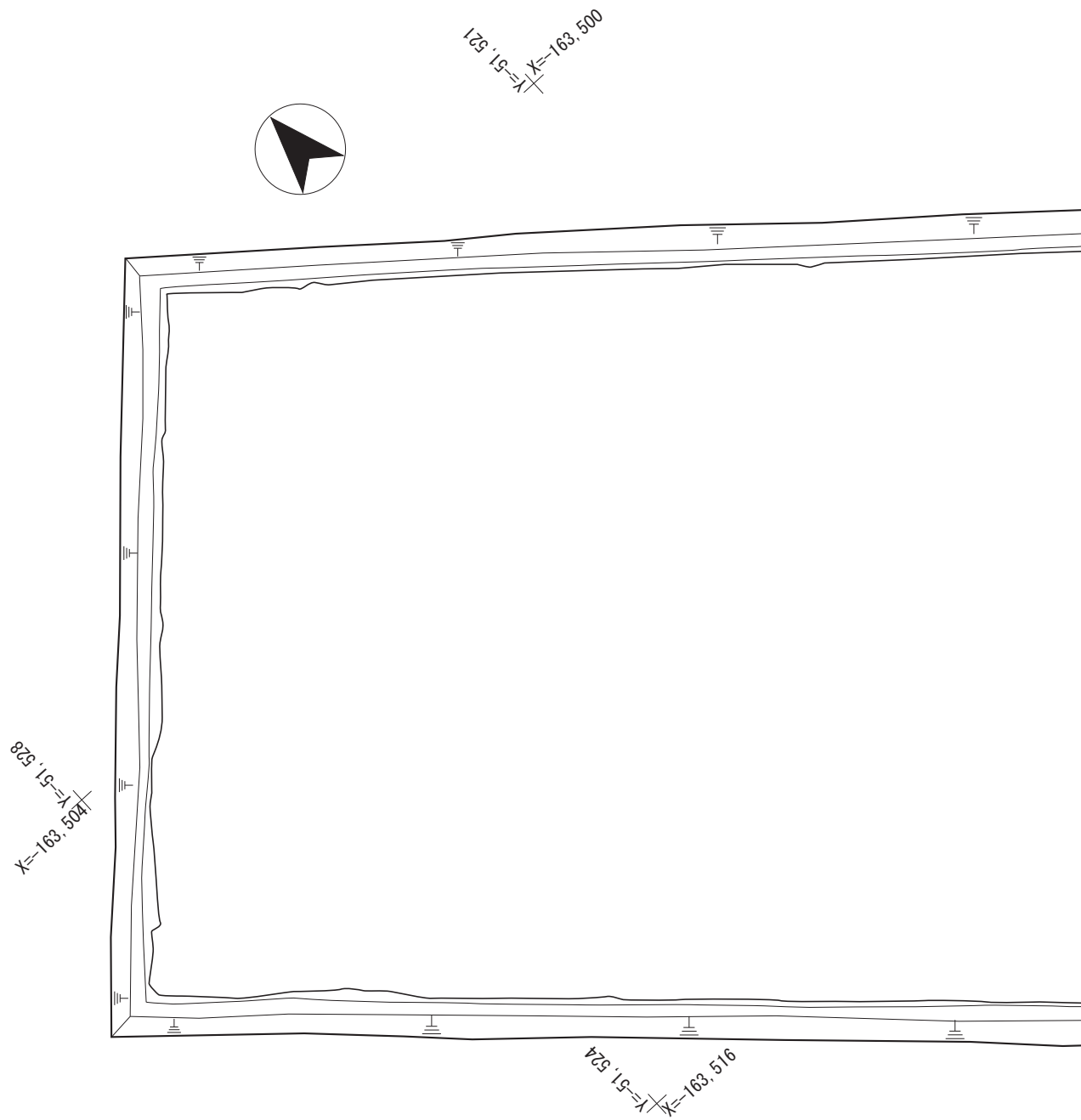


009'19=X-163,528

009'19=X-163,512

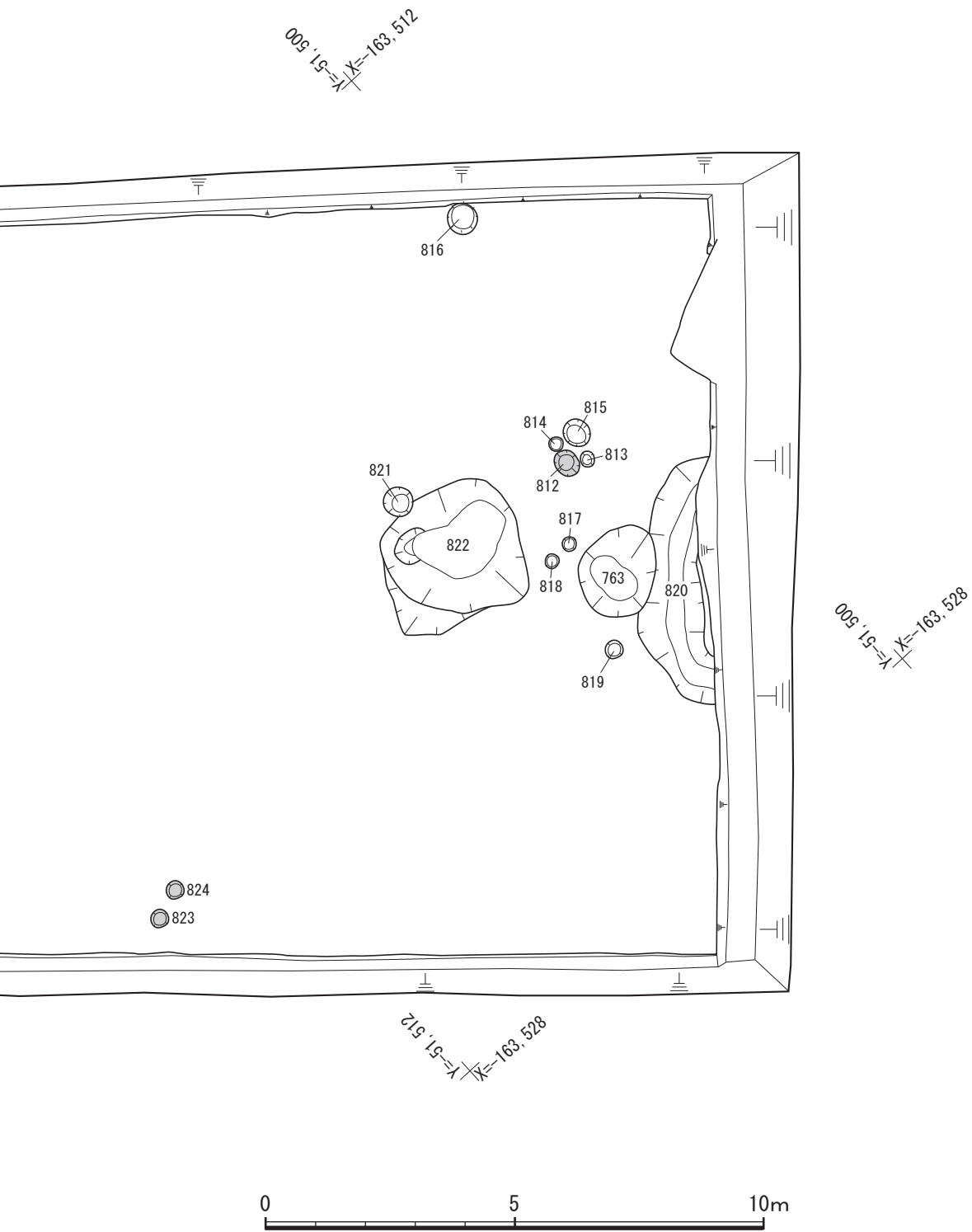


ノ子第2面全体図



※網部は羽釜等を利用した井戸

図8 1 トレンチ第



子第 3 面全体図

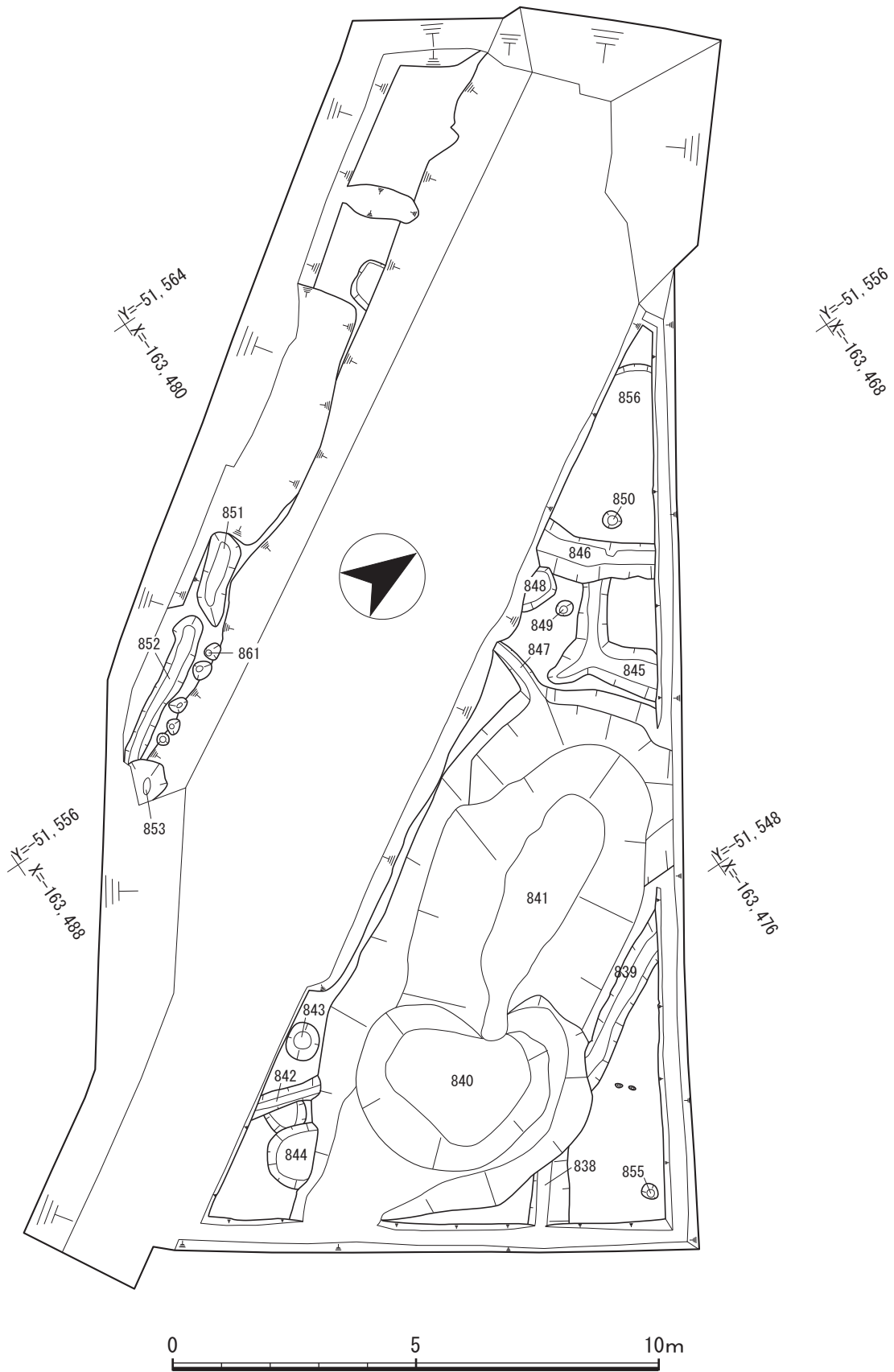


図9 2トレンチ第1面全体図

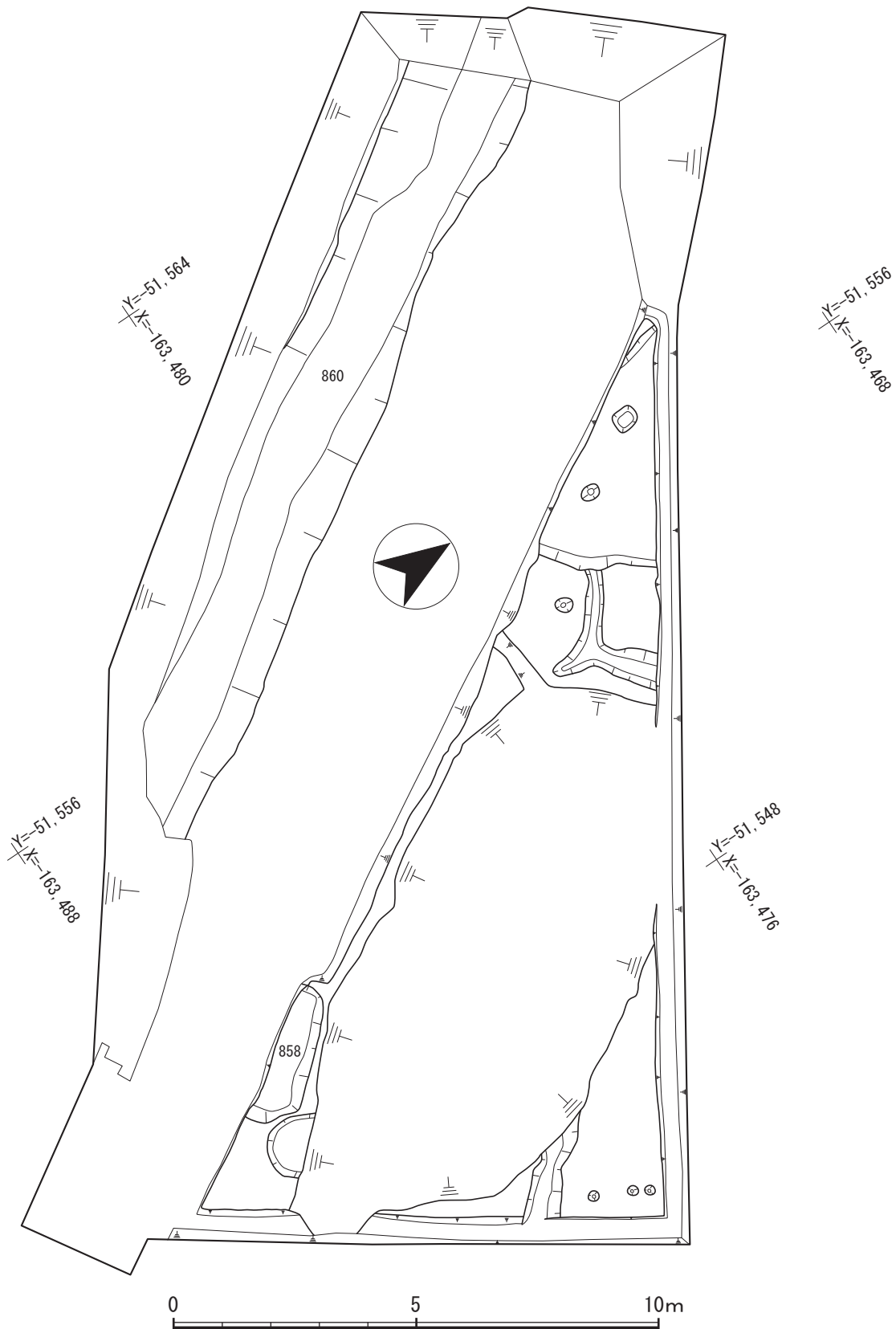
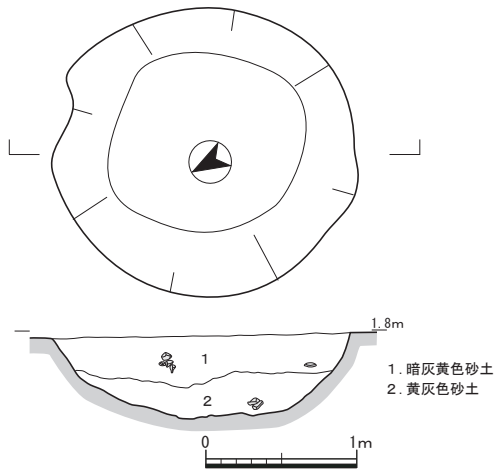
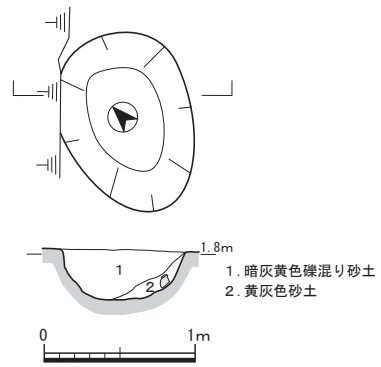


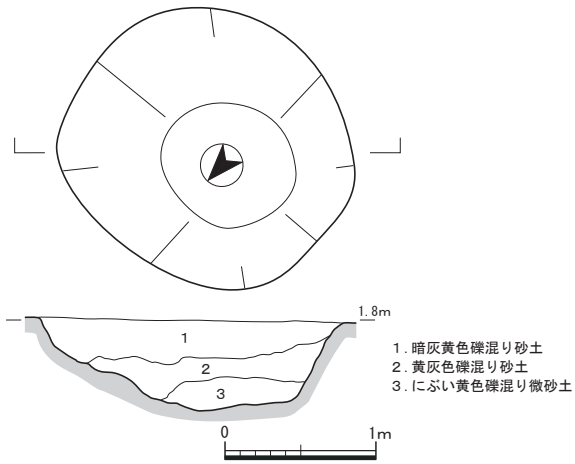
図 10 2 トレンチ第 2 面全体図



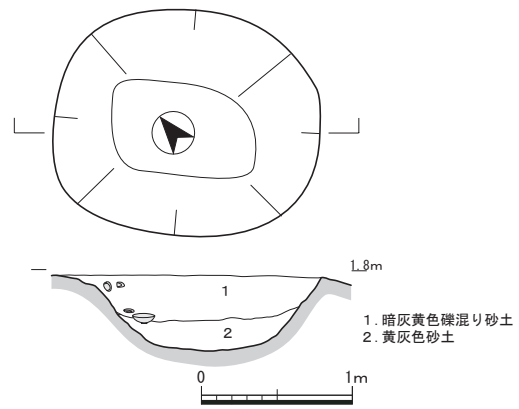
403-00



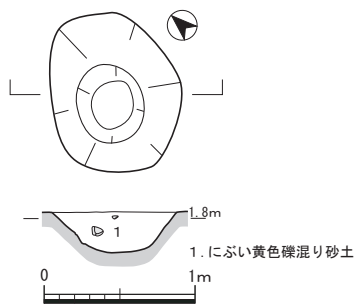
595-00



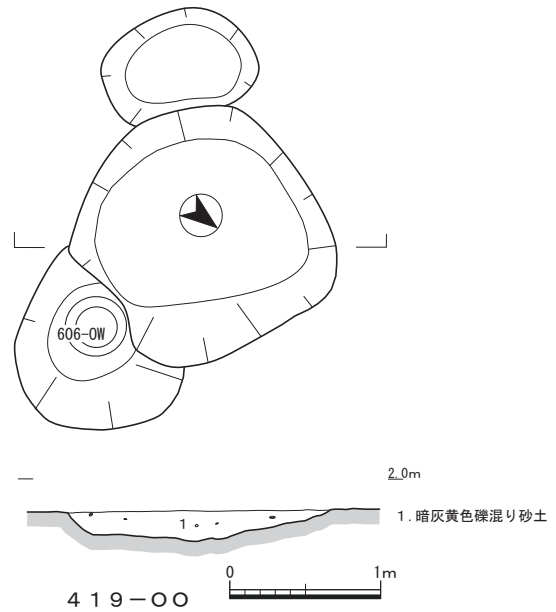
402-00



404-00



605-00



419-00

図 11 遺構図 (1)

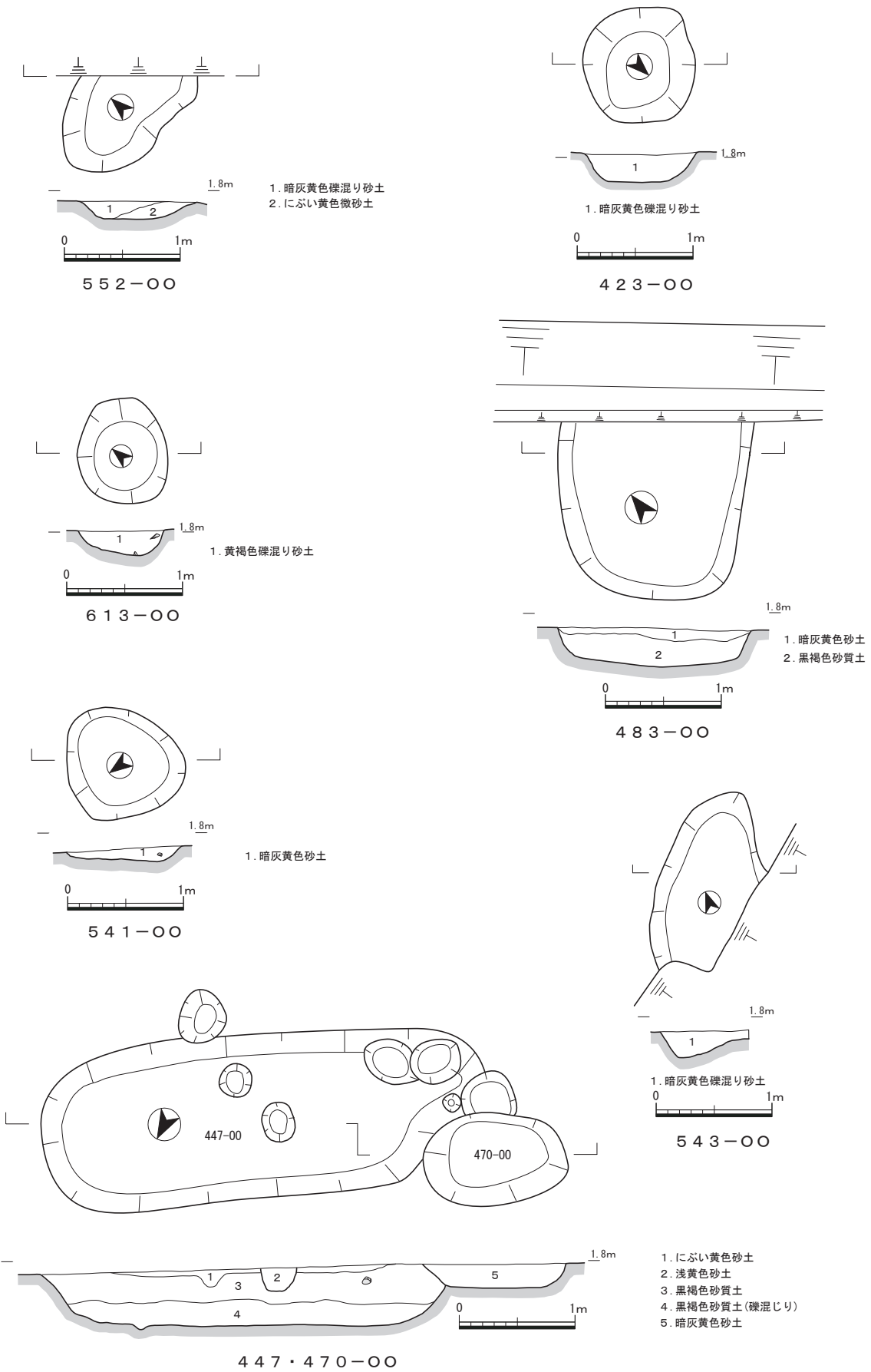


図12 遺構図(2)

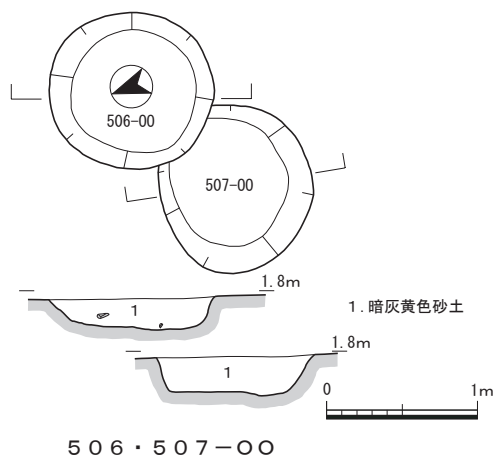
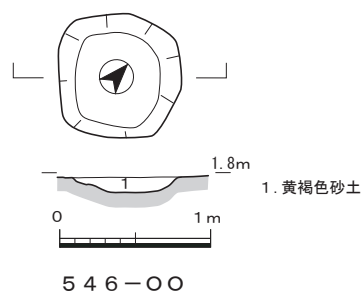
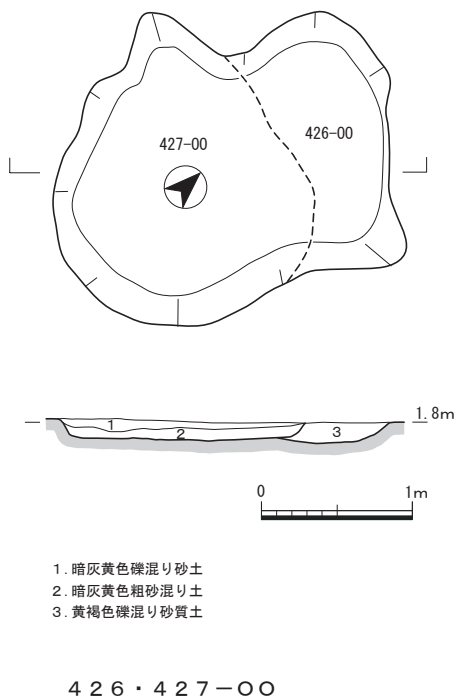
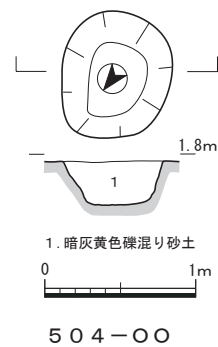
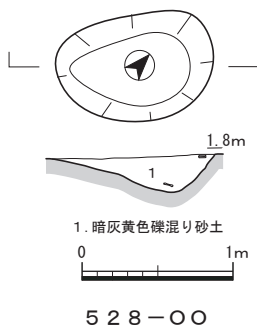
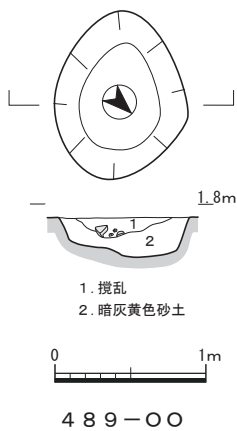
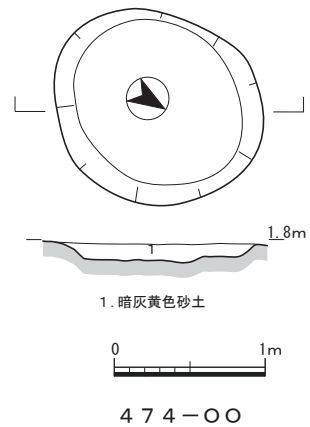
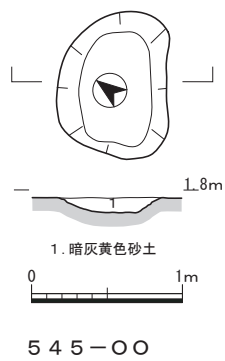
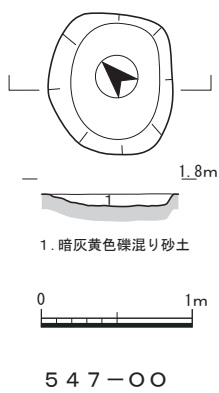


図13 遺構図(3)

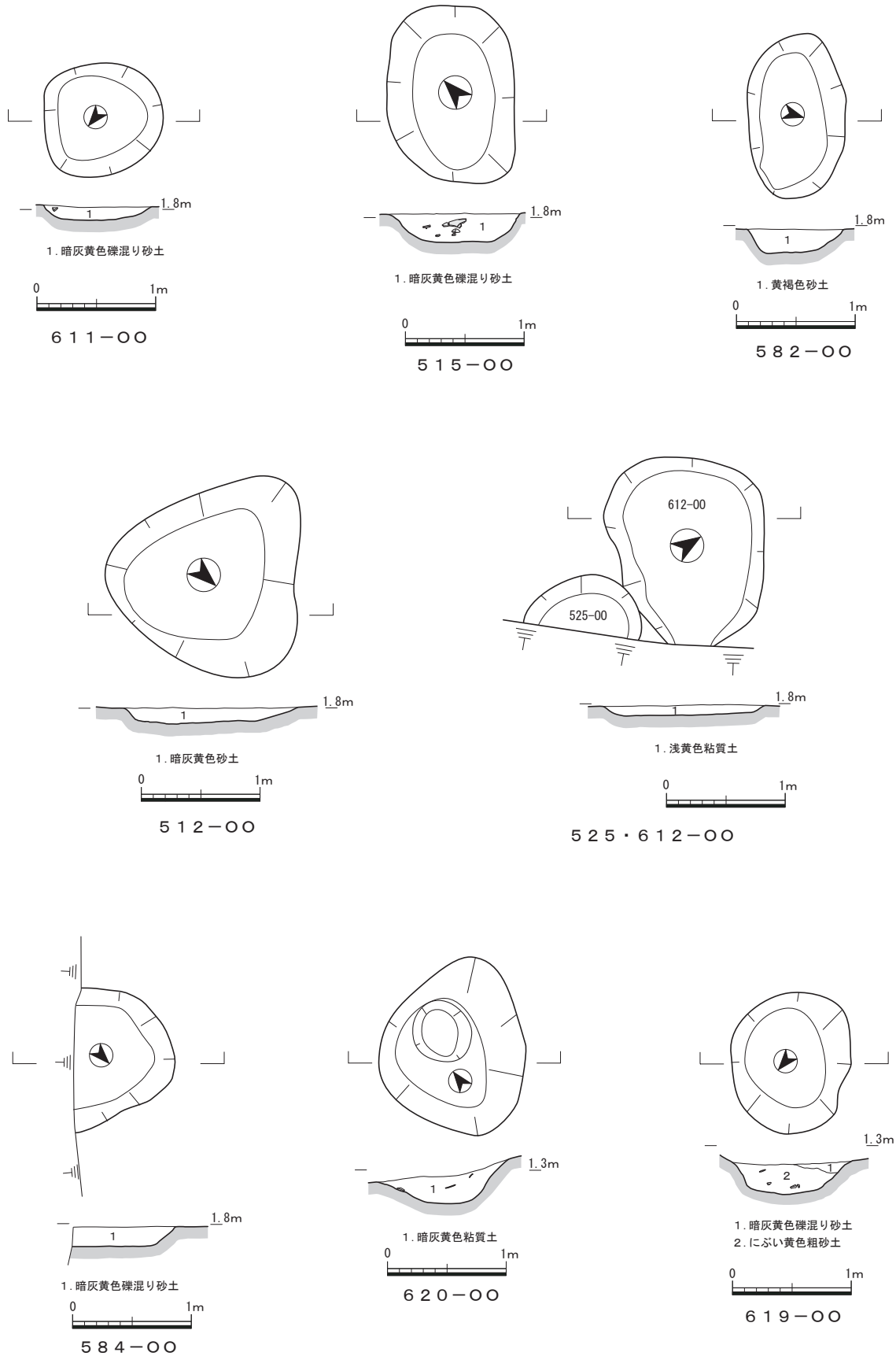


図 14 遺構図 (4)

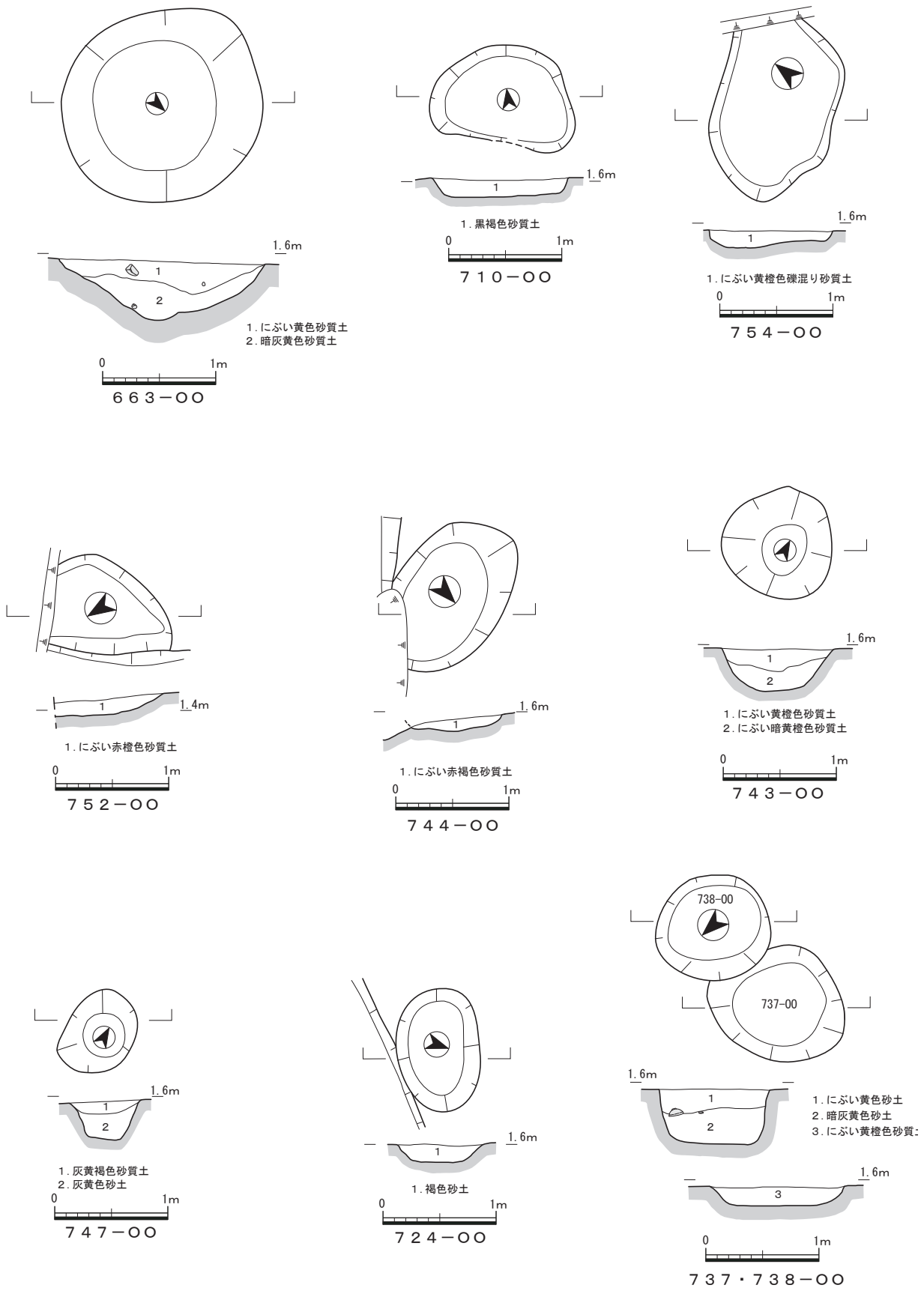


図 15 遺構図 (5)

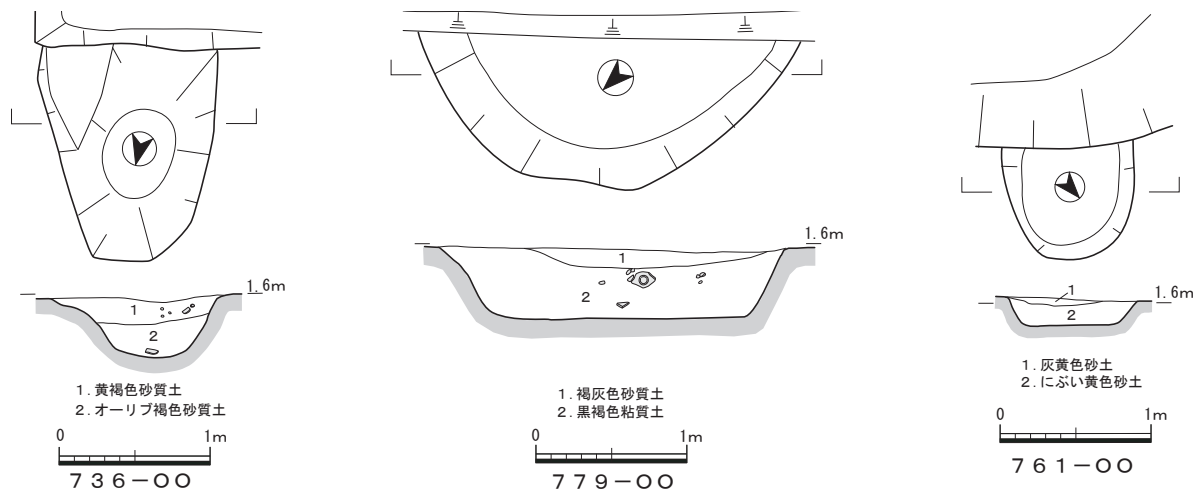


図 16 遺構図 (6)

砂土である。

489-00 (図 6・13)

平面プランは南北 1.1m、東西 0.9m の楕円形に近い不定形を呈する。深さは、25 cm 程度、埋土は暗灰黄色砂土である。

528-00 (図 6・13)

平面プランは南北 1.1m、東西 0.7m の楕円形に近い不定形を呈する。深さは、25 cm 程度、埋土は暗灰黄色礫混じり砂土である。

504-00 (図 6・13)

平面プランは一辺 0.8m 程度の方形を呈する。深さは、30 cm 程度、埋土は暗灰黄色礫混じり砂土である。

426・427-00 (図 6・13)

不定形の土坑は 2 基が切りあっている。427 (南側) が新しく、426 (北側) を切っている。深さは両方とも 15 cm 程度、埋土は 427 が暗灰黄色礫混じり砂土、426 が黄褐色礫混じり砂質土である。

546-00 (図 6・13)

平面プランは一辺 0.8m 程度の方形を呈する。深さは、10 cm 程度、埋土は黄褐色砂土である。

506・507-00 (図 6・13)

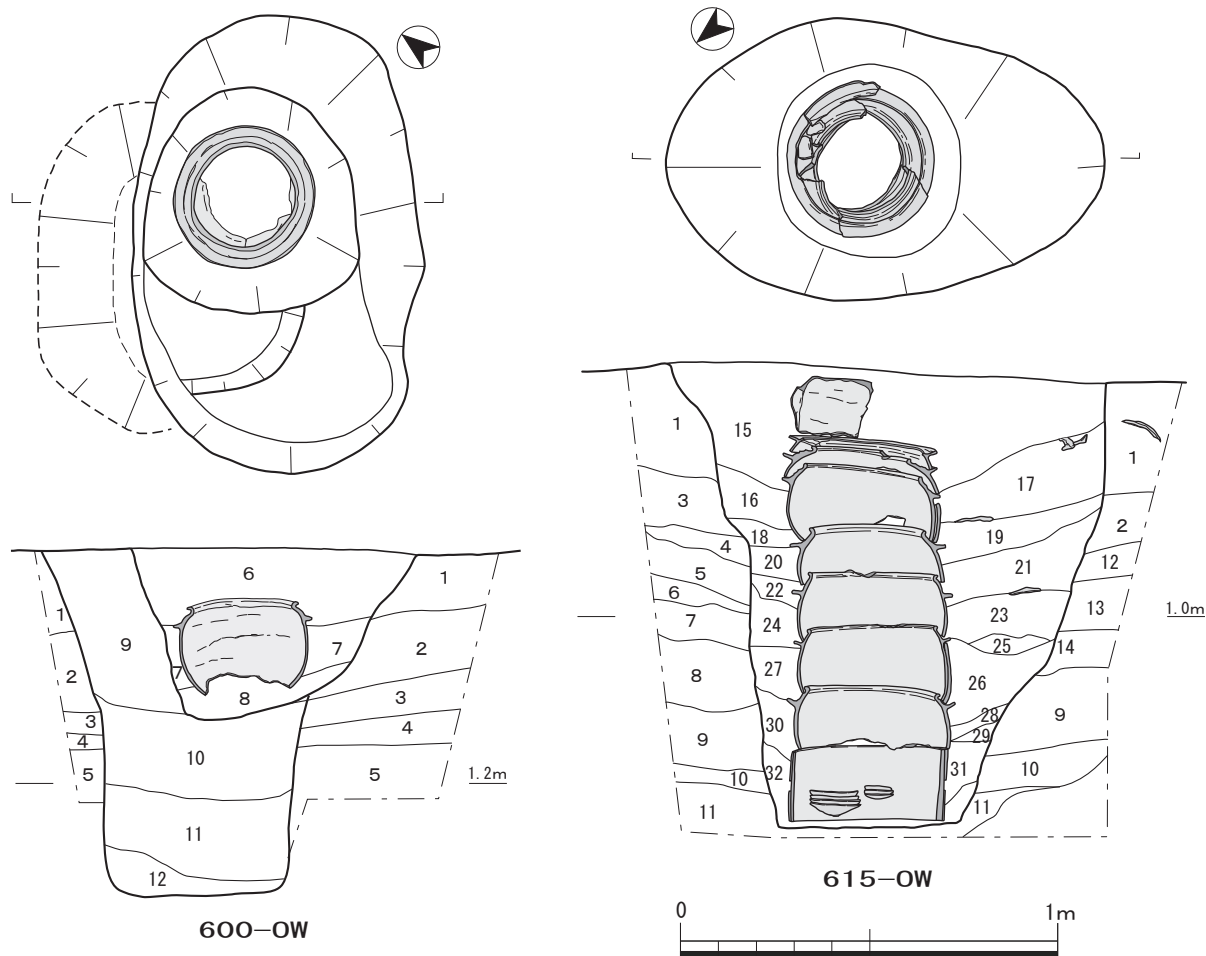
円形に近い不定形の土坑は 2 基が切りあっている。506 (東側) が新しく、507 (西側) を切っている。深さは 506 が 20 cm 程度、507 が 25 cm 程度である。埋土は両方とも暗灰黄色系の砂土である。

611-00 (図 6・14)

平面プランは南北 1.1m、東西 1.0m の卵形を呈する。深さは、10 cm 程度、埋土は暗灰黄色礫混じり砂土である。

515-00 (図 6・14)

平面プランは南北 1.5m、東西 1.1m の長方形を呈する。深さは、25 cm 程度、埋土は暗灰黄色



- | | | | | | | |
|------------------|-------------------|------------|-------------|------------|-------------|------------|
| 1. 黄灰色細砂（粗砂礫混じり） | 7. 黄灰色砂質土（細礫混じり） | 1. にぶい黄橙色土 | 8. 黄灰色細砂 | 15. にぶい黄色土 | 22. 黄灰色土 | 29. 黄灰色土 |
| 2. 黄褐色微砂（粗砂礫混じり） | 8. 黄色細砂 | 2. 黒色土 | 9. 灰白色土 | 16. 灰黄色土 | 23. 灰黄色土 | 30. にぶい黄色土 |
| 3. 褐色細砂・粗砂 | 9. 灰黄褐色砂質土 | 3. 灰黄褐色土 | 10. にぶい黄色土 | 17. 暗灰黄色土 | 24. にぶい黄色土 | 31. にぶい黄色土 |
| 4. 赤褐色粗砂（礫混じり） | 10. 灰褐色土（黄色微砂混じり） | 4. 赤黄色粗砂 | 11. 黄灰色土 | 18. 暗灰黄色土 | 25. 黄灰色ブロック | 32. 灰褐色微砂 |
| 5. 黄色微砂（小石混じり） | 11. 灰黄色砂質土 | 5. 黄灰色細砂質土 | 12. 暗灰黄色土 | 19. 灰黄色砂質土 | 26. 黒褐色砂土 | |
| 6. 浅黄色砂質土 | 12. 灰黄色細砂土 | 6. 赤褐色粗砂 | 13. にぶい黄褐色土 | 20. 灰黄色土 | 27. 灰褐色砂質土 | |
| | | 7. 灰黄色細砂 | 14. 灰黄褐色土 | 21. 暗灰黄色土 | 28. にぶい黄色土 | |

図 17 遺構図 (7)

礫混じり砂土である。

582-00 (図 6・14)

平面プランは南北 0.9m、東西 1.4m の楕円形を呈する。深さは、20 cm 程度、埋土は黄褐色砂土である。

512-00 (図 6・14)

平面プランは南北 1.6m、東西 1.8m の三角形を呈する。深さは、15 cm 程度、埋土は暗灰黄色砂土である。

525・612-00 (図 6・14)

不定形の土坑は 2 基が切りあっている。525（南側）が新しく、612（北側）を切っている。深さは両方とも 10 cm 程度、埋土は浅黄色粘質土ある。

584-00 (図 6・14)

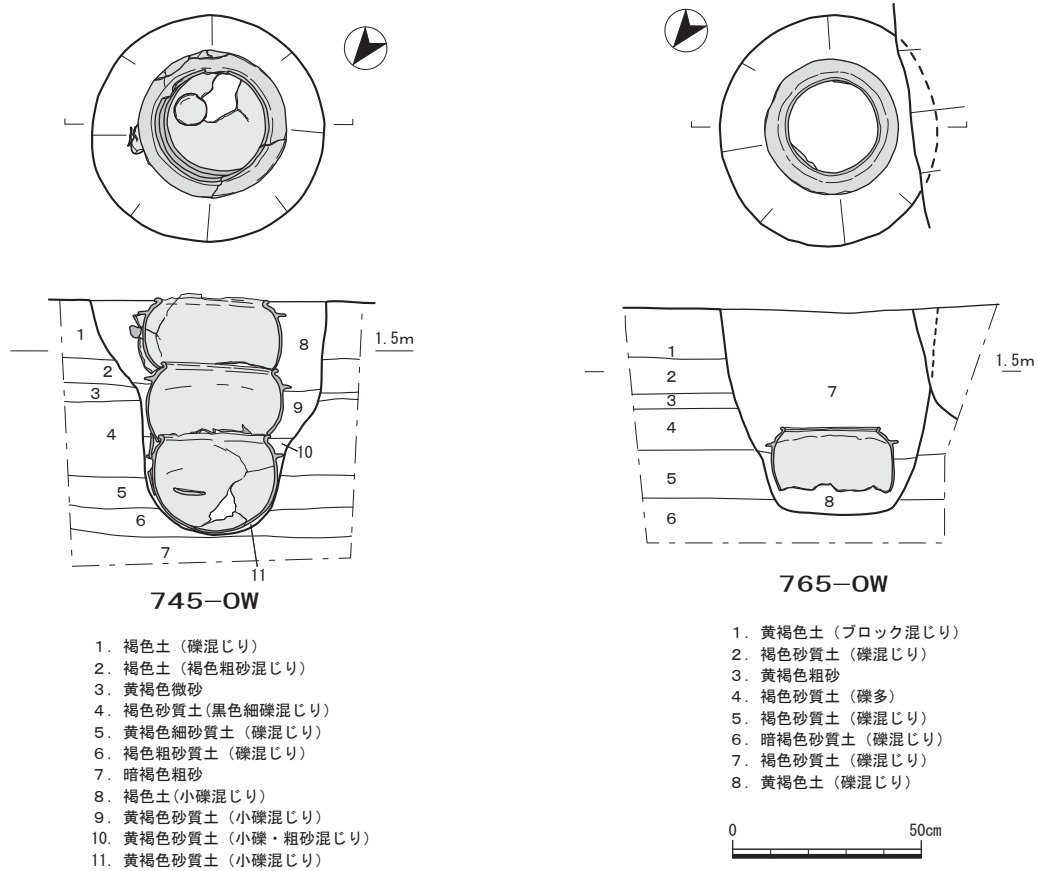
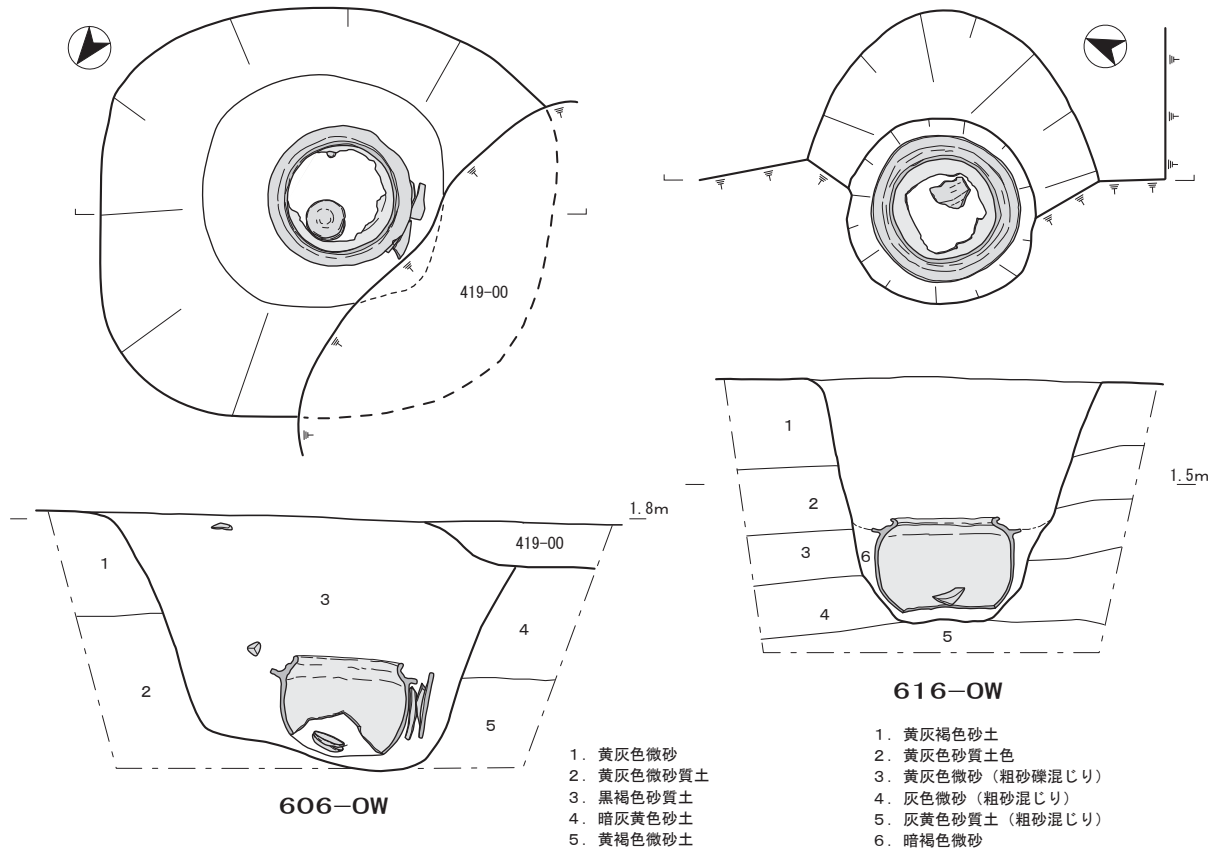
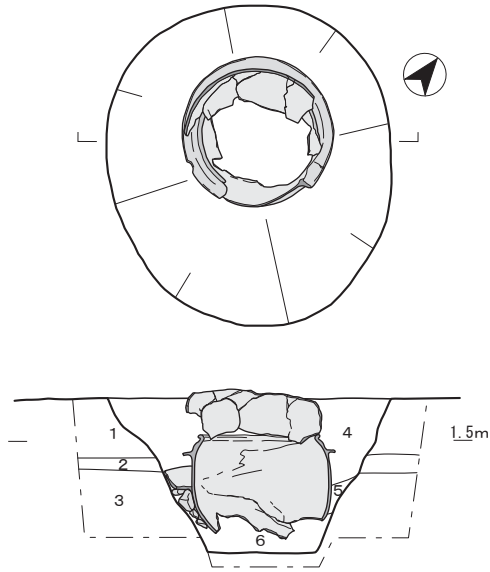
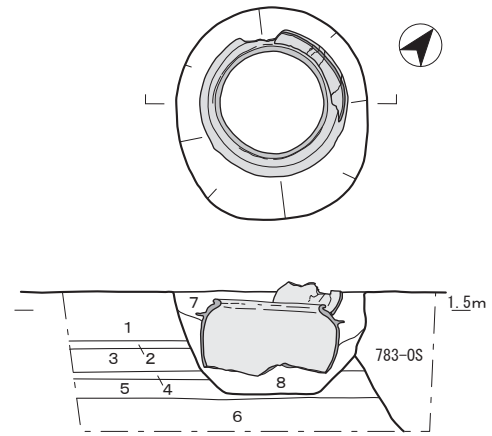


図 18 遺構図 (8)



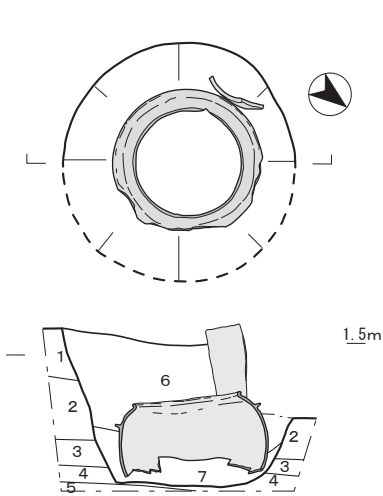
725-OW

1. にぶい黄色褐砂質土（わずかに礫含む）
2. 褐色砂質土
3. 暗褐色砂質土
4. 暗褐色微砂層
5. にぶい黄褐色砂質土
6. 暗褐色砂質土



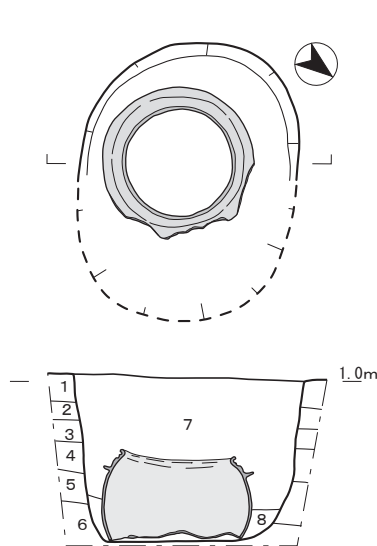
665-OW

1. 褐色砂質土（礫混じり）
2. 灰褐色細砂質土（黄褐色微砂混じり）
3. 明黄褐色微砂質土
4. 黄褐色微砂（礫多含む）
5. 明黄褐色微砂（礫混じり）
6. 明黄褐色微砂（やや暗い）
7. 黄灰色砂質土
8. 灰色砂質土（礫混じり）



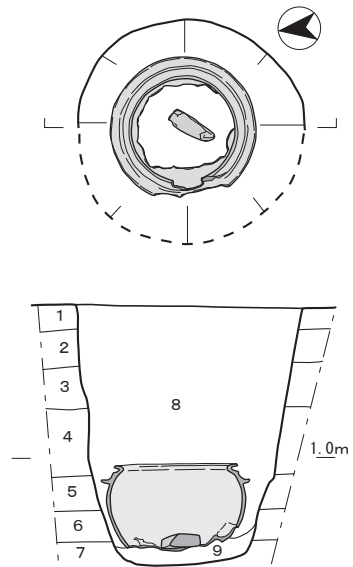
823-OW

1. 黒褐色土
2. オリーブ褐色土
3. 黄褐色土
4. にぶい黄色砂
5. 暗褐色砂質土
6. 暗オリーブ褐色土
7. オリーブ褐色土



824-OW

1. 暗灰黄色砂質土（礫を含む）
2. 暗灰黄色微砂
3. 黒褐色砂質（ややシマ状）
4. 黒褐色粗砂（5よりさらに粗）
5. 黒褐色粗砂（大石を含む）
6. 暗灰黄色粗砂
7. 黒褐色砂（礫を含む）
8. 黒褐色粗砂



812-OW

1. 黄灰色微砂
2. 灰色細砂
3. 黄色微細砂
4. 灰白色微細砂
5. にぶい黄褐色粗砂
6. にぶい黄色細砂
7. 灰色粗砂（礫混じり）
8. 灰黄褐色粗砂（小礫混じり）
9. 灰黄褐色粗砂（やや大礫混じり）



図 19 遺構図 (9)

長方形に近い平面プランと思われるが、南東部が攪乱されているために不明。深さは、20 cm程度、埋土は暗灰黄色礫混じり砂土である。

620-00 (図 6・14)

平面プランは南北 1.3m、東西 1.4m の三角形に近い不定形を呈する。深さは、25 cm程度、埋土は暗灰黄色粘質土である。

619-00 (図 6・14)

平面プランは南北 1.2m、東西 1.0m の楕円形を呈する。深さは、25 cm程度、埋土は上層が暗灰黄色礫混じり砂土、下層がにぶい黄色粗砂土である。

710-00 (図 7・15)

平面プランは南北 0.9m、東西 1.2m の楕円形を呈する。深さは、20 cm程度、埋土は黒褐色砂質土である。

663-00 (図 7・15)

平面プランは直径 1.8m 程度の円形を呈する。深さは、50 cm程度、埋土は上層がにぶい黄色砂質土、下層が暗灰黄色砂質土である。

754-00 (図 7・15)

平面プランは南北 1.1m、東西 1.8m の楕円形を呈すると思われるが、一部調査区外に続く。深さは、15 cm程度、埋土はにぶい黄橙色礫混じり砂質土である。

752-00 (図 7・15)

溝に切られ一部調査区外に続くため平面プランは不明。深さは、15 cm程度、埋土はにぶい赤橙色砂質土である。

744-00 (図 7・15)

平面プランは南北 1.0m、東西 1.5m の楕円形を呈すると思われる。深さは、10 cm程度、埋土はにぶい赤褐色砂質土である。

743-00 (図 7・15)

平面プランは直径 1.0m 程度の円形を呈する。深さは、35 cm程度、埋土は上層がにぶい黄橙色砂質土、下層がにぶい暗黄橙色砂質土である。

747-00 (図 7・15)

平面プランは南北 0.8m、東西 0.6m の楕円形を呈する。深さは、35 cm程度、埋土は上層が灰黄褐色砂質土、下層が灰黄色砂土である。

724-00 (図 7・15)

平面プランは南北 0.7m、東西 1.1m の楕円形を呈する。深さは、15 cm程度、埋土は褐色砂土である。

737・738-00 (図 7・15)

円形に近い不定形の土坑は 2 基が切りあっている。738 (東側) が新しく、737 (西側) を切っている。深さは、738 が 50 cm程度、737 が 15 cm程度である。埋土は 737 の上層がにぶい黄色粘土、下層が暗灰黄色砂土、738 はにぶい黄橙砂質土である。

736-00 (図 7・16)

平面プランは東西 1.2m の楕円形を呈すると思われるが、一部欠損のために不明。深さは、

35 cm程度、埋土は上層が黄褐色砂質土、下層がオリーブ褐色砂質土である。

779-00 (図7・16)

平面プランは、一部が調査区外に続くため不明。深さは、40 cm程度、埋土は上層が褐灰色砂質土、下層が黒褐色粘質土である。

761-00 (図7・16)

平面プランは、東西 0.9m の楕円形と思われるが、一部欠損のため不明。深さは、20 cm程度、埋土は上層が灰黄色砂土、下層がにぶい黄色砂土である。

764-00 (図7)

平面プランは、一部が調査区外に続くため不明。深さは、25 cm程度、埋土は暗灰黄色砂質土である。

〔井戸〕

今回の調査で検出した井戸は、全て土師質の羽釜を積み上げて井筒としたものである。井筒に使用した羽釜は、745 の最下段の羽釜を除いて、羽釜の体部の下半から下部を割っている。外面に煤が付着していることから使用済みの羽釜の再利用と考えられる。

600-OW (図6・17)

掘方の平面プランは南北 1.2 m、東西 0.8 m 程度の楕円形である。井戸の底に一段だけ井筒の羽釜が残っている。断面観察によると、600-OW に先行する井戸があったと思われ、それを切って構築されている。

615-OW (図6・17)

今回の調査で検出した井戸の中で最もよく残っているものである。掘方の平面プランは、南北 1.3 m、東西 0.9m の楕円形である。掘方の埋土の状況から井筒の羽釜を最下段から一段ずつ設置するごとに井筒の外側を埋め戻して井筒を固定していることがわかる。井筒の羽釜は九段現存している。上部の三段については大きく破損していると思われるが、その下段は当時の状態をほぼとどめていると考えられる。

745-OW (図7・18)

掘方の平面プランは 0.6 m 程度の円形に近いものと思われるが、井戸の上部は大きく削られ底に近い部分だけ残っていると考えられる。井筒の羽釜は最下段から上部に三段残っている。最下段の羽釜は、体部下方から底部にかけて一部欠損しているものの底は残っている。

765-OW (図7・18)

掘方の平面プランは 0.6 m 程度の円形であると思われるが、土坑との切りあいで上端のプランは不明。井戸の底に一段だけ井筒の羽釜が残っている。埋土の状況から上部の羽釜は井戸が廃棄される段階で除去された可能性がある。

606-OW (図6・18)

掘方の平面プランは南北 1.1 m 程度の隅丸方形に近いものと思われるが、西側を土坑 419 に切られている。井戸の底に一段だけ井筒の羽釜が残っている。埋土の状況から上部の羽釜は井戸が廃棄される段階で除去された可能性がある。

616-OW (図6・18)

掘方の平面プランは 0.9 m 程度の円形に近いものと思われるが、南西側を大きく攪乱されている。井戸の底に一段だけ井筒の羽釜が残っている。上部の羽釜は井戸が廃棄される段階で除去された可能性がある。

725-OW (図 7・19)

掘方の平面プランは南北 0.6 m、東西 0.8 m 程度の楕円形に近いものと思われるが、井戸の上部は大きく削られ底に近い部分だけ残っていると考えられる。井筒の羽釜は最下段とその上の一段がかろうじて残っている。

665-OW (図 7・19)

掘方の平面プランは 0.5 m 程度の円形に近いものと思われるが、井戸の上部は大きく削られ底に近い部分だけ残っていると考えられる。井筒の羽釜は最下段とその上の一段がかろうじて残っている。

823-OW (図 8・19)

掘方の平面プラン直径 0.6 m 程度の円形である。井戸の底に井筒の羽釜が最下段とその上部に羽釜の体部片がかろうじて残っている。埋土の状況から上部の羽釜は井戸が廃棄される段階で除去された可能性がある。

824-OW (図 8・19)

掘方の平面プラン直径 0.6 m 程度の円形である。井戸の底に一段だけ井筒の羽釜が残っている。埋土の状況から上部の羽釜は井戸が廃棄される段階で除去された可能性がある。

812-OW (図 7・19)

掘方の平面プラン直径 0.6 m 程度の円形である。井戸の底に一段だけ井筒の羽釜が残っている。埋土の状況から上部の羽釜は井戸が廃棄される段階で除去された可能性がある。

〔溝〕

調査区の中央より東よりで調査区を横断する、南東―北西方向で数条の溝が平行して認められる。溝の幅は 1 m 前後である。道路の側溝の可能性も考えられるが、他の遺構とも重複しており、性格については不明である。また、方形周溝墓の周溝の一部と考えられる溝を検出した (782～784-OS)。

2 トレンチの遺構 (図 9・10)

調査区の大半が現代の水路によって攪乱されており、その水路の両側にピット、土坑、溝、池状の遺構等を若干確認したが時期等不明な点が多い。おそらく、現代の水路の前身の河川、あるいは氾濫原のような不安定な地域であったと考えられる。

小結

今回の調査によって検出された遺構をみると、「建物」としての明確なまともは確認できなかったもののピット群の両側に検出した土坑、井戸、あるいはある時期の「道」も想定される平行した一連の溝等を考え合わせれば、中世の段階において町屋の概観を窺うことのできる遺構群と考えられる。

第2節 出土遺物（図20～58、図版9～48）

平成13年度調査区において出土した遺物は、収納用コンテナ約200箱であった。時代は弥生から近世に至るものまでみられ、最も量が多いのは中世の遺物である。弥生時代の遺物は少量だが、比較的残りの良いものがみられた。以下、種類別に項を設け、土器、瓦埴、土製品、石製品の順に概要を述べる。土器は種類別に概要を述べた後、主な遺構出土土器について記述する。

第1項 土器（図20～44、図版9～35）

弥生土器、土師器、土師質土器、須恵器、須恵質土器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、国産陶磁器、輸入陶磁器がある。以下、主な土器について概要を記す。

土師器

土師器にはやや量の多い小皿のほかに、大皿、脚台、椀が僅かにある。

土師器小皿は口径10.6cm以下のものをまとめた。底部から口縁部にかけて屈曲が緩やかなものが主である。口径は5.1～10.6cmまであり、約8～9cmが多い。調整は底部外面を指押さえ、ナデ、口縁部は横ナデ、内面はナデである。色調は灰白色、浅黄橙色ないし黄橙色（以後、橙色と記述）、にぶい橙色ないしにぶい赤褐色や灰褐色（以後、茶褐色と記述）がある。

小皿は底部から口縁部にかけて明確に屈曲したものから、緩やかなものまである。そして、底部から口縁部にかけての屈曲が明確なものは口径が小さめである傾向が認められた。形態の特徴で5分類した。

- A：底部から口縁部にかけての屈曲が明確なもの。口径5.1～8.0cmで、色調は灰白色、橙色がみられる。他のタイプと比較し、口径はやや小さめである。このタイプの中には調整痕は不明であるが、糸切り底のように屈曲部分の角張ったものがみられる（342）。また、粘土を紐状に巻き上げたように口縁部に沿った粘土接合痕の残るもの（302・342）や口縁の一部に煤が付着したものがある（302）。
- B：底部から口縁部にかけての屈曲が緩やかなもの。口径6.8～10.4cmで、色調は灰白色、橙色がある。形態的にはAやCタイプに近いものも含んでおり、もっと細分が可能であるが、ここでは大まかにまとめている。口径は8～9cmのものが最も多く、Aタイプより若干口径が大きい傾向を示す。口縁端部外面を面取り状になでているものを含む（1・2・41・85・358・567）。内面に煤の付着したものが一部認められた。粘土接合痕は粘土紐巻き上げかと考えられるものが多い。中心から外方へ向かう粘土の継ぎ目があり、円板状粘土に切りこみを入れたようなものもみられる（176・236・240）。
- C：底部から口縁部にかけてなだらかなもの。口径7.9～10.6cmがあり、9cm前後のものが多い。色調は灰白色、橙色、茶褐色がみられ、橙色のものが多い。口縁端部外面を面取り状になでているもの（276）を含む。粘土接合痕が粘土紐巻き上げかと考えられるもの（68・80・95・117・153・570）と、円板状粘土に切り込みを入れたような痕跡を残すもの（98・182・571）が少しみられる。
- D：ての字状口縁の退化したような形態をなす。色調は灰白色を呈し、推定口径8.6cmであ

タイプ	土師器小皿
A	
B	
C	
D	
E	

タイプ	土師器大皿
A	
B	
C	
D	
E	

タイプ	瓦質甕
A	
B	
C	
D	
E	
F	

タイプ	土師質羽釜
A	
B	
C	
D	
E	

タイプ	瓦質播鉢
A	
B	

タイプ	瓦質井戸枠
A	
B	
C	

タイプ	土師質羽釜
F	
G	
H	
I	
J	
K	

タイプ	須恵質甕
A	
B	

タイプ	須恵質捏鉢
A	
B	
C	
D	
E	

タイプ	瓦質羽釜
A	
B	
C	
D	
E	
F	

タイプ	備前播鉢
A	
B	
C	
D	
E	
F	

タイプ	備前壺
A	
B	

図 20 土器のタイプ分類

る(94)。

E：底部中央が窪んだへそ皿で、色調は灰白色を呈し、推定口径7.1 cmである(303)。

土師器小皿は抽出された範囲内ではあるが、Bタイプが多い。D・Eタイプは少なく、各1点である。

土師器大皿は少量あり、口径12 cm以上、20 cm以下までみられる。調整は口縁部が横ナデ、体・底部内面がナデ、底部外面が指押さえ、ナデである。形態の特徴で5分類した。

A：やや深めの皿で底部から口縁部にかけて斜め上方へ開いたものである。色調は灰白色、橙色、茶褐色がある。灰白色(133)と橙色(82)で口縁端部がナデにより一部平坦な面をなすものを含む。

B：やや深めの皿で口縁部が少し内湾ぎみのもの。灰白色(137)がある。

C：浅めの皿で、口縁部を2段になでているため、底部から口縁部にかけて屈曲し、さらに口縁端部で短く立ちあがるもの。色調は灰白色であるが、被熱して赤く変色し、内面に煤付着のもの(261)もある。

D：平らな底部から大きく直線的に口縁部は開き、器壁は口縁端部へ向けて薄い。胎土は他と比較して白い。破片のため、この報告書では図化していない。

E：浅い皿で口縁部の横ナデが強く体部との境に段をなす。色調は橙色(258)である。

抽出された範囲内ではあるが、土師器大皿ではAタイプが多い。

瓦器

瓦器は椀、小皿、鉢が出土した。器種の割合では椀が極めて多く、小皿は少々、鉢は極僅かである。

瓦器椀は口縁端部を丸く納めたいわゆる和泉型が殆どである。器表面は被熱によるためか炭素の吸着がみられないものが少々みられた。瓦器椀は高台径他で5分類した。

A：高台径が6 cm以上のものである(121・190)。ヘラミガキは内・外面とも密に施され、外面では高台直上まで分割して見られる。見込みのヘラミガキは一定方向に密なものとの間隔の狭い平行がある。高台は高い。見込みには重ね焼の痕跡と考えられる円形状の炭素吸着不良のみられるものがある。

B：高台径が3.8～5.6 cmのものをまとめた。口径は13.6～15.9 cm、器高3.7～5.9 cmである。ヘラミガキは外面に口縁部ないし体部までまばらに施されているものが多い。体部内面のヘラミガキはやや密なものからややまばらなものまでみられる。見込みのヘラミガキは平行が多いが、斜格子が少し、螺旋状は僅かにみられる。瓦器椀ではこのタイプのものが最も多く出土している。図化していないが、見込みにハケ目が残るものや、体部に粘土を貼り足した痕跡を残すものがある。重ね焼の痕跡は見込み(114・166・291)や、口縁部外面(162)にみられる。また、炭素の吸着の見られないものもある(209・218・219・579・593)。

C：高台径が1.9～3.3 cmのものをまとめた。高台は雑な紐状で繋ぎ目が開いているものが多い。口径11.7～13.8 cm、器高3.0～4.1 cm。外面のヘラミガキは無い。体部内面のヘラミガキはまばらである。見込みは渦巻き状、雑な平行、螺旋状のヘラミガキがみら

れる。25の内面にはハケ目が残る。器表面に炭素の吸着のみられないものがある(20・24・372)。

D：高台の無いものをまとめた。口径9.6～12.1 cm、器高2.6～3.2 cm。外面のヘラミガキは無い。体部内面のヘラミガキはまばらである。見込みのヘラミガキは渦巻き状が殆どである。但し、92の見込みには他とは異なり、平行のヘラミガキがみられる。器表面に炭素の吸着のみられないものがある(379～381)。また、被熱し赤変したものもある(132・383・414)。

E：口縁端部内面に沈線が1条巡る楠葉型である。1点(122)のみ認められた。外面のヘラミガキは高台付近までやや粗く、内面は分割ヘラミガキがやや密に施されている。見込みのヘラミガキは不明である。推定口径15.4 cm、器高5 cm、高台径6.2 cmを測る。

今回の報告で抽出された瓦器碗の中ではBタイプ、次いでCタイプ、Dタイプの順に多く、他地域の瓦器碗であるEタイプは1点だけ確認できた。

瓦器小皿は口縁端部を丸く納めたものが殆どである。しかし、中には193のように口縁端部内面にナデの際ついたものか筋が1条巡るものがあり、その底は平らである。底部は丸いもの、平らに近いものがある。瓦器小皿の口径は7.5～10.1 cm、器高は1.2～2.7 cmである。瓦器小皿はやや大きめで底部外面にまでヘラミガキが及ぶものや、小さめで外面のヘラミガキが無いものがみられる。しかし、それらは傾向を示すだけで、大きさやヘラミガキの特徴が必ずしも合致しない。

外面のヘラミガキは口縁部に残るものが多い。見込みのヘラミガキは平行のものが多く、他にはジグザグ状、格子ないし斜格子状、螺旋状が僅かにある。瓦器小皿は粘土紐巻き上げか粘土板切り貼りか不明であるが、粘土接合痕を留めるものが多い。

器表面には炭素の吸着のみられないものがあり、底部外面に丸くみられるのは重ね焼の痕跡と考えられ、それ以外のものは被熱の可能性が考えられる。

鉢は出土量が少なく、全体形の分かるものは殆ど無い。図化していないが、口縁部と高台部がある。口縁部に片口が一部みられる。調整は体部外面が斜め方向のナデ、体部内面は横方向のヘラミガキを施している。口縁端部の特徴では、口縁端部が薄く丸みをもつもの、口縁端部が面をなし、略水平のもの、口縁端部の面が内側に傾斜するものがあり、外面に文様かと推測する線刻のみられるものがある。鉢と思われる高台部片では見込みに部分的に密なジグザグ状や間隔の広い平行のヘラミガキが施されている。

土師質土器

土師質土器には羽釜、鍋、甕、竈がある。これらのうち、羽釜は井戸枠に転用されたものが多いのが特徴である。鍋、甕は極めて少ない。竈破片は数点みられる。

土師質羽釜は大形と小形があり、大形で残存状況の良いものは井戸枠に転用されたものが多い。小形は大形の羽釜を小さくした形状であり、罫より上方の口縁部に煤が付着している。口縁と罫の間には1ないし2の穿孔がみられる(168)。口縁部が短く「く」の字状に屈曲し、体部外面をヘラ削りしたものが大部分を占める。内面調整はハケのちナデが多い。罫より下半には煤・焼け焦げが顕著に観察される。土師質羽釜を井戸枠に転用した遺構名は600・606・615・

616・665・725・745・765・812・823・824-OWである。

口縁部形態の特徴により、以下のとおり分類した。

A：頸部で屈曲し、口縁部が長めのもの（77）。井戸椀転用品である。

B：頸部で屈曲し、口縁部が直立気味のもの（71・72・169）。71・72は井戸椀転用品である。

C：頸部で屈曲し、口縁部が短めのものである。短めでも若干の長短がみられる（8・13・27・31・32・48・64～67・168・262）。262以外は井戸椀転用品である。

D：口縁がCより更に短め或いは屈曲の度合いが強いものである（28・29・33・34・38・49～51・78）。全て井戸椀転用品である。

E：頸部で鋭角的に屈曲し、口縁部は短く厚みを持つ。図化していないが、破片が1点ある。

F：口縁端部が玉縁状に肥厚したもの（35）。井戸椀転用品である。

G：胎土中に結晶片岩を含む紀伊型の土器である。図化していないが、3点破片を確認した。

H：口縁部が短く直立する摂津または山城型と類似する形態である。図化していないが、破片が3点ある。体部外面には縦方向のハケ目、内面には斜め横方向のハケ目の後ナデが施されている。体部外面には指押さえの痕跡が残るものがある。体部外面に僅かに削りの痕跡が残る灰白色の瓦質と紛らわしいものを含む。

I：口縁部が短く内傾ぎみに立ち上がるもの（395）。

J：口縁部が大きく内傾して端部で短く直立する形態で、瓦質の羽釜に類似するもの（412）。

K：口縁部に段を持つもの。図化はしていないが、破片が6点みられた。

羽釜はA～D・Fタイプを井戸椀に転用したものが多い。形態の特徴では和泉型または河内型羽釜が主である。紀伊型、摂津または山城型と類似したものは少量認められる。

土師質甕は図化していないが、中世のものかと考えられるものが1点あり、体部外面が指押さえ、内面は板状工具によるナデである。

土師質鍋では、口縁部が緩く外反する形態のもの（128）と、図化していないが、外反した口縁部がさらに上方へ立ち上るものがある。

竈と考えられるものは底等の破片が数点ある。これらは胎土中に多量の金雲母を含み、外面または内面に煤の付着したものが多い。

瓦質土器

瓦質土器には羽釜、ミニチュア羽釜、播鉢、甕、井戸椀、火舎などがある。

瓦質羽釜（図版28）は763-OW、515・620・853-00、505・657・846・860-OS、その他より出土した。瓦質羽釜にも土師質羽釜同様に大形・小形がある。羽釜の大半は和泉型または河内型羽釜であり、外面は段状口縁部の内傾したものが多い。調整は外面を横方向にヘラ削りしたものが殆どである。内面調整はナデ、ハケ目の両方がある。以下、口縁部の形態で分類した。

A：口縁部がやや丈長く内傾した階段状をなし、端部で幅広の形状を呈するもの（142～144・397）。

B：口縁部が内傾した階段状をなし、口縁端部に拡張が殆どみられないもの（126・141・265・266・294・323）。

- C：口縁部が段状をなし、直立ぎみのもの（324）。口縁端部の拡張は殆どみられない。
- D：口縁部が短く直立し、端部で厚みをもつ（140）。
- E：口縁部が内傾するが、段をもたないもの（604）。口縁部がやや長めと短め、齔部の幅が短いものとそうでないものなどがみられる。接合はしないが三足の破片があり、このタイプは三足釜の類と推定される。
- F：口縁部が「く」の字状に屈曲したもの（603）。形状は土師質羽釜と類似するが、焼成は良好で須恵質のように堅緻である。

上記以外、茶釜に類似した形態のミニチュアの羽釜が1点ある。

瓦質播鉢は口縁の形態で2分類した。

- A：口縁端部が僅かに下方へ拡張されたもの（267・321・410）。調整は体部外面が横方向の削りが多く、中には縦方向の削りも施されている。体部内面調整はハケ目またはナデである。
- B：口縁端下部が拡張されていないもの。調整は体部外面に削りの後ナデ、またはナデのみが施されている。体部内面調整はハケ目またはナデである。

底部片（322）では内面にハケ目調整の後の卸目がつけられている。底部外面は削り、体部外面は縦ないし横方向の削りである。底部外内面の表面は使用により荒れているものがある（268）。

瓦質甕は口縁から頸部の形態で6分類した。

- A：短く直立する頸部に口縁部は短く外反し、端部は厚みをもち平坦なもの（296）。体部調整は外面では細かいタタキメ、内面は細かいハケ目である。
- B：頸部の立ち上がりがみられず、口縁部が外側へ折れ曲がるもの。口縁端部は薄く、調整は外面が細かいタタキメ、内面が細かいハケ目である（295・610）。
- C：頸部の立ち上がりが殆どみられず、口縁部の折り曲げが小さいもの。調整は外面が粗いタタキメ、内面が細かいハケ目のもの（620・621）と、内面が粗いハケ目のもの（617）がある。折り曲げた口縁が体部についたものでは外面は粗いタタキメ、内面は粗いハケ目である（618）。
- D：頸部はやや内傾して立ち上がり、口縁部で外側へ折れ曲げ、端部へ向けて薄くなるもの。外面に粗いタタキメ、内面に粗いハケ目（411・619）と、細かいハケ目（615）を施したものと、外面に細かいタタキメ、内面には粗いハケ目（611・613）と、細かいハケ目（612）の両方がみられる。411は復元口径37.4cm・復元体部最大径48.8cm・復元底径27.2cmを測る。底部と底部直上の外面調整は削りである。
- E：頸部はやや内傾して短く立ち上がり、口縁部で外側へ折れ曲がった端部が厚みをもつもの。外面のタタキメは粗く、内面は粗いハケ目（614）、細かいハケ目（616）がみられる。
- F：頸部は短く略直立し、口縁端部は厚く丸いもので、外面は粗いタタキメ、内面は粗いハケ目調整である（622）。

瓦質甕はDタイプがやや多いようである。タイプは不明であるが、井戸枠に転用された甕は体部に1ヶ所穿孔痕がみられる（30）。

瓦質井戸枠は口縁部形態で3分類した。

A：口縁部直下に凸帯を1条貼り付けたもの（325・604）。

B：略直立する体部の続きでそのまま口縁端部へ向けて拡張したもの（326）。粘土を内側に貼り足して拡張させている。

C：口縁端部外側に粘土帯を貼り足したものであるが、小破片のため図化していない。

瓦質井戸椀の体部破片では外面はナデ、内面はハケ目或いはナデである。外面または内面に粘土の接合痕を残す。

火舎は図化していないが、平面形が円形と方形がある。平面が円形を呈したものでは花のスタンプ紋のあるものと、無紋のものがある。平面が方形を呈したものでは方形のスタンプ紋や、雷紋の施紋されたものがある。

須恵質土器

須恵質土器には捏鉢、甕がある。

須恵質捏鉢は東播系須恵器が多い。口縁部形態で5分類した。

A：口縁端部を殆ど拡張していないものであるが、小破片のため図化していない。

B：口縁下端部を外面側へ僅かに拡張しているものであるが、小破片のため図化していない。

C：口縁端部で上方へ僅かに拡張しているもの（319）。

D：口縁端部を上下に僅かに拡張しているものであるが、小破片のため図化していない。

E：口縁端部を上下に明確に拡張しているものであるが、小破片のため図化していない。

抽出された遺物の中ではCタイプが多いようである。

口縁端部は黒っぽいものが多くみられる。体部内面には荒れや摩滅が、底部の残る破片では内側表面の荒れや摩滅が見られる。また、底部外面でも接地部分に摩滅が認められ、これら表面の荒れや摩滅は使用によるものと考えられる。底部外面に回転糸切り痕の一部残るものが1点認められた（63）。

甕は口縁部の特徴で2分類した。成形・調整は体部外面に平行か格子のタタキ、内面はナデである。

A：外反した口縁端部が外下方へつまみ出されたもの（43）。体部外面は粗い平行タタキ、内面はナデである。焼成はやや不良で瓦質的である。

B：頸部から口縁部にかけて逆コの字状に屈曲し、口縁端部が僅かに上方へつまみだされたもの。外面の細かい平行タタキは口縁部までおよび、その後口頸部は横ナデされている。焼成不良で瓦質的なものがあり、外内面は黒色に近い。小破片のため、本書では図化していない。

甕体部破片では外面が粗い格子タタキや細かい格子タタキ、細かい平行タタキの綾杉状に重なったものなどがある。内面はなでているが、当て具痕が残るものもみられる。

国産陶磁器

国産陶磁器¹⁾には常滑、備前、丹波、瀬戸、唐津、肥前系などがみられ、常滑と備前が多い。器種には碗、鉢、搦鉢、甕、壺などがある。碗には山茶碗、染付碗を含む。報告書掲載の大半が860-OSからの出土である。

常滑焼には鉢、甕がある。鉢は口縁端部に拡張のみられない形態である。甕は口縁端部の拡張が見られない I b 型式²⁾、直立ぎみの頸部から口縁部で短く外反し、口縁端部を上方に少し拡張した 5 型式、口縁端部が上方に拡張した 6 a 型式 (152) がある。体部破片では細長い格子状ないし平行線状などのスタンプ紋が幾つかみとめられた。

備前焼には播鉢、甕、壺がある。

備前焼播鉢は口縁部形態で 6 分類した。色調は明暗の差はあるが橙色ないし赤褐色のものが多い。

- A：口縁端部が拡張せず断面コの字状のもの。色調は灰白色である。小破片のため図化していない。
- B：口縁端部が上方に少し拡張しているもの。小破片のため図化していない。
- C：口縁端部が上方へ大きく、下方へは僅かに拡張したもの (332・333)。口縁部内面のナデの強弱により、口縁部と体部の境が浅いもの (333) と、深めのもの (332) がある。332 の内面は卸目が 9 条 1 帯であり、摩滅している。片口部分の破片や、卸目が 7 条 1 帯のものがある。
- D：口縁端部を上方へ大きく拡張し、上端部は内側を強くナデ、さらに体部と口縁部の境が大きく屈曲したもの (334) で、口縁端部外面には凹線が 3 条巡る。
- E：口縁端部を上方へ大きく拡張し端部外面に凹線が 3 条巡るもので、D タイプと類似するが、口縁上端面内側のナデが強く幅広であり、内面の口縁部の立ち上がりは短い。口縁部は内側の粘土を押さえて片口としている。内面の卸目は細めであり、12 条 1 帯である。小破片のため図化していない。
- F：口縁端部上方への拡張幅は短く、内面の卸目が E タイプよりも細く 10 条 1 帯で間隔は他のものよりも密に施されている。口縁内側の粘土を押さえた片口付きである。小破片のため図化していない。

体部および底部破片では、卸目が 7 条 1 帯 (335)、8 条 1 帯 (399)、12 条 1 帯のものがあり、内面の摩滅したものがみられる (335・399・400)。

備前焼壺は口縁端部の特徴で 2 種類認められた。

A：口縁端部に拡張のみられないもの (327)。色調は灰白色である。

B：小さく口縁端部を玉縁状にしたもの (328)。

体部の残存するものでは備前焼鉄漿壺がある。

甕は口縁部が全て玉縁状を呈する。

丹波焼では図化していないが、播鉢があり、口縁端部を内面に折り曲げ、断面三角形状を成す。口縁上端部には灰がかかる。体部破片は内面に 5 または 6 条 1 帯の櫛による卸目がつけられている。底部破片の見込みには同心円、その外周には密な放射状に、櫛による卸目がつけられている。

瀬戸焼には鉢、高台付きの捏鉢 (9)、壺、香炉がある。

東海系の山茶碗、捏鉢は図化していないが僅かにある。

唐津焼は小碗、**肥前系**には香炉、仏花瓶、筒茶碗、皿がある。

輸入陶磁器

輸入陶磁器には厦門碗窯系白磁、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁などがみられ、白磁には碗、皿がある。青磁には碗、皿、壺、青白磁には合子がある。時期は12～15世紀のものである。

同安窯系の青磁は猫描紋のある碗Ⅰ1b類、皿Ⅰ2b類がある。

龍泉窯系の青磁は皿Ⅰ1b類、碗Ⅰ1類、碗Ⅰ4類、Ⅰ5b類がある。碗の文様は蓮弁文、線引き蓮弁文、雷文帯、印花紋、無紋である。破片周縁を打ち欠き、メンコに転用されたものが少しみられる。

白磁皿は口禿口縁のⅨ1c類、Ⅷ1b類、Ⅷ2b類か不明がある。308の見込みは輪状に釉剥ぎしている。

景德鎮窯系の合子の身は青白磁かと思われるものである。

白磁碗はⅣ2類、Ⅴ類、Ⅵ類か不明がある。Ⅳ2類は厦門碗窯系の玉縁口縁の白磁碗である。318の見込みは輪状に釉剥ぎしている。

他に凶化していないが、白磁碗Ⅱ類、中国南部の四耳壺体部破片、取っ手破片や、15～16世紀の龍泉窯系の壺がある。

蛸壺

真蛸壺は砲弾形を呈する真蛸壺の最古例として男里遺跡出土例³⁾の黒色土器A類の時期まで遡ることが和泉では確認される。ここにあげたものは中世期のものと考えられる。151・661の外面には不明の線刻がある。1103は底部破片であり、内面に指頭圧痕が多く残る。

飯蛸壺は釣鐘形をした土師質(173・263・404・664・665)、瓦質(666)がある。瓦質は中世であるが、土師質は同時代のものか、今後の類例を探す必要がある。

黒色土器

内面に炭素を吸着させたA類には椀、鉢、杯がある。椀の口縁端部内面には沈線が一巡する。

内外面に炭素を吸着させたB類には椀、皿がある。椀は瓦器椀と殆ど大差のない器形と大きさである。皿は口縁端部内面に沈線が1条巡る(155)。

須恵器

須恵器は破片が少々みられ、古墳時代から奈良時代にかけての杯蓋(406)、杯身、高杯蓋、有蓋高杯、無蓋高杯(407)、壺(73)、筒形器台、提瓶、横瓶(402)、平瓶、短頸壺(408)、直口壺、長頸壺、台付壺、蛸壺(649～658)がある。

須恵器蛸壺の吊手は粘土を貼り足したものと、体部から粘土を細く絞り出して吊手部分としたものの2種類がある。内面調整では2種類みられ、内面絞りをそのままにしたものと、内面に円板状の粘土を貼り、なでて丁寧に仕上げたものがある。

土師器

先述の土師器の他に破片が少々ある。内訳は弥生時代終わりから古墳時代初め頃の脚台式の製塩土器、古墳時代の杯、高杯、取っ手、奈良時代の甕の取っ手、奈良時代かと思われる鉢、平安

時代の杯、時期不明の竈の取っ手かと考えられるもの、近世の焙烙などである。

弥生土器

弥生土器は少量だが遺構の他、中世遺構・包含層より出土しており、その破片数は1141点を数える。その内、完形、底部残存、胴部の特徴的なものを掲載している。

時期的には、弥生中期から後期のものがみられ、中期の土器が多く、後期の土器は少量である。中期では主に畿内第Ⅱ様式から第Ⅲ様式にかけてのものに残存状態の良いものが目立つ。器種は壺、甕、高杯、蛸壺がみられる。胎土中には石英、長石、チャートか流紋岩の砂礫を含むものが多いが、中にはさらにクサリ礫を含むものもある。他に胎土中に角閃石を含むものが僅かに認められた。弥生中期の土器で粘土接合痕の外傾するものが認められた。

壺の中には頸部と体部下半に穿孔痕のある供献土器と考えられるものがある。これは胎土中に角閃石を含む生駒西麓産である。この壺の文様構成は口縁端部に波状紋、刻み目、頸部は直線紋、体部は簾状紋、直線紋、簾状紋である。壺は全体に櫛描き直線紋の多用が目立つ。この他、細頸壺の胴部破片で角閃石を胎土中に含むものがある。

飯蛸壺は口縁部寄りに外面から1ヶ所穿孔されており、形態は頸部で緩くくびれたものと、そうでないものの2種類がみられる。

弥生土器は出土量が少なく、器種も多くはないが、抽出された範囲内であれば、壺の占める割合が高く、甕の割合が極めて低いのが特徴的である。

土坑出土壺の中に、頸部や胴部を焼成後穿孔したものがあり、供献土器に穿孔土器が多く認められることから、土坑は墓の可能性があると考えられる。

遺構出土土器

土器は井戸、土坑、ピット、溝、その他遺構出土の順に中世のものから説明し、弥生土器が纏って出土した遺構のものは最後にまとめた。

〔井戸出土土器〕

600-OW 出土土器 (図 21)

土師器小皿(1・2)、瓦器小皿(3)、瓦器碗(4～7)、土師質羽釜(8)、瀬戸焼捏鉢(9)、常滑焼甕がある。

土師器小皿はBタイプの1が灰白色、2が橙色である。2点ともに粘土接合痕が残り、1は粘土紐接合痕と推定される。瓦器小皿はヘラミガキが口縁部外面に極まばらに、内面はやや密に、見込は平行に施されている。瓦器碗は4がBタイプでⅡ-2～3期の12世紀中頃、5～7がCタイプで、そのうち5・6がⅢ-2～3期の12世紀終わりから13世紀前半、7がⅣ-1期の13世紀中頃である。8は井戸粹転用の土師質羽釜Cタイプである。口径29cm、鏝径38.8cmを測り、時期は12世紀後半頃のものかと考えられる。9は高台付の捏鉢である。外面の底部から体部にはヘラ削りの痕跡があり、内面は摩滅している。常滑甕体部破片は、658-OW・657-OS出土破片と同一個体であり、体部にはスタンプ紋がある。

606-OW 出土土器 (図 21)

瓦器碗(10・11)、白磁碗(12)、土師質羽釜(13)がある。

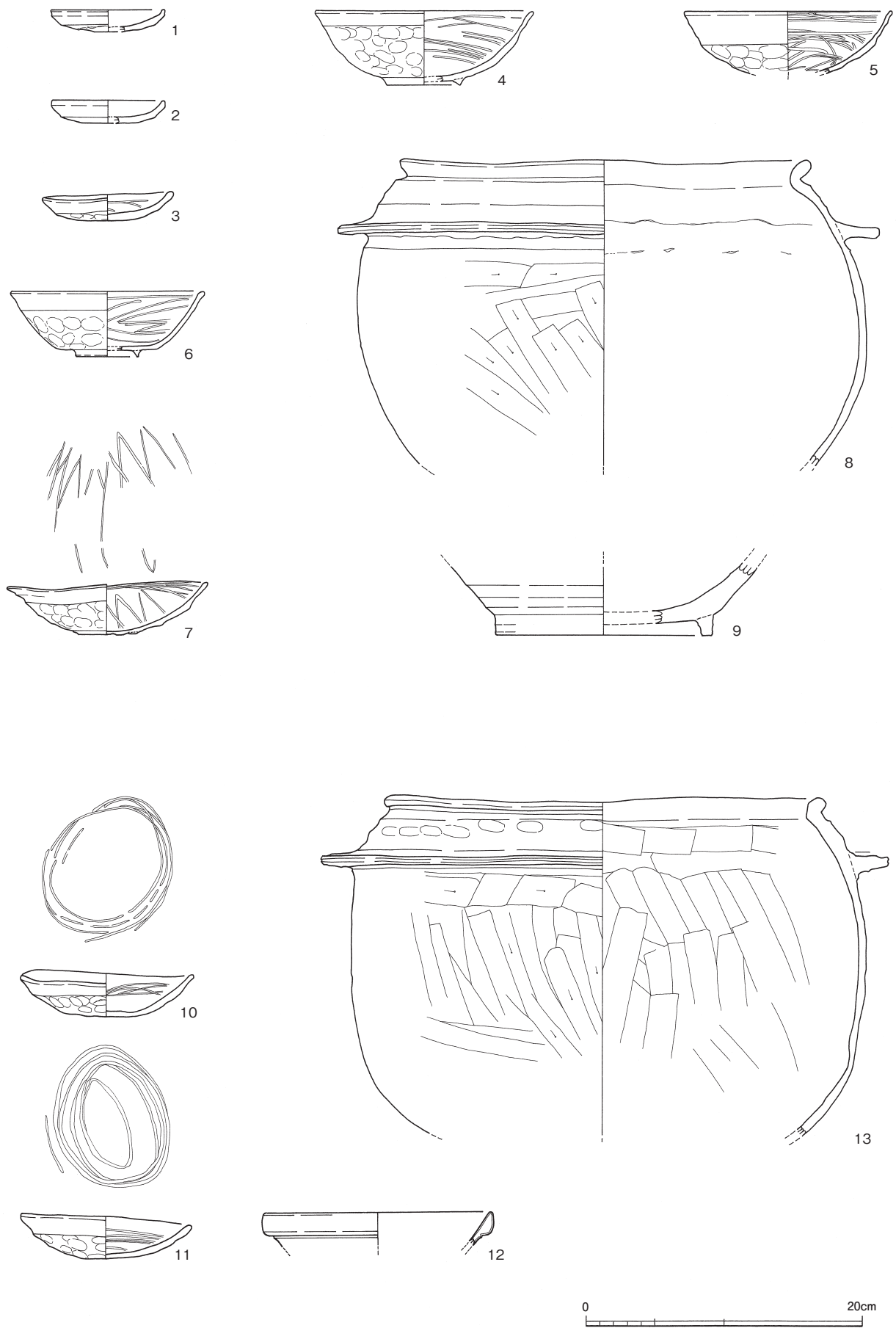


图 21 600·606-OW 出土遗物

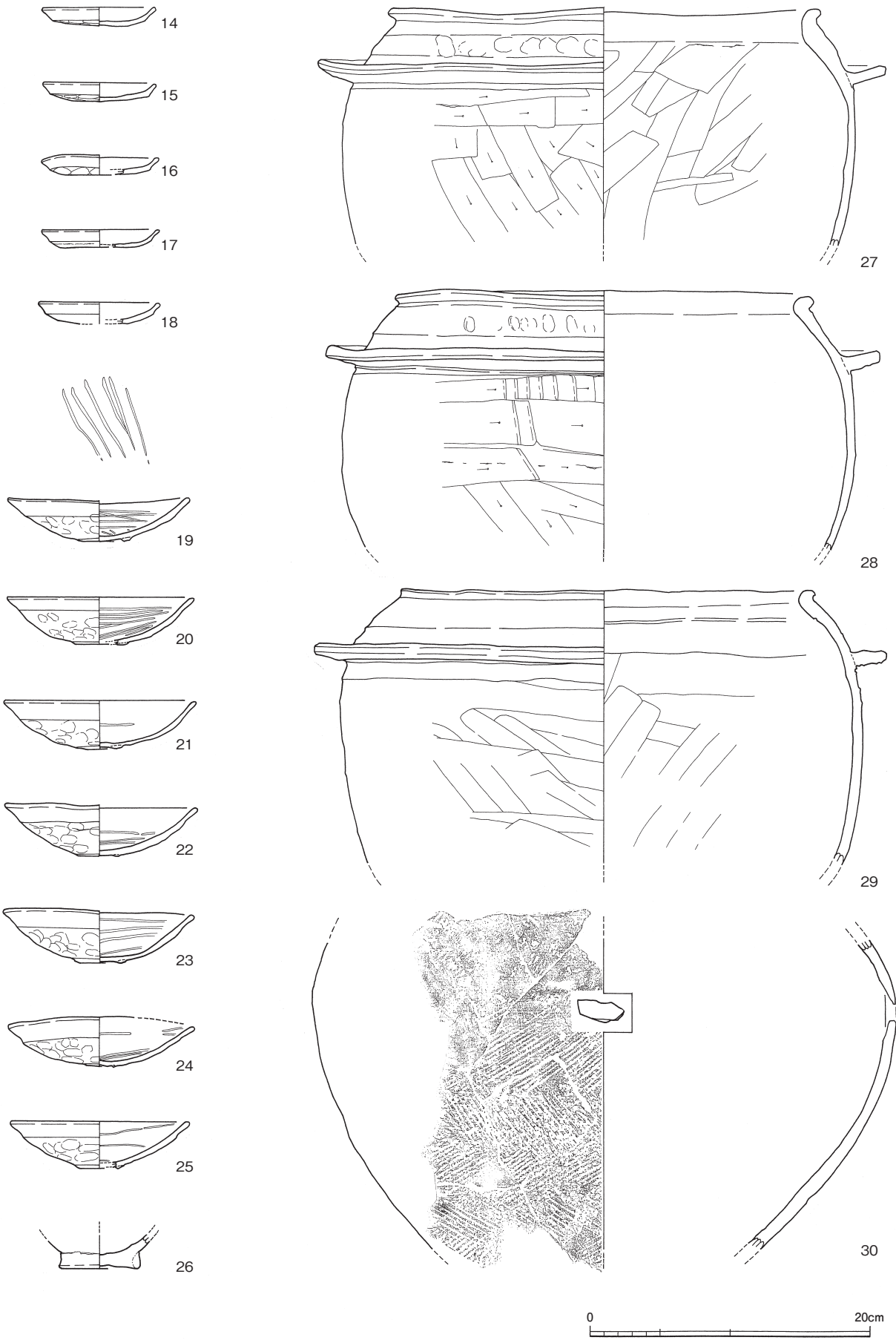


图 22 615-OW 出土遺物 (1)

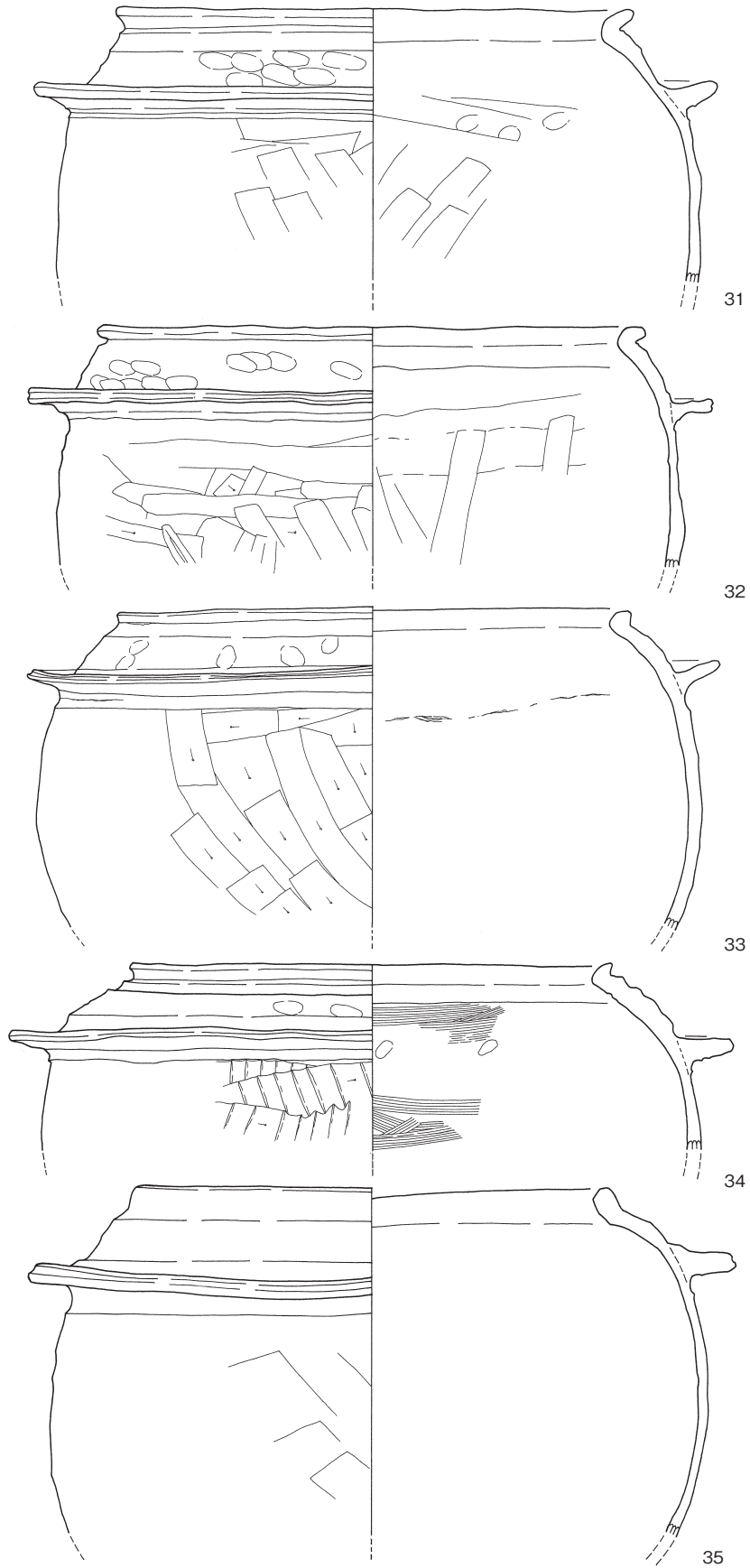


图 23 615-OW 出土遺物 (2)

瓦器碗は高台の消失した形態のDタイプのIV - 3期、13世紀終わりから14世紀初め頃のものである。10の内面に板状のナデが残る。白磁碗は口縁部が玉縁状の廈門碗窯系、13世紀前半のものである。土師質羽釜はCタイプで、井戸枠に転用され、口径31cm、鏝径40.6cmを測る。この遺構の時期は瓦器碗より14世紀初め頃のものと考えられる。

615-OW 出土土器 (図22・23)

土師器小皿(14～18)、瓦器碗(19～25)、青磁碗(625)、須恵質捏鉢、土師質羽釜(27～29・31～35)、須恵質甕、瓦質甕(30)、常滑焼甕、弥生か不明の底部(26)がある。

土師器小皿はBタイプである。16の底部中央に外面からの穿孔がみられる。17・18が橙色、他は灰白色である。14～18の土師器小皿には粘土紐かと推定される接合痕が残る。

瓦器碗は高台が退化した紐状をなすCタイプである。ヘラミガキは内面にはまばらで、見込には平行(19・20)、連結輪状(21・22)、粗い渦巻状で内面のヘラミガキと一体化したもの(23～25)がある。22・24は被熱し、炭素吸着の見られない部分がある。瓦器碗はIV - 2期、13世紀後半と考えられる。

青磁碗はI 5 b類、龍泉窯系の鎬蓮弁紋碗である。時期は13世紀後半である。

須恵質捏鉢は口縁端部を上方に極僅かに摘み上げているCタイプがある。須恵質捏鉢の底部が残るものは、外面底部と内面が摩滅している。時期は13世紀代のものと考えられる。

土師質羽釜は1点の破片を除き、井戸枠に転用されたものである。羽釜の大部分は頸部が「く」の字状に屈曲し、外反した口縁部は小さめのCタイプ(27・31・32)、Dタイプ(33・34)である。31は外反した口縁部がやや長めのCタイプである。35は口縁部が玉縁状のFタイプである。31のみ若干古めの可能性が考えられる。

須恵質甕は外面格子タタキ、内面ナデ調整の体部破片である。瓦質甕は井戸枠詰め物に転用されたものであり、体部に穿孔が1ヶ所みられる。瓦質甕は外面の平行タタキが細めの綾杉状である点から、瓦器碗とほぼ同じ頃の時期かと考えられる。常滑焼甕は図・写真に掲載していないが、I b型式の口縁部があり、時期は13世紀である。体部片ではスタンプ紋のあるものがみられる。

616-OW 出土土器 (図24)

瓦器碗、青磁皿(36)、土師質羽釜(38)、土師質竈(37)がある。

瓦器碗はDタイプの無高台である。ヘラミガキが内面と見込で渦巻状に一体化したものである。時期はIV - 2の13世紀後半頃と考えられる。青磁皿は龍泉窯系I 1 b類の底部であり、内面には猫描紋がみられる。時期は13世紀である。土師質竈は焼き口上部右角の底を含めて残る。調整は外面が縦方向のハケ目、内面が横方向のハケ目のちナデであり、胎土中に多量の金雲母を含む。内面には煤が付着している。井戸枠転用の土師質羽釜はDタイプである。この遺構は瓦器碗より13世紀後半頃と考えられる。

658-OW 出土土器 (図24)

土師器小皿(39～41)、瓦器小皿(42)、瓦器碗、白磁碗、須恵質甕(43)、土師質羽釜、須恵器蛸壺(655)がある。

土師器小皿はBタイプで、39が灰白色、他の2点は橙色である。41の口縁端部外面は平坦である。13世紀のものと考えられる。瓦器小皿は外面にヘラミガキが無く、内面のヘラミガキ

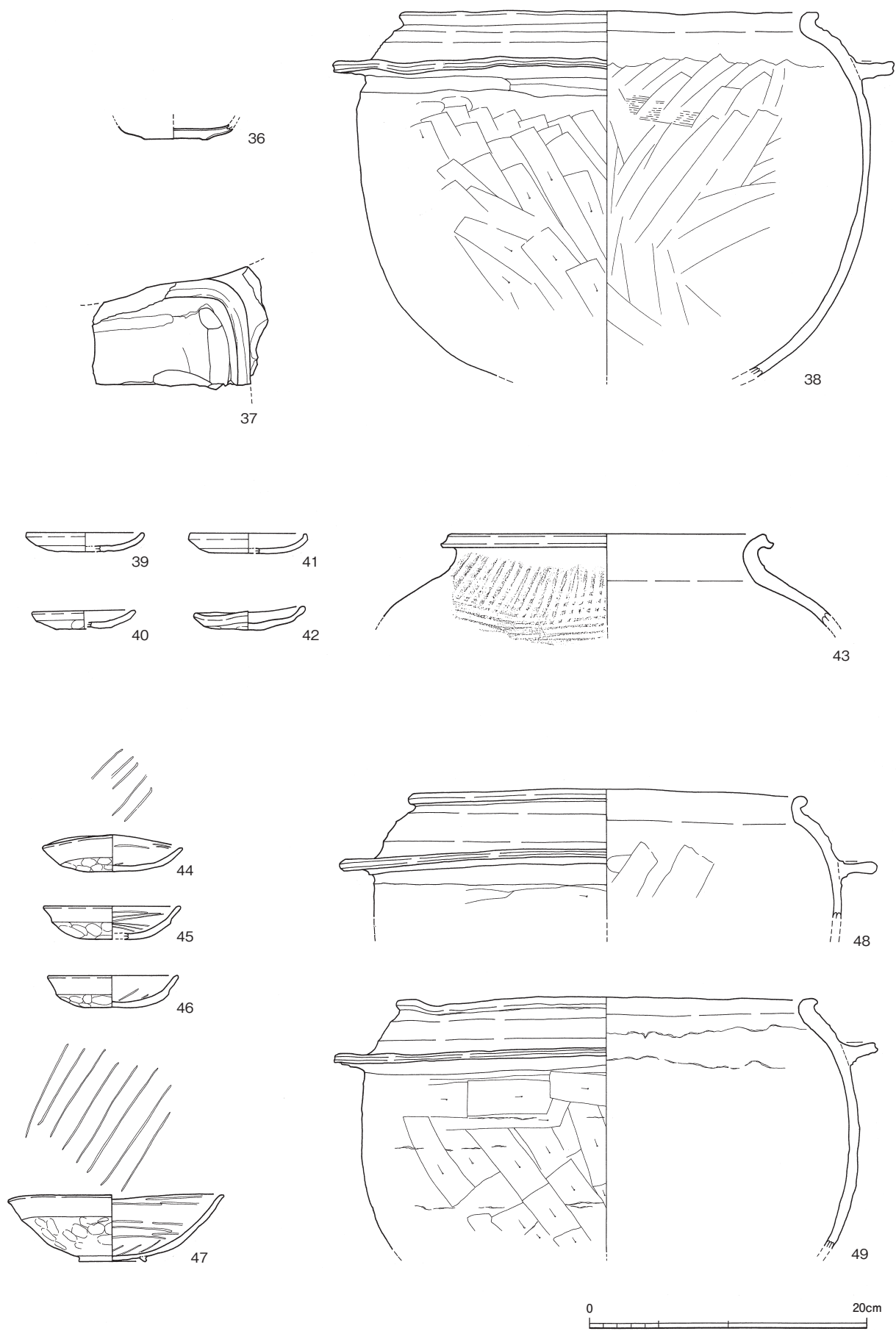


图 24 616 · 658 · 665 · 696-OW 出土遺物

は不明である。瓦器椀はCタイプのIV - 1期、13世紀中頃のものである。白磁碗はVI類かと思われる口縁部で、12世紀のものである。須恵質甕は外面に粗い平行のタタキ目、内面にナデが施されたものである。土師質羽釜は屈曲した口縁部が小さいCタイプとDタイプがみられる。須恵器蛸壺は釣鐘形をした、体部最大径の約7～8cmと推定される大きめの古墳時代のものである。

665-OW 出土土器 (図 24)

土師質羽釜Cタイプ(48)・Dタイプ(49)があり、49は井戸杵転用品である。口縁部はいずれも外反して小さい点から13世紀代のもと考えられる。

696-OW 出土土器 (図 24)

瓦器小皿(44～46)、瓦器椀(47)、土師質飯蛸壺(665)、須恵器蓋がある。

瓦器小皿のヘラミガキは45が外面底部まで、内面は密で、見込みは平行に施されている。44・46は外面口縁部にまばらにヘラミガキが残り、見込みは平行のヘラミガキであり、内面は被熱により炭素の吸着がみられない。瓦器小皿は他に外面のヘラミガキが口縁部と内面にまばらに施された平底に近いものもある。

瓦器椀はBタイプとした中でもⅢ - 2期の12世紀終わり頃から13世紀初め頃のものである。その他に瓦器椀で掲載していないがCタイプでもⅢ - 3期の13世紀前半のものもみられる。土師質飯蛸壺は須恵器の生焼けに近い釣鐘形である。須恵器は高杯蓋のつまみが残る。時期は陶邑Ⅱ型式か。

725-OW 出土土器 (図 25)

土師質羽釜(50・51・601)がある。いずれも井戸杵に転用されたものである。50・51はDタイプであり、体部外面をヘラ削り、内面は板状のものでなでたものと、ハケ目がみられる。601は体部破片であり、外面はヘラ削り、内面はハケ目、ナデである。

763-OW 出土土器 (図 25)

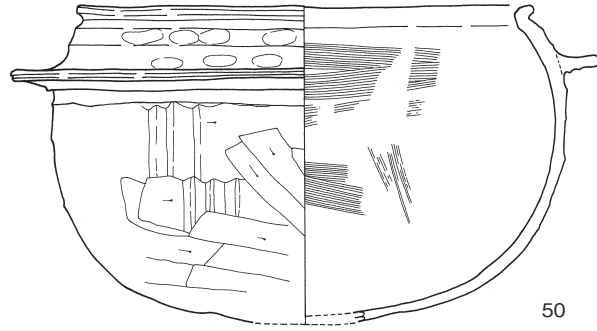
土師器小皿(52～54)、瓦器小皿(55～57)、瓦器椀(58～62)、須恵質捏鉢(63)、土師質羽釜、瓦質羽釜、須恵器壺、須恵器蛸壺がある。

土師器小皿はBタイプで、52・53が灰白色、54が橙色である。瓦器小皿は外面のヘラミガキが口縁部にまばらに施されているものが主である。55は平底で口縁端部内面にナデの際ついたものか沈線が1条巡る。瓦器椀はBタイプでも59がⅡ - 3期の12世紀後半、他はⅢ - 1～2期、12世紀後半から13世紀初め頃のものである。図化していないが、CタイプのⅢ - 3期、13世紀前半頃のものか考えられるものもみられる。須恵質捏鉢はAタイプ、Bタイプ、体部破片がある。土師質羽釜は井戸内出土であり、外反する口縁部がやや長めのBタイプ、摂津か山城型のHタイプがある。瓦質羽釜は口縁部が内傾斜し、口縁端部を丸くおさめたものである。須恵器壺は頸部付け根に突帯を1条巡らせたもので、口縁部寄りに2条の凹線がみられる。須恵器蛸壺は釣鐘形である。

745-OW 出土土器 (図 26)

土師器小皿(68・69)、瓦器小皿(70)、瓦器椀、土師質羽釜(64～67)がある。

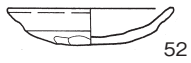
土師器小皿は2点ともに橙色である。69がAタイプ、68はBタイプである。瓦器小皿のヘラミガキは外面ではみられず、内面ではまばらである。他に図化していないがヘラミガキが外面



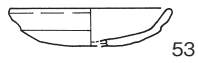
50



51



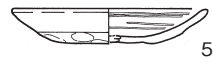
52



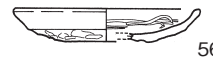
53



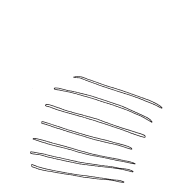
54



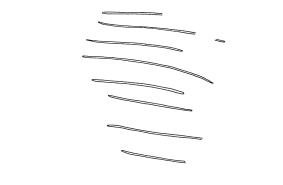
55



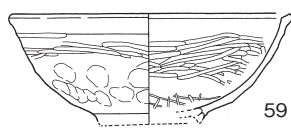
56



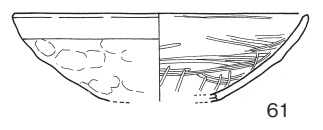
57



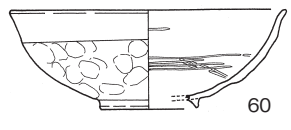
58



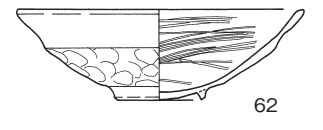
59



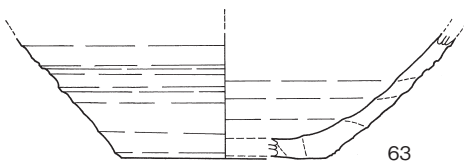
61



60



62



63

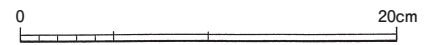


图 25 725·763-OW 出土遺物

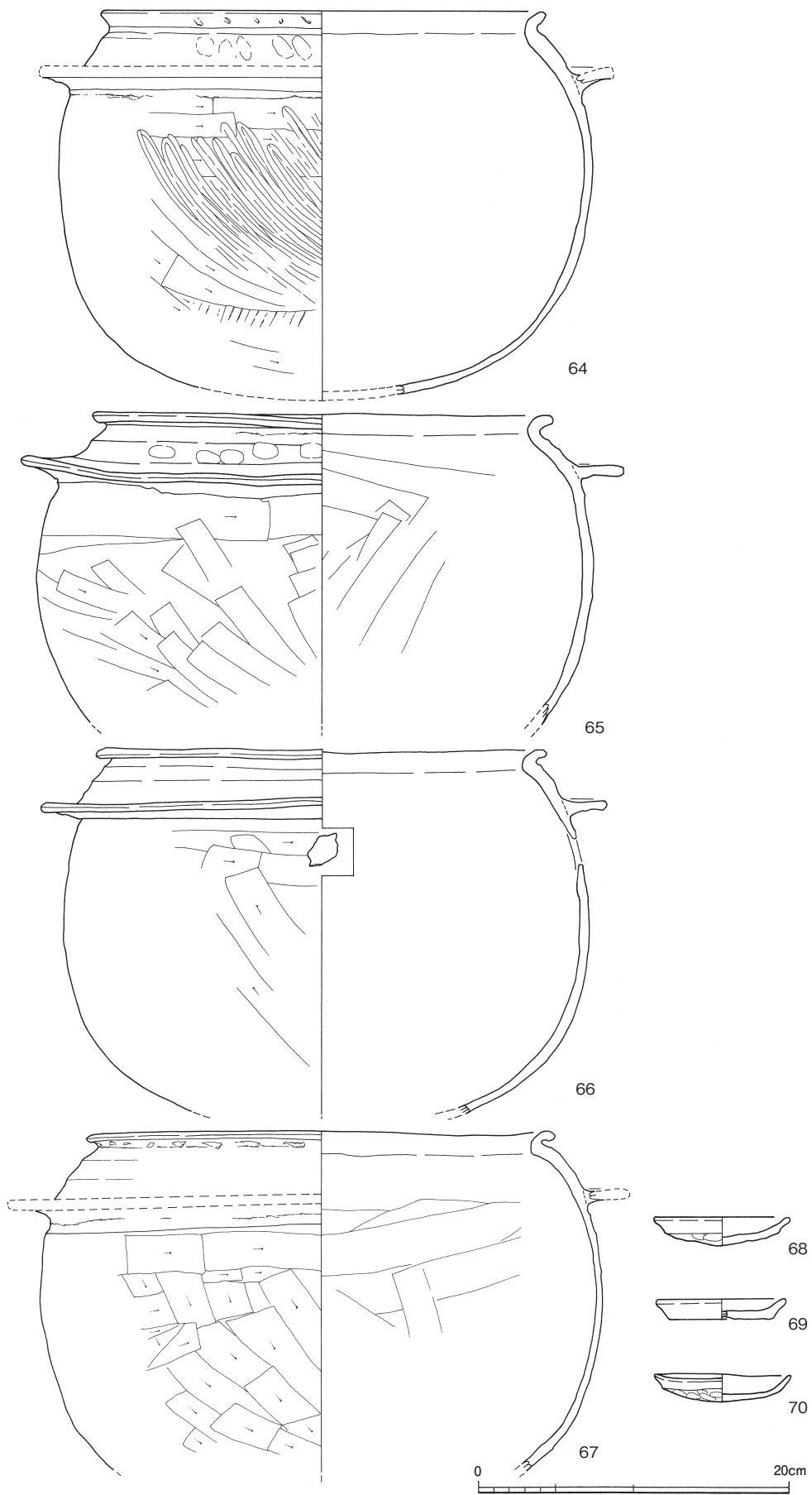
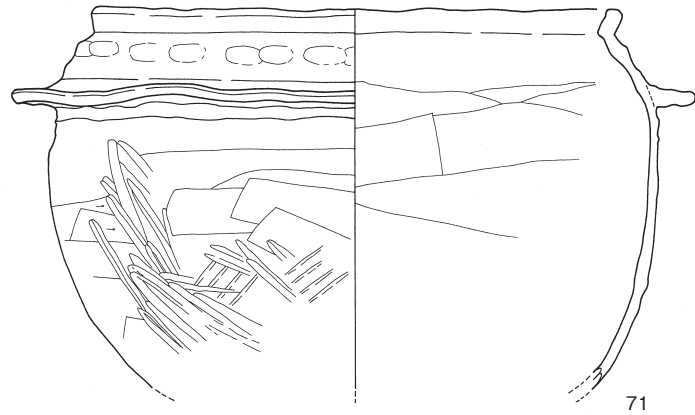
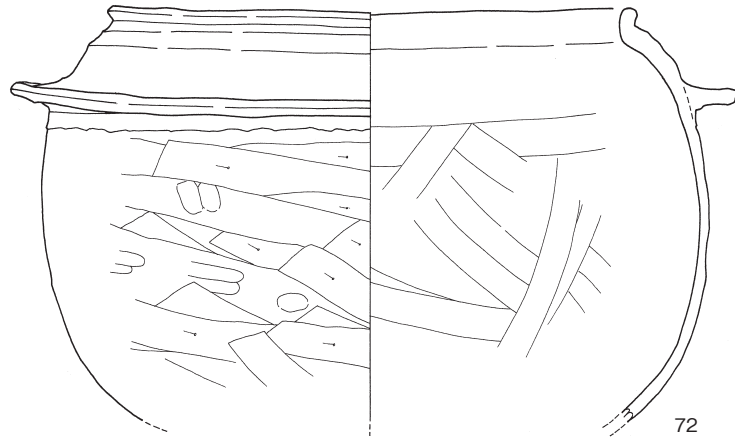


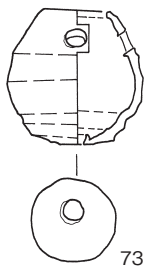
图 26 745-OW 出土遺物



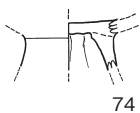
71



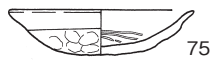
72



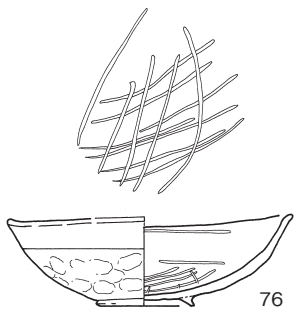
73



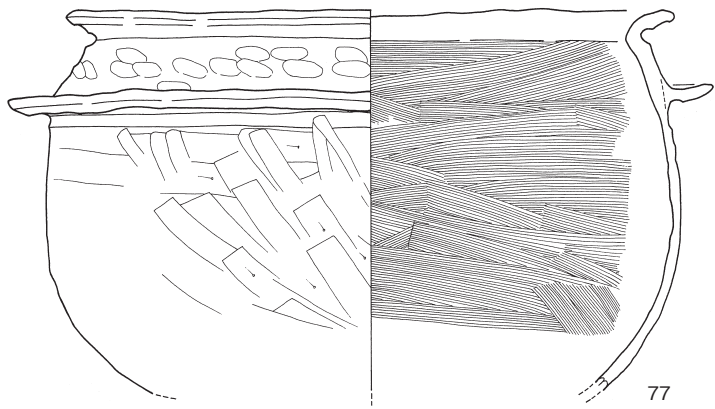
74



75



76



77

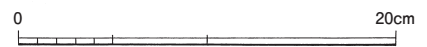


图 27 765 · 812 · 823-OW 出土遺物

口縁部や、底部にまで及ぶもの、見込みには平行に施されているものがある。瓦器椀は図化していないがB・Cタイプがみられ、CタイプはIV - 2期にあたる。土師質羽釜は65～67が井戸椀に転用されている。64～67がCタイプであり、他にDタイプもある。64の体部外面には横方向のへら削りの後、へらミガキ状のナデが施されている。この井戸は瓦器椀からみて13世紀後半のものと考えられる。

765-OW 出土土器 (図 27)

井戸椀に転用された土師質羽釜(71)がある。口縁部が短く立ち上るBタイプである。体部外面には横方向のへら削りの後、へらミガキ状の幅のナデが施され、内面はナデである。

812-OW 出土土器 (図 27)

須恵器壺(73)、土師器脚台(74)、瓦器小皿(75)、瓦器椀(76)、土師質羽釜(77)がある。

73は口縁部直下と底部の2ヶ所に直径1cmの孔が焼成前に外面から開けられており、飯蛸壺形の可能性が考えられる。74は台付皿の脚台か高杯か不明である。瓦器小皿はへらミガキが外面では底部までまばらに、内面では密に、見込では平行に施されている。瓦器椀(76)の見込のへらミガキは斜格子であり、BタイプのII - 3～III - 1期、12世紀後半と思われる。他に図化していないが、Bタイプ、CタイプのIII - 3期の12世紀終わりから13世紀前半と考えられるものもある。井戸椀に転用された土師質羽釜は外反した口縁部の長いAタイプである。体部内面には横方向のハケ目が施されている。

823-OW 出土土器 (図 27)

井戸椀に転用された土師質羽釜(72)がある。土師質羽釜はBタイプであり、体部内面はナデである。

824-OW 出土土器 (図 28)

土師質羽釜Dタイプ(78)がある。羽釜体部外面はへら削りの後、縦方向のへらミガキ状のナデが施されている。

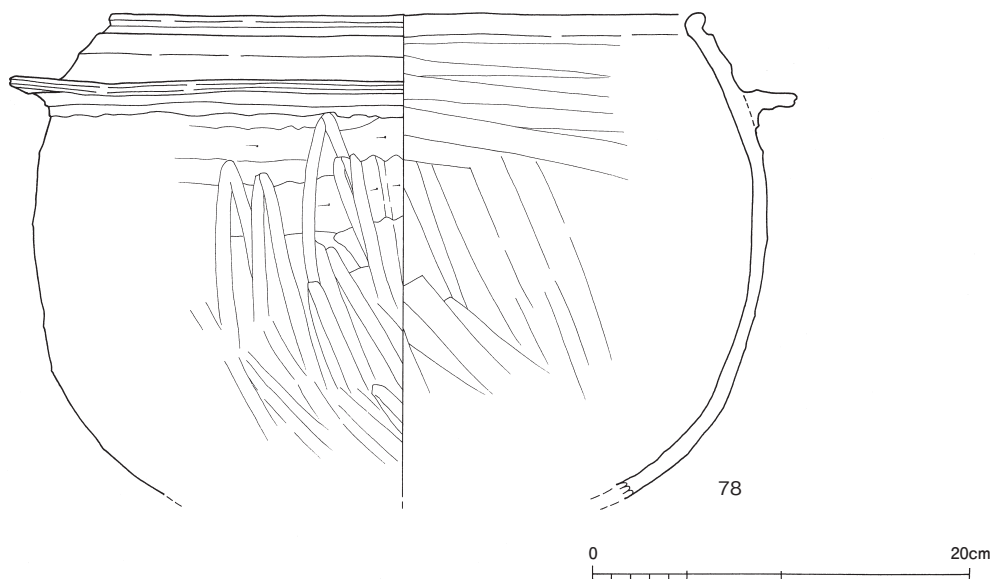


図 28 824-OW 出土遺物

〔土坑出土土器〕

402-00 出土土器 (図 29)

土師器小皿 (79～81)、土師器大皿 (82～84)、瓦器椀がある。

土師器小皿は全て橙色をしており、Bタイプである。80は浅い平底ぎみであるが、底部から口縁部にかけての内面はなだらかである。土師器大皿はAタイプの82・83が橙色、84が茶褐色である。82は口縁端部がなでられ、一部平坦な面をなす。瓦器椀は図化していないが、BタイプのⅡ-3期からⅢ-2期と考えられる。見込のヘラミガキは平行、斜格子、螺旋状がある。時期は12世紀後半から13世紀初め頃にあたり、大半は12世紀後半にあたる。

403-00 出土土器 (図 29)

土師器小皿 (85～87)、瓦器小皿 (88・89)、瓦器椀 (90～92)、白磁碗 (93)、土師質真蛸壺 (663) がある。

土師器小皿はBタイプの灰白色 (85)、橙色 (86・87) がある。瓦器小皿はヘラミガキが外面口縁部にみられ、見込には平行に施している。88は外面底部に重ね焼き痕が残る。瓦器椀はBタイプで高台が比較的しっかりしており、外面口縁部ないし体部までヘラミガキがあり、見込みのヘラミガキが斜格子状 (90)、平行 (91) のものと、Dタイプの高台が退化してなくなった形態のもの (92) の2種類がみられる。時期は前者がⅡ-3～Ⅲ-1期の12世紀後半、後者がⅣ-3～4期の13世紀終わりから14世紀前半にあたる。白磁碗は底部が残存するが、口縁部が玉縁状をした廈門碗窯系のものと推定され、時期は13世紀前半である。土師質真蛸壺は砲弾形の底部破片で、内面には指頭圧痕が多く残り、中世のものと考えられる。

404-00 出土土器 (図 29)

土師器小皿 (94～98)、土師器大皿 (99)、黒色土器椀 (648)、瓦器椀 (100) がある。

土師器小皿Dタイプ (94) は灰白色の「て」の字状口縁が退化したような形態である。95・96・98はCタイプの橙色、97はBタイプの橙色である。土師器大皿はAタイプの茶褐色である。黒色土器椀は内外に炭素を吸着させたB類で、約4分の1個体残存する。口縁端部内面に沈線が1条巡り、内面および外面底部にまで蜜にヘラミガキが施され、復元口径11.0cmである。瓦器椀と大差の無い丸みを持った体部から、11世紀後葉の可能性が考えられる。瓦器椀はBタイプでもヘラミガキが見込みでは主に一方向にやや雑に施されており、Ⅱ-2～3期、12世紀半ば頃にあたる。

427-00 出土土器 (図 29)

土師器小皿Bタイプの橙色 (101) がある。これは粘土接合痕が残り、粘土紐を巻き上げたものかと推測される。時期は12世紀代のものか。

487-00 出土土器 (図 29)

土師器小皿Bタイプの灰白色 (103)、瓦器小皿 (104～106)、瓦器椀Bタイプ (107～110) がある。

瓦器小皿は106が浅めでヘラミガキが外面に施されていない。他は外面にヘラミガキが残る。3点ともに被熱によるものか炭素の吸着がみられない。瓦器椀はⅢ-1期、12世紀後半のものと考えられる。

489-00 出土土器 (図 29)

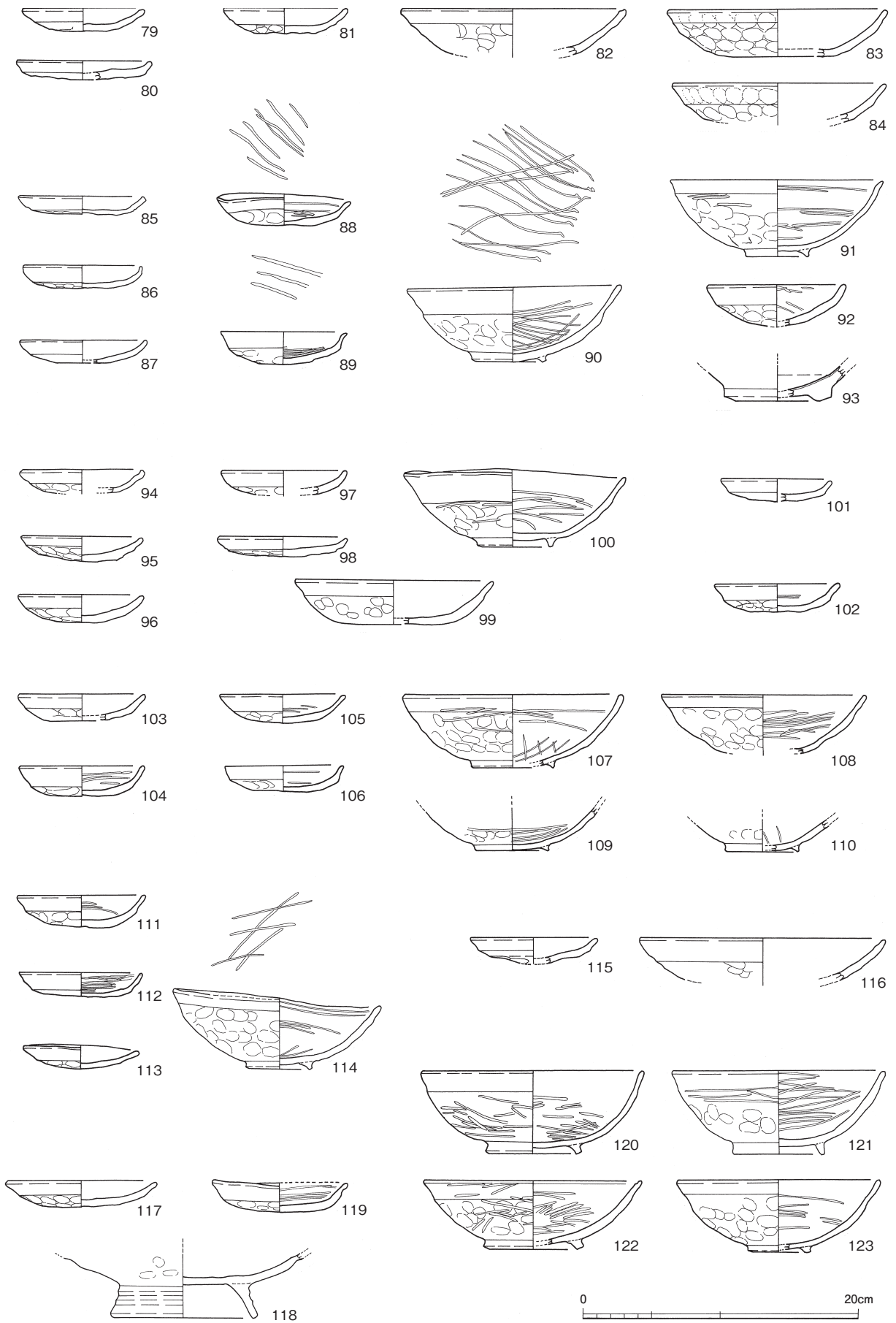


图 29 402 ~ 404 · 427 · 487 · 489 · 491 · 506 · 507-00 出土遗物

瓦器小皿（111～113）、瓦器椀（114）、須恵質捏鉢がある。

瓦器小皿は深くて口径の大きいものから浅くて口径の小さいものがある。112・113は被熱によるものか炭素の吸着がみられない。瓦器椀はBタイプのⅡ-3～Ⅲ-1期、12世紀後半のものと考えられる。見込みには重ね焼の際ついたと思われる高台の痕跡が残る。須恵質捏鉢は口縁端部に拡張のみられないAタイプであり、11世紀後半のものと考えられる。外面は重ね焼きの痕跡か、口縁部が黒色である。

491-00 出土土器（図 29）

瓦器小皿（102）がある。瓦器小皿はヘラミガキが外面にまばらに、内面はやや密に、見込みは平行に施されており、時期はⅢ-1～2期、12世紀後半から13世紀初め頃のものと考えられる。

506-00 出土土器（図 29）

土師器小皿（117）、土師器脚台（118）、黒色土器（120）、瓦器小皿（119）、瓦器椀（121～123）がある。

土師器小皿はCタイプの茶褐色で、口縁部寄りに粘土接合痕を留める。118は12世紀代の盤かと思われるものの脚台である。黒色土器は内面に炭素を吸着させたA類の椀である。口縁端部内面には沈線が1条巡る。10世紀のものか。瓦器小皿は外面底部にまで平行方向にやや密なヘラミガキが施されており、内面も密で、見込みには密な平行に直交するヘラミガキが少しみられる。瓦器椀は121・122がAタイプのⅡ-1～2期、12世紀前半、123がBタイプのⅢ-1～2期、12世紀終わりから13世紀前半のものである。122は口縁端部内面に沈線が1条巡り、ヘラミガキは外面では底部までやや粗く、内面ではやや密に施している。この他、図化していないが、被熱した底部欠損品で内面のヘラミガキがまばらなCタイプがあり、Ⅳ-1期、13世紀半ば頃のものと考えられる。

507-00 出土土器（図 29）

土師器小皿Bタイプ（115）・大皿Aタイプ（116）、黒色土器鉢（644）、瓦器椀がある。

土師器は小皿・大皿ともに橙色である。115は粘土紐巻き上げかと思われる粘土接合痕を留める。黒色土器鉢は内面に炭素を吸着したA類で、外へ開きぎみの口縁部をなし、ヘラミガキは外面ではやや密に、内面では螺旋状に施されている。瓦器椀は底部が残存するものにBタイプがあり、ヘラミガキは外面の口縁部または底部までみられ、内面ではやや密に、見込では平行に施されている。瓦器椀はⅡ-2～3期、12世紀半ば頃のものと考えられる。

513-00 出土土器（図 30）

土師器大皿（125）、瓦器小皿、瓦器椀がある。

土師器大皿はCタイプの灰白色で、口縁端部が摘み上げにより小さく立ち上る。12世紀代のものと考えられる。瓦器小皿はヘラミガキが外面口縁部にまばらに施されているものと、ヘラミガキが外面に無く、内面もまばらなものがある。瓦器椀はB・Cタイプがみられ、Cタイプではヘラミガキが外面口縁部および内面にまばらに、見込には平行に施されており、高台径は3cmである。見込みには重ね焼の際ついたと思われる高台の痕跡が残る。Ⅲ-3期、13世紀前半のものと考えられる。瓦器椀Bタイプでは高台径が5.4cmで、ヘラミガキが外面にまばらに、内面ではやや密に、見込みは平行に施されており、Ⅱ-3期、12世紀後半にあたる。この遺構の時期は瓦器椀より、13世紀前半頃のものと考えられる。

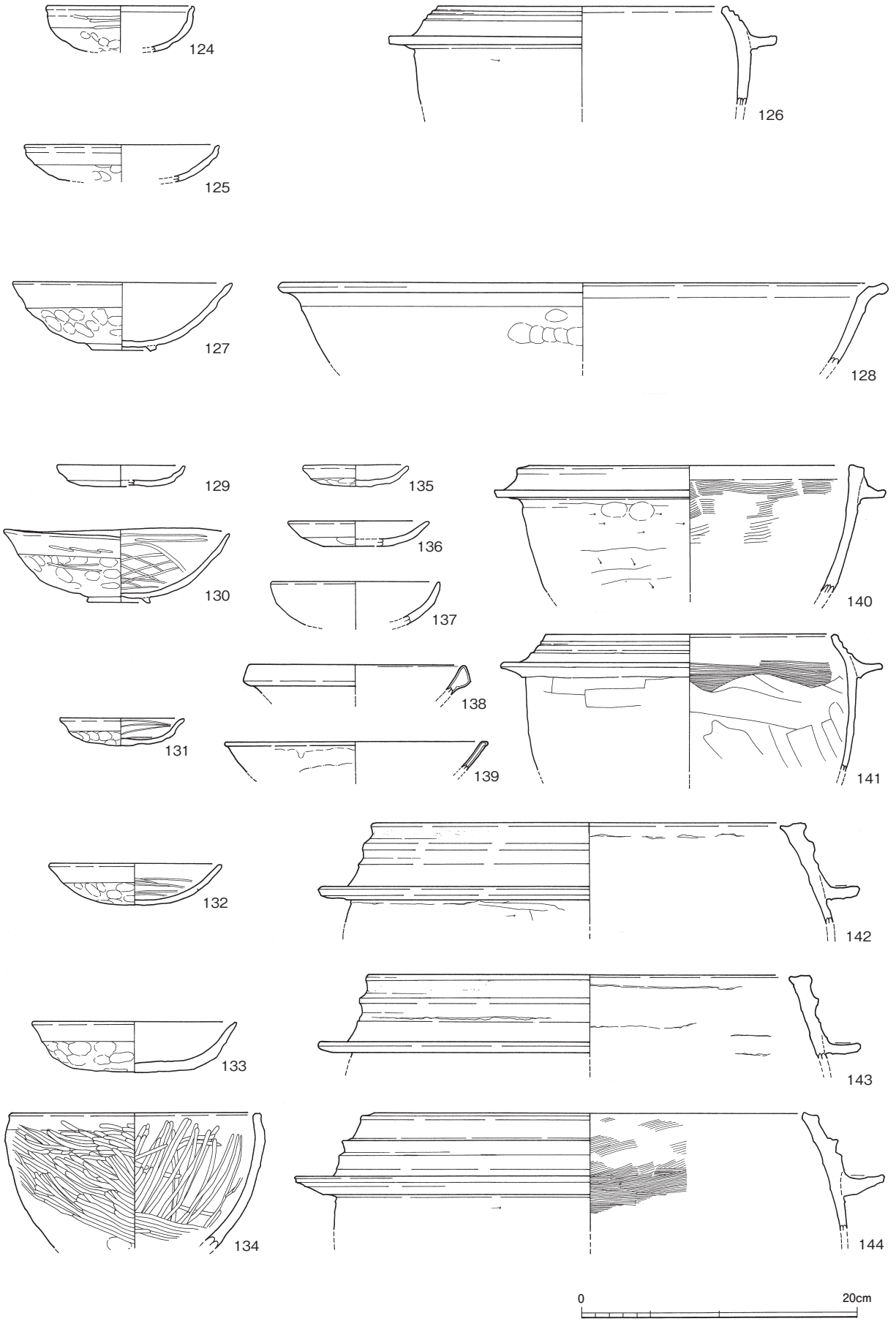


图 30 513 · 515 · 583 · 584 · 595 · 619 · 620 · 653 · 667-00 出土遺物

515-00 出土土器 (図 30)

瓦質羽釜 B タイプ (126)、瓦質甕 B タイプ (610) がある。瓦質羽釜は口縁部が内傾した階段状をなし、調整は体部外面が横方向のヘラ削り、内面はナデである。

583-00 出土土器 (図 30)

土師器杯 (124) がある。これは口縁端部が内側へ傾斜した深めの器形であり、飛鳥Ⅱ～Ⅲの可能性が考えられる。

584-00 出土土器 (図 30)

瓦器椀 (127)、土師質鍋 (128) がある。

瓦器椀は B タイプの、口径 15.3 cm、器高 4.9 × 5.2 cm、高台径 4.2 cm である。ヘラミガキは外面では口縁部にまばらに、内面では密に、見込みでは平行か不明瞭である。Ⅲ - 2 期、12 世紀終わりから 13 世紀初め頃のものと考えられる。土師質鍋は外内面ともになでており、外面には指頭圧痕が残り、煤の付着が認められる。復元口径は 43.0 cm である。

595-00 出土土器 (図 30)

土師器小皿 (129)、瓦器椀 (130) がある。土師器小皿は B タイプで、色調は橙色である。瓦器椀は B タイプで、ヘラミガキが外面には体部までみられ、内面では粗く見込みには雑な斜格子状に施されている。時期はⅡ - 3～Ⅲ - 1 期、12 世紀後半のものと考えられる。

619-00 出土土器 (図 30)

瓦器椀 (132)、須恵質捏鉢がある。

瓦器椀は D タイプの無高台である。ヘラミガキは内面ではまばらで見込みまでの粗い渦巻状をなす。瓦器椀は被熱、赤変しており、時期はⅣ - 3～4、13 世紀後半から 14 世紀前半と考えられる。

須恵質捏鉢は C タイプの口縁端部が上方へ僅かに拡張しており、口縁端部外面は黒い。

620-00 出土土器 (図 30)

土師器小皿 (135・136)、土師器大皿 (137)、白磁碗 (138・139)、土師質鍋、瓦質羽釜 (140～144)、瓦質甕 (611・612)、土師質真蛸壺 (662)、須恵器提瓶がある。

土師器小皿は B タイプの 135 が灰白色、136 が橙色である。土師器大皿は B タイプの灰白色である。白磁碗は 138 が口縁部玉縁状をした廈門碗窯系、139 は白磁碗 V 類の口縁部であり、13 世紀前半のものである。土師質鍋は口縁部が外反する。調整は外面が指押さえ後横ナデ、内面が口頸部にかけて横方向のハケである。外面に煤が付着している。胎土中にはチャート、クサリ礫、長石、石英のうち、長石、石英を多く含み、他と異なる。瓦質羽釜は 140 が D タイプの口縁部の短く直立した形態で、摂津か山城のものと考えられる。141～144 が段釜で、141 が B タイプ、残りは A タイプである。羽釜は 14 世紀代のものか。瓦質甕は D タイプの口縁端部を斜め下方に折り返し、外面のタタキ目が細かい点から、14 世紀末から 15 世紀初めころのものと考えられる。土師質真蛸壺は口縁部が外反する形の中世と考えられるものである。須恵器提瓶は把手部分であり、断面形が丸みを持ち平面形が環状をなす点から陶邑Ⅱ型式 1～3 段階と考えられる。

653-00 出土土器 (図 30)

土師器大皿 (133)、土師器鉢 (134)、土師質竈がある。土師器大皿は A タイプの色調が灰白色で、口縁端部がナデにより一部平坦で薄い。粘土紐巻上げ痕かと思われる痕跡を留める。時期

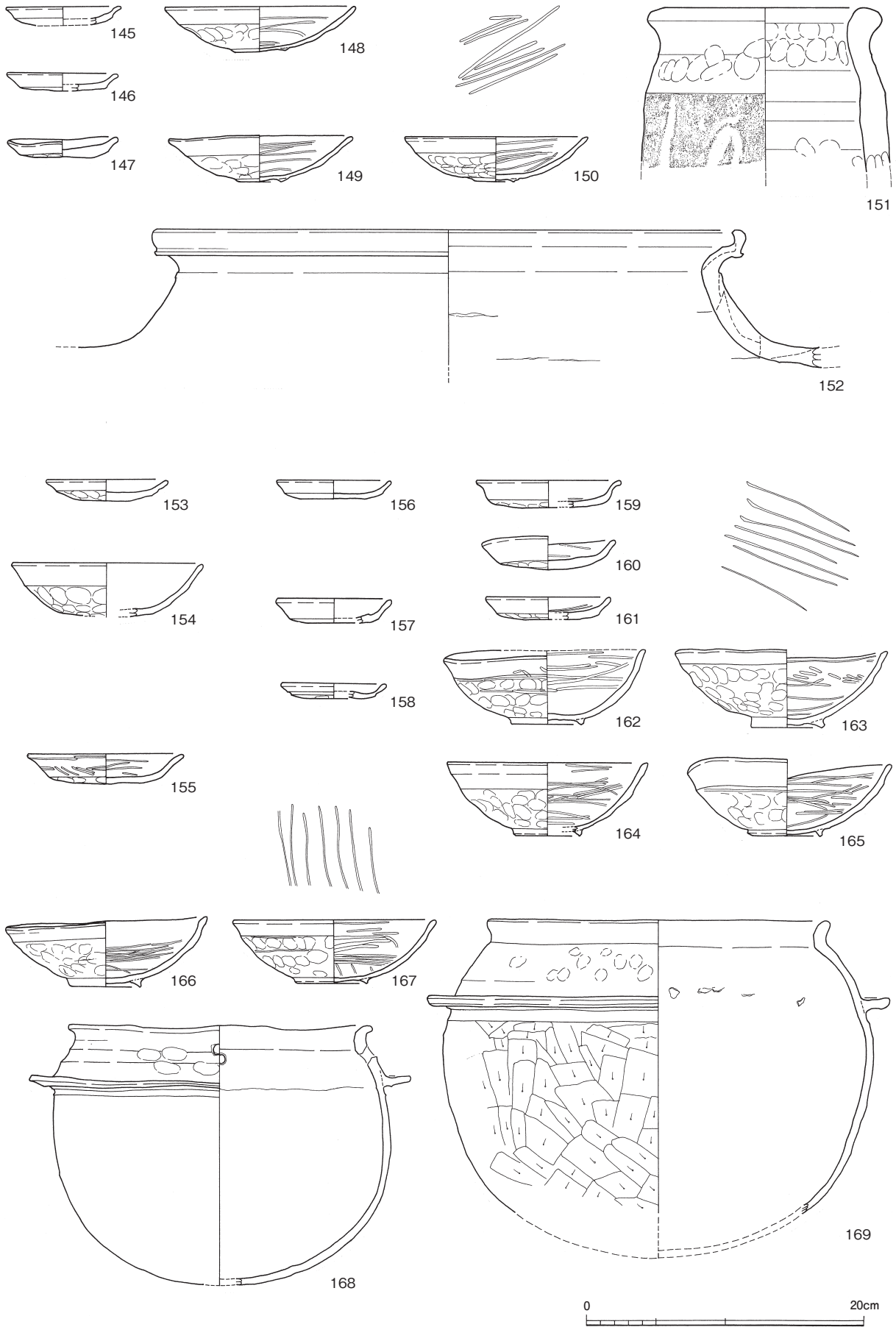


图 31 673·735·738·743·744·747·844-00 出土遺物

は平安時代のものかと考えられる。土師器鉢は復元口径 17.8 cmを測る、奈良時代かと考えられるものである。土師質竈は体部破片と考えられるもので、外面は指押さえ、ナデにより調整されているが、粘土紐接合痕跡を留める。時期は不明である。

667-00 出土土器 (図 30)

瓦器小皿 (131)、瓦器椀がある。瓦器小皿は平底ぎみで、ヘラミガキが外面には無く、内面にやや密に、見込では平行に施されている。瓦器椀は C タイプの推定口径 13.6 cm、器高 3.2 × 3.7 cm、高台径 3 cm である。ヘラミガキは内面に粗く、見込には螺旋状にまばらに施されており、時期は IV - 1 ~ 2 期、13 世紀後半と考えられる。

673-00 出土土器 (図 31)

土師器小皿 (145・146)、瓦器小皿 (147)、瓦器椀 (148 ~ 150)、常滑甕 (152)、土師質真蛸壺 (151) がある。

土師器小皿は 145 が B タイプの橙色、146 が A タイプの灰白色である。瓦器小皿はヘラミガキが見込みだけにみられ、口径はやや小さめである。瓦器椀は C タイプであり、見込みのヘラミガキは 148 が粗い渦巻状、149 が粗い連結輪状、150 が平行であり、高台は紐状の継ぎ目が雑である。時期は IV - 2 期、13 世紀後半と考えられる。常滑甕は中野氏編年の常滑 6 a か 6 b 型式に該当すると思われる、13 世紀後半にあたる。土師質真蛸壺は体部外面に太い線刻があり、中世のものと考えられる。

704-00 出土土器 (図版 32)

白磁碗、須恵器蛸壺 (650) がある。白磁碗は体部破片で 13 世紀のものである。須恵器蛸壺は釣鐘形をしており、古墳時代のものと考えられる。

735-00 出土土器 (図 31)

瓦器小皿 (159 ~ 161)、瓦器椀 (162 ~ 165)、白磁皿がある。

瓦器小皿は 159・160 のヘラミガキが外面口縁部にあり、内面にはやや密に施され、口径が大きく深めである。161 はヘラミガキが外面に無く、口径も小さめで内面のヘラミガキもまばらである。159 は被熱によるものか外面に一部炭素の吸着のみられないものがある。瓦器椀見込みのヘラミガキは平行が多く、なかには斜格子もみられる。瓦器椀は高台の大きくしっかりした形状の A タイプ、高台径が大きめの 162・163・165 は B タイプでも III - 1 期、12 世紀後半、高台径がやや小さめの 164 は B タイプでも III - 2 ~ 3 期、12 世紀終わりから 13 世紀前半と考えられる。162 の外面口縁部には重ね焼の際ついたと思われる細片が溶着している。白磁皿は口縁部が残存し、VIII 1 b 類の 12 世紀後半のものである。

738-00 出土土器 (図 31)

瓦器椀 (166・167)、土師質羽釜 (168・169) がある。瓦器椀は B タイプがあり、見込みのヘラミガキは 167 が平行、166 は連結輪状である。III - 2 ~ 3 期、12 世紀終わりから 13 世紀前半のものと考えられる。瓦器椀では他に、図化していないが、見込みのヘラミガキが内面に密に施された II - 2 ~ 3 期、12 世紀半ば頃と考えられるものもある。土師質羽釜は 169 が口縁部の立ち上る B タイプであり、12 世紀後半頃、168 は C タイプの短く外反する口縁部で穿孔が 1ヶ所、2 方向にみられる。168 の口径は 21.4 cm、鏝径 27.3 cm である。

743-00 出土土器 (図 31)

土師器小皿Cタイプ(153)、土師器大皿Aタイプ(154)がある。小皿・大皿ともに橙色で、粘土紐接合痕を留める。底部から口縁部にかけて丸くなだらかな点から、533-OP出土土器と同じく、時期は11世紀代のものか。

744-00 出土土器 (図31)

黒色土器B類の小皿(155)がある。約1/4個体残存し、口縁端部内面に沈線が1条巡る。ヘラミガキは内面および外面底部まで蜜に施され、復元口径11cm、器高2.1cmである。断面の色は茶褐色である。瓦器出現前位のものかと考えられる。

747-00 出土土器 (図31)

土師器小皿(156)がある。これはBタイプの橙色であり、740-OS出土破片と接合した。形態的な特徴から13世紀代のものかと考えられる。

816-00 出土土器

須恵器杯身、杯蓋がある。須恵器は杯身口縁部であり、陶邑Ⅱ-4～5、6世紀後半、外面に自然釉のかかった杯蓋は陶邑Ⅲ-2、7世紀半ば頃と考えられる。

821-00 出土土器 (図32)

瓦器小皿(170)、瓦器椀(171・172)がある。瓦器小皿は見込みのヘラミガキが平行である。外面底部に重ね焼き痕が残る。瓦器椀はBタイプのⅢ-1期、12世紀後半のものと考えられる。他に図化していないがCタイプのⅢ-3期、13世紀前半もみられる。

844-00 出土土器 (図31)

土師器小皿Bタイプ(157・158)がある。157が橙色、158が灰白色である。

853-00 出土土器 (図版28)

青磁花瓶、備前焼甕、瓦質羽釜(602)がある。青磁花瓶は肥前系で18世紀のものである。備前焼甕は底部が残存し時期は不明である。瓦質羽釜は口縁端部が欠損しているが、ほぼ直立する口縁部外面に凹線状の段、内面は横方向のハケ目、ナデがみられる。焼成は良好で須恵質のように堅緻である。

[ピット出土土器]

442-OP 出土土器 (図33)

土師器小皿Bタイプの灰白色(174)、瓦器小皿がある。瓦器小皿は外面口縁部にヘラミガキをまばらに留めたもので、時期は12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

484-OP 出土土器 (図33)

釣鐘形をした土師質飯蛸壺(173)がある。内面には青海波紋の当て具痕が残り、形態的には古墳時代出土の須恵器の飯蛸壺と類似する。時期は古代か中世のものか不明である。

494-OP 出土土器 (図33)

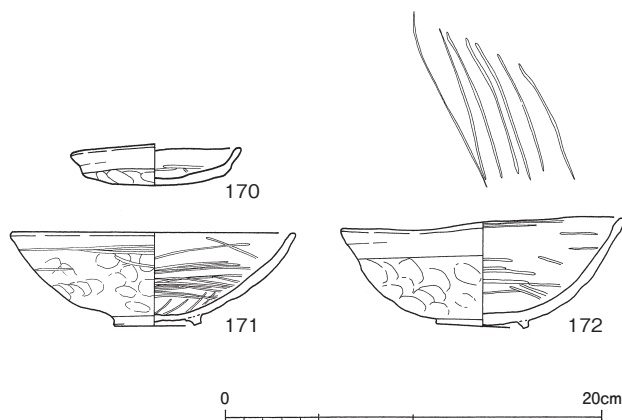


図32 821-00 出土遺物

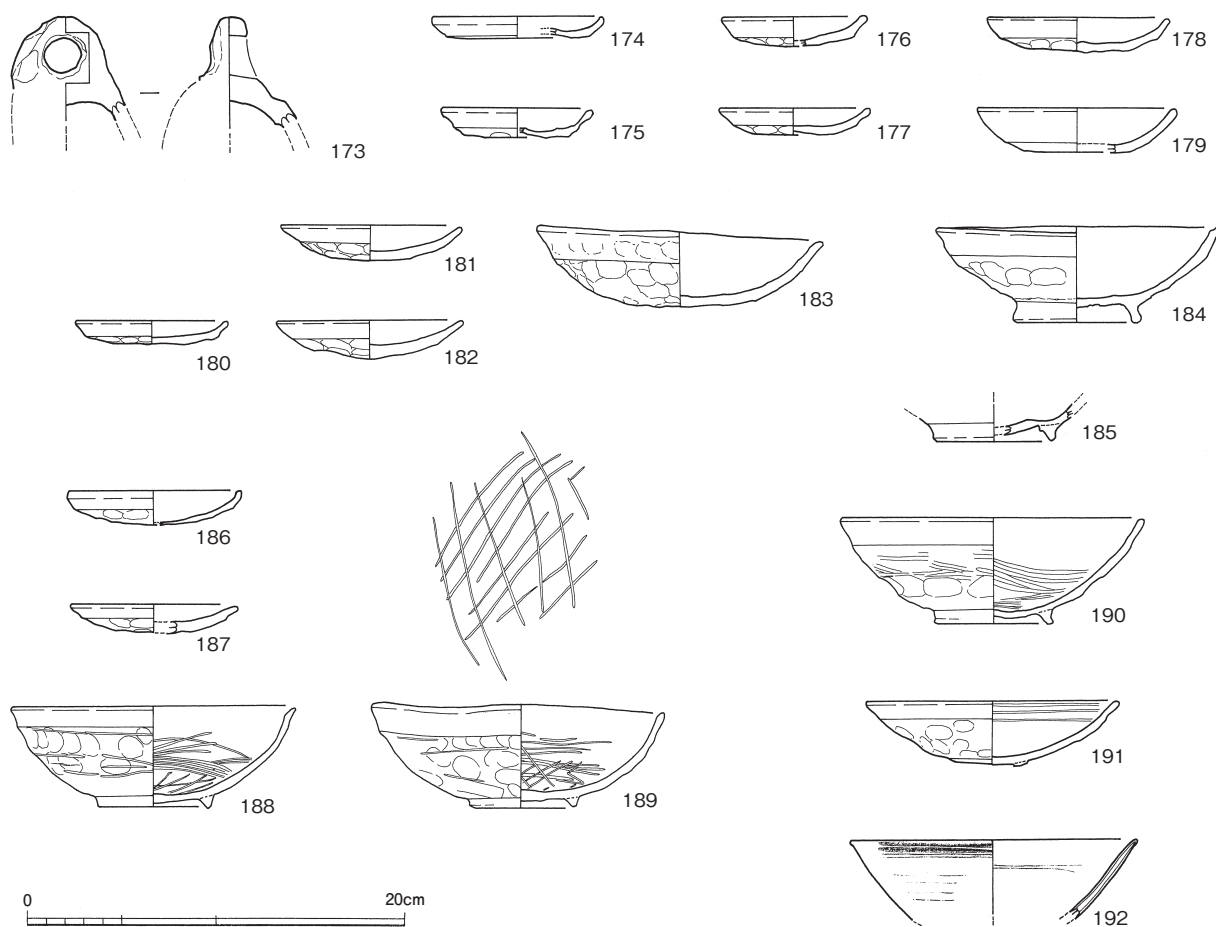


図33 442・484・494・514・516～518・533・537・563・617・722・815-OP 出土遺物

土師器碗（184）がある。これは杯に高台が貼りつけられたような形態をなし、12世紀代のものと考えられる。

514-OP 出土土器（図33）

土師器小皿Bタイプの橙色（175）がある。12～13世紀のものと考えられる。

516-OP 出土土器（図33）

土師器小皿Bタイプの橙色（176・177）、瓦器鉢がある。土師器小皿（176）は中心から外方へむけて粘土の継ぎ目があり、円板状粘土に切りこみを入れて作ったものかと推測する。13世紀のものか。瓦器鉢は口縁端部が内側で面をなし、外面には櫛描紋様か不明の線刻がみられる。

517-OP 出土土器（図33）

土師器小皿Bタイプ（178・179）がある。178が橙色、179が灰白色である。

518-OP 出土土器（図33）

土師器小皿Bタイプの橙色（180）がある。

533-OP 出土土器（図33）

土師器の小皿Cタイプ（181・182）、大皿Aタイプ（183）がある。土師器皿は181が灰白色、182・183が橙色である。これらは底部から口縁部にかけて丸くなだらかな点から、11世紀代のものか考える。

537-OP 出土土器（図33）

瓦器碗Aタイプ（190）がある。ヘラミガキは外面では底部寄りまでまばらに、内面はやや密

に、見込は連結輪状に施され、被熱の痕跡がある。Ⅱ - 1～2期の12世紀前半である。

563-OP 出土土器 (図 33)

中世の土師器椀高台部破片がある(185)。高台は断面三角形状をなし、高台を貼付けた後の高台内側のナデが雑である。高台外側および内面はなでられ、ハケ目状の筋が残る。底部外面は指押さえの後、ナデの筋が僅かに認められる。胎土中には金雲母を含む。吉備系の土師器椀の可能性⁴⁾がある。このような高台の特徴をもつ土師器椀はこの1点だけである。

617-OP 出土土器 (図 33)

瓦器椀Cタイプ(191)がある。高台が殆ど退化した形態で、ヘラミガキは外面には無く、内面もまばらで見込の粗い渦巻状が圏線と一体化している。Ⅳ - 2期の13世紀後半と考えられる。

722-OP 出土土器 (図 33)

12世紀代の白磁碗(192)がある。

815-OP 出土土器 (図 33)

土師器小皿(186・187)、瓦器椀(188・189)がある。土師器小皿は186がBタイプの灰白色、187がCタイプの橙色である。瓦器椀はBタイプである。ヘラミガキは外面ではまばらに底部近くまであり、内面ではやや密、見込は斜格子である。時期はⅡ - 3期の12世紀中頃から後半にあたる。

[溝出土土器]

505-OS 出土土器 (図 34・35)

土師器小皿(229～257)、土師器大皿(258～261)、瓦器小皿(193～207)、瓦器椀(208～228)、白磁碗(264)、土師質羽釜(262)、土師質甕?、土師質竈、瓦質播鉢、瓦質羽釜(604)、瓦質三足(606・607)、須恵質捏鉢、須恵質甕、須恵器杯蓋・杯身、須恵器蛸壺(656)、土師質飯蛸壺(263)、土師器高杯がある。

瓦器小皿は口径が大きく外面にヘラミガキが残るものから、口径が小さく器高が低めの、ヘラミガキの簡略化されたものまである。193は平底で、口縁端部内面にナデによるものか沈線が1条みられる。ヘラミガキは底部外面は密な平行、見込みも密な平行である。外面のヘラミガキがまばらに残るものが多い。瓦器小皿の見込みのヘラミガキは平行が多いが、中には平行に直交する線と十文字状の線が重なったもの(195)や圏線の続き(205・207)のものもある。

瓦器椀の挿図に載せたものはBタイプであるが、中には図化していないもので、高台が欠損しているがAタイプと思われるもの、Cタイプと思われるものがある。また、高台の退化してなくなったDタイプもみられる。瓦器椀の見込みのヘラミガキは平行が多い。他に斜格子、連結輪状、一定方向に密なもの、圏線の続きなどがある。瓦器小皿・椀ともに被熱して炭素の吸着の見られないものが一部みられる(198・200・205・206・219)。瓦器椀の時期はDタイプがⅣ - 3～5期であるが、その中のⅣ - 3期と考えられ、13世紀後半から14世紀初め頃のものかと思われる。

土師器小皿はBタイプ(229～256)、Cタイプ(257)がある。灰白色(229・231・234～245)、橙色(230・232・233・246～257)ともにみられる。粘土接合痕は粘土紐巻き上げかと考えられるものが多い(239・242・243・247・249・252～255)。また、中心から

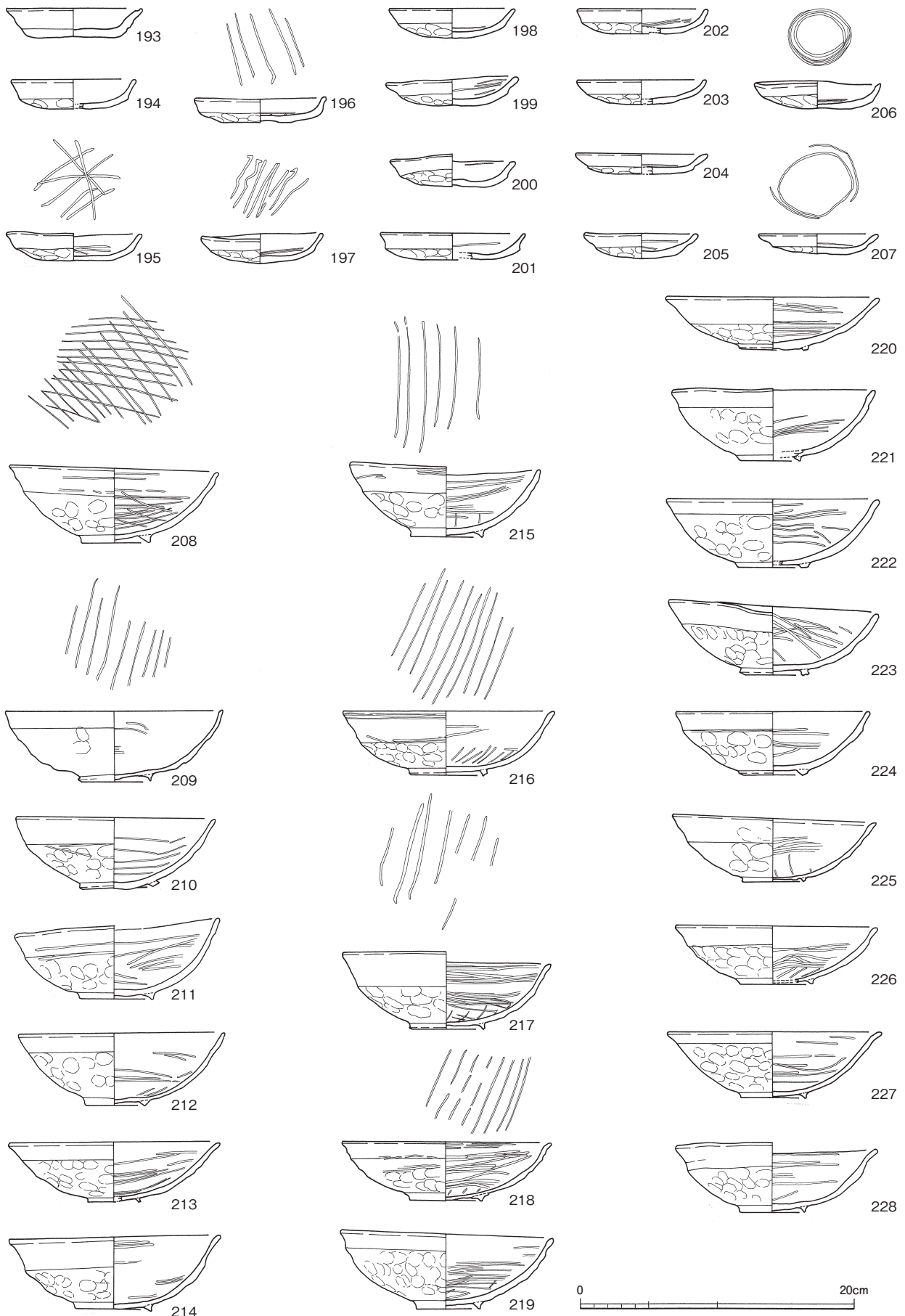


图 34 505-OS 出土遺物 (1)

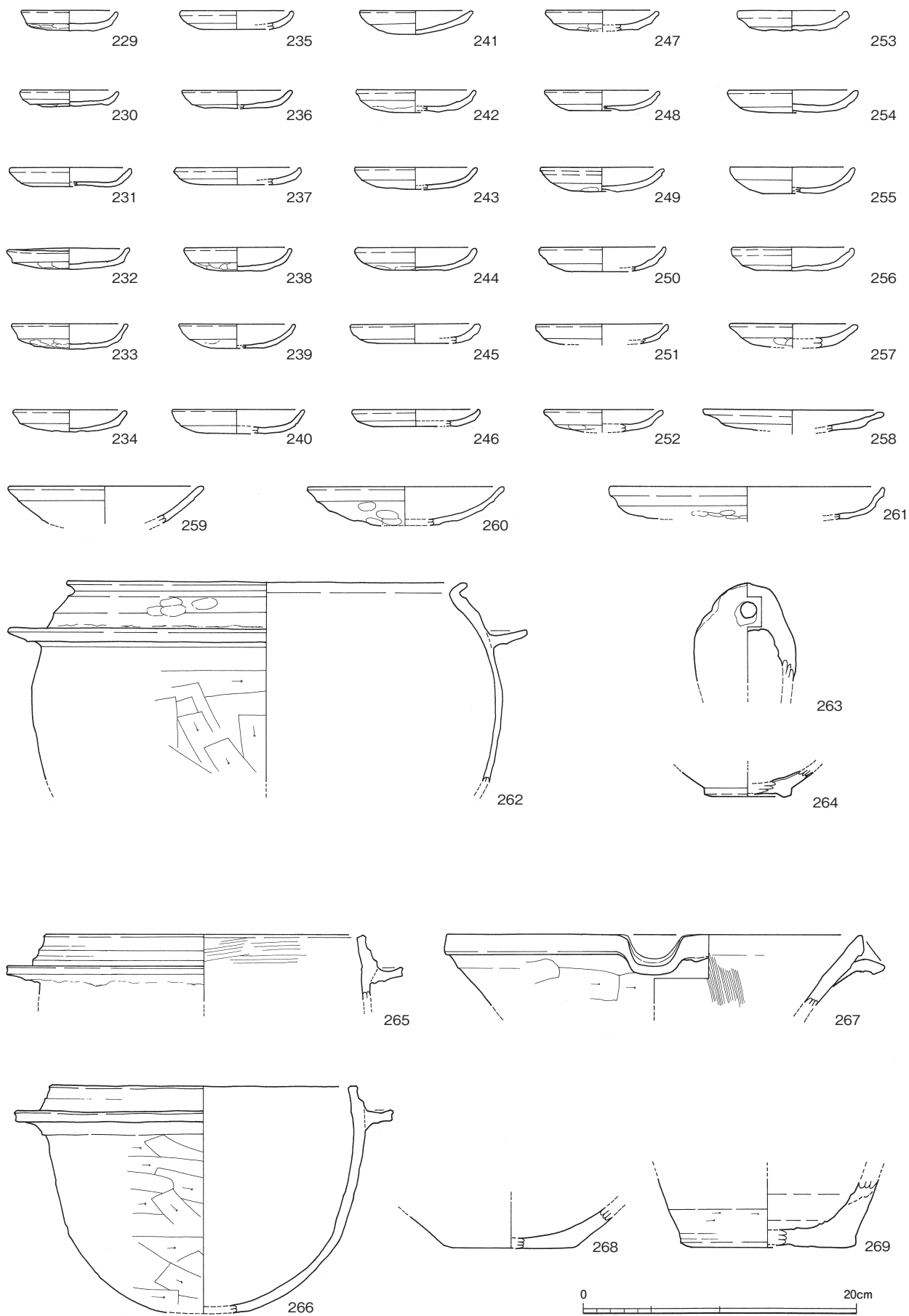


图 35 505-OS 出土遺物 (2)、845・846・852-OS 出土遺物

外側へ向かう粘土の継ぎ目があり、円板状粘土に切りこみをいれたようなものもみられる（236・240）。土師器大皿はAタイプ（259・260）、Cタイプ（261）、Eタイプ（258）が少量あり、色調は橙色である。

白磁碗はIV - 2類である廈門碗窯系碗底部（264）と、V類の白磁碗体部破片がある。

土師質羽釜はCタイプ（262）の他、図化していないがAタイプ、胎土中に結晶片岩を含む伊型のGタイプがみられる。

土師質甕？は口縁部から頸部にかけて「く」の字状に屈曲した口縁部片で、器壁は厚く、外面に黒斑がみられる。

土師質竈は焚き口右上庇部分であり、外内の一部に煤が付着している。

瓦質播鉢はBタイプで口縁端面は幅が狭く、調整は外面ナデである。内面に煤が付着している。

瓦質羽釜はEタイプである。

須恵質捏鉢はCタイプと体部破片がある。須恵質甕は中世のものと考えられるもので、外面の細かい平行タタキは口縁部までおよび、その後口頸部は横ナデされている。口縁部片には焼成不良の瓦質的な須恵質甕があり、外内面は黒色に近い。体部片では外面は細かい平行タタキが綾杉状に重なる。内面はナデであるが、当て具の輪郭が残る。

この遺構からは古代以前の遺物も出土している。須恵器高杯蓋天井部は時期が陶邑I型式にあたる。この他、平城宮土器IV～Vの時期かと考えられる須恵器杯底部もある。土師器は古墳時代の高杯がある。

釣鐘形をした飯蛸壺には土師器（263）と須恵器（656）があり、図化していないが須恵器飯蛸壺には体部最大径が約5cmと小さめのものもある。

当遺構の時期は瓦質播鉢から推測して15世紀代のものか考える。

657-05 出土土器（図 36）

須恵質捏鉢Dタイプ、瓦質播鉢Bタイプ、瓦質甕Aタイプ（296）・Bタイプ（295）、瓦質羽釜Bタイプ（294）・Aタイプ？（口縁端部が欠損し詳細は不明）、瓦質火舎、陶器（297・298）がある。

瓦質火舎は平面が円形を呈し、印花紋が施されている。298は常滑焼の甕底部である。底部外面にスサ状圧痕が残り、内面に自然釉がかかっている。他の陶器と比較し、胎土中に粗い砂粒をあまり含まず、砂っぽい。甕体部破片もある。297は備前焼の鉄漿壺である。口縁部は欠損し、体部から底部が残る。外面には体部に回転ヘラ削りと、底部直上に縦方向のヘラ削りが施されている。

当遺構の時期は瓦質甕から推測して⁵⁾、14世紀後半から15世紀にかけてのものか考える。

727-05 出土土器（図版 29）

瓦質甕Dタイプ（613）がある。これは短くほぼ直立する頸部から小さく口縁部が外反する形態で、調整は外面に細かいタタキ、内面は粗いハケのちナデである。口頸部およびタタキの特徴から14世紀後半のものと考えられる。

740-05 出土土器（図 36）

土師器小皿（270～276）、瓦器椀（288～293）、瓦器小皿（277～287）、須恵質捏鉢Aタイプがある。

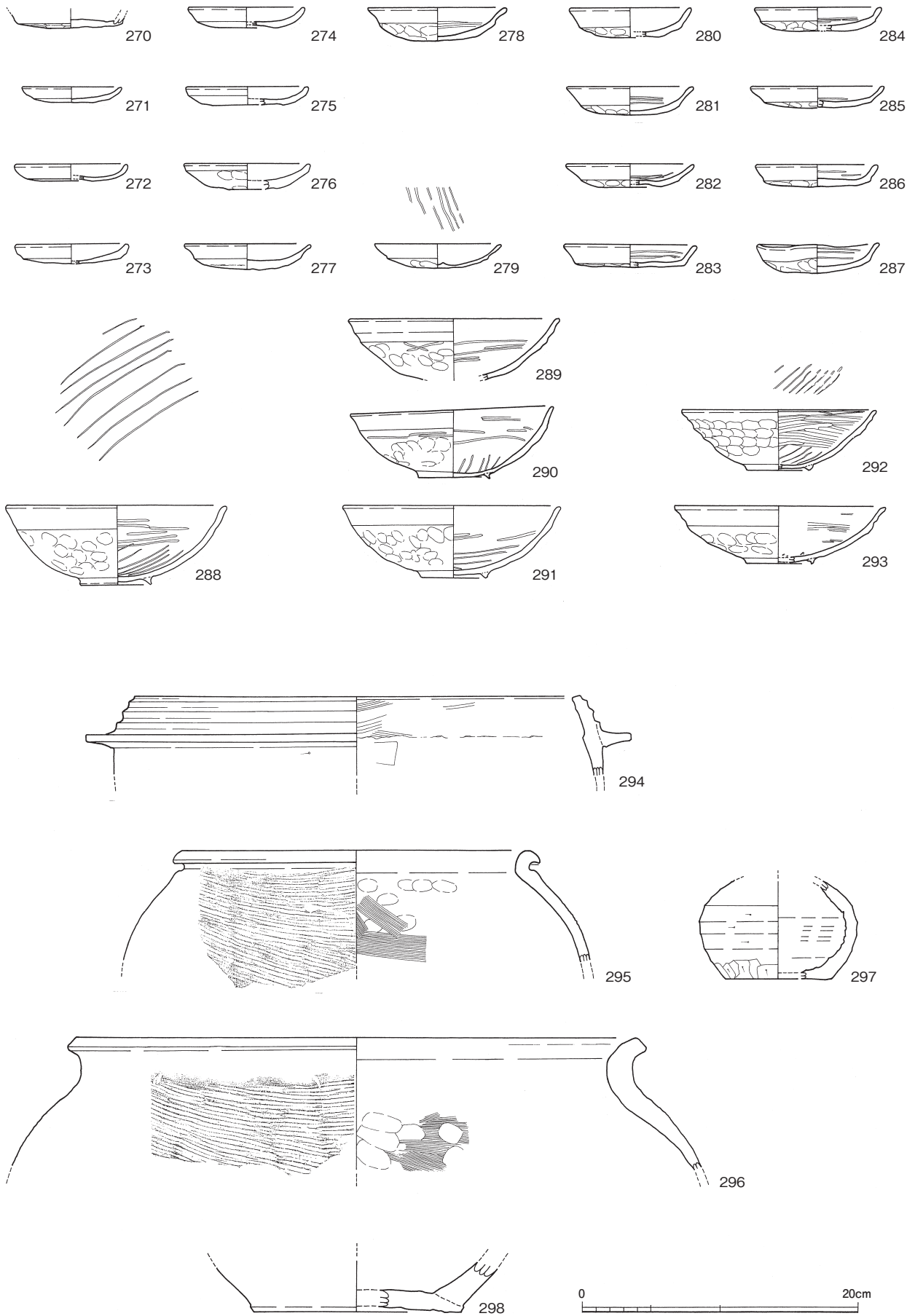


图 36 657·740-OS 出土遺物

土師器小皿はAタイプの橙色(270)、Bタイプの灰白色(271～273)・橙色(274・275)、Cタイプの橙色(276)がある。瓦器小皿は口径が大きめで器高が高く外面にヘラミガキが残るものから、口径が小さめで器高の低めのものまである。277は瓦器小皿が被熱赤変したものである。瓦器皿・椀ともに被熱によるものか炭素の吸着のみられないものがある(278～282・287・293)。瓦器椀はBタイプの範囲におさまるが、中には(292・293)のようにⅢ-3期に近いと考えられるものがある事から、13世紀前半頃のものと思われる。291の瓦器椀は見込みに重ね焼の痕跡である高台の痕が残る。

860-OS 出土土器 (図 37・38)

土師器小皿(299～303)・杯(304)・製塩土器・焙烙、須恵器杯身・高杯・蛸壺(649・651・652・658)、瓦器小皿(305)、土師質羽釜・甕・火舎・竈(306)・脚(697)、瓦質播鉢(321・322)・羽釜(323・324)・三足(605・608・609)・甕(617～622)・井戸杵(325・326)・火舎、須恵質捏鉢(319・320)、国産陶磁器(327～339)、輸入陶磁器(307～318・626・627・629・631・634・636・639・640)がある。

出土土器の時代幅は広く、弥生時代終わりから古墳時代初め頃にかけてのものから近世のものまでみられる。その中で中世の土器が多く、土器以外では瓦類が当遺構に集中しているようである。

土師器小皿はAタイプの橙色(302)、Bタイプの灰白色(299～301)、へそ皿であるEタイプの灰白色(303)がある。302は口径が小さく、口縁の一部に煤が付着し、灯明皿として使用した痕跡が残る。土師器杯(304)は深めの器形で、外面に指押さえが残り、平安時代の可能性が考えられる。

製塩土器は脚部のみ残り、脚外面はタタキ、内面は絞りのちナデ調整のもの、脚内面がヘラ状工具によるナデのものがみられる。弥生時代終わりから古墳時代初めころのものである。

須恵器は杯では陶邑Ⅱ型式5～6段階のもの、平城宮Ⅱ～Ⅲの杯Bがある。須恵器は蛸壺(649・651・652・658)が釣鐘形をしている。

瓦器小皿は口径の大きめでヘラミガキが底部にまばらにみられるもの(305)から、口縁部にまばらにみられるものがある。図化していないが、見込みのヘラミガキに細かい斜格子のものや、内面底部にハケ目を留めるものもみられる。

土師質羽釜は屈曲した口縁部をもつCタイプ、口縁部に段を持つKタイプ、口縁部の短く直立するHタイプがある。H・Kタイプのものは瓦質との区別が難しく、土師質と瓦質の中間的なものか、瓦質が被熱して表面の炭素が飛んだものの可能性も考えられる。

土師質甕は口縁部外面に粘土を貼り足し、口縁上端面に向け厚みをもつ。口縁部外面を横方向にヘラ削り、内面は横方向のハケ目、口縁上端面は口縁に沿いハケ目を施しており、井戸杵の可能性もある。

土師質火舎は口縁が円形で、外面にはスタンプ紋が施されている。

土師質焙烙は底部から口縁部にかけてゆるい曲線で、体部最大径部分から口縁部へ向けて内傾する。口縁端部は丸い。底部外面はヘラ削り、他はナデである。時期は17世紀後半と考えられる。

土師質竈(306)は焚口右下部が残存し、内面に煤が付着している。

瓦質播鉢はAタイプ(321)、底部(322)がある。体部外面調整は口縁部寄り横方向、体

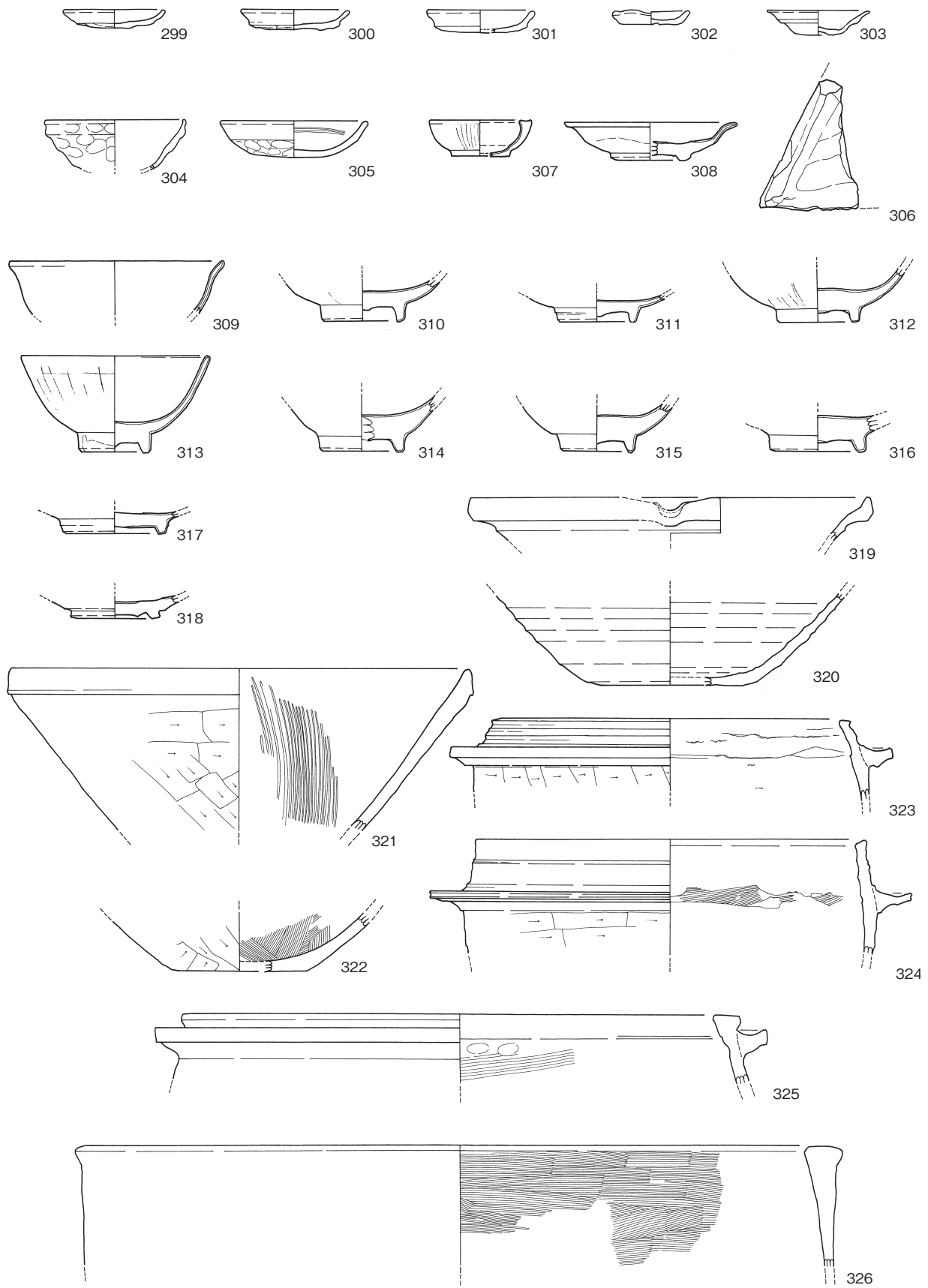


图 37 860-OS 出土遺物 (1)

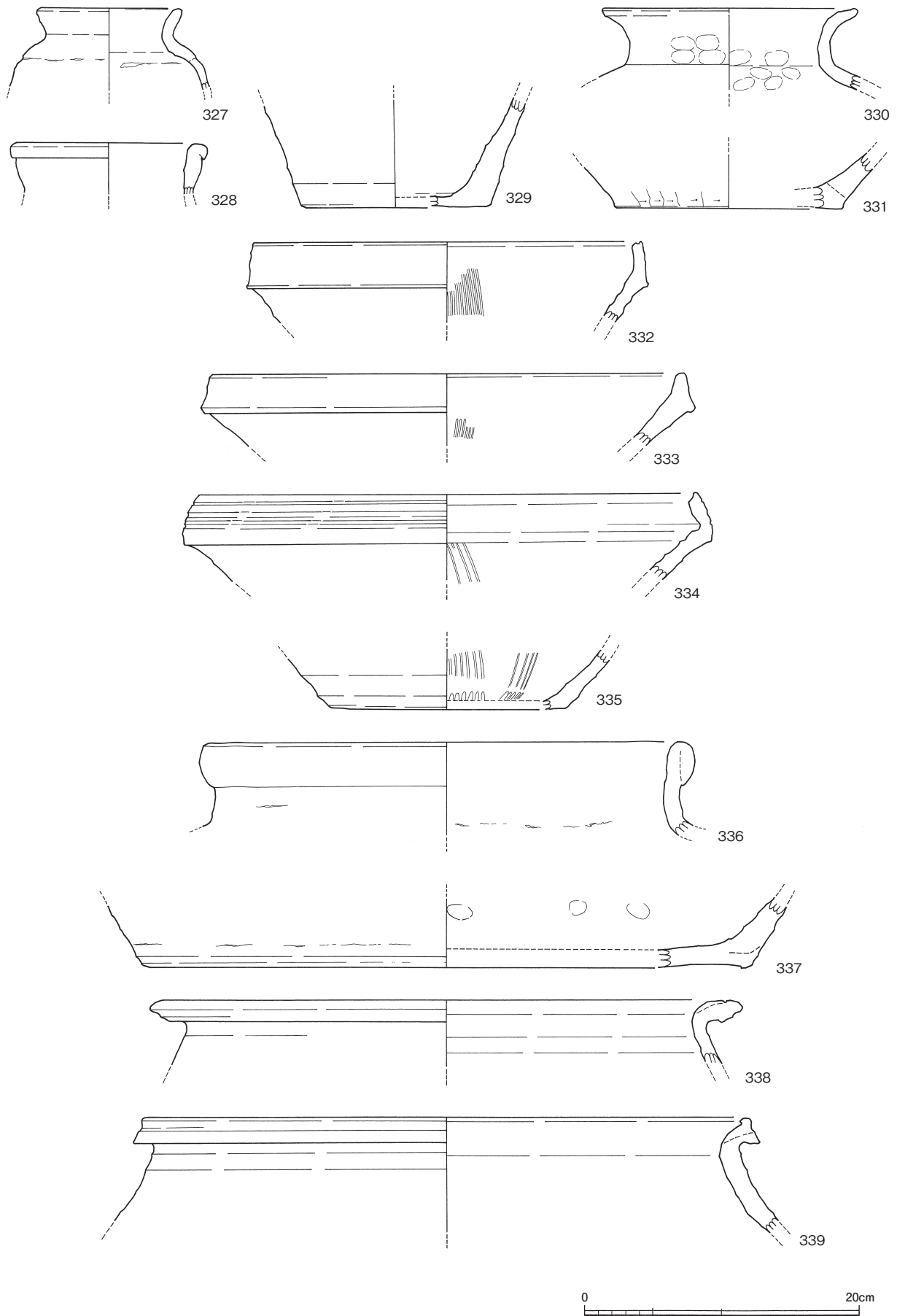


图 38 860-OS 出土遺物 (2)

部から底部寄りにかけては斜め方向のヘラ削り、内面はナデまたはハケ目の後なでられ、卸目がつけられている。

瓦質羽釜はBタイプ(323)、Cタイプ(324)、ミニチュア、瓦質三足(605・608・609)がある。

瓦質甕はC(617・618・620・621)・D(619)・F(622)の各タイプがある。

瓦質井戸杵はAタイプ(325)、Bタイプ(326)、Cタイプがある。

瓦質火舎は円形、方形がある。円形の火舎は無紋で、口縁部が略水平に内側へ広く延びる。方形の火舎は外面に雷紋が連続して線刻で施紋されている。

須恵質には捏鉢、甕がある。捏鉢はCタイプ(319)、Dタイプ、Eタイプと、体部片、底部片(320)がある。体部から底部にかけての内面は使用により摩滅している。また、底部外面は表面の荒れや摩滅が認められる。その他、図化していないが甕頸部破片があり、外面は縄のタタキメ、内面はナデである。断面は灰白色を呈する。甕は胎土が白く、東海系の可能性がある。

国産陶磁器には瀬戸、常滑、備前、肥前系などがある。瀬戸は15世紀の壺がある。常滑は鉢、甕(331・339)がある。鉢は口縁端部が幅狭く平坦で、体部内面に灰をかぶる。339は口縁端部を上下に拡張し、端面中央部は強いナデにより窪む。口縁部内面に少し灰をかぶる。色調は他の陶器と異なり暗灰色を呈し、胎土中に砂を多く含み、焼成が須恵器のようであるが、堅く焼けしまっている。330は常滑焼かと考えられる甕口縁部であり、外面肩部および内面口縁部に自然釉がかかる。331は底部外面に砂が付着し、内面には灰がかかる。その他、常滑甕では図化していないが、常滑編年1b型式の口縁端部で幅狭の面をなす形態のもの、5型式の直立ぎみの頸部から口縁部で短く外反し、口縁端部を上方に少し拡張した形態をなし、外内面に自然釉がかかったもの、6a型式の口縁端部が上方に拡張したもので、外面の頸部から肩にかけて自然釉がかかったものや底部の残るものがある。体部外面にはスタンプ紋のあるものもみられる。この他、図化していないが、胎土の白い東海系の山茶碗、捏鉢が各1点ある。山茶碗は内面に僅かに灰をかぶり、見込には高台の溶着痕がみられる。捏鉢は体部破片であり、体部外面下方を横方向のヘラ削り、体部上方と内面は横ナデである。内面にはリング状の色の違いが認められ、リング状の外側に自然釉がかかり、リング状の内側は使用によるものか表面が摩滅し滑らかである。

陶器甕の338は口縁端部がソロバン玉状を呈し、口縁部内面に沈線が1条巡る。口縁部内面および肩部外面に灰をかぶる。

備前は播鉢(332～345)、壺(327～329)、甕(336・337)がある。播鉢はAタイプ、Bタイプ、Cタイプ(332・333)、Dタイプ(334)、底部(335)がある。口縁端部外面に灰を被ったものがみられる(334)。壺はAタイプ(327)、Bタイプ(328)、体部、底部(329)がある。327の色調は灰白色である。体部破片では肩部から体部にかけて櫛描きの直線紋・波状紋を施し、外面には灰をかぶっている。329は平底であり、底部外面にはスサ状の圧痕が少々認められ、内面には灰をかぶる。甕は336が口縁部、337が底部である。口縁部は全て玉縁状を呈する。底部は外面に回転糸切り痕に似た痕跡とナデがみられ、内面および外面の一部に灰をかぶる。

肥前系陶磁器には18世紀の青磁皿がある。

輸入陶磁器は龍泉窯系青磁が多く、12世紀から15世紀のものまでみられる。309～311・313～317・627・631・636・639・640は15世紀の龍泉窯系青磁で、317が皿、それ以外

は碗である。317の見込は釉を剥いている。636は破損部角を擦り落としている。316・639・640は破損後に周縁からの打ち欠きがある。312は14世紀の龍泉窯系青磁碗である。629は同安窯系青磁皿である。626・634は13世紀の龍泉窯系青磁碗である。318は14世紀の白磁碗かと思われるもの、308は13世紀の白磁皿である。この他、15世紀の白磁皿もある。307は12世紀の景德鎮窯系の青白磁かと思われる合子の身であり、二次焼成を受けている。四耳壺の破片も認められる。

当遺構出土土器には土師器焙烙や肥前系陶磁器などの近世遺物が含まれているが、出土土器の主体は中世にあり、陶磁器などから14世紀から15世紀には機能していた遺構と考えられる。

845-OS 出土土器 (図 35)

瓦質播鉢Aタイプ(267)がある。14世紀後半と推測する。

846-OS 出土土器 (図 35、図版 28)

土師質羽釜、瓦質羽釜・井戸杵が出土している。土師質羽釜は口縁部に段をもつKタイプである。軟質の瓦質羽釜の可能性が考えられる。瓦質羽釜(265・266)はCタイプの段釜である。井戸杵は体部破片であり、外内面ともにナデ調整である。内面には粘土接合痕を留め、横方向のハケ目が微かにある。

当遺構の時期は瓦質土器から15世紀代と推測する。

852-OS 出土土器 (図 35)

須恵器杯B、瓦質播鉢底部(268)、備前播鉢Cタイプ、陶器壺底部(269)がある。須恵器杯Bは平城宮Ⅳ～Ⅴである。陶器壺底部外面にはスサ状圧痕が多数残る。備前播鉢は15世紀中葉である。

864-OS 出土土器 (図版 30)

瀬戸香炉、龍泉窯系青磁碗(630)がある。瀬戸香炉は体部から底部にかけて残り、内面および外面上部に灰釉がかかる。外面は左方向のヘラ削りの後、短い足を貼りつけている。胎土はやや黄色みを帯びた灰白色である。龍泉窯系青磁は雷紋帯碗である。2点ともに15世紀のものである。当遺構は860-OS内、南東の小溝であり、詳細不明の為、遺構図には表示していない。

〔池出土土器〕

731-OL 出土土器 (図 39・40)

土師器小皿(340～362)、土師器脚台(394)、瓦器小皿(363～368)・椀(369～391)・鉢、土師質羽釜(395)・竈(398)、瓦質羽釜(396・397)・播鉢、須恵質捏鉢・甕、陶器甕・壺、輸入陶磁器(392・393・624・638)がある。

土師器小皿はAタイプの灰白色(342・349)、Bタイプの灰白色(340・341・343～348・354～358)・橙色(350～353・359～361)、Cタイプ(362)がある。342は底部の屈曲部が糸切り底のように角張っており、回転台を利用した可能性が考えられる。340の底部外面に毛髪の圧痕が残る。粘土接合痕では円板状粘土の一部を切り取り狭めたようなもの(351・353)、粘土紐巻き上げのようなもの(341・342・346・348・350・361)がみられる。土師器脚台は台付皿で、12世紀代のものかと考えられる。

瓦器小皿は口径がやや大きめで器高が高めのものから、口径が小さく器高が浅いものまであ

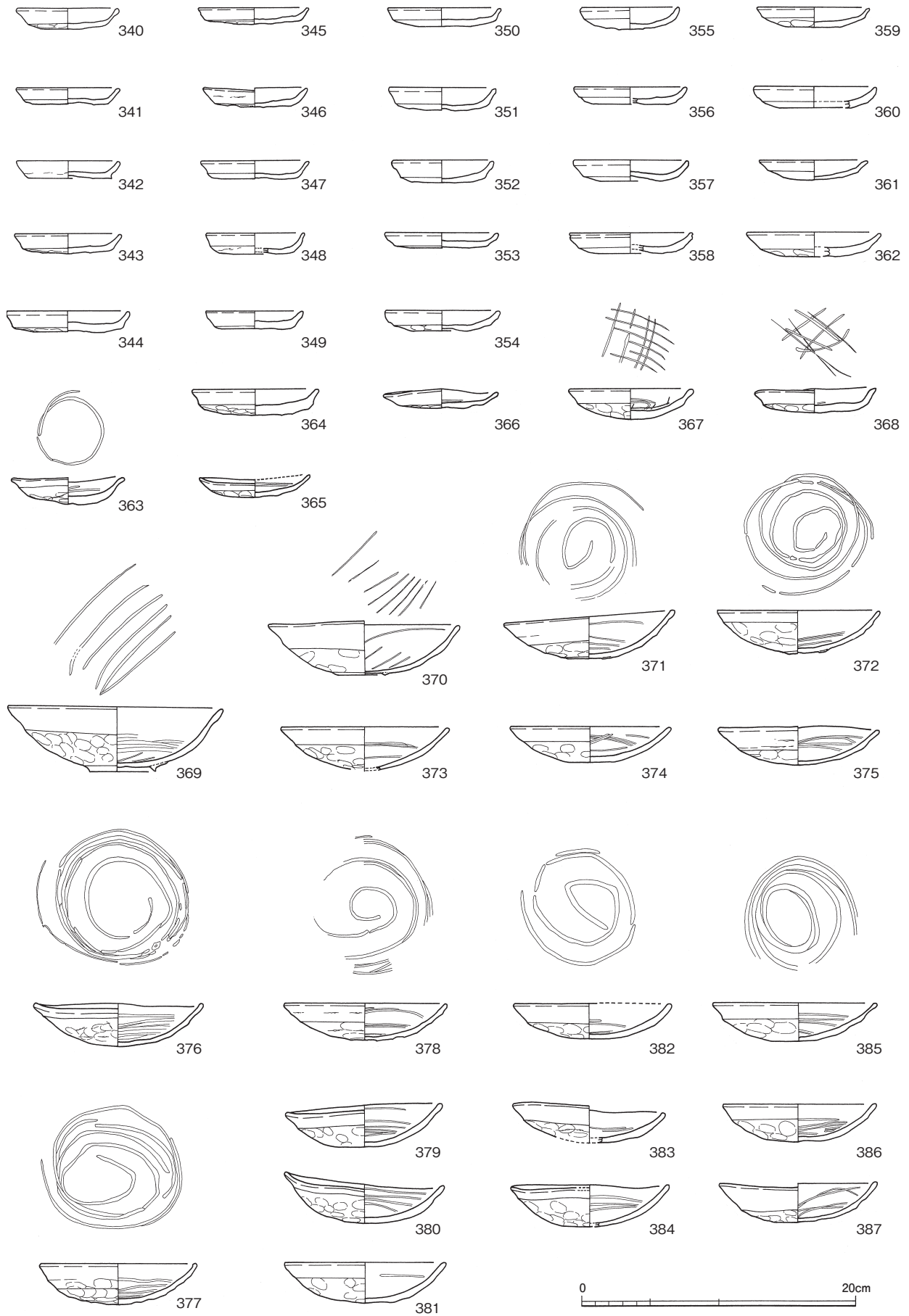


图 39 731-OL 出土遺物 (1)

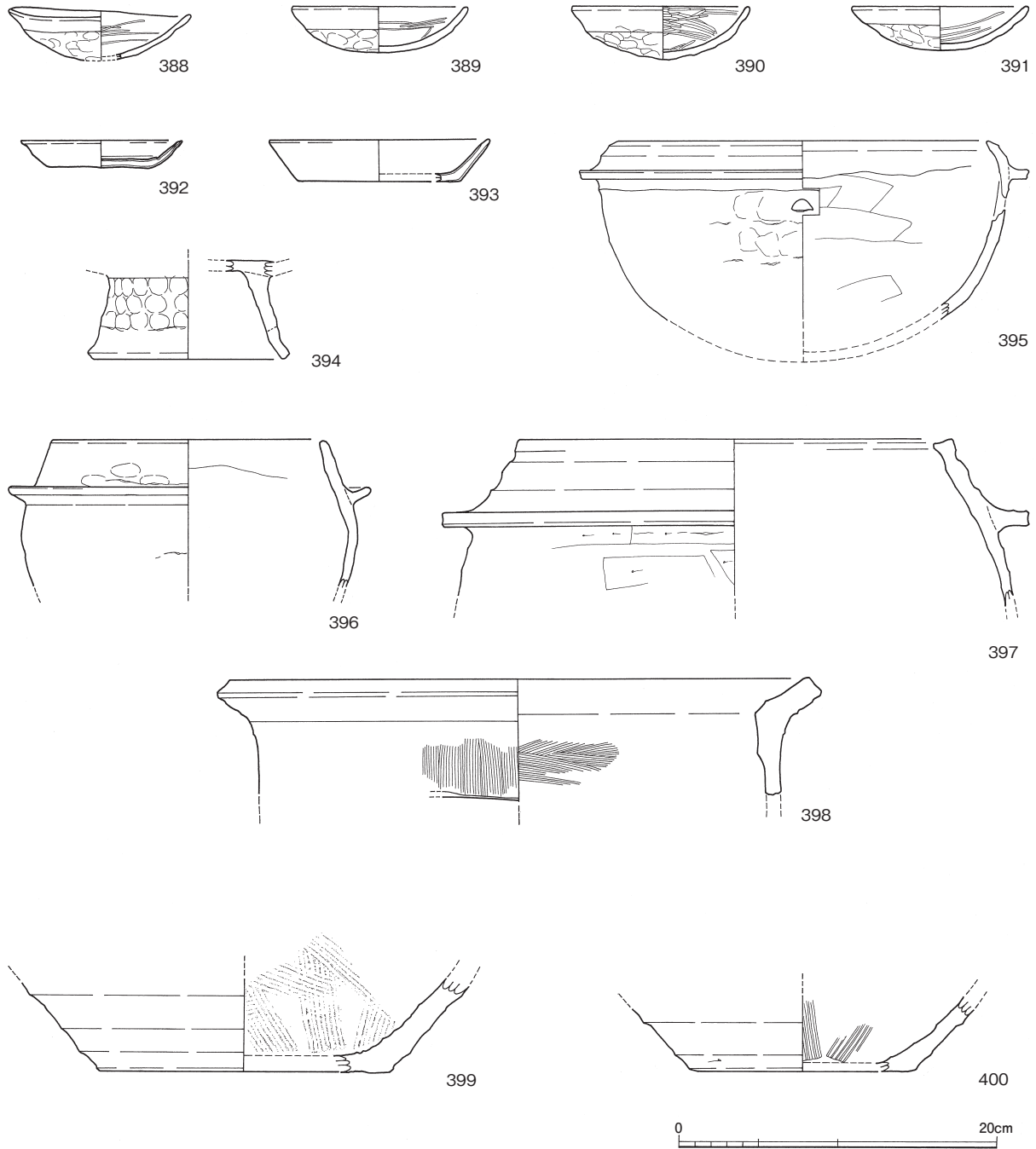


図40 731-OL 出土遺物（2）、840-OL 出土遺物

る。見込みのヘラミガキは斜格子状（367・368）、平行（365）、圏線の続き（363）がみられ、他は不明である。瓦器椀はBタイプ（369）、Cタイプ（370～372）、Dタイプ（373～391）の各タイプがあり、DタイプのものはIV - 5期のものがみられ、時期は14世紀前半にあたる。371は外面に径約7cmの炭素の吸着がみられない部分がある。瓦器小皿・椀は被熱によるものか一部炭素の吸着がみられない（365～367・379～381）。瓦器鉢はBタイプ・Cタイプがある。Cタイプの外面には重ね焼の痕跡がある。

土師質羽釜はAタイプ、Cタイプ、Dタイプ、Iタイプ（395）がある。Iタイプは土師質で分類したが、軟質の瓦質羽釜の可能性が考えられる。土師質竈は焚き口上部が残り、口縁部が厚めの甕体部を切り取ったような形で、復元口径は36cmである。体部調整は外面が縦方向のハケ

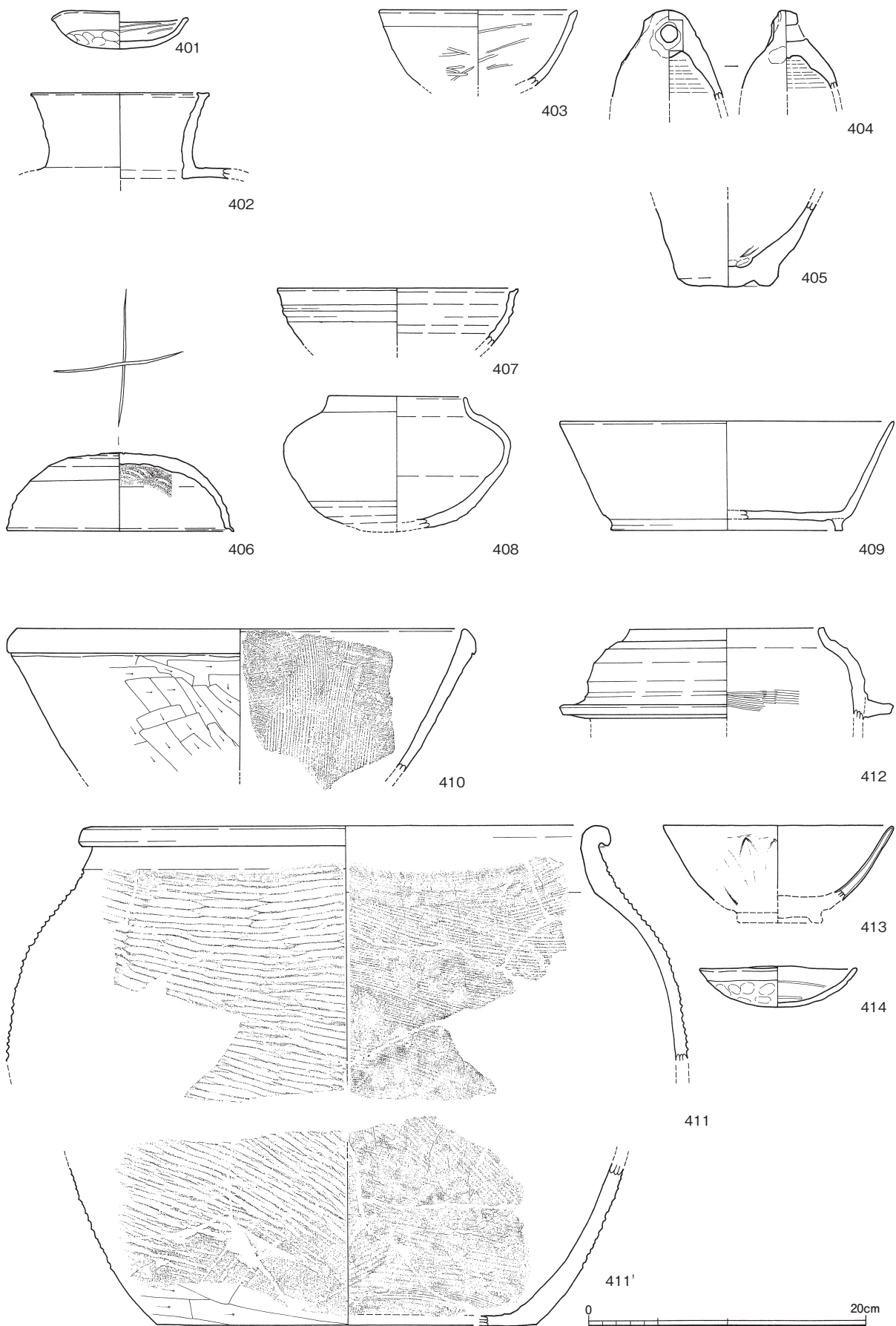


图 41 780·785·820·856-OX 出土遗物

目、内面が横方向のハケ目のちナデであり、胎土中に多量の金雲母を含む。外面に煤の付着が著しい。

瓦質羽釜はAタイプ(397)、Bタイプ、Eタイプ(396)、体部片がある。調整はA・Bタイプが外面を横方向にヘラ削り、Eタイプと体部片はナデである。瓦質播鉢はAタイプである。

須恵質捏鉢はDタイプ、Eタイプ、口縁端部が欠損するがCタイプかと思われるもの、体部破片がある。体部破片の内面下部は表面が摩滅している。須恵質甕は緩く「く」の字状に屈曲し口縁端部下部は欠損するが、上部は拡張されていない。調整は外面の細かいタタキは口縁部までおよび、その後口頸部は横ナデされている。

陶器甕は体部外面にスタンプ紋があり、外面に灰をかぶる。壺肩部片の頸部は細く、肩部は下がりぎみである。調整は外内面ともにナデであるが、肩部内面に粘土接合痕が残り、内傾である。壺底部があり、体部外面をヘラ削り調整している。外面には灰をかぶる。

輸入陶磁器では13世紀の口禿げ白磁皿(392・393)、13世紀の白磁碗、13世紀の龍泉窯系青磁碗(624)、15世紀の龍泉窯系青磁碗(638)がある。638は破損後周縁を打ち欠き、その後摩滅しており、二次焼成を受けている。

この遺構は瓦器椀や輸入陶磁器などから、14・15世紀のものといえる。

840-OL 出土土器 (図 40)

備前播鉢(399・400)、青磁碗(632)・仏花瓶がある。

備前播鉢はすべて底部破片である。底部には7条ないし8条1帯の卸目が残る。399・400の内面は摩滅している。

632は15世紀の龍泉窯系青磁碗である。この他、図化していないが18世紀の肥前系の青磁筒茶碗や仏花瓶がある。

この遺構の時期は近世陶磁器の出土により近世にあたる。

〔その他の遺構出土土器〕

780-OX 出土土器 (図 41)

須恵器蛸壺(657)・横瓶(402)、瓦器小皿(401)・椀がある。

須恵器蛸壺は釣鐘形である。須恵器横瓶は復元口径12.6cmであり、7～8世紀のものと考えられる。

瓦器小皿は口径がやや大きめで器高の高いものがあり、外面底部には重ね焼き痕が残る。瓦器椀はBタイプであり、Ⅲ-2期とすると12世紀終わりから13世紀初め頃のものと考えられる。

この遺構の時期は瓦器椀より12世紀終わりから13世紀初め頃にあたる。

785-OX 出土土器 (図 41)

須恵器の杯蓋(406)・無蓋高杯(407)・短頸壺(408)・杯B(409)・底部がある。

杯蓋は口縁端部内面に段を有する。天井部内面には当て具痕が残り、天井部外面には×のヘラ記号がある。陶邑Ⅱ型式2段階のものと考えられる。無蓋高杯は口縁部内面に段を有し、杯部が深い事と、断面の色が紫色である点から陶邑Ⅰ型式3～4段階と思われる。短頸壺は肩部に灰がかかっており、直径12.7cmの重ね焼きの痕跡がある。陶邑Ⅱ型式3～4段階である。杯Bは外面に自然釉がかかる。時期は平城宮Ⅳ～Ⅴである。底部は陶邑Ⅲ型式の平瓶か壺の底部と考えら

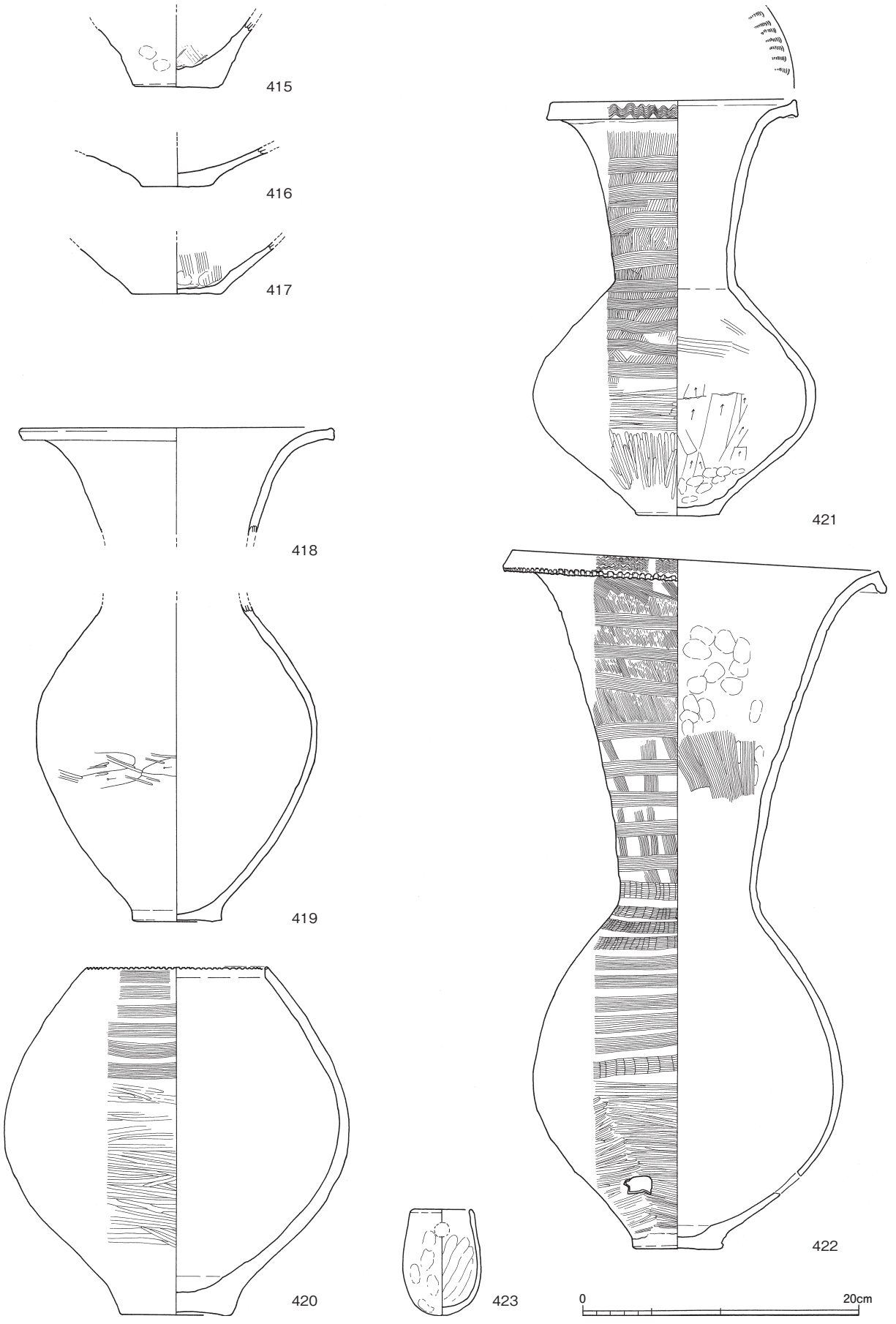


图 42 770-OD、777-00 出土遺物

れるものである。底部と体部の境は角をなし、体部外面にはへら削りが施されている。

この遺構の時期は須恵器杯Bにより、奈良時代のものといえる。

820-OX 出土土器 (図 41)

土師器椀 (403)、土師質飯蛸壺 (404)、弥生底部 (405)、須恵器蛸壺がある。

土師器椀は深めで、口縁端部が内傾した平坦面をなし、口縁部外面には横ナデの際ついた浅い窪みがみられる。外内面はへらミガキが施されているが、外面のへらミガキは少し雑である。胎土は精良で色調はにぶい黄橙色を呈する。これは 12 世紀代の吉備系土師器椀であろうと推測する。蛸壺は釣鐘形で、404 は土師質としたが須恵器の生焼けに近い。弥生土器は外面が磨耗しており調整は不明である。内面は指押さえ後ハケメ・ナデである。底部外面に粘土接合痕があり、一見上げ底状である。粘土接合痕は内傾である。中期の真蛸壺形土器底部に類似している。

当遺構の時期は土師器椀より 12 世紀代と考えられる。

856-OX 出土土器 (図 41)

瓦器椀 (414)、青磁碗 (413)、土師質羽釜 (412)、土師器把手、瓦質播鉢 (410)・甕 (411)・羽釜・井戸杵がある。

瓦器椀は D タイプでも IV - 4 期、14 世紀前半のものである。青磁碗は I 5 b 類の鎬蓮弁紋碗であり、13 世紀第 4 四半期のものである。土師器羽釜は茶釜のような形態の J タイプで、復元口径 20.6 cm、復元罅径 30.5 cm を測る。土師器把手は竈の可能性が考えられる。瓦質播鉢は A タイプである。瓦質甕は D タイプであり、平底が同一個体と考えられる。底部直上の外面には横方向のへら削りがみられる。復元口径 37.4 cm、復元体部最大径 48.8 cm、復元底径 27.2 cm である。瓦質羽釜は B タイプであり、罅直上には未貫通の穴が 1 つ残る。瓦質井戸杵は体部が残り、外面は縦方向のナデ、内面には縦方向のハケ目が施されている。

この遺構の時期は瓦質羽釜や瓦質甕などから、14 世紀後半から 15 世紀初め頃かと推定する。

〔弥生土器出土遺構〕

770-OD 出土土器 (図 42)

弥生土器底部 (415 ~ 417) がある。

415 は器壁の厚い甕か真蛸壺形土器の底部破片である。外面は剥落・磨耗しており調整不明。内面にはハケメ工具の当たった痕跡が明瞭に残り、ハケメは極薄く認められる。中期のものである。

416 は壺の底部と思われる破片である。底部から胴部へ向け大きく斜め外方へ開く。外面は縦方向のハケメのちナデ、内面は斜め方向のハケメのちナデの調整が施されている。底部外面に木の葉の圧痕が認められる。粘土接合痕は外傾である。第Ⅲ～Ⅳ様式のものと思われる。

417 は壺底部の破片と思われるものである。外面の調整は残存状態が悪く不明であるが、ミガキの可能性はある。内面の調整は指押さえの後、斜め方向のハケメのちナデである。第Ⅲ～Ⅳ様式である。

777-00 出土土器 (図 42)

弥生土器の壺 (418 ~ 422)・甕 (1771)・飯蛸壺 (423) がある。

418 は壺口縁部である。頸部がやや長めで、口縁部は緩やかに外反し端部で殆ど肥厚せず、

内外面ともにミガキ調整が施されている点から、第Ⅱ様式の範疇と考えられる。

419 は口縁部の欠損した壺である。胴部下半で肩・胴部上半とつなぎ、図上復元している。全体に表面は剥落し、詳細は不明であるが、胴部中央外面に横方向のヘラ削り後のミガキが残る。粘土接合痕は外傾である。形態的には第Ⅱ様式の特徴を示す。

420 は無頸壺である。一見、広口壺の頸部欠損したものに見えるが、口縁上端部に刻み目が施されている。肩部には櫛描直線紋が6帯施文されており、12 mm幅 10 条 1 帯の同一原体を用いている。調整は胴部外面の直線紋より下方を横方向にミガキ、内面はナデである。粘土接合痕は口縁部寄りと底部直上が内傾、胴部が外傾である。第Ⅱ様式である。

421 は略完形の壺である。口縁上端面に扇形紋、口縁端部外面に波状紋、頸部から胴部にかけて右回りに9帯の直線紋が施されている。扇形紋、波状紋、直線紋ともに12 mm幅 10 条 1 帯の同一原体を用いている。外面調整は口縁部が横ナデ、頸部から胴部上半は縦方向のハケメ、胴部中央は横方向の削りのち横方向のミガキ、胴部下半は縦方向のハケメのち下から上方向にヘラ削りの後縦方向にミガキを施している。胴部の調整は上半と下半を先にした後、中央部分を最後に仕上げているようである。底部外面、底部直上はナデである。内面調整は口縁部から頸部はナデ、胴部は上半が斜め方向のハケメのち横方向のヘラ削り、下半が粗い縦方向のハケメのち縦方向のヘラ削り、底部は指押さえ、ナデである。胴部下半に1ヶ所穿孔の可能性が考えられる。胴部中央には黒斑がある。第Ⅲ様式のものである。

422 の口縁部は端部で外下方に折れ曲がり、端部外面には波状紋、下端部には刻み目が施されている。頸部には櫛描直線紋が8帯、頸部最下部から胴部にかけて簾状紋4帯、直線紋5帯、簾状紋1帯が施されている。波状紋、直線紋、簾状紋は12 mm幅 9 条 1 帯の同一原体を用いているようである。頸部から胴部にかけての紋様は右回りに施紋されている。調整は外面で頸部は斜めないし縦方向のハケメ、胴部下半は5分割の斜めないし横方向のミガキが施されている。外面の底部直上に叩きと思われる痕跡が残る。底部外面は指押さえ、ナデである。内面の調整は口縁部横ナデ、頸部は指押さえ、ハケメ、ナデ、胴部は斜め方向のハケメのちナデである。底部直上に粘土接合痕が残る。胴部外面にはうっすらと黒い部分が認められ、煤の痕跡かと思われる。最も細い頸部分に2ヶ所、胴部下半に1ヶ所の計3ヶ所の穿孔があり、供献土器の特徴を示す。胎土中に角閃石を含む生駒西麓の、第Ⅲ様式の土器である。

1771 は甕肩部破片である。調整は外面に左下がりの叩き、内面にナデが施されている。胴部から底部にかけて、黒斑がみられる。また、外面全体には煤が付着している。第Ⅳ様式のものか不明である。

飯蛸壺は孔部欠損で、調整は内面を下から上へ指ナデしている。底部から胴部にかけて黒斑がある。

この遺構の時期は1771の第Ⅳ様式か不明のものを除くと第Ⅲ様式であり、418～420のような第Ⅱ様式の特徴を備えたものもみられる。

512-00 出土土器 (図 43)

弥生土器の甕(424)・壺がある。甕は口縁から胴部にかけての破片である。口縁端部には一部刻み目が施されているが、一巡しない。胴部は粗い縦方向のハケメ、内面は指押さえのちナデである。胴部下部の外面にはハケメ後下から上へ向けてヘラ削りが施されている。粘土接合痕は

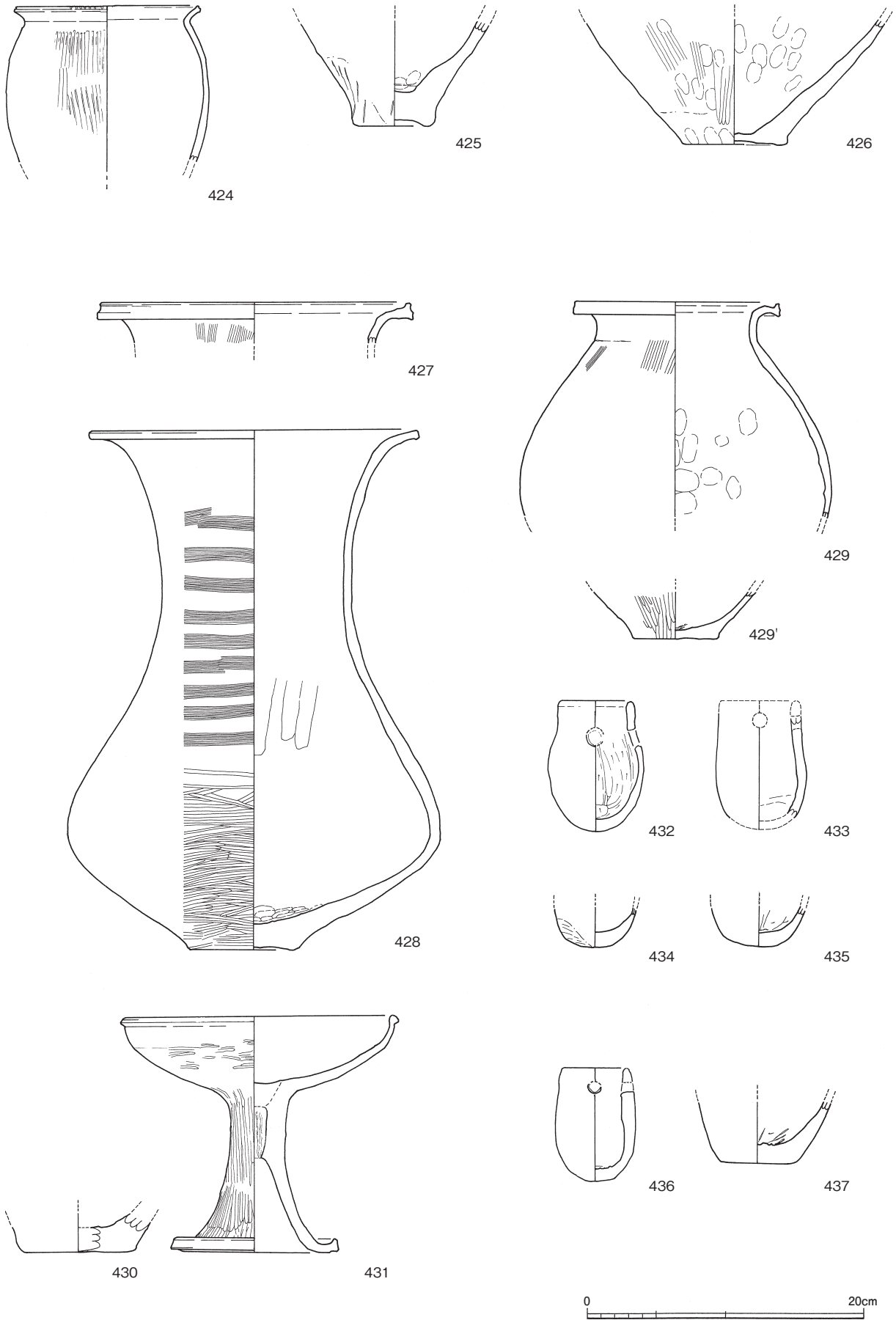


图 43 512·778·779-00、782~784-05 出土遺物

内傾である。第Ⅲ～Ⅳ様式に属する。

壺は口縁部細片である。外反する口縁は端部で下方に折り曲げ、端部外面に簾状紋を12mm幅10条1帯で施紋している。口縁部外面に一部煤の付着が認められた。調整は内外面ともにミガキである。第Ⅲ様式と考えられるものである。

778-00 出土土器 (図43)

弥生土器の底部(425)がある。これは上げ底の真蛸壺形土器の底部と思われるものである。外面の調整は残存状態が悪く不明である。内面の調整は指押さえ後ハケメか不明の工具の当り痕、ナデがみられる。底部外面にはヘラ削りが施されたものか、砂粒の動きが認められた。底部および底部直上に黒斑がある。中期の土器である。

779-00 出土土器 (図43)

弥生土器の底部(426)がある。これは壺か甕か不明の底部である。胴部の外面調整は指押さえ後、斜めハケメ、斜め方向の削りのち縦方向のミガキが施されている。内面は指押さえ後、斜めハケメのちナデ調整である。粘土接合痕は内傾である。第Ⅲ～Ⅳ様式のものである。

782-0S 出土土器 (図43)

弥生土器の飯蛸壺(436)がある。これは口縁部が欠損したものである。表面は粘土接合痕や夾雑物の取れた痕跡か、数ヶ所に窪みがみられる。孔部内径8mmを測る。調整は内外面ともにナデである。

783-0S 出土土器 (図43)

弥生土器の壺(427～429)、底部(430)、高杯(431)、飯蛸壺(432～435)がある。

427は壺口縁部である。外反する口縁部は端部で上方へ肥厚する。調整は外面に縦方向のハケメのちナデが、内面はナデが施されている。粘土接合痕は外傾である。口縁部の形態から、第Ⅱ～Ⅲ様式と思われる。

428は日明山型の壺である。頸部から肩部にかけて櫛描直線紋が11mm幅10条1帯で9帯、右回りに施されている。調整は外面では口縁部は横方向ナデ、胴部上半から頸部にかけては縦方向のナデ、胴部下半は6～5分割の横方向ミガキである。分割ミガキは河内でみられる壺などのように整然とはしておらず、ばらつきのみられるものである。底部の外面調整はヘラ削りの後、一方向にミガキ、それに直行する方向にミガキを施している。内面の調整は口縁部が横方向のナデ、頸部が斜め方向のハケメのちナデ、肩部が縦方向の指ナデ、胴部はやや細かい斜め方向のハケメのち丁寧なナデ、底部は指押さえ、ナデである。胴部最大径部分から底部まで、煤あるいは黒色物質を塗布したものか、表面が黒い。また、口縁部から頸部にかけてと、胴部から底部にかけての広い範囲に黒斑がみられる。第Ⅱ様式の土器である。

429は無紋の壺である。頸部は短く口縁で外反し、口縁端部は上方へ拡張している。外面調整は頸部で縦方向のハケメ、胴部は縦方向のミガキが微かに残る。内面は指押さえの後ハケメ、ナデである。外面には口縁部から胴部にかけて一部煤が付着している。第Ⅲ～Ⅳ様式の土器である。

430は甕か不明の底部破片である。調整は外面がナデ、内面は剥落しており不明である。底部外面には円板の周りに粘土を巻いて土器を製作した痕跡が残る。粘土接合痕は内傾である。砂粒が粗く底部も厚い点から、畿内第Ⅱ様式あるいは遡って第Ⅰ様式の可能性も考えられるもので

ある。

431 は高杯である。やや浅めの杯部口縁は端部で外面に断面三角形状に肥厚する。調整は杯部外面が横方向のミガキ、内面がナデ、脚部は外面が縦方向のミガキ、内面が脚柱部は絞り目、脚裾部内面はナデである。脚裾部内面にヘラ削りがみられない点から、第Ⅲ様式でも古い段階のものと考えられる。

432 の飯蛸壺は頸部で緩やかにくびれたもので、孔部下半が残存する。孔部内径は 11 mm か。内面調整は下から上方向の指ナデである。中期のものかと考えられる。

433 は飯蛸壺の胴部のみ残存する。内面調整は斜め横方向の指ナデである。外面に煤が付着している。

434 は当初、台付き鉢の円板充填部と考えたが、飯蛸壺の底部である。上端破損部に向け、器壁は薄い。内面は指押さえ、ナデ調整が施されている。外面に黒斑がみられる。中期のものかと考えられる。

435 も当初、台付き鉢の円板充填部と考えたが、飯蛸壺の底部である。上端破損部に向け器壁は薄い。内面は指押さえの後、放射状にハケメ、その後ナデ調整を施している。中期のものかと考えられる。

660 は壺の頸部と胴部破片である。櫛描紋が頸部破片では直線紋 2 帯以上と波状紋が 1 帯以上、胴部では直線紋が 5 帯以上、その下に波状紋が 1 帯施紋されている。直線紋、波状紋ともに 16 mm 幅 14 条 1 帯の同一原体を使用したと思われる。胴部に一部煤の付着が認められた。調整は頸部破片では不明であるが、胴部破片では下半の外面に縦方向のミガキ、内面は斜めハケメの後ナデである。粘土接合痕は内傾である。第Ⅲ～Ⅳ様式である。

784-05 出土土器 (図 43)

弥生土器の底部 (437) がある。土器は甕底部破片と思われるものである。外面全体に磨耗しており、調整は不明である。内面調整は斜め方向のハケメか工具の当り痕が残り、その後ナデである。底部外面に黒斑がみられる。中期のどの段階かは不明である。

705-0X 出土土器 (図 44)

弥生土器の甕 (438) がある。口縁端部が欠損するが、肥厚せず薄く丸くおさめるものである。調整は外面を縦方向のハケメのち下から上方向へヘラ削りしている。内面は斜め方向のハケメのちナデ調整である。外面全体に煤が付着している。胴部から底部にかけて黒斑がみられる。第Ⅲ様式と考えられる。

781-0X 出土土器 (図 44)

弥生土器の飯蛸壺 (442 ~ 444) がある。

442 はほぼ完形で頸部は緩くくびれ、平底で器高が少し高い。孔部内径は 10 mm を測る。口縁部内面に横方向のハケメが施されており、原体幅は不明であるが 10 mm 幅に 10 条の筋がみられる。底部外面にやや粗いハケメが残る。口縁部内径からみて、ハケメ工具の長さは 35 mm 以下か。孔部の外面上部角はなめらかであるが、使用によるものと推測される。

443 はほぼ完形に近い残存状態で、頸部のくびれがないものである。底部外面はハケか不明工具の当たった痕跡があり、平坦である。孔部内径は 10 mm を測る。底部から胴部にかけて黒斑がある。

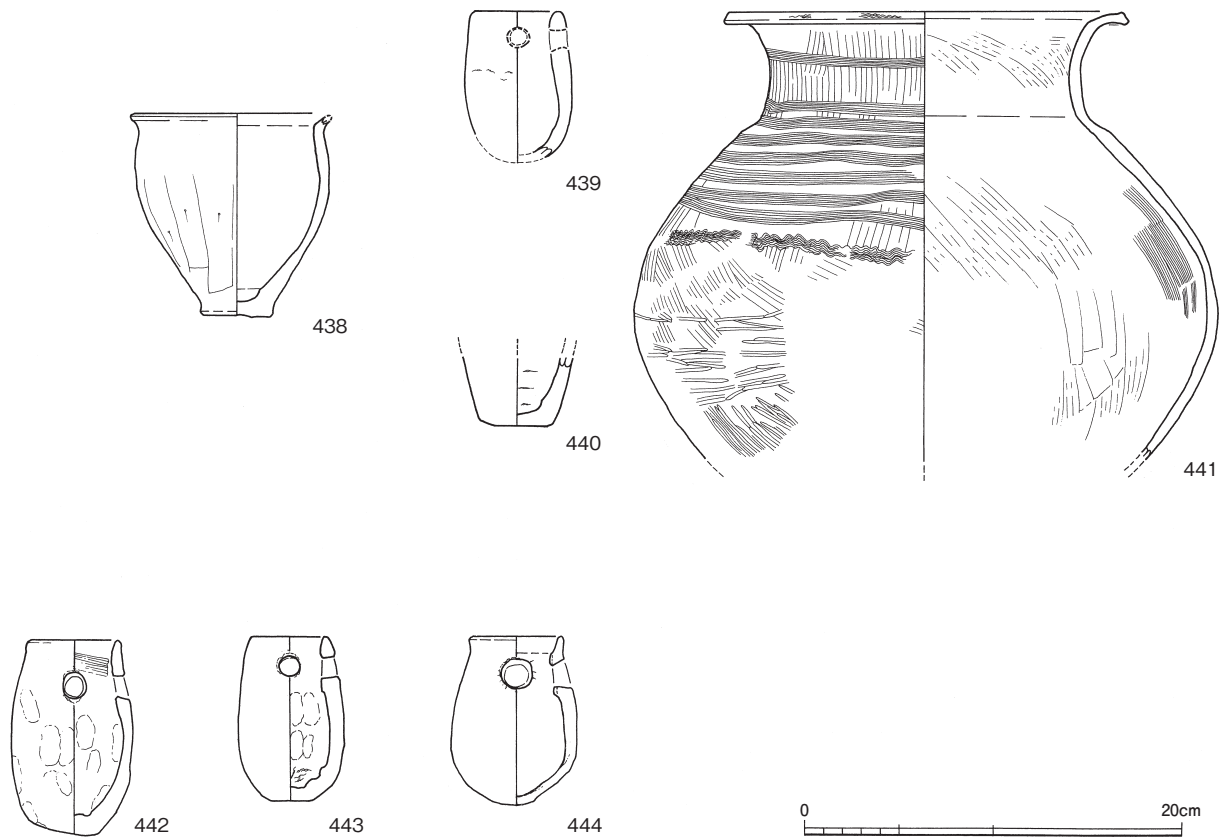


図44 705・781・822-OX 出土遺物

444 はほぼ完形に近い残存状態で、頸部は緩くくびれている。底部は叩きか不明であるが、複数の平坦な面がある。孔部内径は 12×13 mm を測る。外面孔部周縁は放射状にハケメの痕跡が残る。孔部外面上方の稜は極僅かだがなめらかである。底部から胴部にかけて黒斑がある。

822-OX 出土土器 (図44)

弥生土器 (439～441) がある。

439 は飯蛸壺の頸部が僅かにくびれたものである。底部は欠損し、孔部は一部残存する。胴部外面には粘土接合痕が残る。

440 は甕底部かと思われるものである。調整は内面に指押さえによる凹凸の痕跡を留めるが、全体に磨耗しており詳細は不明である。色調は他の土器と異なり灰白色であるが、胎土中の砂礫は他の土器と同様である。第Ⅲ～Ⅳ様式の時期に該当するものか。

441 は頸部の太い壺である。頸部は短めで、小さく外反する口縁の端部は殆ど肥厚していない。口縁端部外面に波状紋、頸部中央に直線紋1帯、頸部下方から肩部にかけて直線紋7帯、その下方に波状紋が1帯施紋されている。直線紋、波状紋ともに8mm幅8条1帯の同一原体である。外面の調整は頸部から胴部上半が縦方向のハケメ、胴部中央は斜め方向のハケメのち横方向のミガキ、胴部下方は斜め方向のミガキである。内面調整は縦ないし斜め方向のハケメである。内外面ともに粗いハケメである。粘土接合痕は内傾である。第Ⅲ様式のものと思われる。

第2項 瓦埴 (445～480・667～785) (図45～49、図版36～41)

瓦埴類は遺構 (840-OL・860-OS など)、包含層より出土した。本項では軒丸瓦・軒平瓦・道

具瓦・丸瓦・平瓦・埴の順に紹介する。

筆者はかつて和泉国と接する摂津国大坂城出土瓦の胎土の肉眼観察による分類を試みた [黒田慶一 2002] が、この分類を蛍光X線分析法による胎土分析の結果と照合させた結果、大阪近郊の産と思われる灰色クサリ礫を含む胎土と、赤色クサリ礫を含む胎土とでは、K(カリウム)、Ca(カルシウム)、Sr(ストロンチウム)の各元素に差が見られ、産地が異なることが判明した [白石純 2002]。白石氏は瓦の胎土をCa量で識別できた原因として、灰色クサリ礫を含む胎土は斜長石を多く含む傾向があることを挙げている。大坂城下では大阪市中央区和泉町1丁目の発掘調査(OS02-8次) [小倉徹也ほか 2003] で、豊臣時代のダルマ窯跡群が発見されているが、瓦窯に伴う瓦埴類の胎土は灰色クサリ礫を含むものである。伽羅橋遺跡から出土した瓦埴類においても、灰色クサリ礫と赤色クサリ礫を含む胎土の区別は有効と考えるので、前者を胎土A類、後者をB類と分類する。しかし瓦埴類が火災に遭ったり酸化炎焼成で、胎土が酸化したものは、赤色クサリ礫をもつことが多いのも事実である。伽羅橋遺跡では胎土A類が圧倒的に多いので、本文中では基本的にB類のみに触れ、A類は注記しない。焼成は火中したもの以外は瓦質が多いが、稀に須恵質があるので、これは注記する。瓦当の成形に当って、離型剤として粗い離れ砂を使うものをa類、細かい離れ砂を使うものをb類、粘土粉(トモ土)を使うものをc類と表記し、軒平瓦当の成形技法は図47のようにA～D類に分けた。

軒丸瓦

瓦当文様は、445～448・667～669が蓮華文、670が梵字文と思われ、449～460・671～685が巴文である。巴文は文様からの時代推定が難しいので、共伴遺物年代も考慮した。

蓮華文軒丸瓦など

複弁蓮華文として2型式、単弁蓮華文として1型式が出土した。いずれも11～12世紀に属する。

445は周縁部の内側に圏線をもつ複弁八弁蓮華文で、蓮弁と子葉を突線で表現し、1+8個の蓮子をもつ中房の周囲には雄蕊を配する(雄蕊を画する突線の数は32本)。蓮弁輪郭と雄蕊画線は一致することから、範型は精密な割付けのもと製作された。離型剤は無い。河内長野市・観心寺で同型式が出土している。

446は445と同型式の複弁八弁蓮華文で、火中したのか橙色を呈し、離型剤は無く、胎土はB類である。

447は周縁部の内側に圏線をもつ複弁八弁蓮華文で、子葉は突線で表現するが、蓮弁は弁端にかけて特に分厚く平面的に盛り上がる。1+8個の蓮子をもつ中房の肩を押しつぶすように、雄蕊の円環が刻まれている。範傷が周縁部と圏線間で目立つ。離型剤はb類。瓦当裏面は粗くナデ、縁辺部に指紋が多く見られる。

448は周縁部の内側に圏線をもつ単弁十弁蓮華文で、杏仁形の蓮弁を大きなクサビ形間弁の間に落とし込む。離型剤は無く、胎土はB類である。よく似た文様は堺市日置荘遺跡(大阪文化財センター1995、図版I-107の3)から出土している。

667～669は445と同型式の複弁八弁蓮華文の細片で、離型剤は無い。

670は珠文帯の内側の圏線内に梵字を配した文様と思われ、木製の範型がやせていたのか範傷が目立つ。珠文は2個が一对になっており、一对2個と次の珠文間がやや開く。復元珠文数

20 個である。離型剤は c 類。12 ~ 13 世紀と思われる。

巴文軒丸瓦

巴文軒丸瓦は全て三巴文である。巴文の巻きの方向を巴頭から尾に向う方向で示すと、左巻きは 27 点中 19 点と全体の約 2 / 3 を占め、珠文帯の外側を巡る圏線を外圏線、内側を巡るのを内圏線と称すと、27 点中 8 点に外圏線が 1 条、11 点に内圏線が 1 条見られる。このうち内外圏線両方が巡るのは 6 点である。

449 は内外圏線をもつ右巻き巴文で、巴は 1/2 周して内圏線に接する。珠文数 27 個で、離型剤は c 類。

450 は内外圏線をもつ左巻き巴文で、巴は 1/2 周して内圏線に接する。復元珠文数 20 個。離型剤は c 類で、瓦当は分厚い。

451 は内外圏線をもつ左巻き巴文で、巴尾は長く内圏線に接しない。復元珠文数 28 個で、離型剤は c 類。

452 は内外圏線をもつ右巻き巴文で、巴尾は細く長い。復元珠文数 16 個で、離型剤 b 類。

453 は内外圏線をもつ左巻き巴文で、空隙が乏しく密集した巴は 1/2 周して内圏線に接する。珠文は大粒で、復元すると 24 個である。離型剤 c 類で、胎土 B 類。

454 は内外圏線をもつ右巻き巴文で、巴尾は内圏線に接するように沿う。復元珠文数 16 個で、離型剤無し。

455 は内圏線をもつ右巻き巴文で、巴は 1/2 周して内圏線に接する。復元珠文数 20 個で、離型剤は無い。

456 は圏線をもたない右巻き巴文で、巴尾は長く、珠文から離して配される。復元珠文数 16

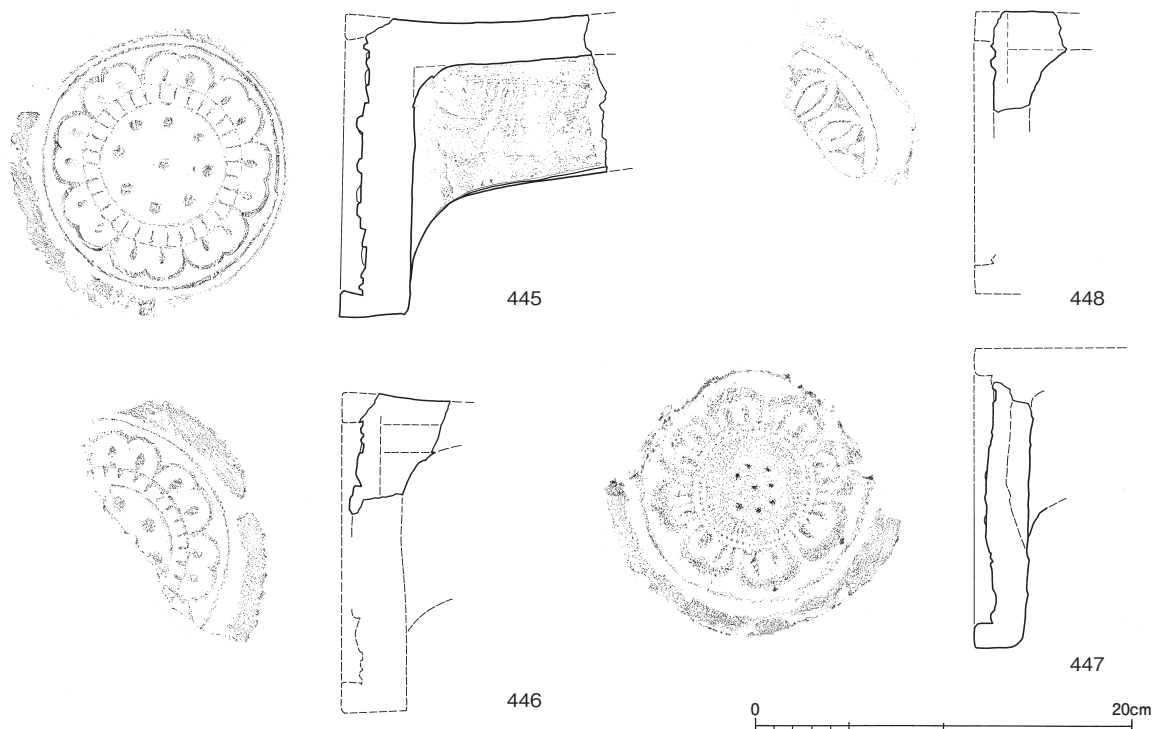


図 45 軒丸瓦 (1)

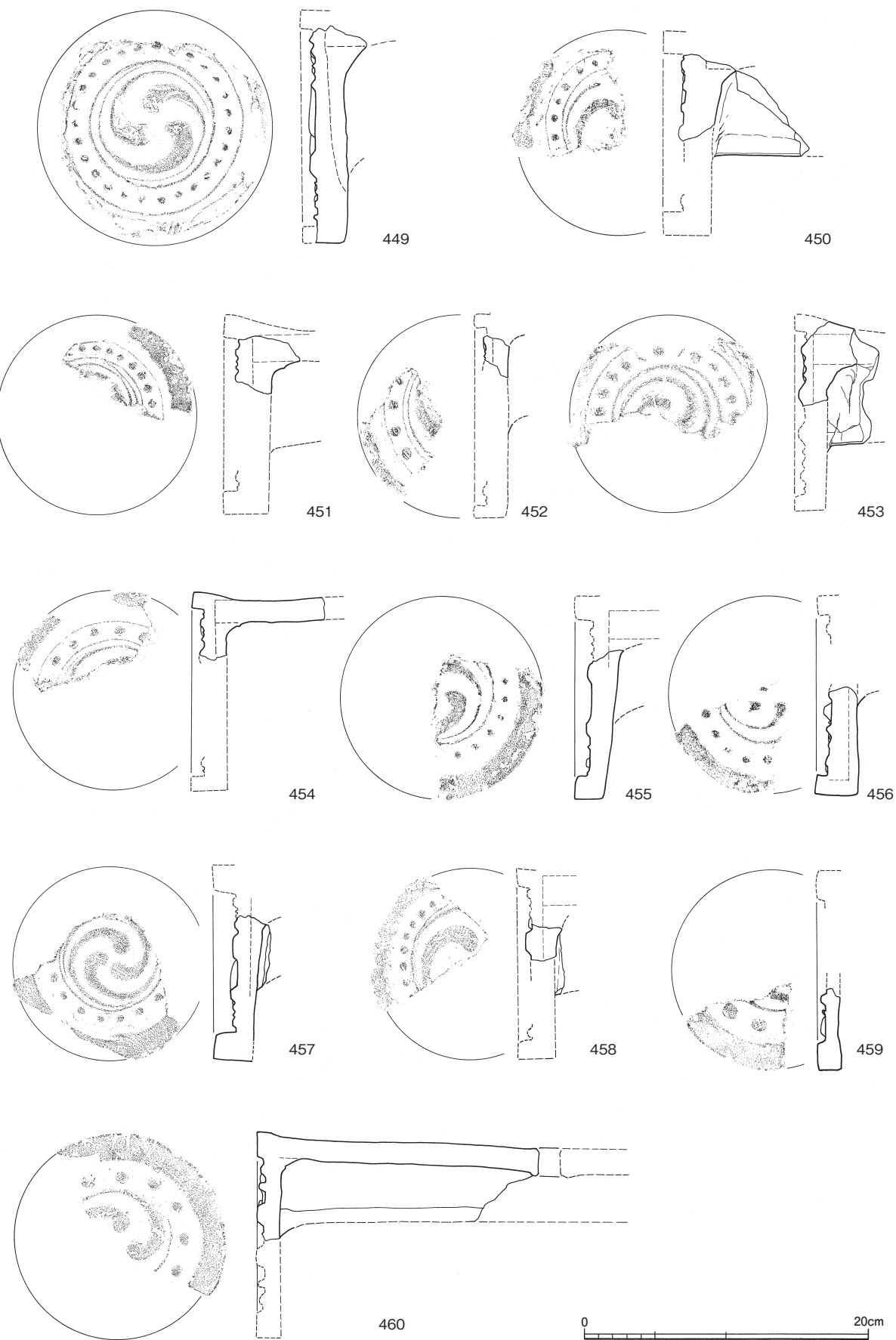


图 46 軒丸瓦 (2)

個で、離型剤は c 類。

457 は内圏線をもつ左巻き巴文で、細い巴尾は次の巴胴部に接する。復元珠文数 18 個で、離型剤は b 類。

458 は圏線をもたない左巻き巴文で、巴は 1/2 周する。復元珠文数 24 個で、離型剤無し。

459 は圏線をもたない左巻き巴文で、大粒の珠文は復元すると 18 個である。

449 ~ 459 は 860-OS の出土であり、当遺構は 15 世紀以前の遺物を含むから、15 世紀がこれらの下限となる。

460 は圏線をもたない左巻き巴文で、巴は 1/2 周する。大粒の珠文は復元すると 12 個で、離型剤 c 類。丸瓦部凹面にコビキ B が見られる。

495 は内圏線内で左巻き巴が 1/2 周するが尾は圏線に接しない。復元珠文数 20 個。

671 は外圏線をもつ左巻き巴文で、巴尾は太い。復元珠文数 18 個で、離型剤は無く、胎土は B 類。

672 は内外圏線をもつ左巻き巴文で、巴尾は細く長い。復元珠文数 36 個で、離型剤無し。

673 は圏線をもたない左巻き巴文で、巴は 1/2 周する。復元珠文数 12 個で、離型剤は無く、胎土は B 類。17 世紀。

674 は圏線をもたない右巻き巴文で、巴尾は内圏線のように珠文際を巡る。復元珠文数 24 個で、離型剤は無く、16 世紀後半 ~ 17 世紀初頭。

675 は圏線をもたない右巻き巴文で、細い巴尾は内圏線のように珠文際を巡る。復元珠文数 28 個で、離型剤は無く、16 世紀後半 ~ 17 世紀初頭。

676 は圏線をもたない右巻き巴文で、巴断面は箱形で、長い巴尾は次の巴胴部に接する。珠文は大粒で、復元すると 24 個である。離型剤は a 類で、16 世紀後半。

677 は内圏線をもつ左巻き巴文で、復元珠文数 10 個である。離型剤無し。

678 は内圏線をもつ左巻き巴文で、巴は 1/2 周弱で圏線に接する。復元珠文数 12 個で、離型剤は無く、胎土は B 類。16 世紀末から 17 世紀。

679 は圏線をもたない左巻き巴文で、巴尾は次の巴胴部に接する。復元珠文数 16 個である。離型剤は c 類。16 世紀後半 ~ 17 世紀。

680 は内圏線をもつ左巻き巴文で、長い巴尾が圏線に接する。大粒で平たい珠文が間隔を空けて配され、復元すると 12 個である。離型剤は b 類、胎土は B 類。

681 は圏線をもたない左巻き巴文で、長い巴尾をもつ。大粒の珠文は復元すると 20 個である。丸瓦部凹面に吊り紐痕をもち、離型剤 c 類で、胎土 B 類。16 世紀後半。

682 は圏線をもたない左巻き巴文で、巴尾は短い。復元珠文数 12 個である。離型剤 b 類で、17 世紀。

683 は圏線をもたない左巻き巴文で、巴胴部は細く、巴間の空隙は広い。巴尾は圏線に似て珠文に近く配され、復元珠文数 8 個である。離型剤は無く、胎土 B 類。16 世紀末 ~ 17 世紀。

684 は圏線をもたない左巻き巴文で、大粒の珠文は復元すると 12 個である。離型剤は無く、胎土 B 類。18 ~ 19 世紀。

685 は圏線をもたない左巻き巴文で、大粒の珠文は復元すると 12 個である。離型剤としてキラコを用いる。18 ~ 19 世紀。

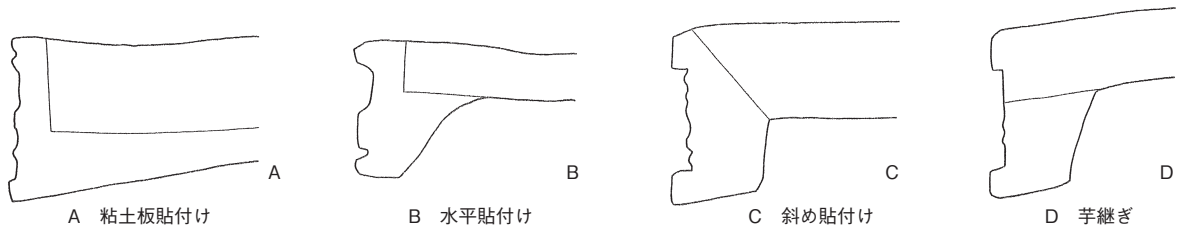


図47 軒平瓦の成形技法

なお、447・460・677は包含層、448は852-OS、670・685は851-OX、671・672・675・676・678～683は840-OL、673・674は853-OO、684は862-OO、それ以外は860-OS出土である。

軒平瓦

軒平瓦は461～470・688～691が唐草文、474～476・687は連珠文、471は鋸歯文、不明が692・693である。

唐草文軒平瓦

461は圏線をもち、杏仁形の実の両側に短い唐草を配した、三葉に似た中心飾で、その左右には長い蔓状の下向き巻きをもつ唐草が文様区を横断し、その唐草の上下に短い唐草を4転させる。離型剤は無く、瓦当成形はB類である。14世紀前半。

462は686と同形式で、圏線をもつ中心飾三葉と見られる唐草文だが、左右には凸線が無い。686は唐草の右端が右外縁に接することから、范型を切り詰め、左右圏線が消滅した可能性を感じる。離型剤は長石粒のb類、瓦当成形はB類、胎土は長石粒が顕著である。離型剤はトモ

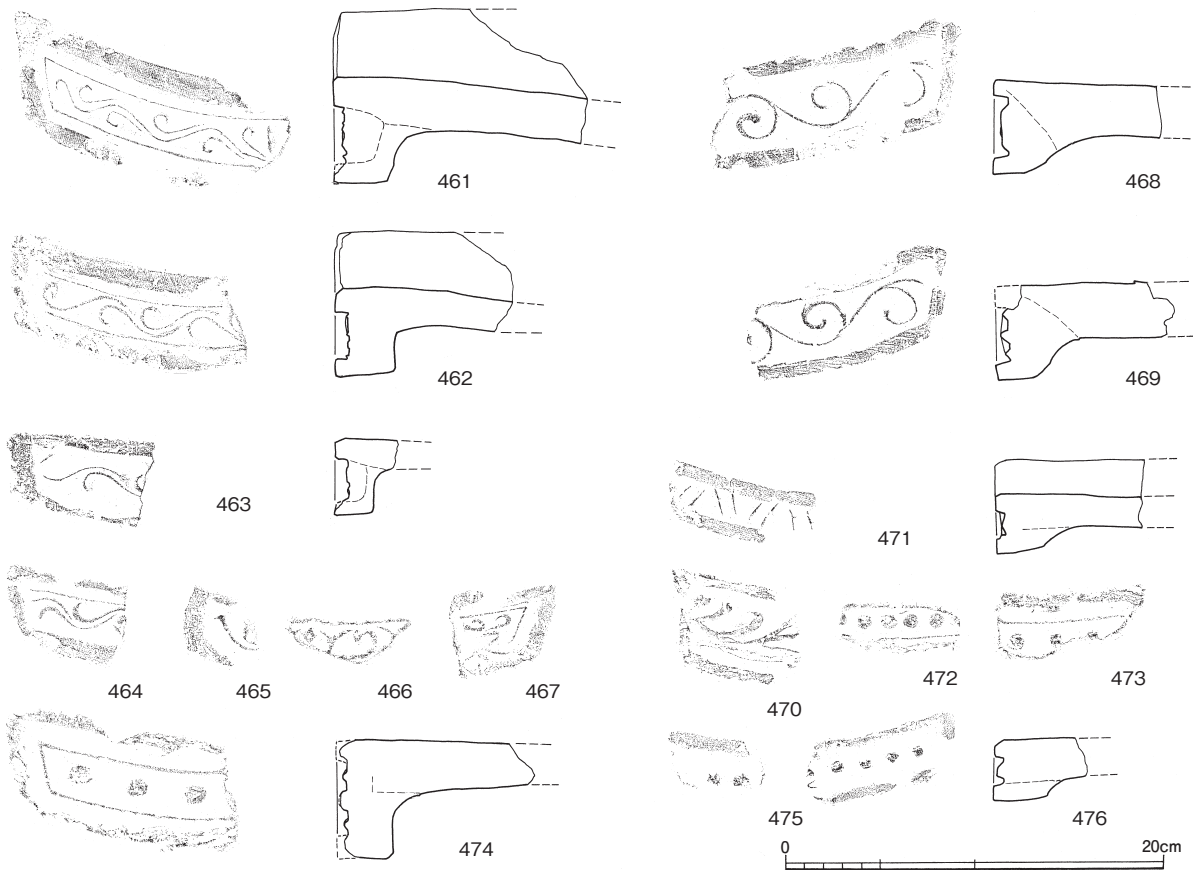


図48 軒平瓦

土を乾燥して用いたc類かも知れない。14世紀前半。

463は無圏線でリズミカルに反転する繊細な唐草をもつ。離型剤は無い。14世紀。

464は上圏線のみ有し、リズミカルに反転する唐草をもつが、唐草の巻きは弱く、先端は鳶口状になっている。離型剤は無く、火中したのか橙色を呈し、胎土はB類である。13世紀中葉。

465は無圏線の唐草文左端で、巻きが短くきつい唐草をもつ。離型剤は無く、瓦当成形はD類。14世紀。

466は中心飾がダイヤ形の花頭にY字の萼をもつ橘文で、離型剤はc類、瓦当成形はD類。17～18世紀と考えられる。

467は圏線内に短い唐草が上下反対向きに2段に配された唐草文である。離型剤は無い。13世紀前半。

468・469は同範の太い突線で表現した唐草文軒平瓦で、凸面に縄目叩き痕をもつ平瓦の広端部を斜めに切り落とし、斜め貼り付けで瓦当成形したC類である。平瓦部凹面は布目痕を見せるが、468には離れ砂が付着する。離型剤は無い。13世紀中葉。

470は左端の薄い外縁部から中央に向かって蔓状の唐草が派生する和泉系軒平瓦によく見られる文様だが、繊細さを欠く。離型剤は無く、瓦当成形はB類。胎土に長石がめだつ。13世紀前半。

688は中心飾が宝珠文でその左右にY字形唐草を立て、唐草を2転させる。上外縁部に面取りが無く、左右側区が広く、Y字形唐草をもつ。離型剤は無く、瓦当成形はD類。17世紀。

689は唐草文軒平瓦で、中心飾の左右に枝の長い唐草が2転する。平瓦広端部凸面にカキヤブリを入れ、芋継ぎ（瓦当成形D類）している。離型剤はc類で、瓦範打込み時、平瓦先端部と瓦当用粘土の際で、浅い段ができています。上外縁部は軽く面取りする。16世紀末～17世紀前半。

690は中心飾がオタマジャクシ状の五葉で、巻きの無い棒状の唐草が右側に2本平行に配された、側区の広い文様である。離型剤はc類、瓦当成形はD類。17世紀。

691は中心飾は不明だが、七曜星と思われる文様からY字唐草が派生する。17世紀。

連珠文軒平瓦

連珠文は圏線をもつものが12世紀末～13世紀に属し、無圏線が14世紀と考えられる。

472は平瓦部が剥離喪失し、上圏線以下の文様区が残っている。珠文径9mm、間隔3mm、非常に形の整った珠文で、離型剤は無く、瓦当成形はA類である。

473は上内縁に圏線をもつ連珠文で、珠文径12mmとやや大粒で、間隔8mm。離型剤は無く、瓦当成形はA類。

474は687と同型式の圏線をもつ連珠文で、直径13mmの珠文を17mm間隔で配している。凹面右端に滑り止めの粘土板がある。離型剤は無く、瓦当裏面が厚さ1cmほど板状に剥離している。

475は珠文径9mm、間隔4mmの小粒の連珠文で、離型剤は無く、平瓦部凹面に細かい離れ砂が付着する。瓦当成形はA類である。

476は珠文径・間隔とも7mmと小粒の連珠文で、無圏線。離型剤は無く、平瓦部凹面に布目痕がある。瓦当成形はA類。

687は474と同型式の圏線をもつ連珠文で、凹面左端に滑り止め粘土板の剥離した痕がある。離型剤は無く、瓦当成形はD類。

その他の軒平瓦

471 は 2 本の凸線で表現する鋸歯文軒平瓦で、瓦当文様は岸和田市積川神社出土例と一見類似するが、隅の線が伽羅橋遺跡では 2 本平行、積川神社出土例では 3 本平行と異なる。離型剤は無く、平瓦部凹面には離れ砂が付着し、瓦当成形は A 類。12 世紀。

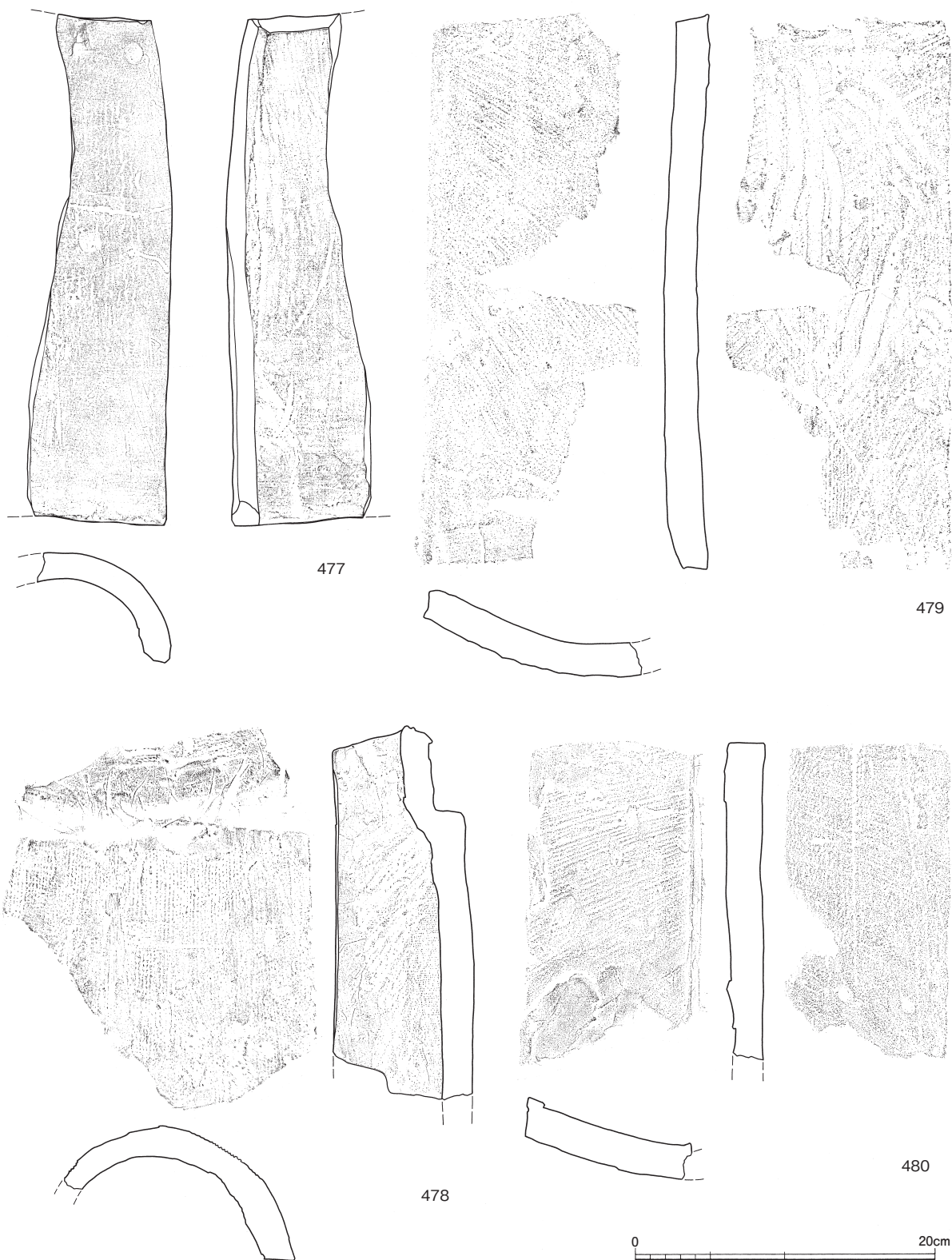


図 49 丸瓦、平瓦

692 は瓦当を失った軒平瓦で、平瓦凸面に粘土板を貼り、指頭ナデ付けの瓦当成形 A 類で、須恵質。

693 は瓦当を失った軒平瓦で、縄目叩き痕と離れ砂が見える平瓦凸面に、粘土板を貼った（瓦当成形 A 類）後、凸面をタテ方向に板状工具によるナデを加えて調整する。

なお、464・466・470・476 は包含層、467 は 852-OS、471 は 505-OS、686・688・690・691 は 840-OL、687・689 は 841-OL、それ以外は 860-OS 出土である。

道具瓦

480・729・732・734 は平瓦を縦に半截した熨斗瓦の破片である。480 は胎土 B 類である。

694 は雁振瓦で、凸面は縄目叩き痕をナデ消している。凸面にかすかに見える布目痕は、乾燥時に重ねた別個体の凹面の転写と思われる。

697 は薄い円筒に粘土紐をひねってくっつけた形状の土製品で、細かい刺突文を円筒の底面以外に施文する。円筒直上の太い L 字状の沈線は歯を表現したと考えられることから、鬼瓦の顔面口辺の破片と思われる。火中したのか浅黄橙色を呈するが、胎土は A 類である。

なお、480 は 600-OW、それ以外は 860-OS 出土である。

丸瓦

477・478 と 698～726 は丸瓦片で、708・710 の玉縁部にそれぞれ径 1.5 cm、1.2 cm の凸面側から穿孔した釘穴をもち、軒丸瓦の破片と考えられる。708～719 は有玉縁の丸瓦、477・725 が無玉縁のいわゆる「行基葺」である。713 と 716 は直径 11.5 cm と小型で、同型式である。708・721 の凹面には縦方向に幅 0.8～1 cm のナデが 1 ヶ所見られる。708～711・716 は凸面に縄叩きの痕跡を留めないほどナデ調整される。胎土が B 類なのは 701 で、酸化炎焼成である。

なお、477 は 823-OW、707 は包含層、720 は 862-OO、721 は 658-OW、それ以外は 860-OS 出土である。

平瓦

479・480 と 727～772 は平瓦片（この内、前述のように 480・734 は半截した熨斗瓦）で、全て凸面に離れ砂が付着しており、叩きの痕跡を留めるものが 19 点ある。凹面側に布目を残すものが 22 点、また、表面に糸切り痕を留めるものも認められ、両面に糸切り痕を留めるのは 13 点、凸面のみは 18 点、凹面のみは 20 点である。748・750・759 は凹面に模骨痕が観察される。766 は広端部凸面側が剥離していることから、瓦当を喪失した軒平瓦と思われる。胎土 B 類は 742・744・745・755・756・764・765 で、この内、755・756・764・765 は瓦質だが、他は酸化炎焼成である。

なお、480 は 600-OW、747・766・772 は 731-OL、748・762 は 658-OW、それ以外は 860-OS 出土である。

埴

695・696・773～785 は埴である。先述の平瓦の厚さは 2 cm 前後であるのに対して、埴は 3～4 cm と厚い。695・696 は直径 1.0 cm 前後の釘穴をもち、上面に粗い離れ砂が付着する。695 は裏面の粘土を掻き取っている。776 は羽目瓦（塀瓦）のように側縁に段をもつ。

なお、773 は 841-OL、776・777・780・783・784 は 840-OL、778 は 658-OW、それ以外は 860-OS 出土である。

第3項 土製品

土製品には、円板状土製品、土錘、焼土塊等がある。

円板状土製品 (481～496) (図50、図版36)

土器や瓦の破片周縁を打ち欠き、更に擦るなどして円形状に成形したものが幾つか認められた。最大幅(直径)2.4～7.7cm、最大厚1.0～2.4cmを測る。直径5cm以上は12点である。

出土遺構は860-OS(487～492・494～496)、657-OS(486)、740-OS(484)、856-OX(485)、包含層(481～483・493)である。

481・482は瓦質甕、483は陶器、484は丸瓦、485～493・496は平瓦、494・495は軒丸瓦の中央部を転用再加工している。482・483・488・489・494は周縁を打ち欠いたままである。481・484～487・410～412は周縁を打ち欠いた後、一部擦っている。493・495・496は周縁を打ち欠いた後、大部分を擦っている。平瓦は離れ砂のついたものが多い。軒丸瓦は495が三巴紋、494は不明である。494の瓦当面には煤が付着している。

土錘 (497～514・786～1382) (図51、図版42～44)

土錘の大半は840・841-OLからの出土である。

形態により、以下の通り分類した。

A:両端に孔のある棒状のもの。1点ある。現存長6.1cm、径1.7cm、現存重量20.2gを測る。

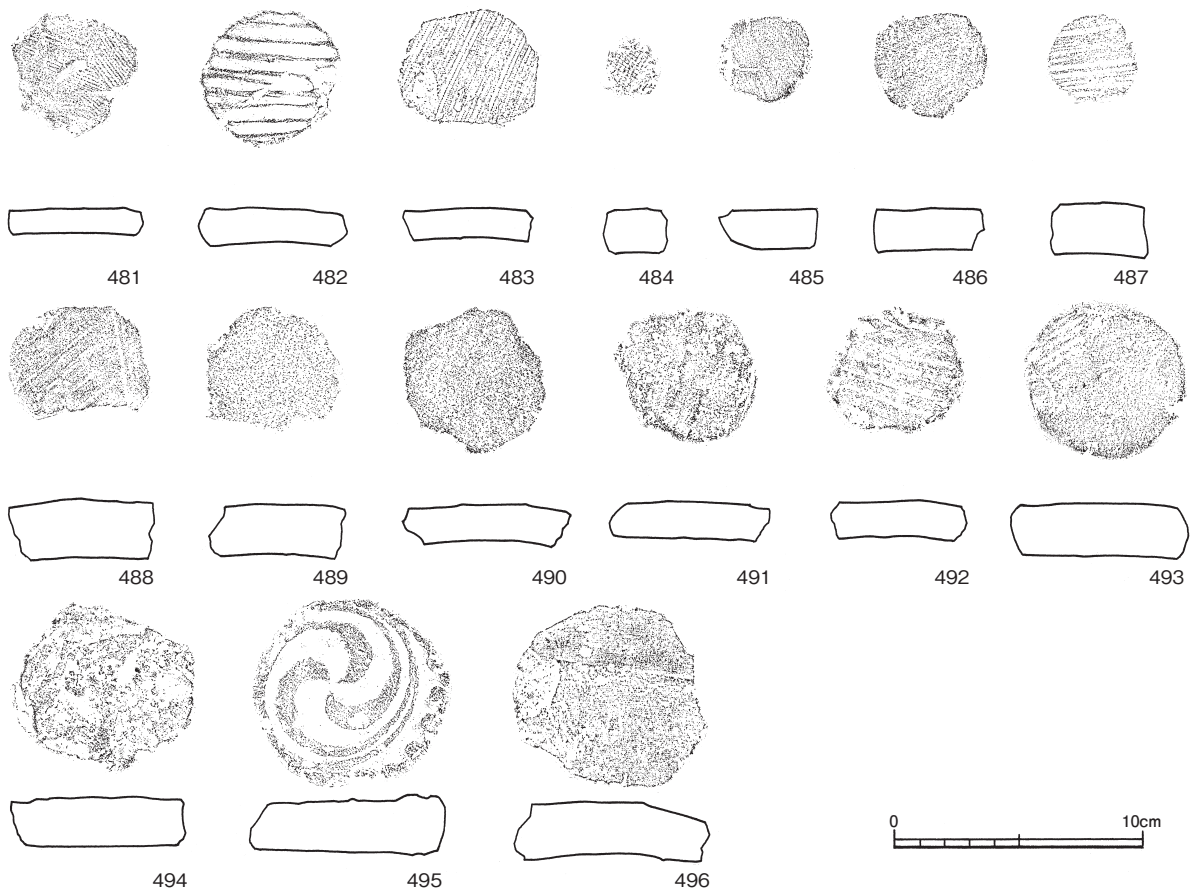


図50 円板状土製品

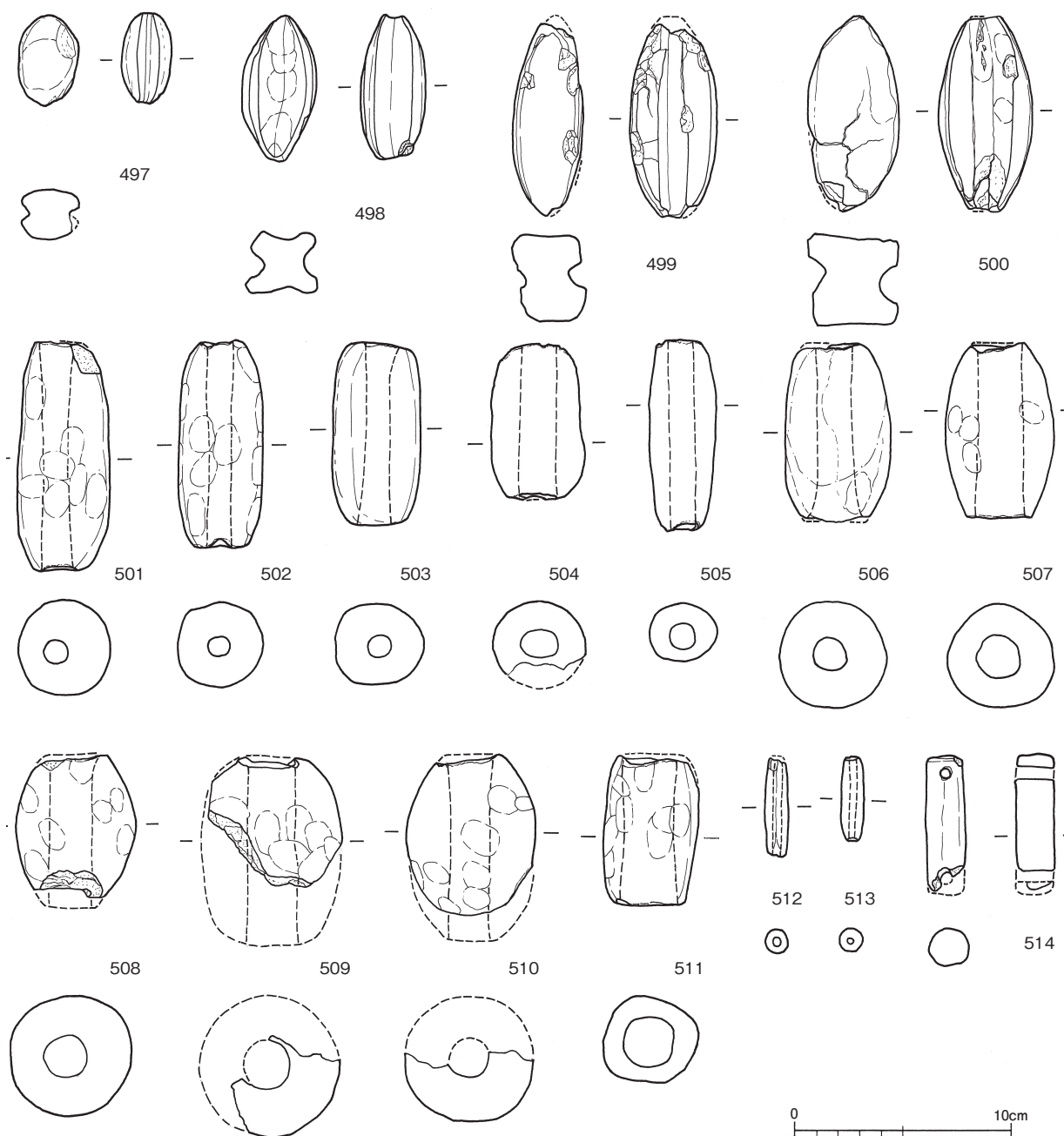


図51 土鍾

- B：側面に溝が一周するもの。ほぼ完形は4点あり、長さ4.1～8.9 cm（平均7 cm）、幅2.6～4.2 cm（平均3.3 cm）、重さ20～150g（平均79g）である。500は瓦質である。
- C：やや太くて長い管状のもの。大小ある。大は孔径が小さめで、Dタイプと比較し、胎土に砂粒を多く含む。ほぼ完形は7点あり、長さ6.3～10.3 cm（平均8.2 cm）、幅2.6～5.0 cm（平均4.0 cm）、孔径1.1～2.5 cm（平均1.6 cm）、重さ66～202g（平均128g）を測る。511・802は瓦質である。511は孔径が2.5 cmであるが、その他は孔径2 cm未満が多い。小はほぼ完形が1点あり、長さ5.0 cm、幅3.6 cm、孔径1.7 cm、重さ45gである。
- D：太くて短い管状のもの。Cタイプと比較し、孔径が大きめで、胎土は精良である。ほぼ完形は5点あり、長さ4.6～5.8 cm（平均4.6 cm）、幅4.8～5.8 cm（平均5.4 cm）、孔径2.4～3.0 cm（平均2.8 cm）、重さ80～134g（平均106g）である。

E：細い管状のもの。ほぼ完形は201点あり、長さ2.6～5.1 cm(平均4.2 cm)、幅0.8～1.3 cm(平均1.0 cm)、孔径0.3～0.5 cm(平均0.3 cm)、重さ2～6 g(平均4.2g)を測る。土鍾の中で最も出土量が多いタイプである。

F：ソロバン玉形。Dと類似するが、中央に稜をもつ。ほぼ完形は6点あり、長さ3.8～5.8 cm(平均4.8 cm)、幅4.8～5.7 cm(平均5.3 cm)、孔径2.4～3.1 cm(平均2.8 cm)、重さ80～169g(平均113.5g)を測る。

井戸出土のものはCタイプの503(812-OW)・511(696-OW)・788(763-OW)・798(615-OW)、Eタイプの803(658-OW)である。

土坑出土のものはBタイプの787(816-00)、Cタイプ大の505(619-00)・507(816-00)・793(816-00)・796(853-00)・797(747-00)、Eタイプの805(704-00)・808(853-00)である。

ピット出土はEタイプの806(531-OP)である。

溝の505-OSではBタイプ(498・500)、Cタイプ大(504・510・789・792・795)、Eタイプ(804)がある。538-OS(786)はBタイプ、740-OS(509)、860-OS(802)はCタイプ大、842-OS(807)はEタイプである。

池の840-OLではCタイプ大(501・502・506・799)、Cタイプ小(1347・1349)、Dタイプ(1351～1354・1360・1369～1371・1376～1378)、Eタイプ(811～1145)、Fタイプ(1356・1363・1365・1367・1372・1375・1379・1381・1382)がある。841-OLではCタイプ小(800・801・1346)、Dタイプ(1350・1368・1374)、Eタイプ(1146～1316・1355)、Fタイプ(1357・1364・1366・1373)がある。

その他の遺構では851-OX(1362)のFタイプがある。

包含層ではBタイプ(497・499)、Cタイプ大(508・790)、Eタイプ(512・513・1317・1318)、表採ではEタイプ(1319)がある。攪乱ではAタイプ(514)、Cタイプ小(1348)、Dタイプ(1359・1361)、Eタイプ(809・810・1320～1345)、Fタイプ(1358・1380)がある。

焼土塊等

本報告では写真など掲載していないが、スサ入り焼土塊、鈳滓などが少量みられる。これらは大きいものでも10 cmに満たない大きさである。鈳滓と考えられるものでは、大きさのわりに重量のあるものが620-00、860-OS、731-OL、840-OLより出土した。また、表面に気泡が多くみられ軽いものは731-OL、840-OLより出土した。スサ入り焼土塊は860-OS出土のものは胎土や特徴で3種類みられる。一つは胎土が粗く、一部の面が平らに残るもので、壁土の焼けたものかと考えられるものである。もう一つは炉壁の可能性のあるものである。さらに、鑄型の可能性が考えられるものも含まれている。840-OL出土の焼土塊は炉壁か鞆羽口の可能性が考えられる。763-OW出土のものはスサを含んでいない焼土塊であり、壁土ではないが、炉壁かどうかは不明である。

第4項 石製品

石製品には石鍋、サヌカイト・粘板岩、砥石などがある。

石鍋

滑石製石鍋は本報告書に図など掲載していないが、外面に煤の付着した体部破片が731-OLより1点のみ出土した。

サヌカイト・粘板岩 (図52、図版44)

サヌカイトは火打石と推定されるもの(515)、石鏃か石錐の未成品(1383)、剥片(1384～1386)、石核(1387)がある。

515は小振りの石核のエッジが潰れており、特に一辺に著しい。1383は両面中央に大剥離面を残すが、二辺に両面側への剥離調整がみられる。表面は全体に白く風化している。1384は表面に打点を欠いた大剥離面を大きく残し、裏面は自然面である。断面は三角形状に片側が厚く、全体に風化している。1385は表面が大剥離面、裏面の半分弱に自然面を残す薄手の剥片であり、全体に少し風化して白い。

1386は両面に大剥離面を大きく残し、一辺に自然面を留める。断面は三角形状を呈し、表面は少し風化して白い。1387は表面に大剥離面を残し、裏面に大きく自然面を留め、側面は割れ面からなる。厚みのある剥片素材の割れたものか。

1383が620-00、1384が538-OS、1385が615-OW、1386・1387が860-OSからの出土である。

粘板岩(1388)は包含層出土であり、厚さ3.5mmの一辺が直に研磨され、他辺は割れており、何の破片か不明である。

砥石他 (図53～58、図版45～48)

荒砥または中砥・仕上げ砥がある。その他自然石、加工石、台石状のもの、焼き物製も含む。

荒砥または中砥では全体に大きめの河原石やその割れたもので、表面に僅かに砥いだ痕跡を残すものが多く、中には煤の付着したものや被熱により赤く変色したものもみられる。粒子の比較的粗い545・552の中粒砂岩は荒砥かと考えられる。545は丸みを帯びた自然石の長軸方向の両端部が欠損するが、2面が平らで砥ぎ面と考えられ、他の面は叩打痕がみられる。552には粗い線条痕が残り、1ヶ所に巻貝か不明の圧痕状のものが認められる。中砥かと考えられるものは荒砥以外の中粒砂岩である。その他ヒン岩、流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩などの石材があるが、砥石か不明である。1401では砥ぎ面と考えられる面の隅に二枚貝の圧痕が認められた。仕上げ砥は石材が泥岩、粘板岩、流紋岩のものと考えられ、小さい板状のものが多い。輝石安山岩は仕上げ砥か不明である。仕上げ砥と考えられる556は石1439と接合した。砥石の擦痕は顕著でないが、建築部材の割れたものを砥石として転用したものであろうか。

1395は須恵質の焼き物を砥石のように用いたものか、1面が擦られて滑らかである。1408・

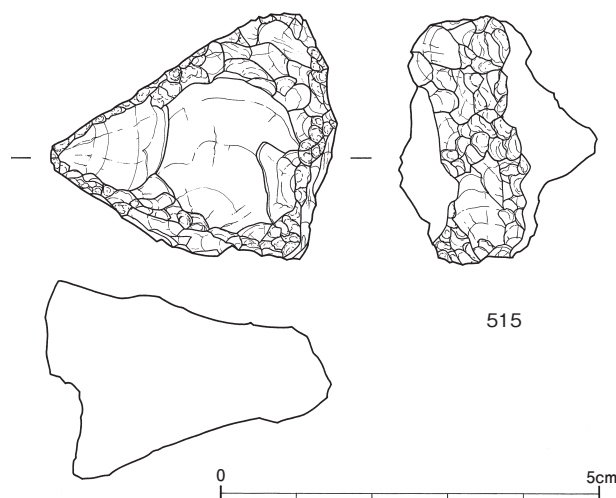


図52 サヌカイト

1409 は砥石ではなく、何らかの加工石であり、1408 には未貫通の穴が1つみられる。1409 は多くの穴が不規則にあけられた化石である。1410 は長方形の硯である。

出土遺構は 658-OW (527・559・1402)、745-OW (1400)、824-OW (550・558・562)、427-OO (521)、487-OO (564)、619-OO (556)、743-OO (531)、779-OO (546)、853-OO (516)、861-OO (1406)、473-OP (561)、533-OP (544・549・553・554)、505-OS (524・525・1409)、657-OS (526・555)、852-OS (518・1396・1410)、860-OS (520・522・523・528～530・532～539・557・560・1398・1401・1404・1405・1407)、783-OS (1397)、731-OL (543・547・552)、840-OL (565・566・1389・1391・1393)、841-OL (1395)、705-OX (551)、780-OX (563)、822-OX (541・545)、851-OX (1392)、包含層 (517・519・542・1394・1399・1403・1408)、攪乱 (548・1390) である。

図版 47 (下段)・48 は根石・裏込め石、礎石等の可能性のあるもの、その他のものを含む。これらは結晶片岩を除き自然石が殆どである。全体に煤の付着や被熱による赤変など、焼けた痕跡のみられるものが多い。

1411～1425 は結晶片岩である。うち 1411・1412・1422・1423 には焼けた痕が、1411・1413～1415・1420～1423 には板状の側面を切断した加工痕が見られる。特に 1411・1412 の表面には煤の付着が著しい。1416・1418・1421 は一部に叩打痕がみられる。1423 は表裏面が研磨されている。

1426～1428・541・1436・1440～1442・1444・1447・1451・1452 は和泉砂岩である。そのうち 1428 を除くすべてに焼けた痕が見られる。1436 は表面全体に煤が付着しており、楕円形状の窪みの一端が外側へ延びる石皿状をなす。表面窪み中心部には直径約 10 cm の炭化の著しい部分が認められる。裏面は剥離面である。柱の焼けた痕跡が残るものか。541 は表面が割れて不明瞭であるが、極一部に砥石として使用された痕跡を留める。1442・1447・1451 は一部に叩打痕がみられる。1440・1444 は割って長形状に整形していると考えられる。1440 は煤が略全面に付着している。1452 は表裏ともに叩打痕や浅く窪んだ面が認められ、台石または砥石の可能性が考えられる。

1429・1439・1443・1445 は流紋岩である。1439 は砥石 556 と接合する。

1430・1431・1449 は流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩、1450 は流紋岩質溶結凝灰岩である。1430・1431 に焼けた痕跡がある。

1432・1446 は輝石安山岩、1448 は石榴石角閃石安山岩である。1432・1446・1448 は焼けた痕跡がある。1433 は閃緑岩、1434 はアプライトであり、1433 は厚く平坦な板状に加工したものと考えられる。

1437 は焼けた痕のある長形状の安山岩質火山礫凝灰岩である。全面に煤が付着し、柱状の生きた 3 面には斜め方向に規則正しく並ぶ線条痕がみられ加工痕跡と考えられる。

1438・1453・1454 は加工痕のある黒雲母花崗岩である。1438 は台形状、1453 は 4 面が平坦面をなす。1453 には焼けた痕が見られる。1454 は上白であり、側面には挽き木を固定する穴が開けられている。

これらの出土遺構は 600-OW (1416)、615-OW (1430)、658-OW (1419・1420・1442・1449)、824-OW (1445)、403-OO (1425)、584-OO (1440)、708-OO (1439)、844-OO (1431)、

473-OP (1427·1433)、480-OP (1428)、486-OP (1435)、617-OP (1421·1429)、651-OP (1412)、
505-OS (1438·1443)、657-OS (1415·1441)、860-OS (1418·1422 ~ 1424·1436·

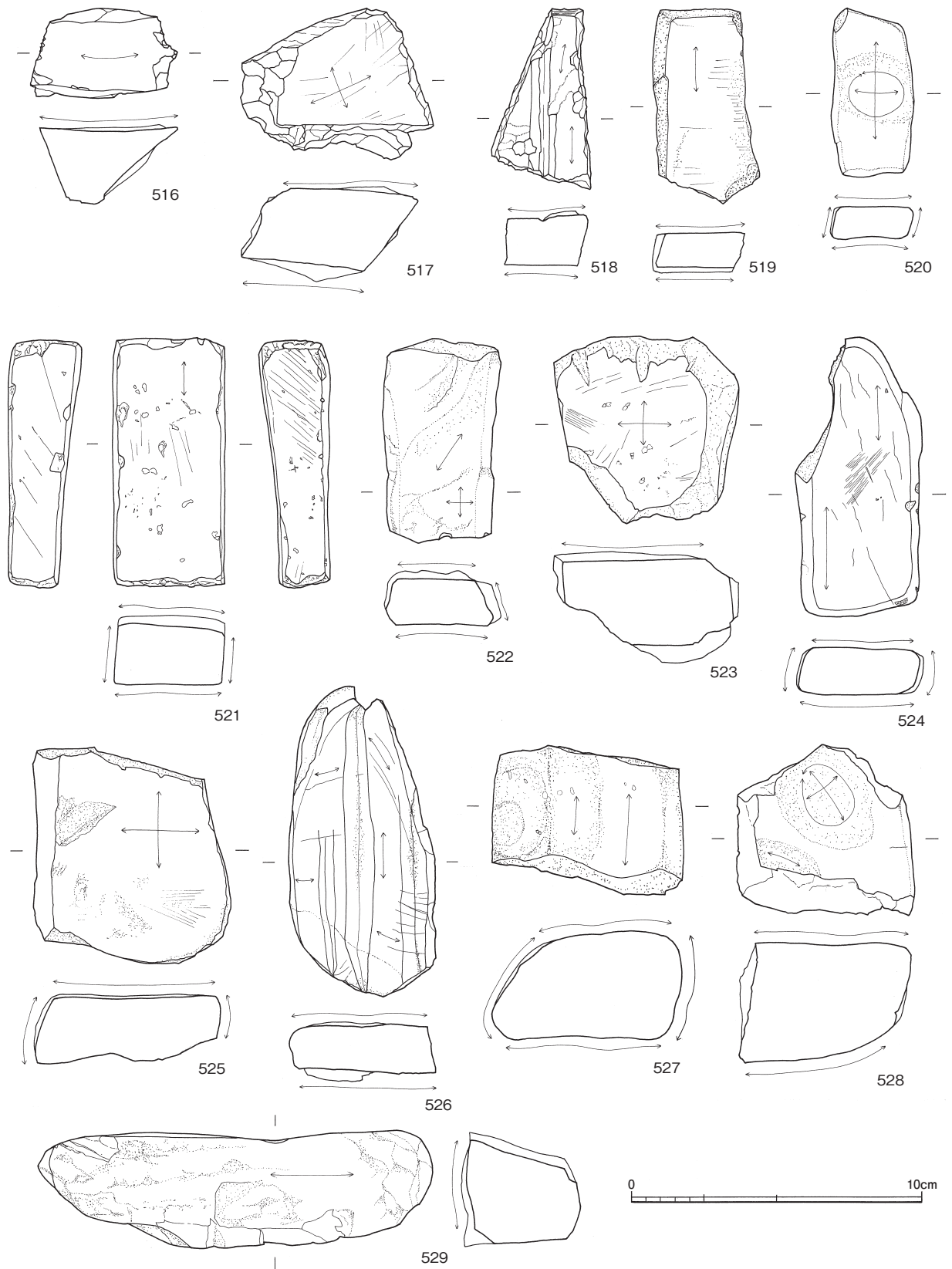


图 53 砥石他 (1)

1444・1446～1448・1450～1453)、731-OL (1414・1417)、840-OL (1437・1454)、
780-OX (1411・1426・1432)、784-OX (1434)、856-OX (1413) である。



图 54 砥石他 (2)

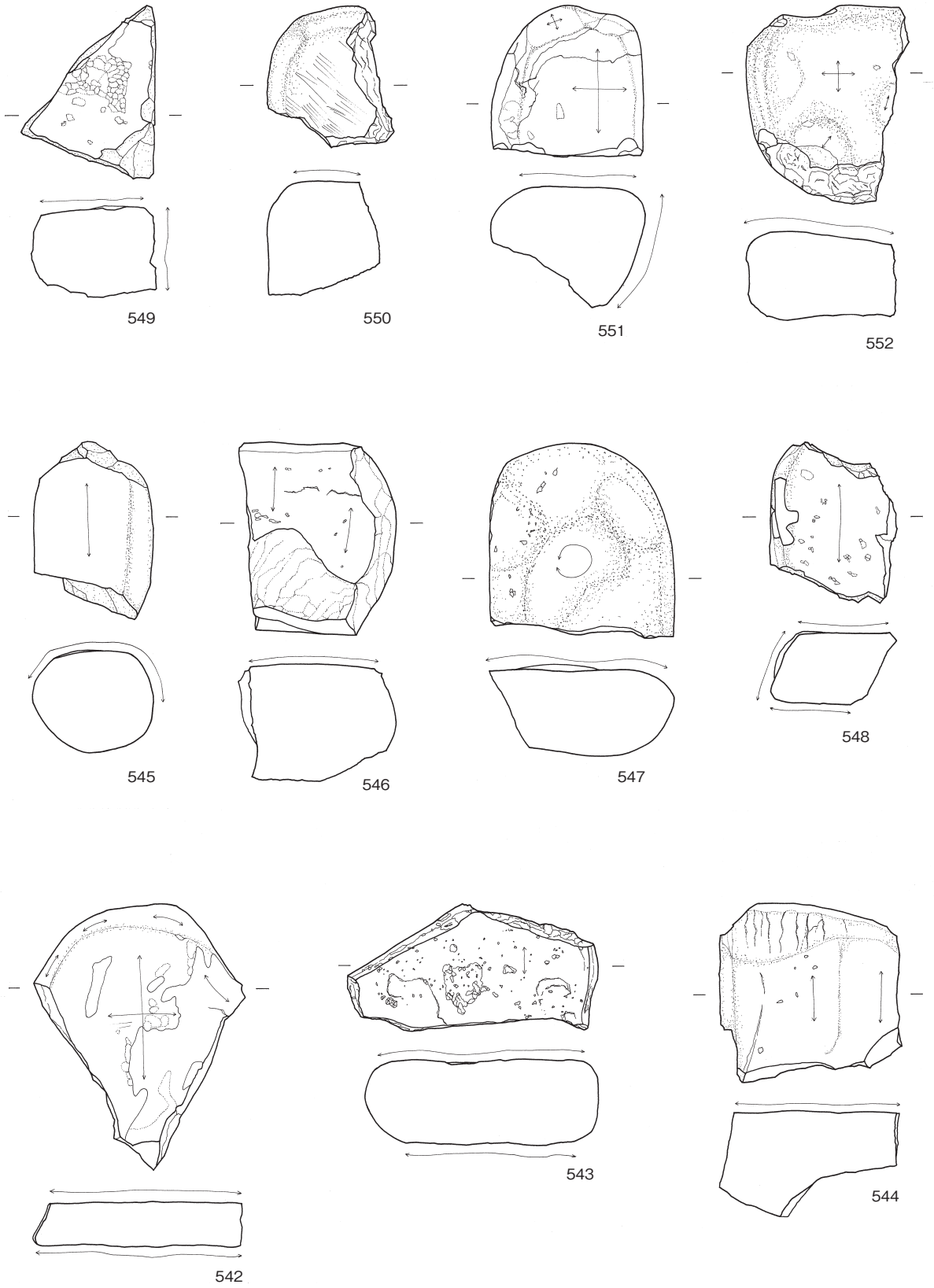
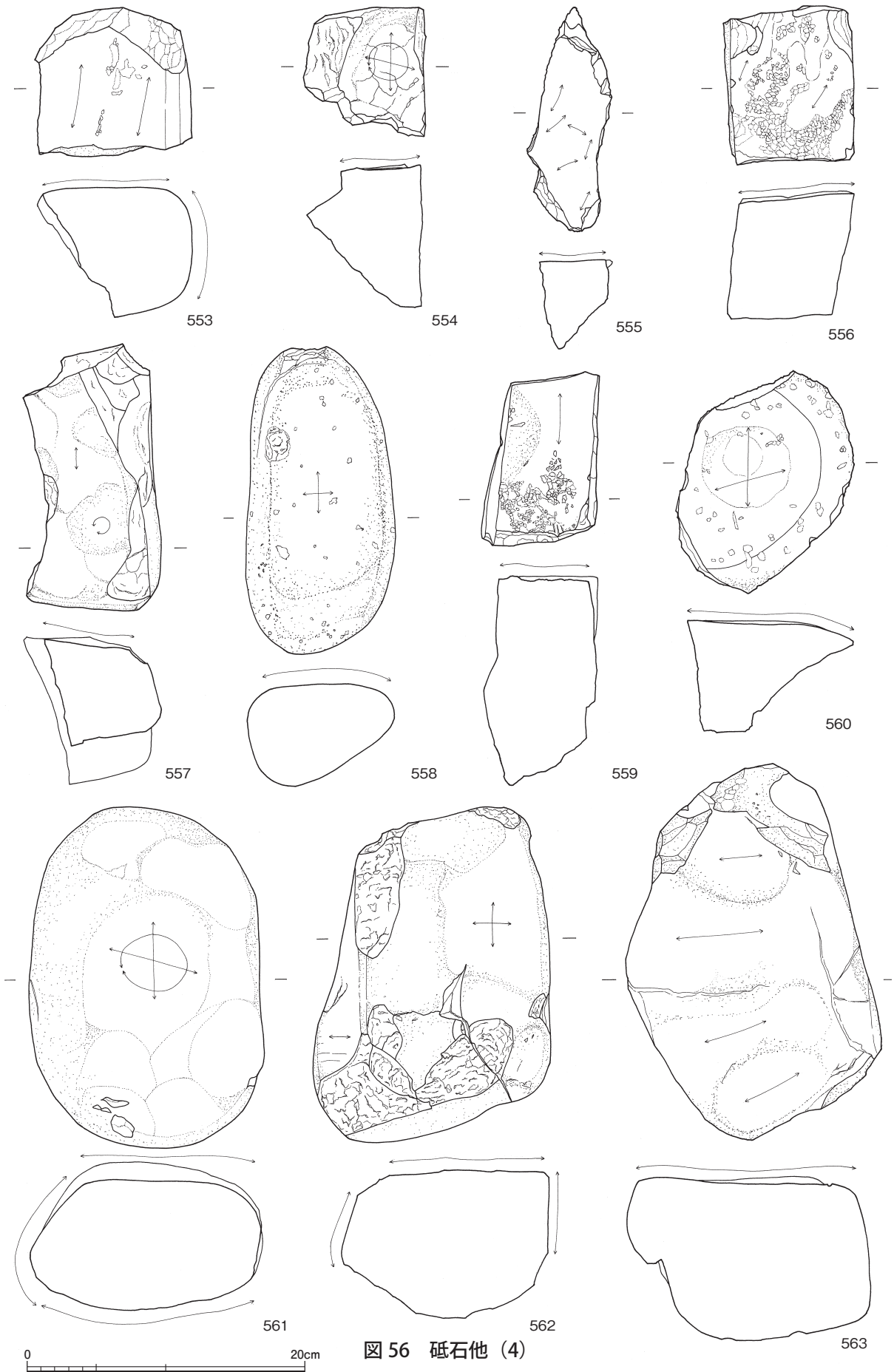


图 55 砥石他 (3)



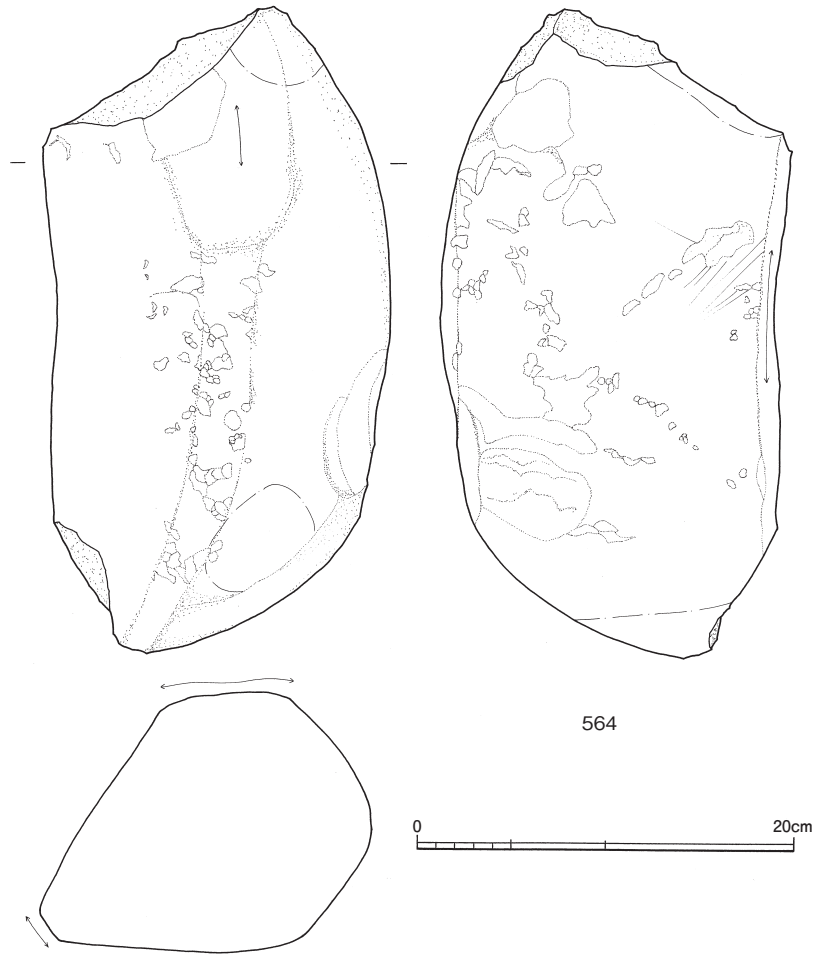


图 57 砥石他 (5)

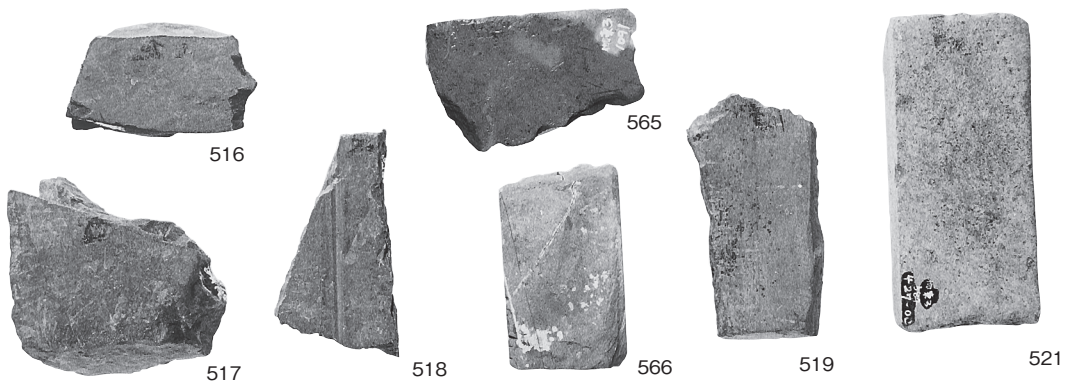


图 58 砥石他 (6)

第3節 小結

伽羅橋遺跡平成13年度調査出土遺物は、弥生時代から近世まで幅広い時期のものがみられるが、大半は中世遺物である。弥生時代の遺物は少量ながら遺構に伴って出土している。

抽出された遺物内での観察によれば、瓦器椀、土師器小皿、土錘が多い。出土した遺物の全破片点数からみれば、瓦器椀が最も多く、次いで土師質土器、瓦埴類、国産陶磁器、土師器小皿、瓦質土器、その他の順に多い。土師質土器は井戸枳転用羽釜を含み、国産陶磁器では近世遺物を含んではいるが、出土遺物の組成の割合については、大まかな傾向を示しているといえる。

弥生時代の遺物では中期を主として後期までの土器と、サヌカイトが僅かに出土した。弥生土器では体部に穿孔痕のある完形に近い土器が数点みられた。全体に抽出された範囲の中では弥生中期でも第Ⅲ様式の古い特徴を備えたものが多い傾向にある。器種は壺、甕、高杯、飯蛸壺と種類が少ない。搬入された他地域の土器では、胎土中に角閃石を含んだ河内の壺が認められた。

古墳時代から平安時代の遺物は僅かながらあり、凶化しなかったが筒形器台や初期須恵器の可能性のある甕の破片等がみられた。また、黒色土器はA類B類ともに少量出土している。

中世の遺物では主な器種別にその特徴を述べると、瓦器椀は12世紀前半から14世紀前半までのものがあり、12世紀後半から13世紀前半のものも多く、14世紀前半のものは少々みられる。この中には被熱して表面に炭素の吸着がみられないものや、重ね焼により高台が見込みに溶着した痕跡のあるものが目に付いた。確実に他地域のものは12世紀後半の楠葉型1点だけである。

土師器皿では際立って白い胎土のものは殆どない。また、他地域の特徴とされる、底部外面の回転糸切り痕やへら切りの痕跡は、糸切り痕かどうか不明の1点を除き皆無である。土師器椀は極少量出土しているが、他地域のものが僅かに含まれている。820-0X出土の1点は吉備系であり、もう1点は吉備系か不明のものが563-0Pより出土している⁶⁾。

土師質羽釜は多く出土したが、残存状態の良いものは羽釜の底部を打ち欠いて井戸枳に転用したものである。井戸枳転用ではない土師質羽釜の中には胎土中に結晶片岩を含む紀伊のものや、摂津ないし山城型と類似した形態の他地域のものが少量認められた。

瓦質羽釜は井戸からの出土は少なく、溝、土坑などからの出土が多い。摂津ないし山城型と類似した形態のものが僅かにみられたが、大部分は河内・和泉型と称されるものである。

東播系須恵質の器種では甕と比較し、捏鉢が多い。また、国産陶磁器では常滑の甕、備前播鉢が多い。その他、瀬戸の壺、常滑の鉢、東海系の捏鉢、山茶碗などが僅かにみられた。

輸入陶磁器は全体の遺物の中では少量である。時期は12世紀から15・16世紀のものまでであり、器種では碗・皿が多いが、中には四耳壺の破片や合子もみられた。

石鍋は平成13年度調査では体部破片が1点だけ、731-0Lより出土したのみである。

軒丸瓦は複弁蓮華紋が少量と巴紋が多く出土している。軒平瓦では唐草紋、連珠紋が多い。時期的には平安後期から鎌倉時代のものが多いが、室町時代、江戸時代のものもみられる。

土錘は弥生から近世に至るものまで含んでおり、出土遺構では840・841-0Lに集中している。

瓦や砥石などでは、表面に煤の付着や、被熱の痕跡のみられるものが少々みられた。特に石では柱の痕跡状に煤の付着したものがみられ、礎石建物があつたと推定される。

以上のことから、平成13年度調査区より出土した遺物からみた伽羅橋遺跡は以下の通りである。弥生時代には河内の土器や二上山のサヌカイトが入っており、河内との交流があつたことが

わかる。また、体部に穿孔された土器が出土しており、墓があったと推定される。

中世の出土遺物は全体的に日常雑器が主体であり、12世紀後半から13世紀にかけての瓦器碗が多い。土師質土器では井戸枠に転用された羽釜が多い。そして、土鍾や蛸壺が多いことも伽羅橋遺跡の特徴としてあげられる。土鍾は弥生時代から近世のものまで含まれており、瓦質の土鍾も含まれていることから、中世にも漁業に関連する遺物が出土している事は確かである。

他地域の遺物については楠葉の瓦器碗、吉備系の土師器碗、東海系の山茶碗や捏鉢その他の国産陶磁器、紀伊の土師質羽釜、山城か摂津の土師質や瓦質羽釜などにみるように少しは流入しているが、それらの占める割合は低い。さらに、輸入陶磁器の出土遺物の中で占める割合は低い。

平成11年度調査で検出された溝13の続きである2トレンチの860-OSからは、近世まで含む時期幅の広い遺物が出土しているが、中世遺物では合子、火舎といった寺に関連する遺物がみられた。また、その遺構からは平安から鎌倉時代にかけての瓦がやや多く出土しており、室町時代や近世の瓦も少々含まれている。これらのことから、平成11年度調査によって出土した遺物が更に補強された資料であるといえる。但し、それらの遺物がどういった寺と関係があるのかは、出土遺物からだけでは明らかではない。また、土鍾や蛸壺の出土は、海岸に近い遺跡の立地条件とも合わせて、漁業に関係のある遺跡であった事を示す。これらのことから、伽羅橋遺跡の中世においては、近くに寺が存在する泉州における一つの漁村のあり方を示していると推測する。

注

注1 国産陶磁器および輸入陶磁器は全て、森村健一氏（堺市立埋蔵文化財センター）ご教示による。

注2 『概説 中世の土器・陶磁器』1995 中世土器研究会編 真陽社 の中世陶器〔2〕常滑・渥美を参照した。

注3 （財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第83輯 『男里遺跡』1994

注4 藤本史子氏（大手前大学）ご教示による。

注5 『堺市教育委員会報告書第20集 SKT19 地点』1984 により瓦質甕の編年を参照した。

注6 注4と同じ

参考文献

市本芳三 2001 「大阪地域の平安時代後期瓦の様相」『中世寺院の幕開け 11・12世紀の寺院の考古学的研究一』第4回 摂河泉古代寺院フォーラム、摂河泉文庫・摂河泉古代寺院研究会

（財）大阪府埋蔵文化財協会 2002 『大坂城跡』V

（財）大阪府埋蔵文化財センター 1995 『日置荘遺跡—近畿自動車道松原ささみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書一』

神谷正弘 1997 「泉州高石大雄寺研究ノート」『堅田直先生古希記念論文集』

小倉徹也ほか 2003 「OS02-8次調査」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』2001・2002年度、（財）大阪府埋蔵文化財協会

黒田慶一 2002 「出土遺物」『大坂城跡』V、（財）大阪府埋蔵文化財協会

白石純 2002 「大坂城出土瓦の胎土分析」『大坂城跡』V、（財）大阪府埋蔵文化財協会

泉南市教育委員会 1987 『海会寺—海会寺遺跡発掘調査報告書一』

山崎信二 2000 『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊



※網部は羽釜等を利用した井戸

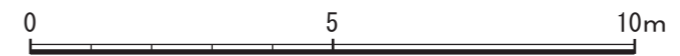
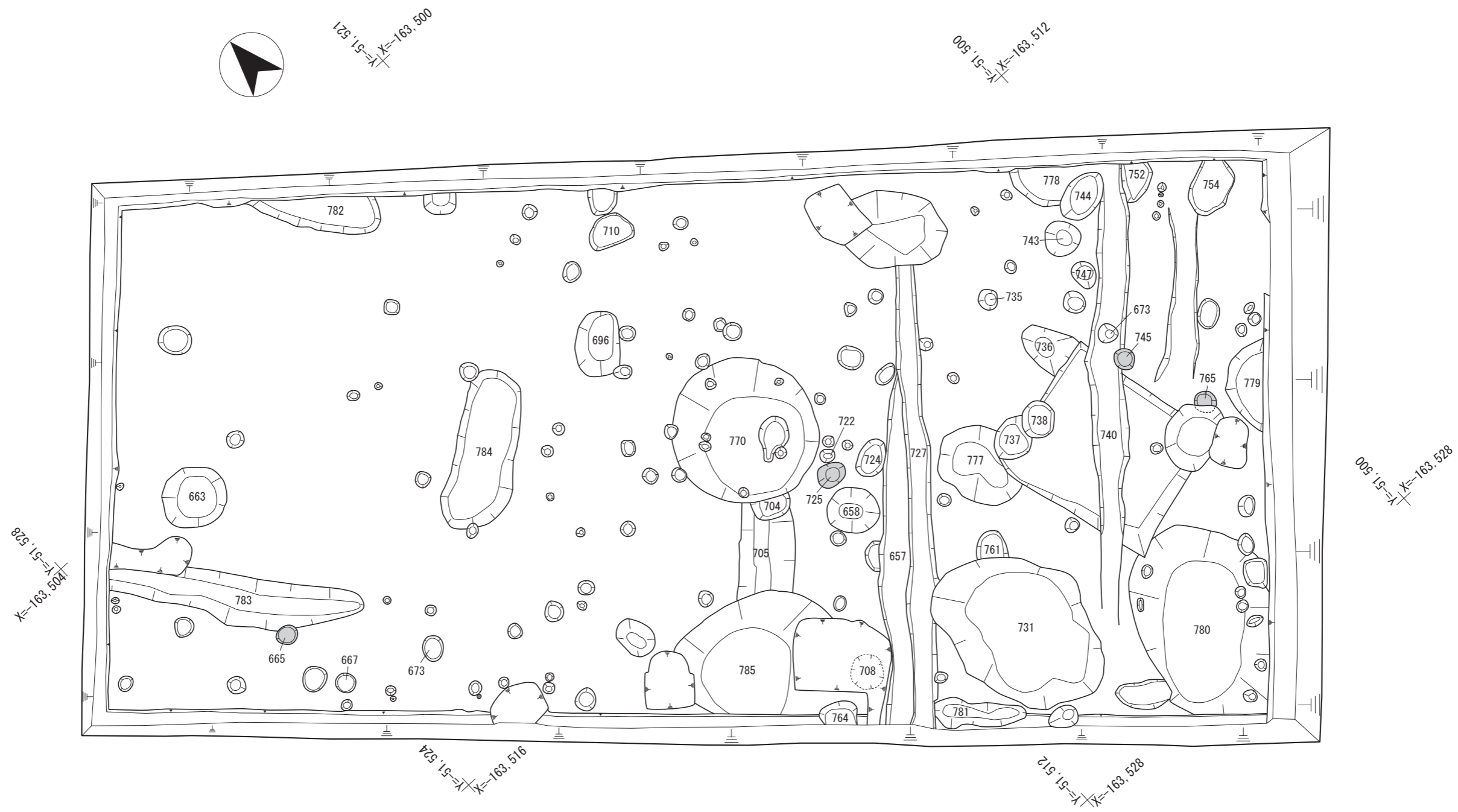


図6 1 トレンチ第1面全体図



※網部は羽釜等を利用した井戸

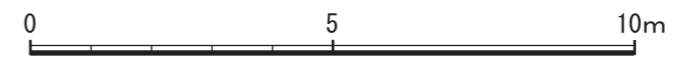
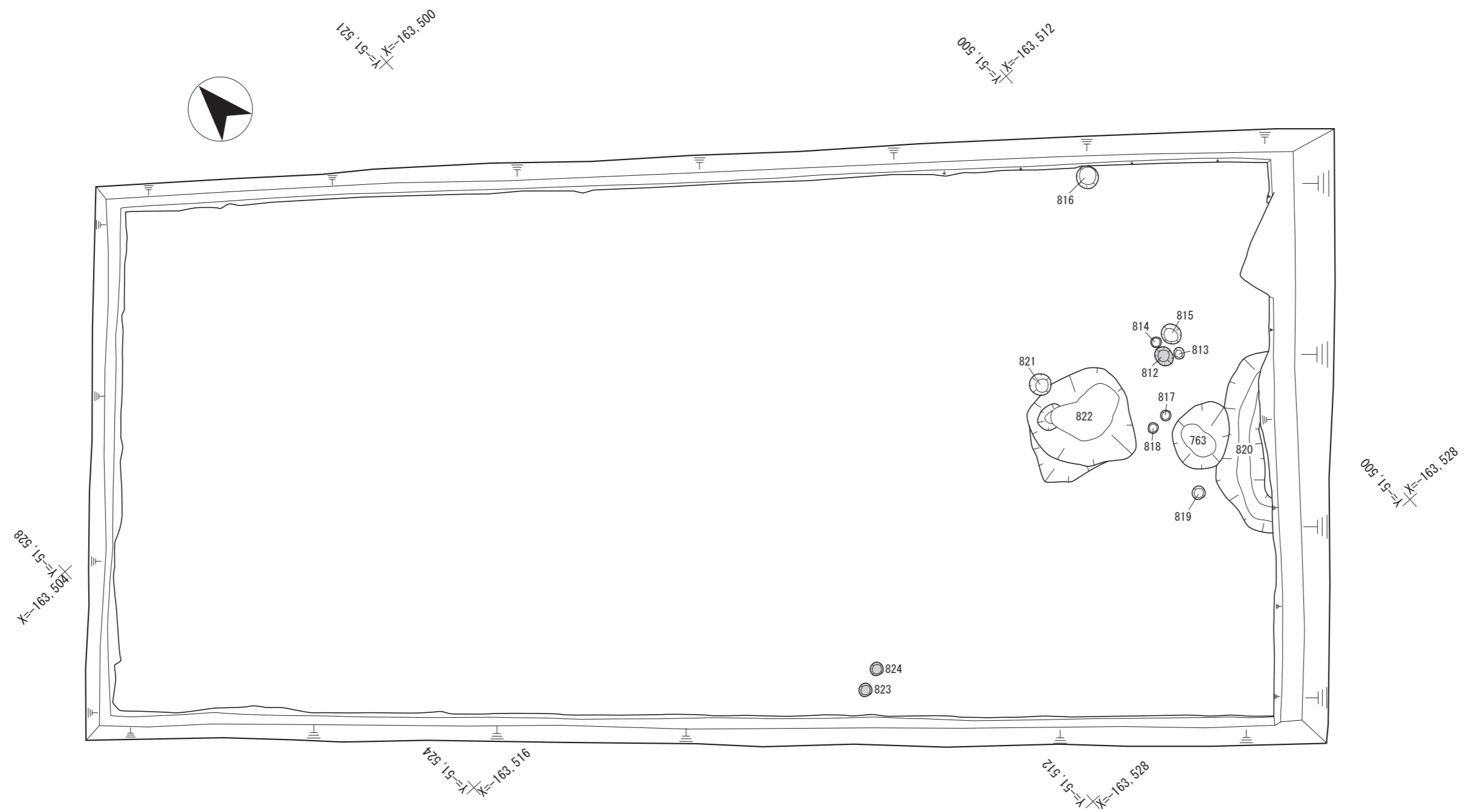


図7 1 トレンチ第2面全体図



※網部は羽釜等を利用した井戸

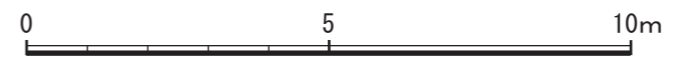


図8 1 トレンチ第3面全体図

第4章 平成16年度の調査成果

第1節 基本層序と遺構面

調査区の現地表面の標高は、T.P.2.5 m前後である。調査区から西へおよそ100 mの辺りが最も標高が高く、T.P.3.5 m前後を測る。ここをピークにして、この付近は、西から東に向かって緩やかに下がる地形であった。

現地表面から、まず上層の近現代と考えられる攪乱や盛土等を0.2～0.4 m除去した。これ以下の基本層序は、次の通り5層に分層が可能である(図59・60、図版49・51)。

第1層は、褐灰色中礫混じり中砂であり、層厚は0.1～0.2 mを測る。上部は攪乱を受け、特に1トレンチでは削平が著しかった。土層のしまりは悪く、耕土層といった感じは受けなかった。旧表土と考えられる。

第2層は、黄灰色中礫混じり細砂～中砂であり、層厚は0.1～0.2 mであった。2トレンチ中央部では、削平を受け残存していなかった。13世紀から14世紀代の遺物を含む。

第3層は第1面のベースに相当し、灰黄褐色中礫混じり細砂である。層厚は0.1～0.25 mを測る。1トレンチはほぼ平坦であったが、2トレンチでは下層の影響を受けたためか、中央部が盛り上がっていた。主に13世紀代の遺物を含む。また、古墳時代の須恵器細片も1点出土した。

第4層は、1トレンチ西半部分に主に堆積していた。地形的には、くぼ地部分に当たり、第2面のベースに相当する。灰黄褐色中砂～細砂であり、層厚は0.2 m程度であった。土壌化層であり、第5層の上

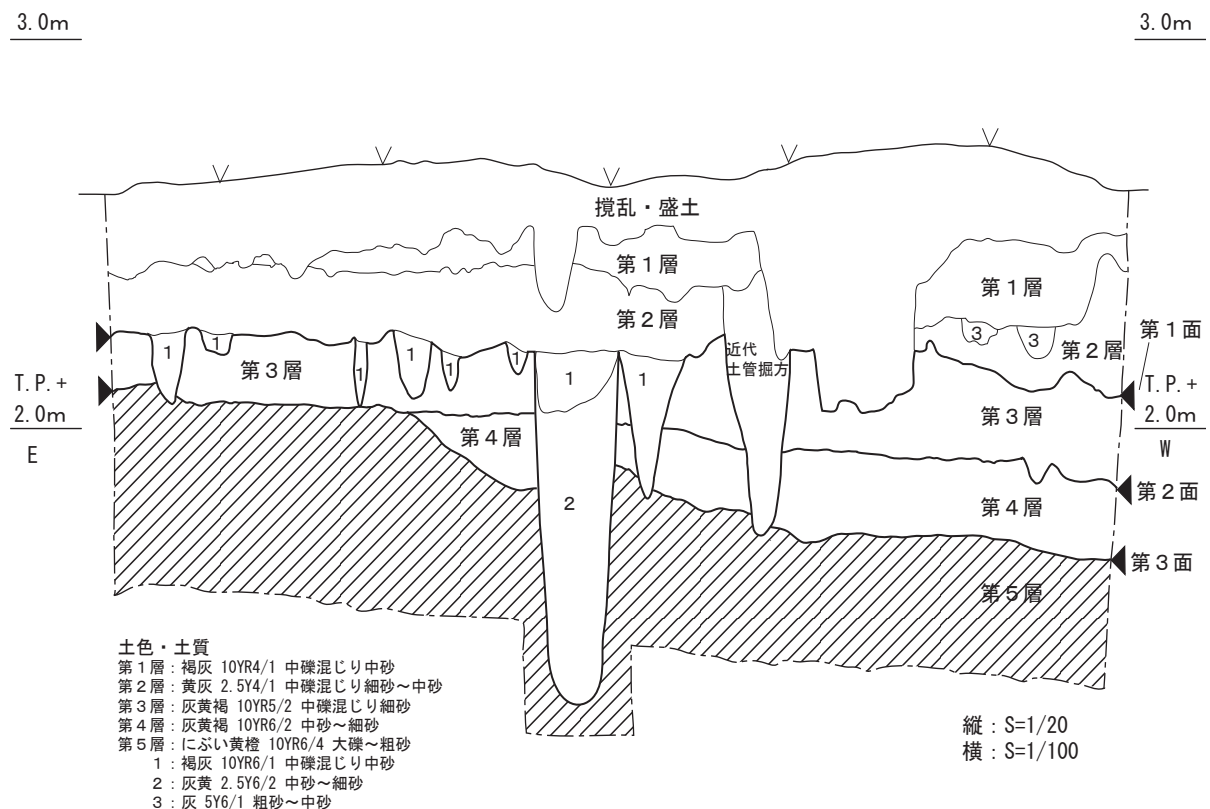


図59 1トレンチ南壁断面

部が部分的に土壌化したものと推測される。また、西側部分よりも、東側の方が強く土壌化していた。

第5層は第2面・第3面のベースに相当し、にぶい黄橙色大礫～粗砂である。ラミナの認められる自然堆積の粗砂礫層であり、地元では羽衣砂丘と通称している砂堆に相当する。無遺物層であり、いわゆる地山と考えられる。

上記のように、今回の調査では合計3面の遺構面を検出した。大きく弥生時代と中世に分かれる。以下にその概要を記す。

第1面は、主に中世遺構面であり、G.L. - 0.4 ~ 0.6 mに位置する。中世の遺構を中心に、2トレンチの中央部でまとまって検出した。遺構の種類は井戸・土坑・ピットである。井戸・土坑からは、細片も含めて出土遺物は多かった。

第2面は、中世遺構面であり、G.L. - 0.5 ~ 0.8 mに位置する。2トレンチを中心に遺構を検出した。遺構の種類は井戸・土坑・ピットである。2トレンチの東側では、土坑・井戸など規模の大きい遺構を検出した。第1面・第2面ともに、13世紀から14世紀初頭にかけての中世遺構面と考えられる。

第3面は、弥生時代の遺構面であり、第2面と重複して検出した。1トレンチでは土坑を、2トレンチでは溝を検出した。1トレンチ東端や2トレンチ中央部のように周囲より高い部分もあり、遺構面は起伏も大きく、トレンチ内では最大0.4 m程度の高低差が認められた。

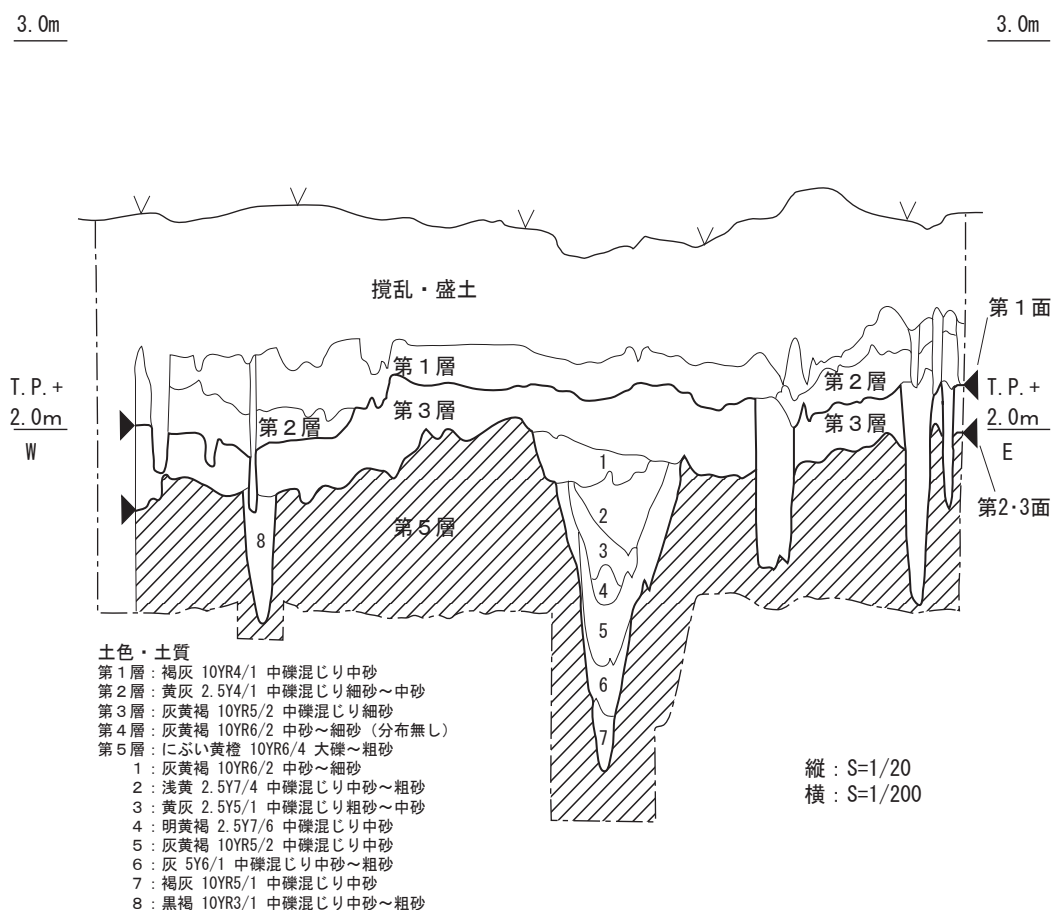


図60 2トレンチ北壁断面

第2節 遺構

第1項 第1面検出遺構（図61、図版49・51）

第1面は第3層をベースとする。G.L. - 0.4 ~ 0.6 mであり、T.P.2.2 m前後に位置する。ほぼ平坦な地形であるが、西が高く、東にゆるやかに低くなる地形であった。

ここで検出した遺構には井戸・土坑・ピットがある。

1 トレンチでは、攪乱が深くまで及んでおり、遺構面は良好に残っていなかった。遺構は土坑を2基、ピットを2基検出した。

2 トレンチでは、トレンチの中央部に遺構がまとまっており、井戸・土坑・ピットを検出した。

出土遺物の大半は井戸・土坑からの出土であり、土師皿・瓦器椀が主に出土した。ピットからは顕著な遺物は出土しなかった。特筆すべき遺物としては、11井戸で井戸枠として検出した常滑の大甕があり、畿内においては良好な状態での出土例が少ないことを考えると、貴重なものと思われる。

第1面は13世紀中頃から14世紀初頭の中世遺構面と考えられる。以下に主要遺構について記す。

〔井戸〕

7井戸（図62、図版53）

2 トレンチの東側に位置する。平面形はいびつな楕円形を呈しており、長径2.3 m、短径1.9 mを測る。断面形は底が平らなU字形であり、検出面からの深さは1 mであった。埋土は3層であり、上層からにぶい黄橙色中礫混じり中砂～粗砂、にぶい黄色粗砂～中砂、灰色粗砂であった。そのうち中層は遺物を比較的多く包含していた。

井戸の底ではピットが2基検出され、北西側に位置するピットからは曲物と思われる木片が出土したが、遺存状況は非常に悪かった。他には、13世紀後半と考えられる瓦器椀などが出土した。

出土遺物には、13世紀後半と考えられる土師皿・瓦器皿・瓦器椀・羽釜片・須恵器甕・須恵器飯蛸壺などがある。

11井戸（図62、図版54・55）

2 トレンチの中央部に位置する。平面形は楕円形を呈しており、直径1.3 ~ 1.4 mを測る。断面形はU字形であり、検出面からの深さは1.2 mであった。埋土は2層であり、上層から灰黄色中礫混じり細砂、にぶい黄色粗砂～中砂であった。

遺構検出面から、深さ0.4 mの位置で人頭大の川原石が遺存しており、それを除去すると常滑の大甕の口縁部が検出された。この大甕は底部が大きく欠損しており、井戸枠として利用したのと考えられる。大甕の時期は、13世紀後半と考えられる。

掘方埋土からは、土師器・羽釜等が大甕の東側部分に張り付けられたように出土した。その部分の大甕の体部は大きく欠損しており、そこから井戸内部へ土砂の流入を防ぐために、別個体である常滑の甕の破片をあてがい、周囲に羽釜などの土器を詰めて補強した状態であったと考えられる。従って、これらの遺物は詰物として利用していた可能性が高い。

甕の内部からは、13世紀末から14世紀初頭の土師皿・瓦器椀・羽釜・真蛸壺・須恵器甕片・瓦・埴等が出土した。また、緑色片岩や砂岩をはじめ、多量の石材も出土した。これらの遺物は、井戸廃

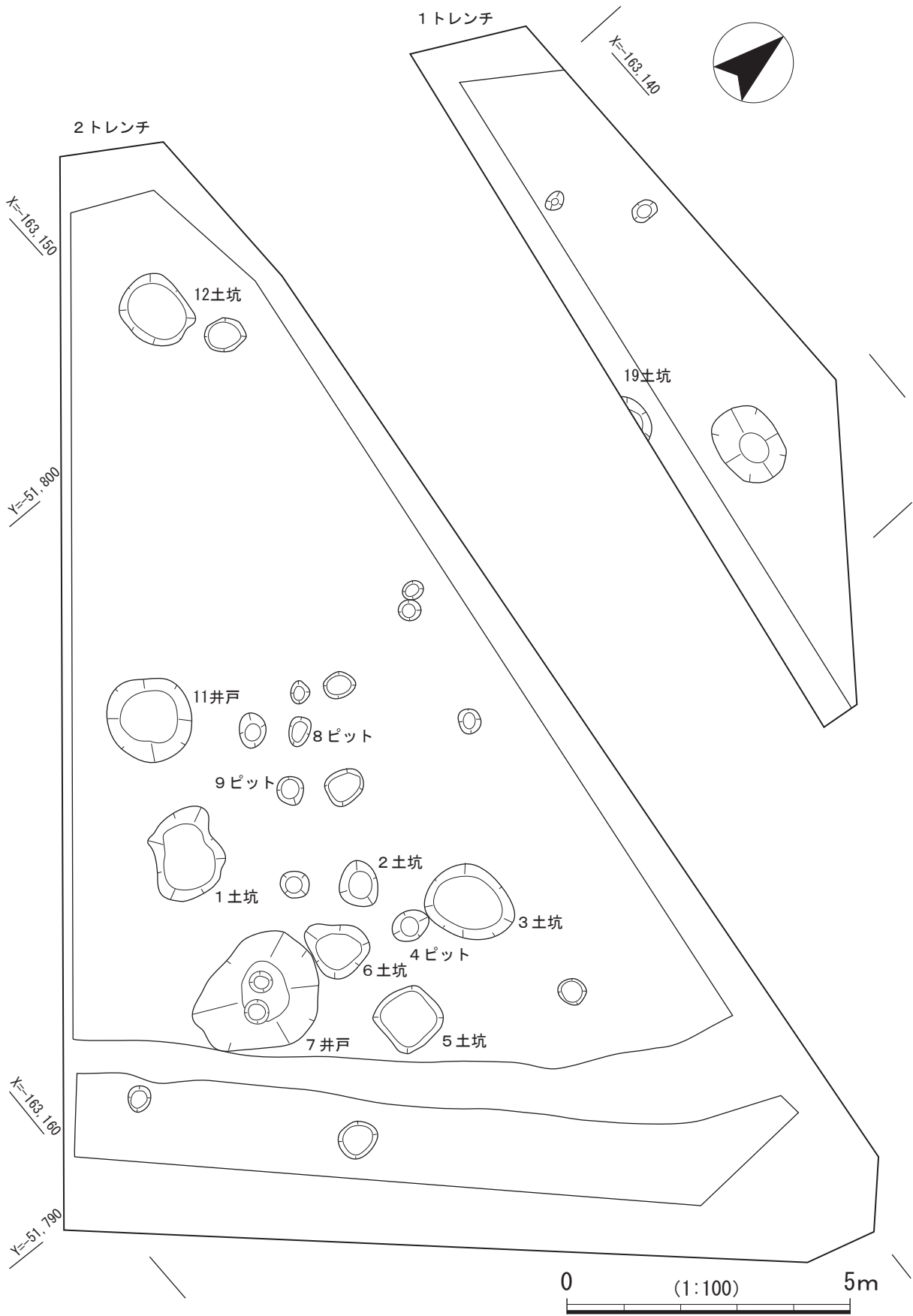


図 61 第 1 面平面図

絶時に投棄されたものと考えられる。

以上のことから、井戸として機能していた時期は 13 世紀末頃から 14 世紀初頭と考えられ、比較的早い段階で廃絶したと考えられる。

〔土坑〕

1 土坑 (図 63、図版 52)

2 トレンチの中央部に位置する。平面形は不定形を呈しており、長径 1.7 m、短径 1.4 m を測る。断面形は北西部分が少しくぼんだ皿状であり、そこが最も深かった。検出面からの深さは 0.3 ~ 0.45 m を測る。埋土は 3 層であり、上層から灰黄褐色粗砂混じり中砂~細砂、黄褐色粗砂混じり中砂~細砂、にぶい黄色粗砂であった。上層の 2 層は灰黄色・黄色のブロック土を含んでおり、下層はやや土壌化した砂層であった。

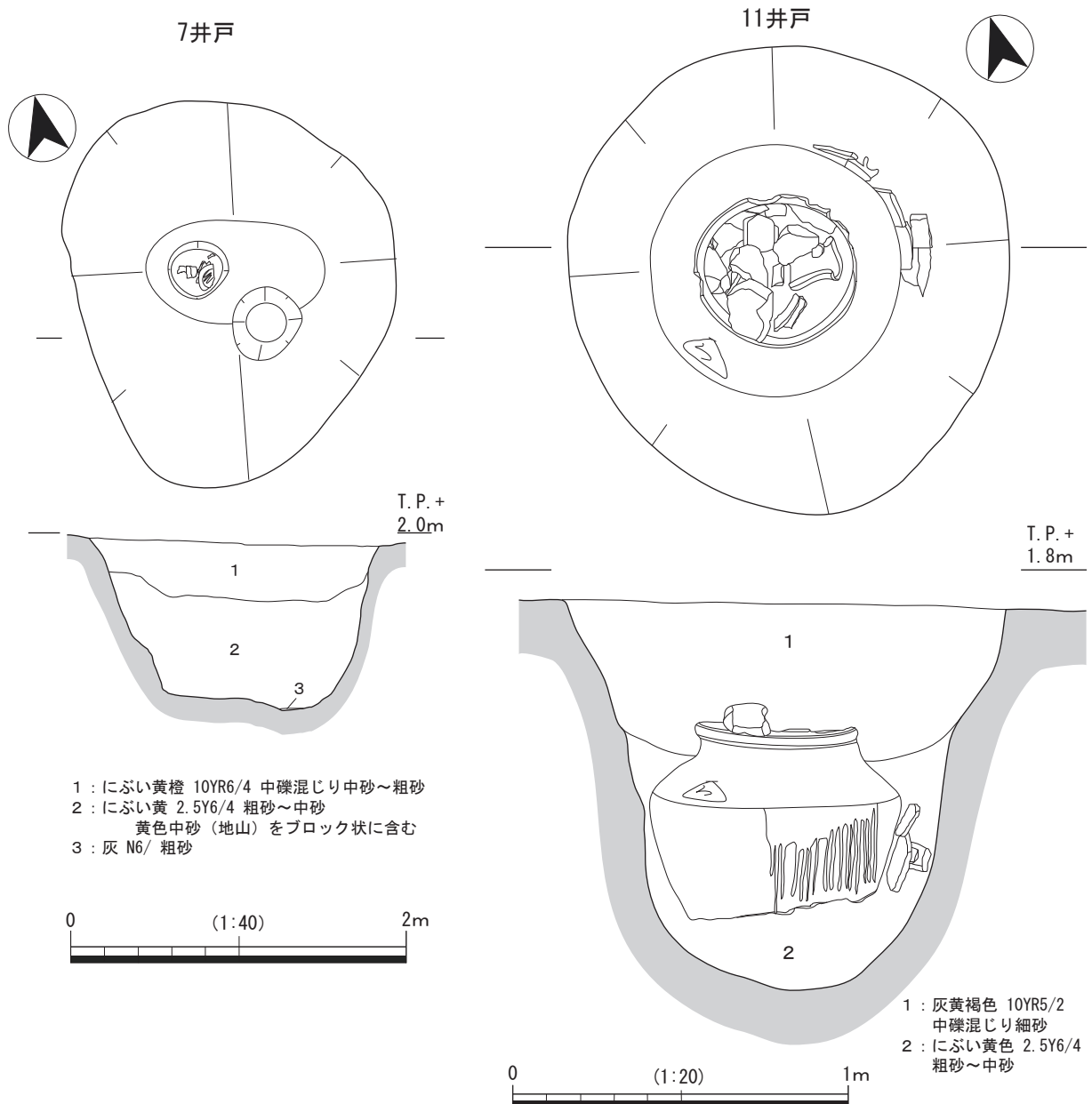


図 62 第 1 面遺構図 (井戸)

出土遺物には、13世紀中頃と考えられる土師器片・瓦器皿・瓦器椀がある。

2土坑 (図63、図版52)

2トレンチの中央部に位置する。平面形は円形を呈しており、直径0.7mを測る。断面形はU字形であり、底は若干凹凸がある。検出面からの深さは0.3mであった。埋土は2層であり、上層から褐灰色大礫混じり中砂～粗砂、褐灰色中礫～粗砂であった。

出土遺物は少なく、土師器・瓦器椀の細片が出土している。

3土坑 (図63)

2トレンチの東側に位置する。平面形は楕円形を呈しており、長径1.5m、短径1.3mを測る。南側が一部攪乱を受けていた。断面形は皿状であり、検出面からの深さは0.4～0.45mを測る。埋土は3層であり、上層から黄灰色大礫混じり粗砂～中砂、灰黄色大礫混じり中砂、オリーブ黄色中礫混じり粗砂～細砂であった。

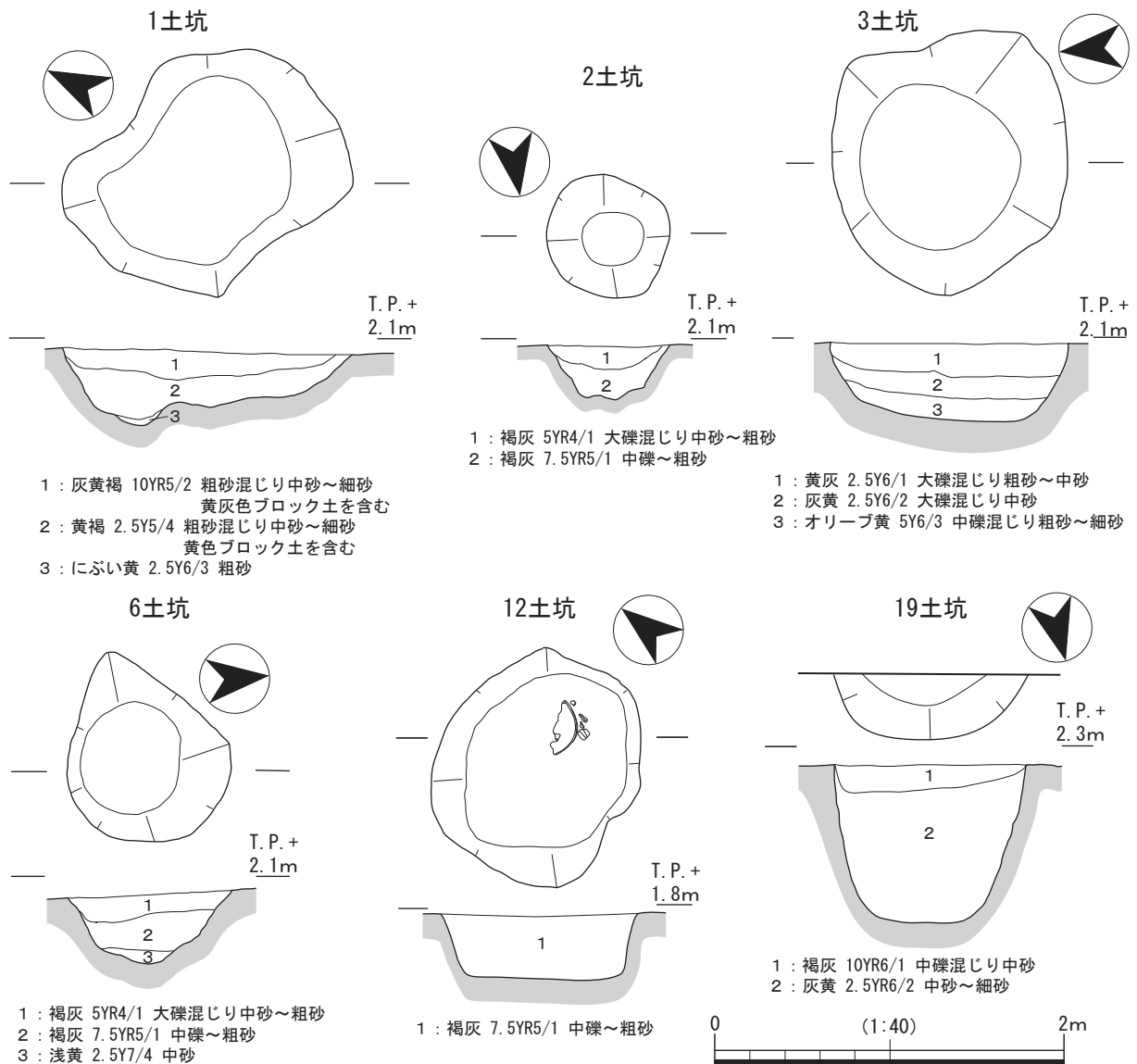


図63 第1面遺構図 (土坑)

出土遺物には、土師器片・瓦器椀片がある。

5 土坑 (図 61)

2 トレンチの東側に位置する。平面形は隅丸方形を呈しており、一辺 1 m を測る。断面形は皿状であり、検出面からの深さは 0.1 m を測る。埋土は単一層であり、灰黄褐色の中礫混じり細砂であった。

出土遺物は少なく、土師器・瓦器椀の細片が出土している。

6 土坑 (図 63、図版 53)

2 トレンチの東側に位置する。平面形は西に凸のいびつな円形を呈しており、直径 0.9 m を測る。断面形は U 字形であり、検出面からの深さは 0.4 m を測る。埋土は 3 層であり、上層から褐灰色大礫混じり中砂～粗砂、褐灰色中砂～粗砂、浅黄色中砂であった。埋土の上部は土壌化が強かった。

出土遺物は少なく、堺播鉢の細片が 1 点出土している。遺構の時期は近世の可能性も考えられる。

12 土坑 (図 63、図版 56)

2 トレンチの西端に位置する。平面形はいびつな楕円形を呈しており、長径 1.3 m、短径 1.1 m を測る。断面形は皿状であり、検出面からの深さは 0.3 m を測る。埋土は単一層であり、黄灰色中礫混じり細砂～中砂であった。

出土遺物には、炮烙・土錘・竈片・瓦・陶磁器等がある。近世遺物も出土したことから、遺構の時期は近世の可能性が高い。

19 土坑 (図 63、図版 50)

1 トレンチ中央部の南側に位置する。平面形は円形を呈しており、直径 1.1 m を測る。南側は調査区外へと続く。断面形は U 字形であり、検出面からの深さは 0.9 m を測る。埋土は 2 層であり、上層から褐灰色中礫混じり中砂、灰黄色中砂～細砂であった。

出土遺物には、土師皿・瓦器皿・瓦器椀の良好な一括資料がある。特に、土師皿は使用された痕跡が少なく、完形品に近いものが多く出土したこともあり、一時に使用され、投棄されたと推測される。

側溝掘削時に検出したため、出土状況の詳細については明らかにできなかったが、廃棄土坑と考えられる。遺構の時期は 13 世紀末から 14 世紀初頭と考えられる。

[ピット]

4 ピット (図 61)

2 トレンチの東側に位置する。平面形は楕円形を呈しており、長径 0.7 m、短径 0.5 m を測る。断面形は皿状であり、検出面からの深さは 0.3 m を測る。埋土は単一層であり、灰黄褐色の中礫混じり細砂であった。

出土遺物は少なく、土師器・瓦器椀の細片が出土した。

8 ピット (図 61)

2 トレンチの中央部に位置する。平面形は楕円形を呈しており、長径 0.5 m、短径 0.4 m を測る。断

面形は皿状であり、検出面からの深さは 0.2 m を測る。埋土は単一層であり、灰黄褐色の中礫混じり細砂であった。

出土遺物は少なく、土師器の細片が 1 点出土したのみである。

9ピット (図 61)

2 トレンチの中央部に位置する。平面形は円形を呈しており、直径 0.5 m を測る。断面形は皿状であり、検出面からの深さは 0.2 m を測る。埋土は単一層であり、灰黄褐色の中礫混じり細砂であった。

出土遺物は少なく、土師器の細片が 1 点出土したのみである。

第 2 項 第 2 面検出遺構 (図 64、図版 56・58)

第 2 面は第 4 層・第 5 層をベースとする。G.L. - 0.5 ~ 0.8 m であり、T.P.2 m 前後に位置する。ほぼ平坦な地形であるが、2 トレンチ東側の中央部が、低い地形であった。

ここで検出した遺構には井戸・土坑・ピットがある。

1 トレンチでは、遺構は検出されなかった。

2 トレンチでは、特に東側に遺構がまとまっており、井戸・土坑などを検出した。

出土遺物の大半は井戸・土坑からの出土であり、土師皿・瓦器椀・羽釜等が主に出土した。ピットからは顕著な遺物は出土しなかった。

第 2 面は、13 世紀後半の遺物が出土する遺構も見られるが、基本的には 13 世紀前半から中頃の中世遺構面と考えられる。以下に主要遺構について記す。

〔井戸〕

13 井戸 (図 65、図版 57)

2 トレンチの南側に位置する。南東に位置する土坑に切られていた。平面形は楕円形を呈しており、長径 1 m、短径 0.7 m を測る。断面形は U 字形であり、検出面からの深さは 1.0 m を測る。埋土は 2 層であり、上層から灰黄褐色中礫混じり細砂、にぶい黄色粗砂～中砂であった。主に下層から瓦器椀片等が出土した。

検出面から深さ 0.65 m で羽釜を検出した。底が打ち欠かれており、井戸枠として使用したものと考えられる。

過去の調査成果をみると、羽釜積みの井戸は、羽釜を何段か積み重ねて使用されていた。しかし、今回は 1 段のみの検出であったことから、上の数段が抜き取られた可能性も考えられる。

出土遺物は、主に掘方からの出土であり、13 世紀中頃のものと考えられる瓦器皿・瓦器椀などがある。

〔土坑〕

14 土坑 (図 65)

2 トレンチの東側に位置する。平面形は円形を呈しており、直径 1.3 m を測る。断面形は U 字形を呈しており、検出面からの深さは 0.9 m である。埋土は単一層であり、灰黄色中砂～細砂であった。

出土遺物には、13 世紀前半から中頃と考えられる土師皿・瓦器皿・瓦器椀・羽釜などがある。

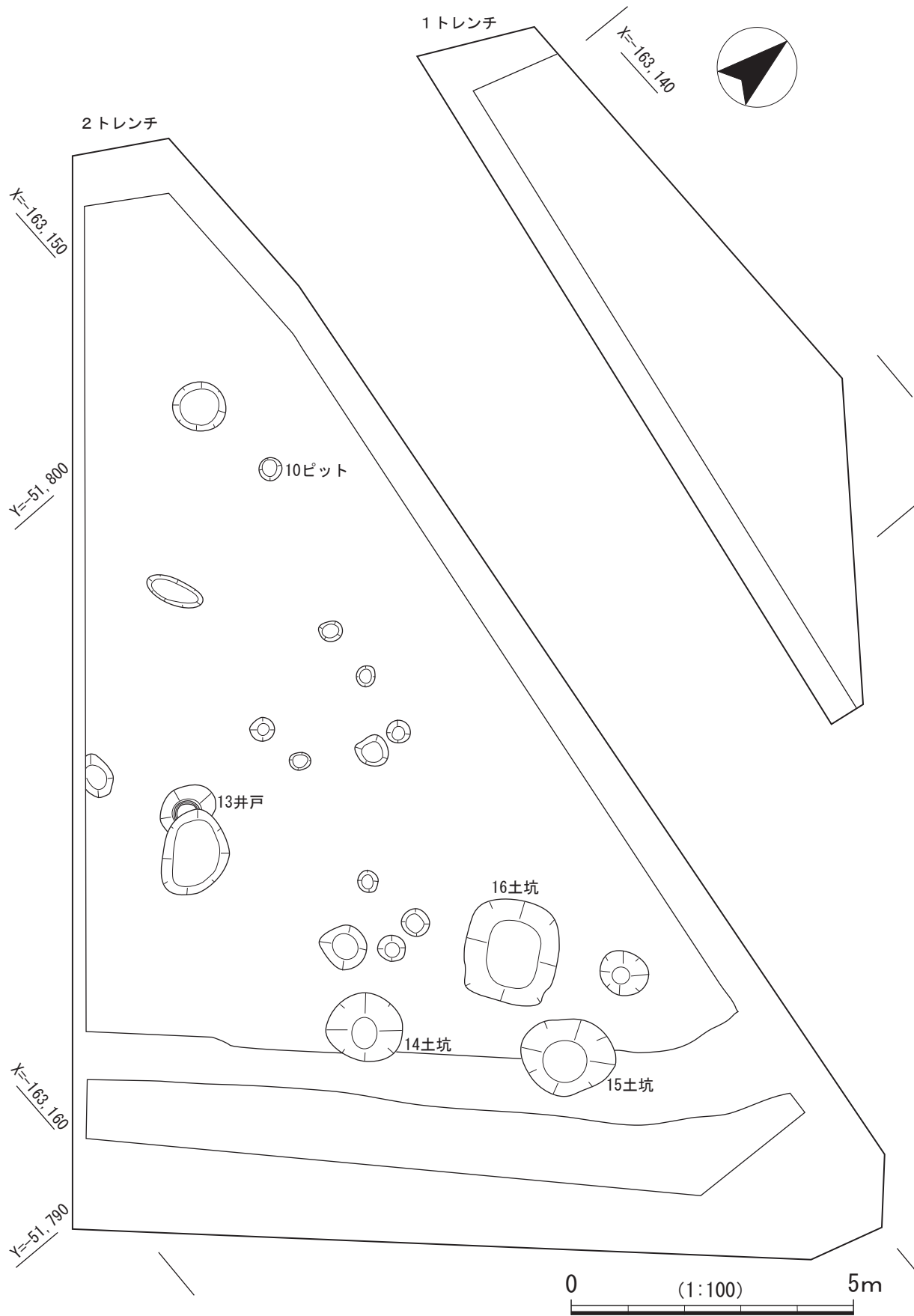


図 64 第 2 面平面図

15 土坑 (図 64)

2 トレンチの東側に位置する。平面形は楕円形を呈しており、長径 1.7 m、短径 1.4 m を測る。南東側は攪乱を受けていた。断面形は U 字形であり、検出面からの深さは 0.9 m である。埋土は単一層であり、灰黄色中砂～細砂であった。

出土遺物には、13 世紀後半と考えられる土師皿・土師器甕・瓦器皿・瓦器椀・蛸壺などがある。

16 土坑 (図 64)

2 トレンチの東側に位置する。平面形は隅丸方形を呈しており、長辺 1.8 m、短辺 1.6 m を測る。断面形は U 字形であり、検出面からの深さは 0.2～0.3 m である。埋土は単一層であり、灰黄色中砂～細砂であった。

出土遺物は少なく、13 世紀代と考えられる土師器の細片が出土している。

[ピット]

10 ピット (図 65、図版 57)

2 トレンチの西側に位置する。平面形は円形を呈しており、直径 0.4 m を測る。断面形は U 字形であり、中央部が 5 cm 程度、一段くぼんでいた。検出面からの深さは 0.3 m 前後である。埋土は単一層であり、灰黄色中砂～細砂であった。

出土遺物には、13 世紀初頭頃と考えられる東播系須恵器の捏鉢・羽釜片・竈片がある。

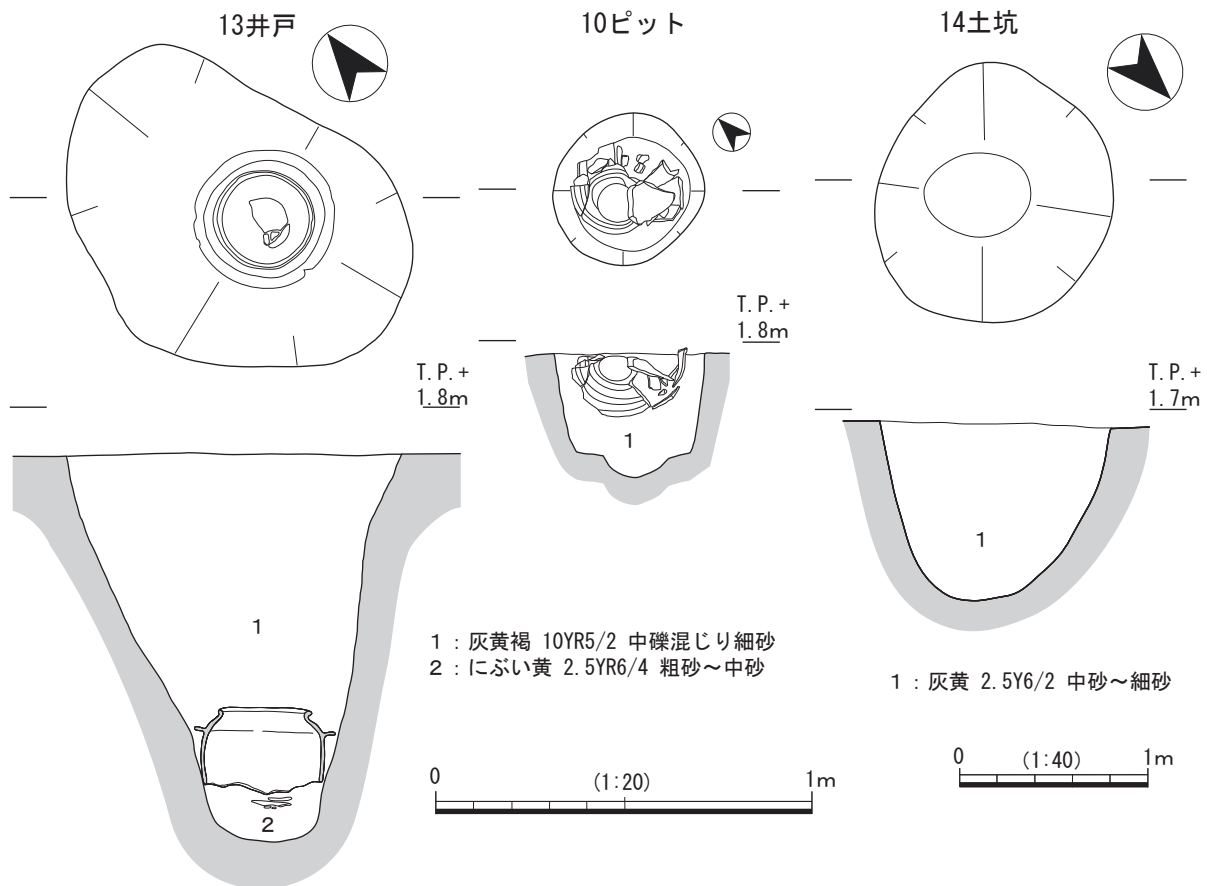


図 65 第 2 面遺構図

第3項 第3面検出遺構（図66、図版58）

第3面は第5層をベースとする。G.L. - 0.5 ~ 0.8 mであり、T.P.2 m前後に位置する。トレンチ内では比較的高低差もあり、1トレンチ東端や2トレンチ北側の中央部は高く、T.P.2 mを測る。

平成13年度の調査では、東に位置する1トレンチの西半で溝（782-OS・783-OS・784-OS）が、コの字状に廻って検出された。出土遺物から弥生時代中期の遺構と考えられる。これらは方形周溝墓状遺構として認識されており、今回の調査ではその続きを検出することとなった。

ここで検出した遺構には、土坑・溝がある。

1トレンチでは、土坑を1基検出した。

2トレンチでは、弥生時代中期の遺物を含む溝を検出し、過去の調査成果や埋土の状況等から、方形周溝墓に伴う周溝と考えられる。平成13年度調査区も含めると、合計3基の方形周溝墓の存在が確認された。

第3面は弥生時代中期の遺構面と考えられる。以下に主要遺構について記す。

〔土坑〕

21 土坑（図66、図版50）

1トレンチ北端に位置する。最も高い1トレンチ東端から若干下がったT.P.1.8 mに位置する。平面形は円形を呈しており、直径0.8 mを測る。断面形は皿状を呈しており、検出面からの深さは0.3 mであった。埋土は単一層であり、黒褐色中砂であった。埋土は全体的に強く土壌化しており、ラミナも認められなかった。

遺物の出土はなく、時期は不明であったが、埋土の状況や層序等から弥生時代の遺構と考えられる。

〔溝〕

20 溝（図66、図版58）

2トレンチの南側に位置する。溝の先端部分にあたり、北西・南東方向を指向する。T.P.1.9 ~ 2.0 mで検出した。検出長は2.3 m、幅は2.4 m、深さは0.6 mである。埋土は単一層であり、黒褐色中砂であった。全体的に強く土壌化しており、ラミナも認められなかった。

今回検出した20溝は、平成13年度調査で検出した溝（783-OS）の続きに該当する。それぞれの溝は埋土・堆積状況ともに類似しているが、検出した幅に違いが生じた。これは遺構を検出した際の、検出面の高さの違いによるものと考えられる。

遺物の出土はなく、時期は不明であったが、783-OSの続きの溝であることから、弥生時代中期と考えられる。

17 溝（図67、図版58）

2トレンチの西端に位置する。平面形はL字状を呈する。長辺は北西・南東方向を、短辺は南西・北東方向を指向する。検出長は長辺4 m、短辺1 mを測る。それぞれの端はトレンチの外へと続く。幅は1.5 ~ 2 m程度、コーナーでは2.3 mを測る。検出面からの深さは0.5 ~ 0.7 m、断面形はなだらかなV字形を呈する。

埋土は上から順に、黒褐色大礫混じり中砂～粗砂、暗灰黄色中礫混じり中砂～粗砂、灰オリーブ色中

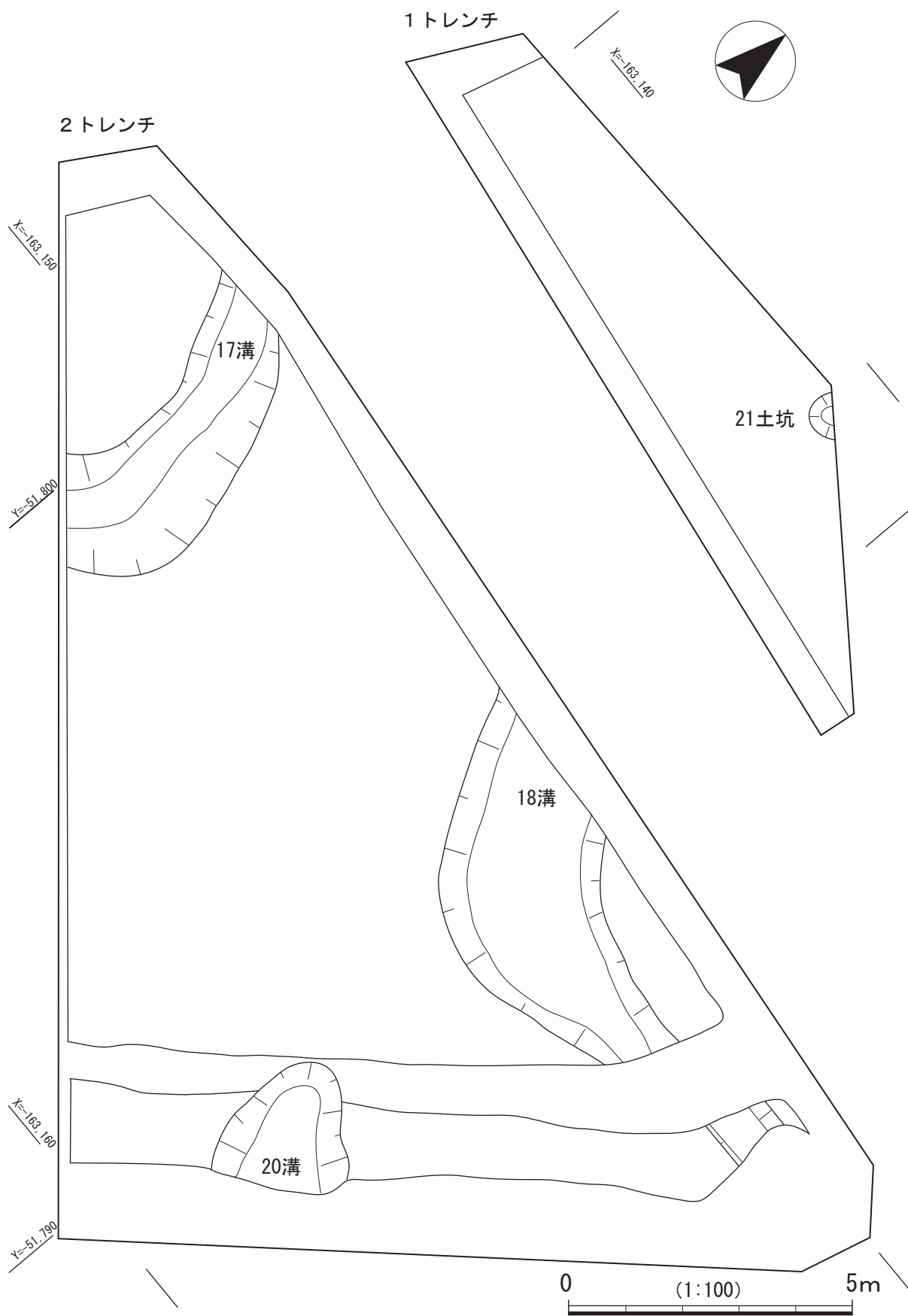


図 66 第 3 面平面図

礫混じり中砂～粗砂、浅黄色粗砂～中砂である。全体的に強く土壌化しており、ラミナも認められなかった。

出土遺物には、弥生時代中期と考えられる無頸壺がある。

17溝は、従前の調査成果や、埋土、周辺の状態等から考えると、方形周溝墓の周溝に該当すると考えられる。なお、削平を受けているため、主体部については検出されなかった。

18溝 (図68、図版59・60)

2トレンチの東端に位置する。平面形はL字状を呈し、長辺は東西方向を、短辺は北西・南東方向を指向する。検出長は長辺6m、短辺3mを測る。それぞれの端は、トレンチの外へと続く。幅は1mから、広いところで2.7m、コーナーでは2.8mを測る。検出面からの深さは0.5m、最も深いところで0.75mを測る。断面形はなだらかな皿状を呈する。

埋土は、黄灰色系の砂層と黒褐色系の土壌化した砂層が互層となって堆積していた。上から順に浅黄色中礫混じり中砂～粗砂、黄灰色中礫混じり粗砂～中砂、明黄褐色中礫混じり中砂、灰黄褐色中礫混じり中砂、灰色中礫混じり中砂～粗砂、褐灰色中礫混じり中砂である。ラミナも認められず、ベースの砂層とも類似しているこれらの黄灰色系の砂層は、いわゆる地山との識別が非常に困難なものであった。これは、周辺の砂が風で吹き流されるなどして、自然の営力により二次堆積したものと考えられた。

出土遺物には、弥生時代中期と考えられる広口壺口縁部がある。溝のコーナーから川原石に混じって出土した。少し浮いた状態で検出したことから、溝がある程度埋まった段階で流れ込んだものとみられる。

18溝は、従前の調査成果や、埋土、周辺の状態等から考えると、方形周溝墓の周溝に該当すると考えられる。平成13年度に検出した方形周溝墓では、その北西側の周溝が検出されていないことから、この18溝を周溝として共有していたと考えるのが妥当であろう。

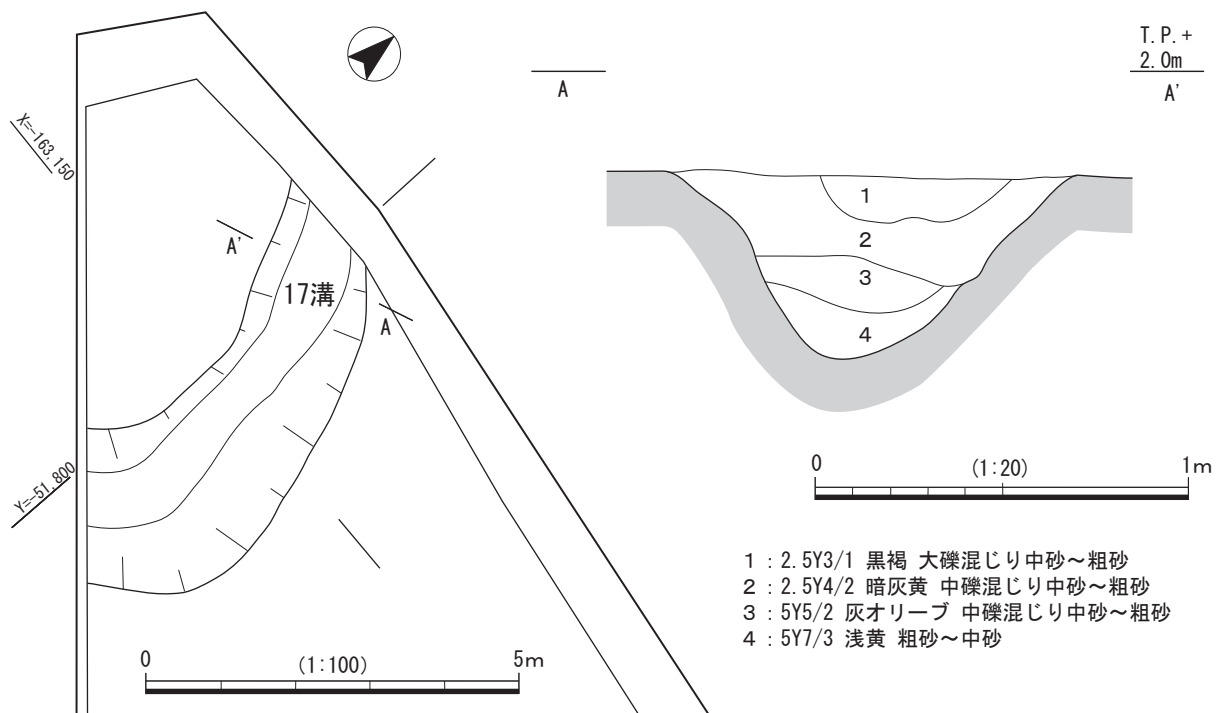


図67 第3面17溝

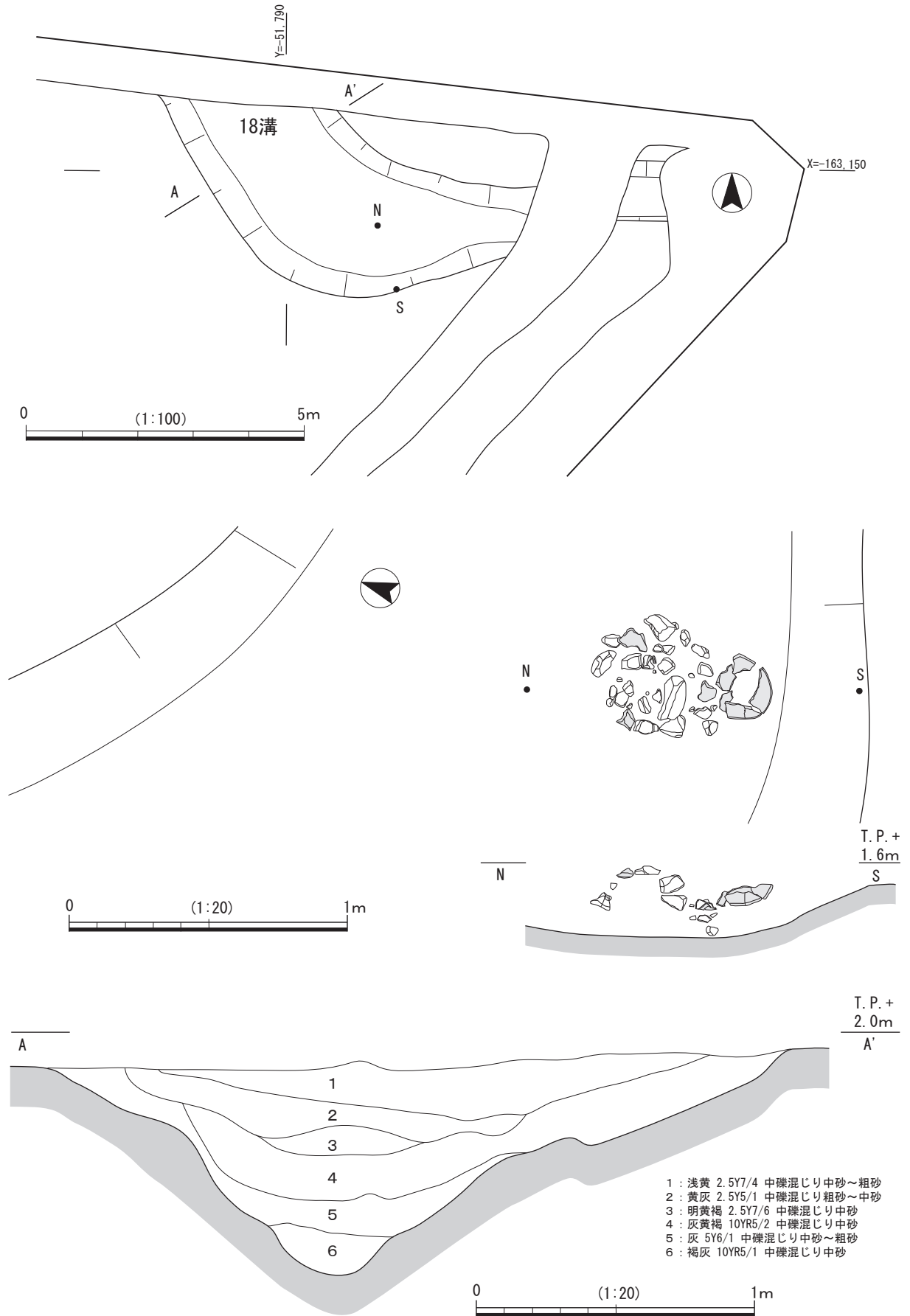


図68 第3面18溝

第3節 出土遺物

7井戸出土遺物 (図69)

2001～2006は土師皿である。2006は井戸の底から出土した。やや大きなものもみられるが、口径は8cm前後のものが多い。口縁部には横ナデを一段施す。時期は13世紀後半と考えられる。

2007～2015は瓦器皿である。2012・2013は井戸の底から出土した。見込部には粗雑な平行ミガキを、体部内面には渦巻き状のミガキを施す。口径は8cm前後である。

2016～2025は和泉型の瓦器椀である。2023～2025は井戸の底からの出土である。見込部には平行ミガキやジグザグ状のミガキを施し、その後、体部内面には渦巻き状のミガキを施す。体部外面は指押さえと横ナデを施す。断面三角形の高台が付くものも認められるが、時期は13世紀後半と考えられる。

2026～2028は土師器の羽釜である。2026はやや小型の羽釜であり、口径は19cm程度である。外面にハケ目を施す。2029は須恵器の釣鐘形飯蛸壺である。

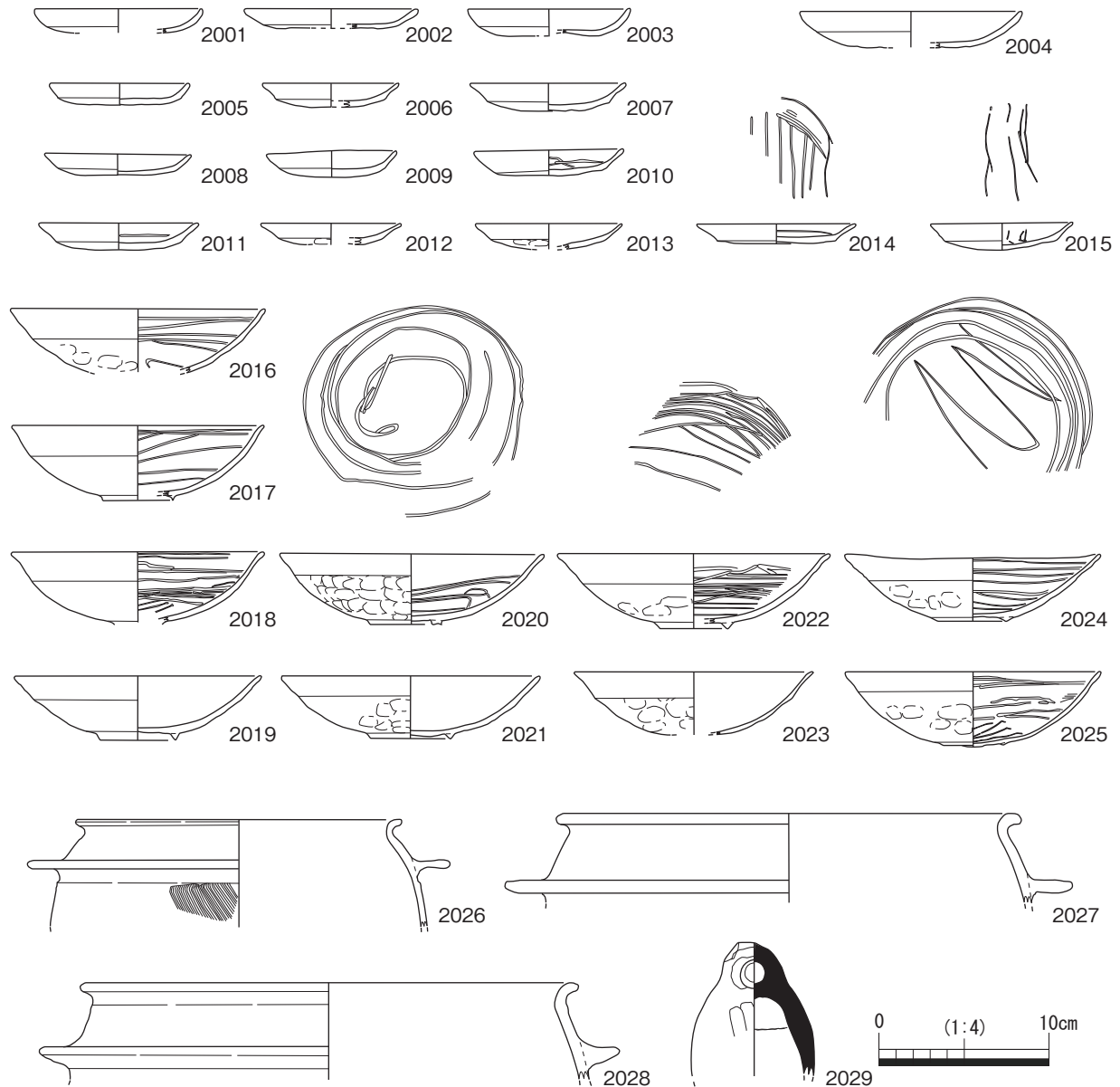


図69 7井戸出土遺物

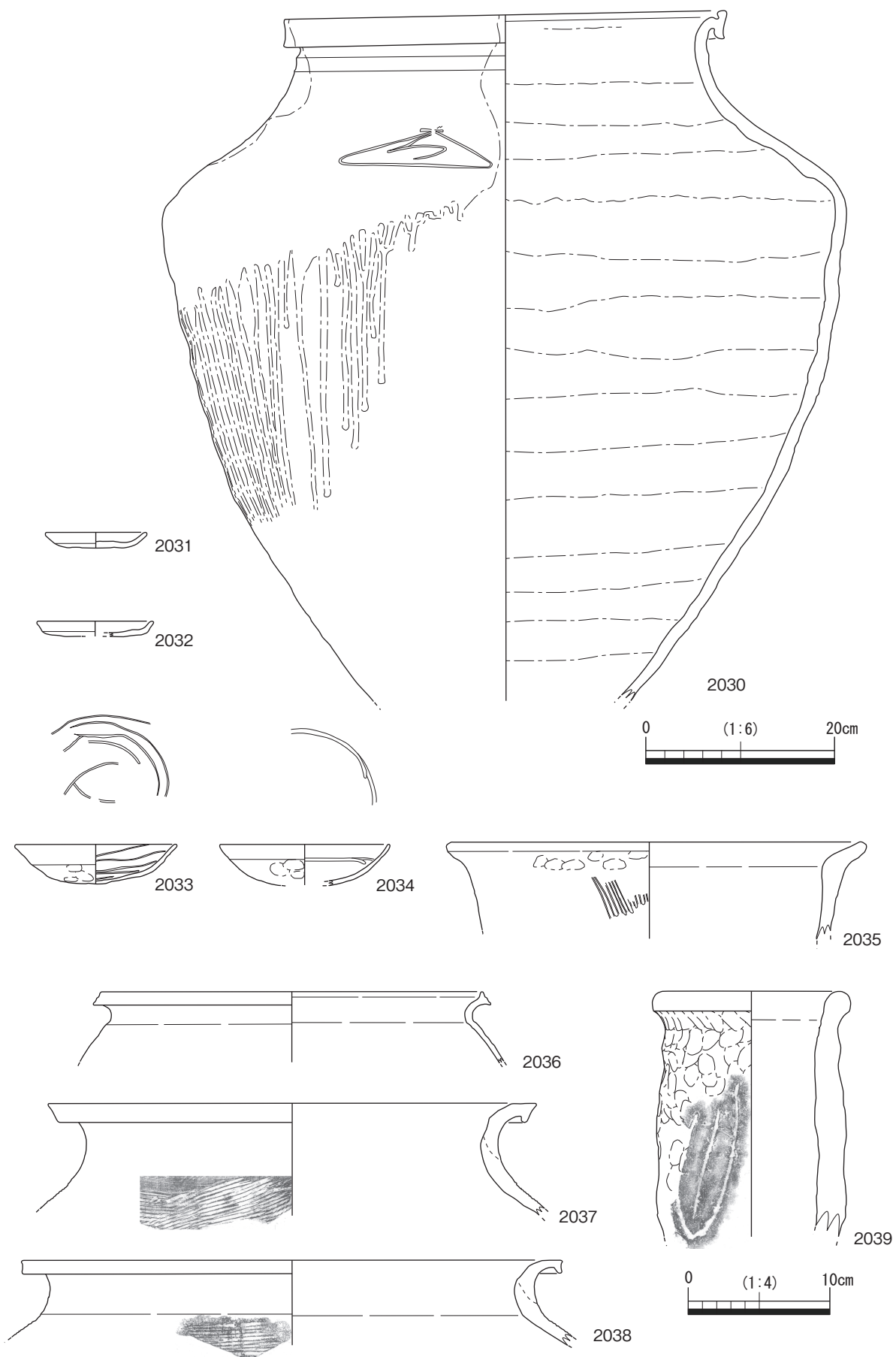


图 70 11 井戸出土遺物 (1)

11 井戸出土遺物 (図 70・71、図版 63)

2030 は常滑の大甕である。11 井戸の井戸枠として検出した。底部及び体部の一部は、打ち欠かれており、井戸枠として利用したものと考えられる。

口縁部は N 字状の形状を呈する。端部は倒れることなく垂直であり、縁部帯は約 3 cm の厚さを測る。肩部はなだらかに張り出しており、その部分には窯印が認められた。

褐色の器面には自然釉がかかっている。粘土紐巻き上げによる成形であり、押印帯は省略されたためか見られなかった。時期は 13 世紀後半と考えられる。

2031・2032 は土師皿である。大甕の内部から出土した。口径は 7.5cm 程度、器高は 1cm 程度であった。褐色系であり、時期は 13 世紀末から 14 世紀初頭のものと考えられる。

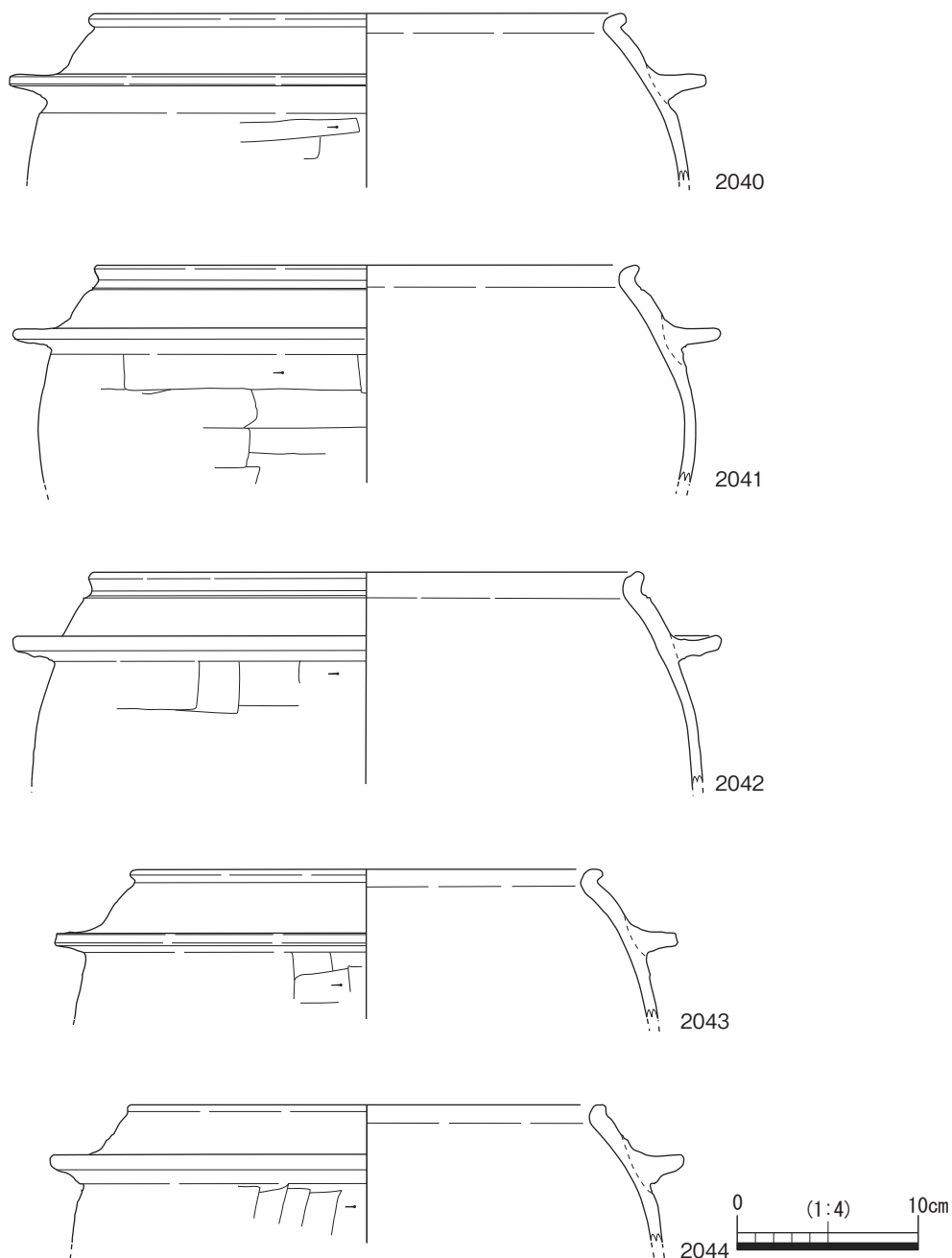


図 71 11 井戸出土遺物 (2)

2033・2034 は和泉型の瓦器碗である。大甕の内部から出土した。口径は 11.5cm 程度、器高は 3cm 前後である。底部には高台を持たなかった。和泉型のIV -3 に該当し、時期は 13 世紀末から 14 世紀初頭のものと考えられる。

2035～2044 は大甕の内部から出土した。2035 は土師器の鉢と思われる。内外面には煤の付着が著しい。2036 は土師器の羽釜と考えられる。2037・2038 は瓦質の甕である。外面はタタキを施す。2039 は土師器の真蛸壺である。外面は指押さえを施し、ヘラ記号が認められた。2040～2044 は土師器の羽釜である。口径は 30cm 程度である。体部外面にはケズリを施す。

1 土坑出土遺物 (図 72)

2045～2047 は瓦器皿である。口径は 8 cm 前後である。2048 は和泉型の瓦器碗である。内面はミガキ、外面は指押さえと横ナデを施す。底部には高台が付く。時期は 13 世紀中頃のものと考えられる。

19 土坑出土遺物 (図 73、図版 64)

比較的完形に近い土師皿や瓦器皿・瓦器碗が出土した。良好な一括資料が得られたと考えられる。

2049～2063 は土師皿である。埋土の下層からの出土である。口径は 7.5cm 程度、器高は 1.5cm 程度であった。底部には指頭圧痕が、口縁部には横ナデが一段施されていた。口縁部は波打つものが多く、稚拙な造りもあった。褐色系であり、時期は 13 世紀末から 14 世紀初頭のものと考えられる。

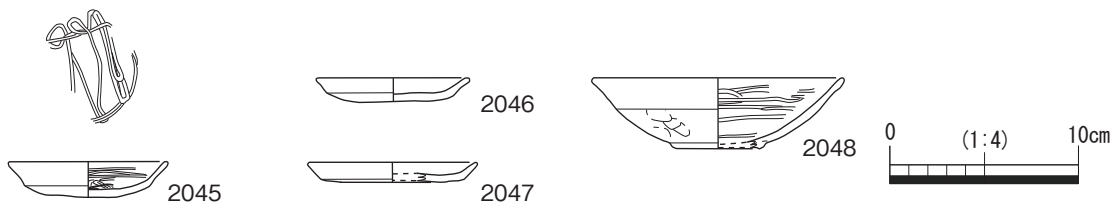


図 72 1 土坑出土遺物

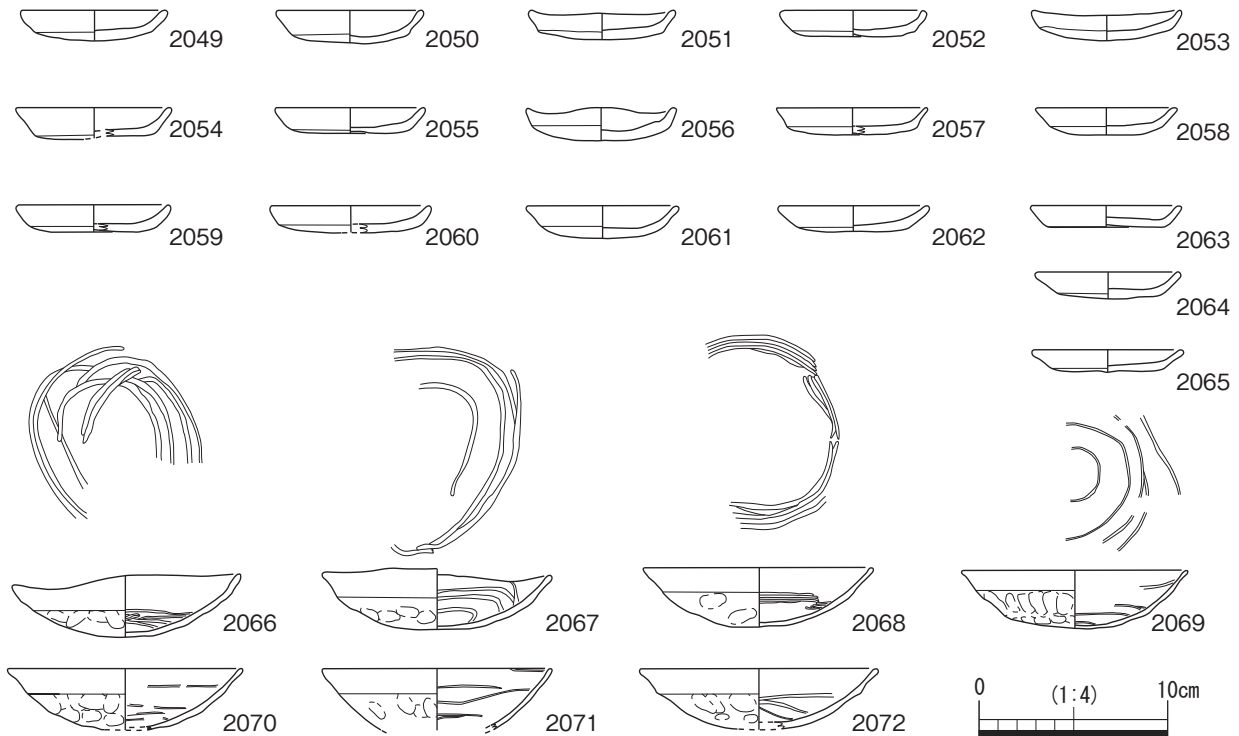


図 73 19 土坑出土遺物

2064・2065 は瓦器皿である。口径は 8 cm 前後である。土師皿と同様の時期と考えられる。

2066～2072 は和泉型の瓦器椀である。口径は 12cm 前後、器高 3cm 前後である。体部内面は渦巻状のミガキを施し、体部外面は指押さえと横ナデを施す。底部には高台を持たなかった。和泉型のIV-3に該当し、時期は 13 世紀末から 14 世紀初頭と考えられる。

13 井戸出土遺物 (図 74)

2073・2074 は瓦器皿である。2075～2083 は和泉型の瓦器椀である。見込部には粗雑な平行ミガキや、螺旋状のミガキを施す。体部内面には渦巻状のミガキを施す。体部外面は指押さえと横ナデを施す。和泉型のIV-1に該当し、時期は 13 世紀中頃と考えられる。

2084 は土師器の羽釜である。13 井戸の井戸枠として検出した。底部は打ち欠かれていたため、井戸枠として利用したものと考えられる。

14 土坑出土遺物 (図 75)

2085～2088 は土師皿である。口径は 8.0cm 程度、器高は 1.5cm 程度である。口縁端部は面取りが施されているものもある。褐色系であり、時期は 13 世紀前半から中頃のものと考えられる。

2089～2090 は瓦器皿である。口径 8 cm 程度である。

2091～2093 は和泉型の瓦器椀である。口径は 15.0cm 程度、器高は 3.5cm 前後である。底部には断面半円形の高台を持つ。時期は 13 世紀中頃のものと考えられる。

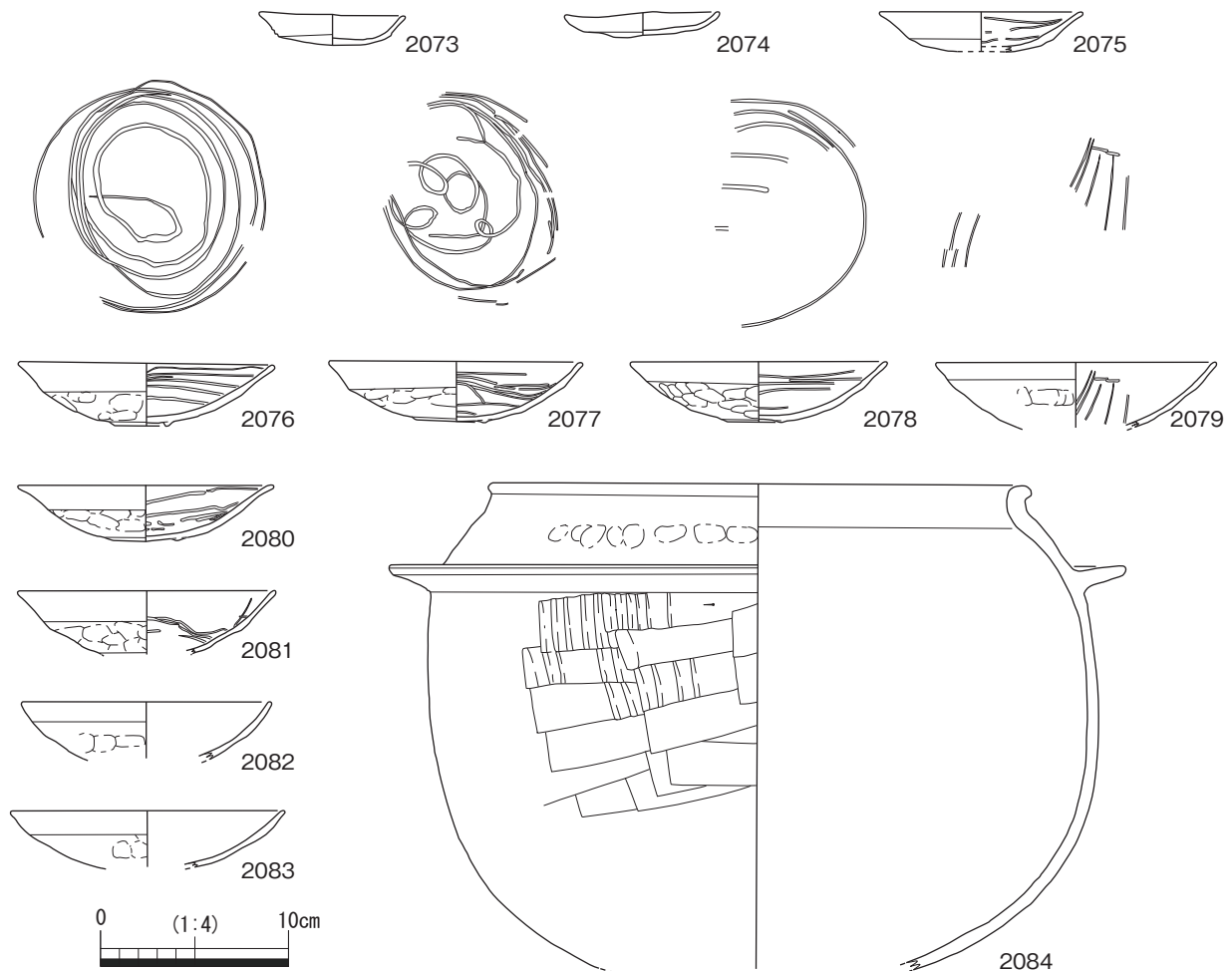


図 74 13 井戸出土遺物

2094 は土師器の羽釜である。体部外面はケズリを施す。

15 土坑出土遺物 (図 76)

2095 ~ 2098 は瓦器碗である。口径は 13cm 程度、器高は 3.5cm 程度である。底部は断面半円形の高台を持つ。時期は 13 世紀後半と考えられる。

10 ピット出土遺物 (図 77、図版 64)

2099 は、東播系須恵器の片口鉢である。時期は 13 世紀初頭と考えられる。

17 溝出土遺物 (図 77、図版 64)

2100 は、弥生土器の無頸壺である。外面には簾状文が施され、体部には波状文が施される。口縁部には 2 孔一対の紐孔が認められた。時期は弥生時代中期、畿内第Ⅲ様式と考えられる。

18 溝出土遺物 (図 77、図版 64)

2101 は、弥生土器の広口壺である。口縁部から頸部まで残存していた。頸部外面には櫛描文の一部と考えられる沈線状のものが一条認められる。内面には刷毛目が施される。時期は弥生時代中期、畿内第Ⅱ様式でも古い様相を示すものと考えられる。

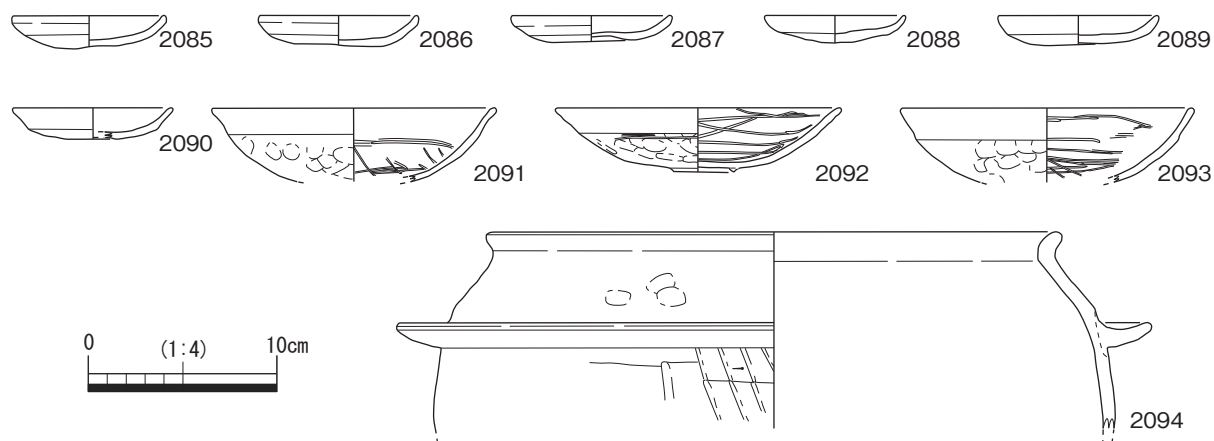


図 75 14 井戸出土遺物

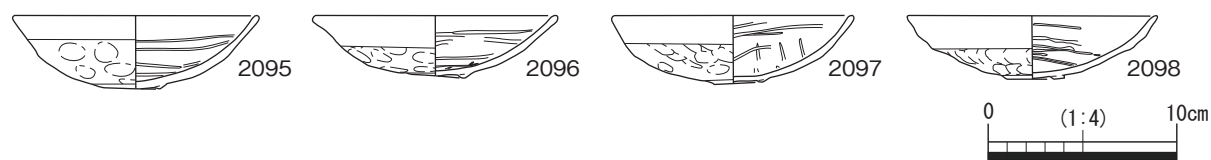


図 76 15 土坑出土遺物

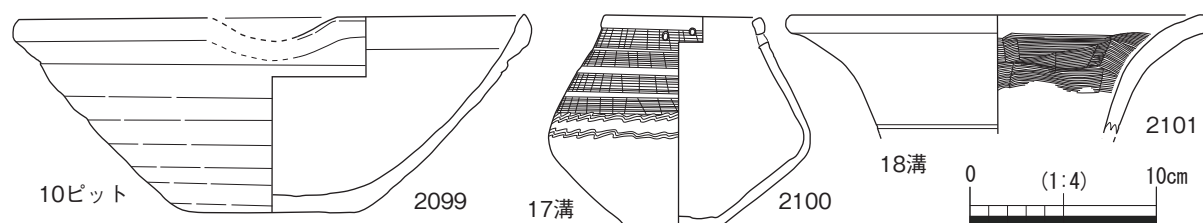


図 77 10 ピット・17 溝・18 溝出土遺物

第4節 小結

今回の調査では、第1面から第3面まで、合計3面にて遺構検出をおこなった。当遺跡は羽衣砂丘に立地することもあり、風などの作用により砂が動いて当時の生活面が錯綜しているためか、遺構面の検出や認識が難しかった。実際、第1面では十分に検出することはできず、次の第2面で検出した遺構もあったことから、第1面のベースにあたる第3層中には複数の遺構面が存在したことが想定される。

検出した遺構は、大きく中世と弥生時代の二時期に分かれる。それぞれの遺構面のうち、中世遺構面としては第1面と第2面が該当し、第1面の時期は13世紀中頃から14世紀初頭、また、第2面の時期は基本的には13世紀前半から中頃までと位置付けられた。弥生時代の遺構面としては第3面が該当し、弥生時代中期と考えられる。

第1面では井戸・土坑・ピットを検出した。13世紀中頃と考えられる1土坑や13世紀後半の7井戸、13世紀末から14世紀初頭と考えられる11井戸や19土坑が主要遺構として挙げられる。また、6土坑や12土坑のように近世と考えられる遺構もあるが、第1面では基本的に13世紀中頃から14世紀初頭の遺構が検出された。

第2面では井戸・土坑・ピットを検出した。13世紀初頭と考えられる10ピットや、13世紀前半から中頃と考えられる14土坑、13世紀中頃の13土坑、13世紀後半の15土坑が主要遺構として挙げられる。遺構には時期幅があり、13世紀後半の遺物が出土する遺構も若干認められるが、基本的には第2面では13世紀前半から中頃までの遺構が検出された。

それぞれ遺構面で検出した遺構は、主に調査区中央部の東側に集中しており、調査区西側は遺構密度が全体的に希薄になることから、過去の調査で検出された集落の、西側縁辺部に位置すると考えられる。従って、今回の調査では、13世紀から14世紀初頭まで営まれたであろう集落の、縁辺部の状況が明らかとなったといえる。

顕著な遺物としては、第1面の19土坑から出土した土師皿・瓦器皿・瓦器碗の良好な一括資料がある。また、同一遺構面の11井戸から井戸枠として検出した13世紀後半と考えられる常滑の大甕があり、畿内においては良好な状態での出土例が少ないことを考えると、貴重なものと思われる。

次に、第3面では土坑・溝を検出した。畿内第Ⅱ様式の遺物が出土した18溝や、畿内第Ⅲ様式の遺物が出土した17溝をはじめ、平成13年度調査区1トレンチの783-0Sの続きに当たる20溝や、弥生時代中期と推定される21土坑が挙げられる。これらの溝は、過去の調査成果や埋土の状況等から検討した結果、方形周溝墓に伴う周溝に該当すると考えられる。

従って今回の調査では、平成13年度調査区も含めると合計3基の方形周溝墓の存在が確認された(図78)。周溝を共有して、近接した状態で方形周溝墓が作られていることから、弥生時代中期には、この周辺の砂堆上には墓域が広がっていた可能性が高い。また、当地の北側には羽衣砂丘遺跡など、弥生時代の集落が隣接している。そして、伽羅橋遺跡・伽羅橋東遺跡ともに弥生時代中期から後期にかけての遺物が出土し、集落と想定されることから、北には集落域が広がり、この付近には墓域が広がっている可能性が高い。

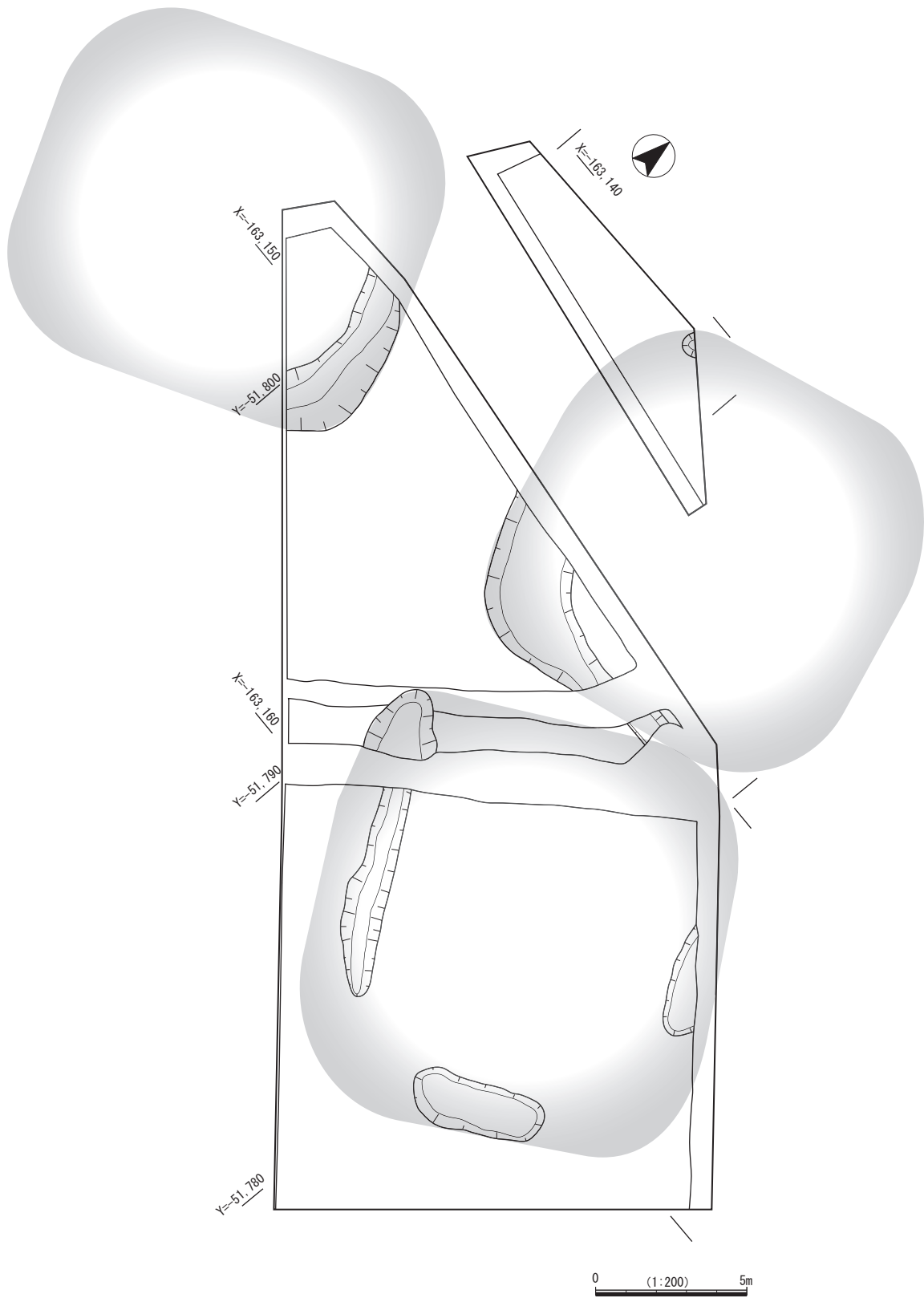


图 78 方形周溝墓配置图

第5章 分析

砥石・根石等の石種と産地同定（図 53～58、図版 45～48）

高石市の芦田川河口に位置する伽羅橋遺跡から出土した石材の石種を肉眼で観察した。石材の石種はアプライト・黒雲母花崗岩 A・黒雲母花崗岩 B・閃緑岩・ヒン岩・流紋岩 A・流紋岩 B・流紋岩 C・流紋岩 D・流紋岩 E・流紋岩 F・流紋岩 G・流紋岩 H・流紋岩質溶結凝灰岩 A・流紋岩質溶結凝灰岩 B・流紋岩質溶結凝灰岩 C・流紋岩質溶結凝灰岩 D・流紋岩質溶結凝灰岩 E・流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩・輝石安山岩・石榴石黒雲母角閃石安山岩・安山岩質火山礫凝灰岩・礫質砂岩 A・礫質砂岩 B・中粒砂岩 A・中粒砂岩 B・中粒砂岩 C・細粒砂岩・泥岩・硅質泥岩 A・硅質泥岩 B・粘板岩・頁岩・チャート・泥岩ホルンフェルス A・泥岩ホルンフェルス B・紅柱石ホルンフェルス・泥質片岩・絹雲母片岩・石墨片岩・緑泥石片岩・玄武岩質凝灰岩質片岩・紅簾石片岩 A・紅簾石片岩 B・泥質点紋片岩 A・泥質点紋片 B である。

遺跡が位置する付近は、和歌の歌枕にも詠まれている様に白砂・青松で有名な「高師浜」で、砂丘が広がり、石ころが見られない場所である。川原石を採石に行くとするれば、近距離では北方の芦田川となり、更に北には石津川があり、南には大津川（槇尾川・松尾川・牛滝川）がある。芦田川や石津川は泉北丘陵や段丘が後背地となっており、大津川の後背地には泉南酸性岩・鍋山火山岩・和泉層群が分布している。現在、芦田川や石津川では河川改修が進み、川原石の石種構成すらも検討できない。遺跡発掘地の石種構成を参考にすしかない。

（1）アプライト：1434

色は灰色で、粒形が垂角である。石英・長石が噛み合っている。石英は灰色透明、粒径 4.0～6.0 mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が 5.0～8.0 mm、量が多い。

このような岩相を示す石は大津川の川原石にも僅かであるがみられる。

（2）黒雲母花崗岩 A：1438・1453

色は淡桃灰色で、粒形は垂角である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が 1.0～6.0 mm、量が多い。長石は淡桃色、粒径が 1.0～6.0 mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状、粒径 1.0～3.0 mm、量が中である。

このような岩相を示す石を見聞していない。採石地不明。

（3）黒雲母花崗岩 B：1454

色は淡桃色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が 2.0～4.0 mm、量が僅かである。長石は桃色と灰白色のものがある。桃色の長石は粒径が 2.0～6.0 mm、量が中である。灰白色の長石は粒径 2.0～8.0 mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状・粒状で、粒径 1.0～2.0 mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は山陽地方に分布する広島型花崗岩の岩相の一部に似ている。採石地としては東灘区御影から芦屋市にかけての付近が推定される。石材名では「御影石」と呼ばれている石である。

（4）閃緑岩：1433

色は灰白色である。長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。長石は灰白色と淡桃色のものがある。灰白色の長石は、粒径が 5.0 ～ 10.0 mm、量が多い。淡桃色の長石は粒径が 5.0 ～ 8.0 mm、量が僅かである。黒雲母は黒色・茶褐色で、板状、粒径 1.0 ～ 3.0 mm、量がごく僅かである。角閃石は黒色、柱状・粒状で、粒径 1.0 ～ 4.0 mm、量が中である。

このような岩相を示す石を見聞していない。採石地不明。

(5) ヒン岩：527

色は灰色で、粒形が垂角である。斑晶鉱物は長石・輝石・カンラン石である。長石は白色、短柱状で、粒径が 0.3 ～ 0.7 mm、量が多い。輝石は黒色、粒状で、粒径が 0.1 ～ 0.2 mm、量が中である。カンラン石は黄土色透明で、粒状、粒径が 0.1 ～ 0.2 mm、量がごく僅かである。石基はガラス質である。このような岩相を示す石を見聞していない。採石地不明。

(6) 流紋岩 A：556

色は淡青灰色で、粒形が垂角である。斑晶鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は無色透明で、粒径が 0.2 ～ 0.3 mm、量が中である。長石は無色透明、短柱状で、粒径が、0.2 ～ 0.5 mm、量の中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が 0.2 ～ 0.3 mm、量の中である。石基はガラス質である。

このような岩相を示す石を見聞していない。採石地不明。

(7) 流紋岩 B：520

色は淡茶灰色である。球状の発泡孔が散在する。孔径が 0.5 ～ 1.5 mm、量の中である。斑晶鉱物は石英と長石である。石英は暗灰色で、粒径が 0.5 ～ 3.0 mm、量が多い。自形のものと同周囲が融蝕されているものがある。長石は灰白色、短柱状で、粒径が 0.2 ～ 0.7 mm、量の中である。石基はガラス質である。

このような岩相を示す石を見聞していない。採石地不明。

(8) 流紋岩 C：1393

色は黄土色で、粒形が垂角である。基質はガラス質である。石英は無色透明で、粒径が 0.3 ～ 0.7 mm、量ごく僅かである。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、短柱状で、粒径が 0.2 ～ 0.4 mm、量ごく僅かである。石基はガラス質である。

このような岩相を示す石を見聞していない。採石地不明。

(9) 流紋岩 D：521・523・525

色は淡茶灰色である。球状の発泡孔が散在する。孔径が 0.5 ～ 1.0 mm、量が僅かである。斑晶鉱物は石英と長石である。石英は無色透明で、粒径が 0.3 ～ 0.5 mm、量ごく僅かである。長石は白色、短柱状・柱状で、粒径が 0.3 ～ 2.0 mm、量が多い。石基はガラス質である。

このような岩相を示す石を見聞していない。採石地不明。

(10) 流紋岩 E：1443

色は淡青灰色である。斑晶鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は無色透明で、粒径が 0.5 ～ 6.0 mm、量が多い。長石は灰白色で、粒径が 0.5 ～ 5.0 mm、量の中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が 0.5 ～ 3.0 mm、量ごく僅かである。石基はガラス質である。

このような岩相を示す石は泉南酸性岩の岩相の一部に似ている。

(11) 流紋岩 F：1429

色は黄灰色である。斑晶鉱物は石英・長石である。石英は無色透明で、粒径が 0.2 ～ 0.3 mm、

量が中である。長石は灰白色、短柱状で、粒径が0.2～0.3 mm、量が中である。石基はガラス質である。このような岩相を示す石を見聞していない。採石地不明。

(12) 流紋岩 G : 1439

色は暗灰色で、粒形が垂角である。斑晶鉱物は石英と長石である。石英は無色透明で、粒径が0.1～0.4 mm、量が多い。長石は灰白色透明、短柱状で、粒径が0.3～0.4 mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.2～0.3 mm、量が僅かである。石基はガラス質である。

このような岩相を示す石を見聞していない。採石地不明。

(13) 流紋岩 H : 1445

色は灰白色で、粒形が垂角である。ガラス質である。

このような岩相を示す石は泉南酸性岩や和泉層群の礫岩中の礫の岩相の一部に似ている。採石地としては大津川の川原が推定される。

(14) 流紋岩質溶結凝灰岩 A : 543・1399

色は暗灰色で、粒形が垂角である。板状節理があり、溶結がみられる。斑晶鉱物は石英と長石である。石英は灰色で、粒形が角、粒径が0.5～3.0 mm、量が多い。粒形が大ききものは円くて砕けているものが多く、細粒のものは複六角錐あるいはその一部が認められているものが多い。長石は灰白色で、粒形が角・垂角、粒径が0.5～3.0 mm、量が多い。砕けて割れているものが多い。基質はガラス質である。

このような岩相を示す石は、泉南酸性岩の岩相の一部に、あるいは和泉層群の礫岩中の礫の一部に似ている。採石地としては大津川が推定される。

(15) 流紋岩質溶結凝灰岩 B : 1389

色は灰色で、粒形が垂角である。溶結がみられる。孔が散在する。孔形が球状で、孔径が0.5～1.5 mm、量が中である。黒色の物質が不定形なレンズ状をなして延びている。斑晶をなす長石は灰白色で、粒形が角、粒径が0.1～0.3 mm、量が多い。砕けて割れているものが多い。基質はガラス質である。

このような岩相を示す石は泉南酸性岩の岩相の一部に、あるいは和泉層群の礫岩中の礫の一部に似ている。採石地としては大津川が推定される。

(16) 流紋岩質溶結凝灰岩 C : 1390

色は淡灰褐色で、粒形が垂角である。溶結がみられる。捕獲晶は石英・瑪瑙である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.5～2.0 mm、量がごく僅かである。瑪瑙は乳白色、粒形が垂円、粒径が0.5～1.5 mm、量はごく僅かである。斑晶をなす長石は灰白色で、粒形が角、粒径が0.1～0.3 mm、量が多い。砕けて割れているものが多い。基質はガラス質である。

このような岩相を示す石は、泉南酸性岩の岩相の一部に、あるいは和泉層群の礫岩中の礫の一部に似ている。採石地としては大津川が推定される。

(17) 流紋岩質溶結凝灰岩 D : 524・526・1394

色は黄土色で、粒形が垂円である。溶結がみられる。斑晶鉱物は石英と長石である。石英は灰色で、粒形が垂角・垂円である。粒径が0.1～2.0 mm、量が多い。粒径が大ききものは円くて砕けているものが多く、細粒のものは複六角錐あるいはその一部が認められているものが多い。長石は灰白色で、粒形が垂角、粒径が0.2～0.4 mm、量が中である。砕けて割れているものが多い。

基質はガラス質である。

このような岩相を示す石は、泉南酸性岩の岩相の一部に、あるいは和泉層群の礫岩中の礫の一部に似ている。採石地としては大津川が推定される。

(18) 流紋岩質溶結凝灰岩 E : 1450

色は灰白色で、粒形が亜角である。溶結がみられる。斑晶鉱物は石英と長石である。石英は灰色で、粒径が 1.5 ~ 3.0 mm、量が多い。長石は灰白色で、粒径が 0.5 ~ 2.0 mm、量が僅かである。基質はガラス質である。

このような岩相を示す石は、泉南酸性岩の岩相の一部に、あるいは和泉層群の礫岩中の礫の一部に似ている。採石地としては大津川が推定される。

(19) 流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩 : 528・531・1430・1431・1449

色は淡赤褐色で、粒形が亜角・亜円である。溶結がみられる。構成粒は流紋岩・石英・長石・黒雲母である。流紋岩は粒形が亜角・亜円、粒径が 2.0 ~ 8.0 mm、量が僅か、石基はガラス質である。石英は無色透明・褐色透明で、粒径が 0.5 ~ 1.5 mm、量が多い。長石は灰白色で、短柱状で、粒径が 0.3 ~ 0.7 mm、量が僅かである。黒雲母は金色、板状で、粒径が 0.5 mm、量がごくごく僅かである。基質はガラス質である。

このような岩相を示す石は、泉南酸性岩の岩相の一部に、あるいは和泉層群の礫岩中の礫の一部に似ている。採石地としては大津川が推定される。

(20) 輝石安山岩 : 522・529・1396・1432・1446

色は灰色で、粒形が亜角である。斑晶鉱物は長石と輝石である。長石は無色透明、粒径が 0.1 ~ 0.2 mm、量がごくごく僅かである。輝石は青銅色透明で、柱状・短柱状をなし、粒径が 0.2 ~ 0.7 mm、量が中である。石基はガラス質である。

このような岩相を示す石は、大津川の上流付近に分布する鍋山火山岩などの岩相の一部に似ている。採石地としては大津川が推定される。

(21) 石榴石黒雲母角閃石安山岩 : 1448

色は黄土色である。斑晶鉱物は長石・黒雲母・角閃石・石榴石である。長石は無色透明、粒径が 0.3 ~ 1.0 mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が 0.5 ~ 1.5 mm、量が中である。角閃石は黒色、柱状で、粒径が 0.5 ~ 2.0 mm、量が僅かである。石榴石は赤褐色で、粒径が 0.5 mm、量がごくごく僅かである。石基はややガラス質である。

このような岩相を示す石は讃岐の雨山に分布する石榴石黒雲母角閃石安山岩の岩相の一部に似ている。この石種は柏原市の安福寺の石棺や松岳山古墳の石棺材の一部などにみられる。

(22) 安山岩質火山礫凝灰岩 : 1437

色は褐色である。構成粒種は花崗岩・安山岩・軽石である。花崗岩は灰色、粒形が角、粒径が 3.0 ~ 5.0 mm、量がごくごく僅かである。安山岩は暗灰色と褐色のものがある。暗灰色の安山岩は粒形が亜角、粒径が 1.0 ~ 6.0 mm、量が多い。石基がガラス質である。褐色の安山岩は、粒形が亜角、粒径が 2.0 ~ 10.0 mm、量が中、石基がガラス質である。軽石は茶灰色、粒形が亜角、粒径が 1.0 ~ 5.0 mm、量が中である。

このような岩相を示す石は香川県の豊島に分布する安山岩質火山礫凝灰岩の岩相の一部に似ている。中世から現在まで讃岐・吉備・播磨では多くの石造物に使われている石である。石材とし

ては「豊島石」と呼ばれている石である。

(23) 礫質砂岩 A : 1403・1427・1451

色は茶褐色で、粒形が垂円である。構成粒種は流紋岩・泥岩・石英・長石である。流紋岩は暗灰色・褐色・茶褐色・茶色で、粒形が垂角、粒径が 0.5 ～ 5.0 mm、量が非常に多く、石基がガラス質である。泥岩は黒色、粒形が垂円、粒径 1.0 ～ 6.0 mm、量のごくごく僅かである。石英は無色透明、粒形が角、粒径が 0.2 ～ 0.7 mm、量が僅かである。複六角錐あるいはその一部が認められるものが中である。長石は灰白色、粒形が角、粒径が 0.2 ～ 1.5 mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は和泉層群の砂岩の岩相の一部に似ている。採石地としては大津川の川原が推定される。

(24) 礫質砂岩 B : 1441

色は灰色で、粒形が垂円である。構成粒種は流紋岩・石英・長石である。流紋岩は灰白色・赤褐色・茶褐色・黒色で、粒形が垂角・垂円、粒径が 0.1 ～ 8.0 mm、量が非常に多く、石基がガラス質である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が 0.3 ～ 0.4 mm、量のごくごく僅かである。複六角錐あるいはその一部が認められるものが中である。長石は灰白色、粒形が角、粒径が 0.3 ～ 0.4 mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は和泉層群の砂岩の岩相の一部に似ている。採石地としては大津川の川原が推定される。

(25) 中粒砂岩 A : 532・1397

色は灰色で、粒形が円である。構成粒種は流紋岩・石英・長石である。流紋岩は灰色、粒形が垂角、粒径が 0.3 ～ 0.5 mm、量のごく僅かで、石基がガラス質である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が 0.2 ～ 0.3 mm、量が非常に多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものが僅かである。長石は灰白色、粒形が角、粒径が 0.2 ～ 0.3 mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は和泉層群の砂岩の岩相の一部に似ている。採石地としては大津川の川原が推定される。

(26) 中粒砂岩 B : 542

色は茶褐色で、板状節理がある。構成粒種は花崗岩・流紋岩・石英・長石・角閃石である。花崗岩は灰色、粒形が垂角、粒径が 0.3 ～ 0.5 mm、量のごく僅かである。石英と長石がかみ合っている。流紋岩は灰色、粒形が垂角、粒径が 0.3 ～ 0.5 mm、量が僅かである。石英の斑晶がみられる。石英は無色透明、粒形が角、粒径が 0.2 ～ 0.4 mm、量が中である。長石は白色、粒形が角、粒径が 0.2 ～ 0.3 mm、量が中である。角閃石は黒色、粒形が角、粒径が 0.2 ～ 0.3 mm、量のごく僅かである。

このような岩相を示す石は和泉層群の砂岩の岩相の一部に似ている。採石地としては大津川の川原が推定される。

(27) 中粒砂岩 C : 530・533 ～ 538・541・544 ～ 555・557・559 ～ 564・1400 ～ 1402・1404 ～ 1407・1426・1428・1436・1440・1442・1444・1447・1452

色は灰色で、粒形が垂角・垂円である。構成粒種は流紋岩・石英・長石である。流紋岩は灰色・白色、粒形が垂角、粒径が 0.3 ～ 1.0 mm、量が中、石基がガラス質である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が 0.1 ～ 0.7 mm、量が中である。複六角錐あるいはその一部が認められるものが中

である。長石は灰白色、粒形が角、粒径が 0.2 ～ 0.5 mm、量が多い。

このような岩相を示す石は和泉層群の砂岩の岩相の一部に似ている。採石地としては大津川の川原が推定される。

(28) 細粒砂岩：1398

色は暗灰色である。やや変質している。構成粒は石英・長石である。石英は無色透明、粒形が亜角、粒径が 0.1 ～ 0.2 mm、量が非常に多い。長石は灰色、粒形が亜角、粒径が 0.1 ～ 0.2 mm、量がごく僅かである。

このような岩相を示す石を見聞していない。採石地不明。

(29) 泥岩：1408・1409

色は褐色で、粒形が円である。穿孔貝による穿孔の痕がみられる。泥岩には微粒の白雲母がごく僅かにみられる。

このような岩相を示す石は秩父帯や四万十帯の地層にみられる泥岩の一部に似ている。穿孔貝の痕跡があることから、海岸の石と推定される。採石地としては紀伊湯浅から白浜にかけての付近、あるいは小松島から阿南にかけての付近の海岸が推定される。

(30) 珪質泥岩 A：516

色は黒色で、片理や層理がみられない。粒径が 0.05 mm で、無色透明の石英の粒が非常に多い。

このような岩相を示す石は大阪府の南部に分布する和泉層群の泥岩の岩相の一部に似ている。原石の形状が不明である為に露岩を採石されたのか、大津川の川原石を採石されたのか判断し難い。

(31) 珪質泥岩 B：566

色は灰色で、片理が顕著である。片理方向に黒色板状の粒が並ぶ。また、白色球状の粒があり、片理と関係なく散在する。粒径が 1.0 ～ 6.0 mm である。基質は緻密である。

このような岩相を示す石は、チャート層の上面に分布する珪質泥岩の岩相の一部に似ている。京都市西部のチャート層が分布する付近にも同じような岩相の石が見られる。

(32) 粘板岩：565

色は黄土色で、やや片理が見られ、緻密な石である。微粒の白雲母がある。白雲母は無色透明、板状で、粒径が 0.01 ～ 0.02 mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は、京都市西部の鳴滝付近に分布する粘板岩の岩相の一部に似ている。アジノール板石とも呼ばれており、少し風化して柔らかくなった部分は、「鳴滝砥石」として採掘されていた。床屋や料理屋などで剃刀のような鋭利な刃を付ける為の仕上げ砥石に使用されていた石である。

(33) 頁岩：1410

色は黒色で、微かに片理がみられる。微粒の石英と長石が僅かにみられる。

このような岩相を示す石は、丹波から美濃にかけて分布する中生層の泥岩の岩相の一部に似ている。採石地不明。

(34) チャート：1435

色は青灰色で、粒形が亜角である。白い縞模様がみられる。

このような岩相を示す石は段丘礫層の礫、和泉地方の川原石にみられる。採石地を限定できな

い。

(35) 泥岩ホルンフェルス A : 518・519・1391・1392

色は暗灰色・灰色で、片理が見られ、粒状である。構成鉱物は石英・長石・黒雲母・白雲母で、粒径が 0.05 mm である。石英は無色透明、量が多い。長石は無色透明、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、量が中である。絹雲母は無色透明、板状で、量が多い。

このような岩相を示す石は亀岡市・笠置町・茨木市などの火成岩の貫入付近に分布するホルンフェルスの岩相の一部に似ている。原石の形状が不明の為、露岩を採石されたのか川原石を採石されたのか判断し難い。

(36) 泥岩ホルンフェルス B : 1416

色は暗灰色で、粒形が垂角である。片理が顕著である。構成鉱物は石英・長石・黒雲母・角閃石である。石英と長石は無色透明、粒径が 0.1 mm、量が多い。黒雲母は黒色・褐色で、粒径が 0.1 mm、量が多い。板状面が片理の方向に並ぶ。角閃石は黒色、粒形が角、柱状で、粒径が 0.3 mm、量のごくごく僅かである。

このような岩相を示す石は亀岡市・笠置町・茨木市などの火成岩の貫入付近に分布するホルンフェルスの岩相の一部に似ている。川原石様であることから淀川付近で採石されたと推定される。

(37) 紅柱石ホルンフェルス : 558

色は灰色で、粒形が円である。片理が見られる。構成鉱物は堇青石・紅柱石・黒雲母である。堇青石は茶褐色、方形で、粒径が 1.0 ~ 5.0 mm、量のごく僅かである。紅柱石は灰白色、粒径が 0.5 ~ 7.0 mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が 0.1 mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は亀岡市・笠置町・茨木市などの火成岩の貫入付近に分布するホルンフェルスの岩相の一部に似ている。川原石を採石されたと推定され、採石地としては淀川の川原が推定される。

(38) 泥質片岩 : 1411

色は茶褐色で、片理が顕著である。このような岩相を示す石は紀ノ川や吉野川の流域に広く分布する泥質片岩の岩相の一部に似ている。

(39) 絹雲母片岩 : 1412

色は灰緑色で、粒形が垂円である。片理が顕著である。構成鉱物は絹雲母・長石である。絹雲母は無色透明、板状で、粒径が 0.1 ~ 0.2 mm、量が多い。長石は無色透明、粒状で、粒径が 0.1 ~ 0.2 mm、量が多い。

このような岩相を示す石は紀ノ川や吉野川の流域に広く分布する絹雲母片岩の岩相の一部に似ている。近距離とすれば、採石地として紀ノ川の川原が推定される。

(40) 石墨片岩 : 1417・1422

色は黒色である。片理が顕著である。構成鉱物は石墨と白雲母である。石墨は黒色、針状で、粒径が 0.5 ~ 0.8 mm、量が多い。白雲母は無色透明、板状で、粒径が 0.2 ~ 0.3 mm、量が中である。

このような岩相を示す石は紀ノ川や吉野川の流域に広く分布する石墨片岩の岩相の一部に似ている。近距離とすれば、採石地として紀ノ川流域が推定される。

(41) 緑泥石片岩 : 1413・1419 ~ 1421

色は暗緑色である。片理が顕著である。構成鉱物は緑泥石・長石である。緑泥石は暗緑色、レンズ状・糸状で、粒径が0.5～0.7 mm、量が僅かである。長石は無色透明、球状で、粒径が0.2～0.3 mm、量が多い。

このような岩相を示す石は紀ノ川や吉野川の流域に広く分布する緑泥石片岩の点紋ができかけた岩相の一部に似ている。近距離とすれば、採石地として紀ノ川の川原が推定される。

(42) 玄武岩質凝灰岩質片岩：1414・1423～1425

色は灰緑色で、片理が顕著である。斑晶をなす輝石は黒色、柱状で、粒径が0.1 mm、量がごく僅かである。

このような岩相を示す石は紀ノ川や吉野川の流域に広く分布する玄武岩質凝灰岩質片岩の岩相の一部に似ている。近距離とすれば、採石地として紀ノ川の川原が推定される。

(43) 紅簾石片岩A：1415

色は灰緑色で、片理が顕著である。構成鉱物は長石・緑泥石・紅簾石である。長石は無色透明、球状で、粒径が0.2～0.3 mm、量が多い。緑泥石は濃緑色、針状で、粒径が0.5～1.0 mm、量が多い。紅簾石は濃赤色、柱状で、粒径が0.5～0.7 mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は、紀ノ川や吉野川の流域に見られる石である。原石の形状が不明であるため、露岩を採石されたのか、川原石を採石されたのか判断し難い。

(44) 紅簾石片岩B：539

色は暗赤紫色で、片理が顕著である。構成鉱物は長石・白雲母・紅簾石である。長石は無色透明、柱状で、粒径が0.7～1.0 mm、量がごく僅かである。白雲母は無色透明、板状で、粒径が0.2～0.3 mm、量が僅かである。白雲母の板状面は片理に平行している。紅簾石は濃赤色、粒状・柱状で、粒径が0.2～1.0 mm、量の中である。

このような岩相を示す石は、徳島市の眉山などに見られる石である。原石の形状が不明であるため、露岩を採石されたのか、川原石を採石されたのか判断し難い。

(45) 泥質点紋片岩A：517

色は黒色で、片理が顕著である。節理面があり、片理面と節理面とは斜交している。長石は白色、球状の斑晶で、粒径が0.1～0.3 mm、量の中である。白雲母は無色透明、板状で、粒径が0.05 mm、量の中である。白雲母の板状面は片理に平行している。

このような岩相を示す石は、和歌山市の紀ノ川流域や徳島市の吉野川の川原に多く見られる石である。原石の形状が不明であるため、露岩を採石されたのか、川原石を採石されたのか判断し難い。

(46) 泥質点紋片岩B：1418

色は暗緑色で、片理が顕著である。構成鉱物は石墨・長石・絹雲母である。石墨は黒色、針状で、粒径が0.5～1.0 mm、量が多い。長石は灰白色、球状の斑晶で、粒径が0.5～1.5 mm、量が多い。白雲母は無色透明、板状で、粒径が0.3～0.5 mm、量の中である。白雲母の板状面は片理に平行している。

このような岩相を示す石は、和歌山市の紀ノ川流域や徳島市の吉野川の川原に多く見られる石である。原石の形状が不明であるため、露岩を採石されたのか、川原石を採石されたのか判断し難い。

第6章 まとめ

第1節 遺物からみた伽羅橋遺跡

伽羅橋遺跡は今回の報告分を含め4次にわたる調査をセンターが行ったが、それらで出土した遺物について、特徴などを以下に述べる。

縄文時代の遺物では平成12年度調査で石鏃が出土しているのみである。

弥生時代では、平成13年度と16年度調査で方形周溝墓状の遺構が検出され、その遺構からは中期の供献と目される土器群が出土した。他地域からの搬入土器には角閃石を含んだ河内のものが認められた。石器では平成11年度調査で緑泥片岩の石包丁が、平成12年度調査ではサヌカイトのスクレーパーが、平成13年度調査ではサヌカイト剥片が出土した。

古墳時代の遺物は少量出土しており、須恵器の蛸壺が目立つが、初期須恵器の甕、平成11年度調査により出土した滑石製双孔円盤1点などがある。

古代の遺物では、ごく少量の奈良時代遺物のほかに、平成12年度調査において土坑やピットから少量の平安時代の黒色土器が出土した。

中世の遺物では瓦器椀、土師質土器、土師器小皿、瓦質土器、須恵質土器、国産陶磁器、輸入陶磁器、土錘等多くの遺物が出土した。時期は12世紀後半から13世紀半ばと13世紀終わり頃から14世紀初め頃の遺物が比較的纏って出土した。12～14世紀初め頃の遺物はピット、井戸、土坑などからの出土である。井戸枠には土師質の羽釜を転用した例が多い。14世紀後半～16世紀の遺物は、東は平成12年度調査の大畦畔西側溝から、西は平成13年度調査の657・727-OSにいたる間の731-OLを除き、土坑からの出土が目立つ。平成11年度調査の溝13と平成13年度調査の860-OSは同一遺構であり、出土遺物は近世まで含むが、主体は14・15世紀のものである。この遺構からは寺に関わりがあるとされる遺物組成の合子、火舎、瓦などが出土した。

このほか、中世遺物では石鍋が平成11年度調査では2点、平成12年度調査では5点、平成13年度調査では1点の合計8点出土しているが、平成11年度調査の2点を除き、細片が多い。

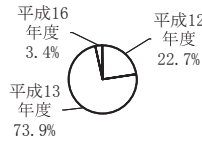
伽羅橋遺跡出土遺物の特徴として、上記以外では被熱した瓦や瓦器があることと、鑄造関連かと思われる焼土塊などが、ごく僅かに出土している点あげられる。

次に、調査年度別に出土遺物破片数の割合を出してみたのが図79である。平成11・12・13・16年度調査のうち、破片数のわかる平成12・13・16年度調査における出土遺物破片数を合計し、それらの割合を年度別に円グラフに表してみた。平成13年度調査の出土遺物量が多いことがわかる。但し、平成11年度調査で出土した遺物量はコンテナ数にして400箱出土していることから、調査年度の中では最も多く出土していることになる。内訳は詳細不明であるが、大部分が瓦である点で、他年度調査とは少し異なる。

出土遺物の種類別組成では、伽羅橋遺跡の平成12・13年度調査分については、接合前に全破片数を数えており、グラフ化している。平成16年度調査分については、報告書掲載遺物のみ接合作業を終了した後に破片数を数えている。各年度ともに中世遺物が大部分を占める。破片数の

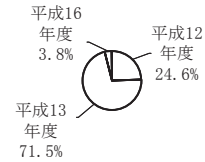
調査年度別遺物	
調査年度	破片数
平成12年度	13851
平成13年度	45055
平成16年度	2100
合計	61006

調査年度別遺物割合
(合計61006片)



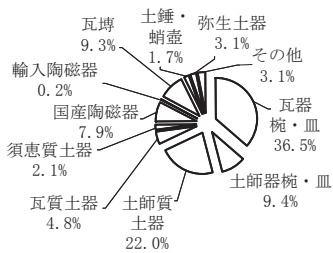
調査年度別中世土器	
調査年度	破片数
平成12年度	11632
平成13年度	33749
平成16年度	1811
合計	47192

調査年度別中世土器割合
(合計47192片)



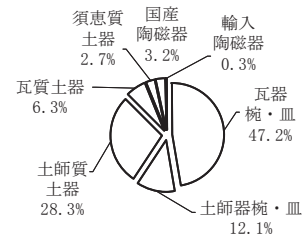
平成12・13・16年度調査出土遺物	
種類	破片数
瓦器椀・皿	22266
土師器椀・皿	5714
土師質土器	13403
瓦質土器	2954
須恵質土器	1263
国産陶磁器	4795
輸入陶磁器	119
瓦埴	5660
土鍾・蛸壺	1018
弥生土器	1918
その他	1894
合計	61006

平成12・13・16年度調査出土遺物 (合計61006片)



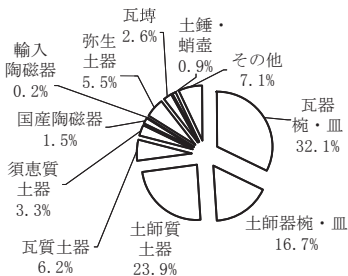
平成12・13・16年度調査出土中世土器	
種類	破片数
瓦器椀・皿	22266
土師器椀・皿	5714
土師質土器	13361
瓦質土器	2954
須恵質土器	1263
国産陶磁器	1515
輸入陶磁器	119
合計	47192

平成12・13・16年度調査出土中世土器 (合計47192片)



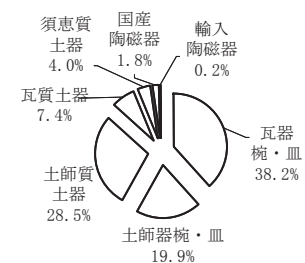
平成12年度調査出土遺物	
種類	破片数
瓦器椀・皿	4446
土師器椀・皿	2318
土師質土器	3310
瓦質土器	855
須恵質土器	460
国産陶磁器	214
輸入陶磁器	29
瓦埴	361
土鍾・蛸壺	122
弥生土器	755
その他	981
合計	13851

平成12年度調査出土遺物 (合計13851片)



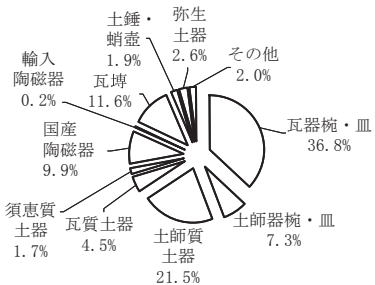
平成12年度調査出土中世土器	
種類	破片数
瓦器椀・皿	4446
土師器椀・皿	2318
土師質土器	3310
瓦質土器	855
須恵質土器	460
国産陶磁器	214
輸入陶磁器	29
合計	11632

平成12年度調査出土中世土器 (合計11632片)



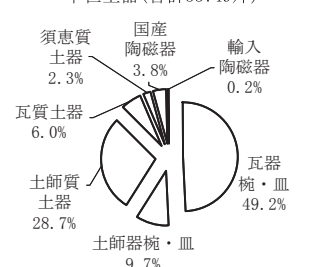
平成13年度調査出土遺物	
種類	破片数
瓦器椀・皿	16600
土師器椀・皿	3288
土師質土器	9681
瓦質土器	2033
須恵質土器	775
国産陶磁器	4452
輸入陶磁器	83
瓦埴	5227
土鍾・蛸壺	872
弥生土器	1151
その他	893
合計	45055

平成13年度調査出土遺物 (合計45055片)



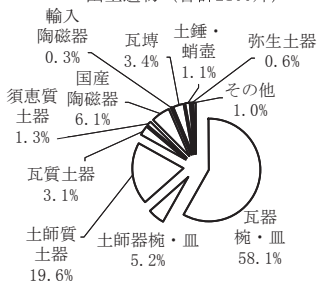
平成13年度調査出土中世土器	
種類	破片数
瓦器椀・皿	16600
土師器椀・皿	3288
土師質土器	9681
瓦質土器	2033
須恵質土器	775
国産陶磁器	1289
輸入陶磁器	83
合計	33749

平成13年度調査出土中世土器 (合計33749片)



平成16年度調査出土遺物	
種類	破片数
瓦器椀・皿	1220
土師器椀・皿	110
土師質土器	412
瓦質土器	66
須恵質土器	28
国産陶磁器	129
輸入陶磁器	7
瓦埴	72
土鍾・蛸壺	24
弥生土器	12
その他	20
合計	2100

平成16年度調査出土遺物 (合計2100片)



平成16年度調査出土中世土器	
種類	破片数
瓦器椀・皿	1220
土師器椀・皿	108
土師質土器	370
瓦質土器	66
須恵質土器	28
国産陶磁器	12
輸入陶磁器	7
合計	1811

平成16年度調査出土中世土器 (合計1811片)

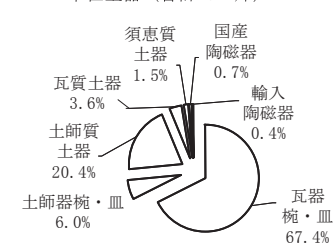


図 79 伽羅橋遺跡出土遺物割合

多いものから瓦器、土師質土器であり、次いで平成 13 年度の瓦罫を除くと、土師器が多い。

遺物組成の割合は 12 世紀から 16 世紀まで（土師質土器、国産陶磁器において、他の時代のもの若干含んでいる可能性はある）に限り、土器破片数で割合をみている。伽羅橋遺跡では、調査年度によって異なるが、瓦器碗・皿が最も割合が高く、平成 12 年度調査では 4 割弱、平成 13 年度調査では 5 割弱、平成 16 年度調査では 7 割弱を占める。食器である瓦器碗・小皿、土師器碗・小皿は、平成 12・13 年度調査では 6 割弱、平成 16 年度調査では 7 割強を占める。調理用容器は約 3 割であるが、井戸枳転用の土師質羽釜を含む。国産陶磁器の割合は平成 13 年度調査では須恵質土器よりも高いが、他年度では須恵質土器の方が割合が高い。輸入陶磁器は全体の割合からみれば、ごく少量である。

他地域の瓦器、土師器は殆ど見られず、在地の土器が殆どである。楠葉型瓦器碗が平成 12・13 年度調査で合計 3 点、平成 13 年度調査で吉備系土師器碗が 1 点みられる程度である。国産陶磁器では、常滑の甕が多く出土しているが、大半は体部破片であり、その他僅かに鉢口縁部もある。東海系の捏鉢体部破片は平成 13 年度調査で 1 片、山茶碗の破片が平成 12・13 年度調査で合計 3 片出土している。備前焼の播鉢は 14 世紀中葉以降のものがみられ、15 世紀代のものが多い。国産陶磁器は平成 13 年度調査では 860-OS から多く出土している。

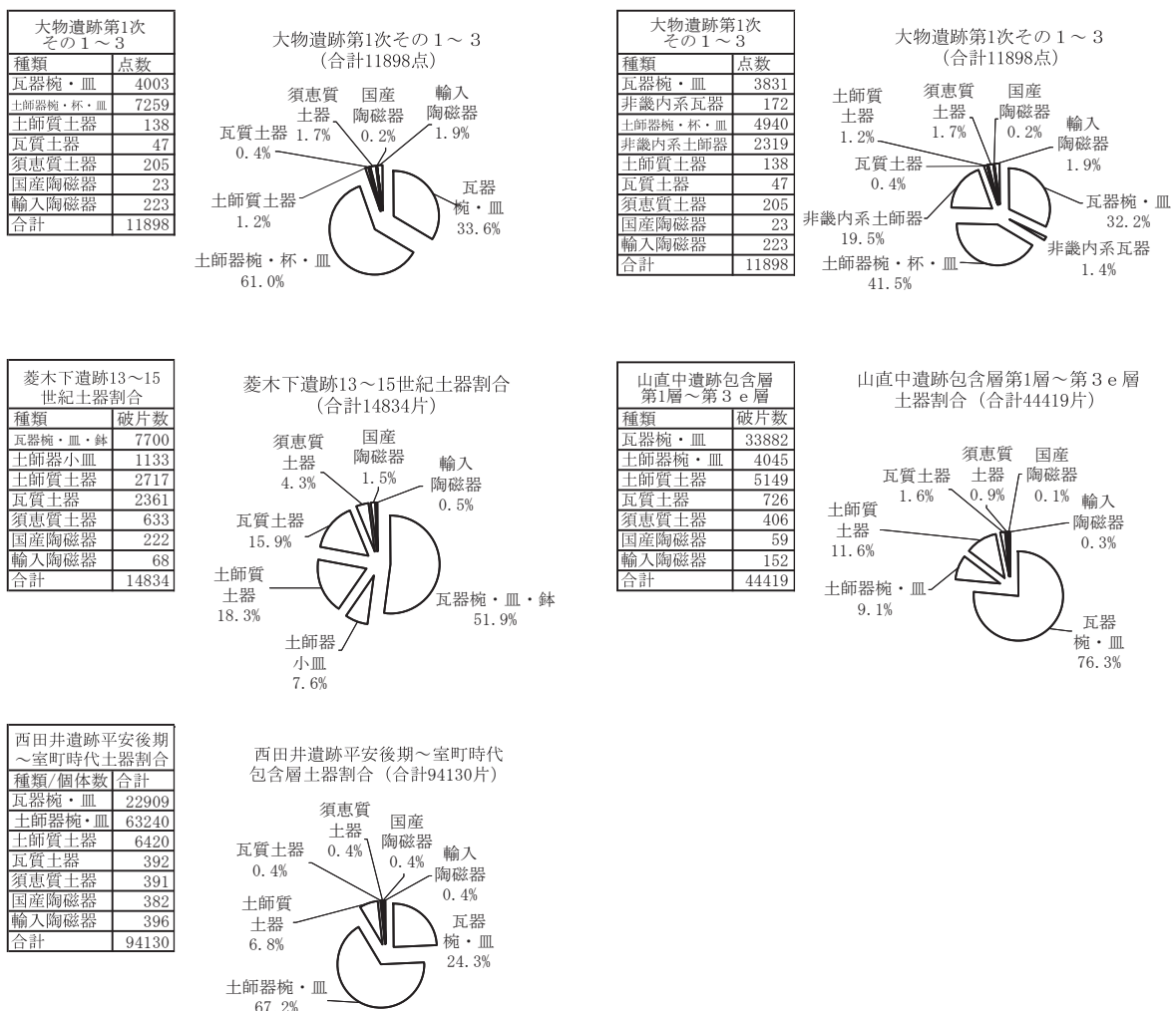


図 80 他の遺跡出土遺物割合

土器以外では瓦の出土数が多く土錘や蛸壺も出土しているのが伽羅橋遺跡の特徴ともいえる。

中世の土器破片数や口縁点数を数えている他の遺跡での土器の種類別割合を図 80 にグラフ化してみた。各遺跡はそれぞれ時期幅が異なり、遺跡の性格も異なるのを承知の上で、土器の割合をみることにする。

菱木下遺跡¹⁾では 13～15 世紀の遺物破片点数を合計したものである。食器が約 6 割を占め、そのうちの約 5 割が瓦器椀・小皿・鉢である。輸入陶磁器は伽羅橋遺跡と似たような割合を示す。

山直中遺跡²⁾の 11～15 世紀の包含層出土遺物は接合前の破片数である。山直中遺跡では瓦器・土師器の食器が 9 割弱を占め、瓦器椀・小皿の割合が 8 割弱と極めて高い点に特徴がみられる。国産陶磁器の割合はかなり低い。輸入陶磁器の割合は低く、伽羅橋遺跡とほぼ似たような割合を示す。

大物遺跡³⁾では A - 4 区第 I 層～第 XIV 層出土遺物を、層別に土器口縁部点数を数えており、それを合計したものをグラフ化した。時期は 12～13 世紀代である。食器が 9 割 5 分近くを占めており、瓦器椀・皿が 3 割強、土師器椀・杯・皿が 6 割を少し超えている。大物遺跡では非畿内系の土師器が 2 割弱、瓦器では非畿内系のものが 1.4% と、伽羅橋遺跡と比較してかなり高い割合で他地域の土器が含まれており、また、輸入陶磁器の割合が 1.9% と少し高い点に特徴がある。

西田井遺跡⁴⁾では包含層出土遺物を平安後期から鎌倉時代、室町時代の時代毎に破片数を数えており、それを合計したものをグラフ化した。土師器椀・皿が 7 割弱、瓦器椀・皿が 2 割強を占め、食器が 9 割を超える。他の遺跡と比較して瓦器椀が少なく、土師器が多い点で特徴がある。

出土遺物からみて、伽羅橋遺跡は漁労具が大量に出土している点を除き、中世土器の組成や割合が菱木下遺跡に近い状況を示す。輸入陶磁器は 1% に満たない数値を示し、菱木下遺跡や山直中遺跡よりも割合は低い状態である。さらに伽羅橋遺跡は在地の瓦器・土師器が殆どであり、輸入陶磁器も少量である事から、大量の他地域土器を含む大物遺跡とは、遺跡の性格が全く異なっているといえる。

以上の事から伽羅橋遺跡出土遺物は、若干他地域の物が入っているものの、大多数は在地の土器によって占められている。また、他の遺跡と比較しても突出した遺物はあまり認められない。ただ、漁業関連の遺物が含まれている点と、寺関連の遺物組成をしたものが遺構から出土していることがあげられる。これらの事柄から、中世における伽羅橋遺跡は、近くに寺があり、少しは他地域との交流のある、漁業に従事していた可能性の高い集落であったといえる。

第2節 歴史史料・資料からみた伽羅橋遺跡

はじめに

高石市域の海岸部には、浜寺と呼ばれた南北朝期の大寺「大^{だいゆう(おう)じ}雄寺」が存続した記録がある。昭和30年の同志社大学調査では平安時代の瓦が出土し、大雄寺に先立つ寺院が周辺部に存在することがわかった(森浩一他:1956)。また、集落内に大王寺(寛永年間(1624～1644)創建。旧綾井村浄土宗専称寺末)があり、これが大雄寺の名称を継承するようであることから、寺院関係遺跡として伽羅橋遺跡(伽羅橋東遺跡を含む)があげられるようになった。

伽羅橋遺跡における(財)大阪府文化財センターの調査は、鴨池から海岸へと流れる旧高石北村北縁近くの水路(カモガワ)に沿い、これを横断して紀州街道に至る約250m区間の道路幅が対象になった。海岸線に沿って連なる砂堆の上は開発され居住地帯となっているが、調査地はこれを横切る。

調査では、弥生時代以降、近世に至るまで、各時代の遺物が出土した。遺構が伴うのは、弥生時代、また、平安時代後期から中世を中心として近世に至る時代の二者である。当センターの調査としては、平安時代末期から鎌倉時代に至る居住区(掘立柱建物群を中心とする)が検出されたことが主要成果である。本節ではこれらの成果に基づき、今一度、文献史料等の面から検討してみたい。

1. 掘立柱建物群について

平成12・13年度調査で検出された掘立柱建物群は、海岸線に平行する砂堆上に建ち並び、居住区を形成していた。この状況は、海岸線に同じく平行する街道(南海道とは別)の存在をうかがわせていた((財)大阪府文化財調査研究センター:2001.12)。

検出された居住区は、砂堆の安定部分を占めることはわかるが、全体範囲が確認できたわけではない。南北の広がりも調査地の関係から不明である。塊村か、列村か、構成形態も不明となっている。集落の年代観も調査地では状況がわかるが、遺跡全体にそれが及ぶとは限らない。

しかし、以上の居住区形態からいえば、近世を踏襲していると思われる現代の集落とは一見して合わない。したがって、高石市役所所管明治23年以降に作成された旧高石北村の「切り図」と比較した。また、江戸時代延宝5年(1677)の検地村絵図(高石市教育委員会所蔵)とも比較した。次の点に大きな違いがみられた。

近代資料としての切り図の居住地には字名がない。居住地、道、水路、池などの状況は、もちろん、現代からみた古い集落の姿を彷彿とさせる。これは、近世検地村絵図においても切り図と同様の状況にあった。すなわち、旧高石北村の居住区だけについていえば、近世以降、水路(カモガワ)を北側(羽衣側)に越えることはなかった。検出された中世の居住区は、集落形態だけでいえば、現代に重なる近世集落とは断絶を生じていることがわかった(図81)。古代・中世の律令制的行政区分である「里」に存在する居住区の一つであることが推測できる。

2. 古代・中世の歴史的状況

古代から中世における本地域の所属関係や集落関係史料をみたい(参考 高石市:1986・

1989)。

(高脚海・高磯浦)

持統天皇3年(689)8月、摂津国武庫海・紀伊国那耆野・伊賀国身野が禁漁区に指定され守護人が置かれた件に関し、これは河内国大鳥郡高脚海に準じたとする記述が『日本書紀』巻30にみえる(高石市:1986古代25)。高脚は高石・高磯・高師に通じ、北は葦田川河口、南は王子川河口までの約1.8kmの海岸を指すとされる。延喜22年(922)の『大鳥神社流記帳』にも「浜式浦、四季御贄料、葦田浦・高磯浦」の語がみえる(高石市:1986古代95)。

(高石正里)

調査地周辺は「高石里」であったが、高石村の開発によって、鎌倉時代初頭には大鳥郷下条「高石正里」となっていた。

周辺部の里の名称が記載された史料がある。上記『流記帳』に葦田正里があり、また、『和泉国司庁宣案』(元久3年(1206))(高石市:1986中世29)、および、『和泉国大鳥社神人等解案』(建永元年(1206))(高石市:1986中世30)に高石正里がある。高石正里は両案において「大鳥社供菜浦当郷内高石正里」、「当社御祓戸大鳥郷高石正里浦白浜南北六町内、為大明神毎年祓戸、(略)」と記される。

以上から、葦田川河口周辺を境界とし、海岸部北に葦田正里、南に高石正里が並び、高石正里の海浜が古来、高磯浦と呼ばれ、また、高脚海の一部であったことがわかる。そして、高石正里は、大鳥神社に贄を供出し、毎年、祓えが行われた大鳥社領であると大鳥神人が主張したところでもあった。

高石正里の範囲については、『高石市史』第1巻ですでに「芦田正里・高石正里比定の試み(図78)」が作成されている。今回、旧羽衣・高石北村・高石南村の切り図、および、『高石市史』の条里復元図(高石市:1989図76)の現代に遺存する坪名称を参照、大阪府デジタル地形図(平成15年10月大阪府発行。1/2500)を基図として、里範囲を追認した(図81)。旧高石北村西部を主要範囲とし、伽羅橋遺跡調査地が含まれることが示される。範囲の設定が正しければ、検出された居住区は、この高石正里の中にあっただことがわかる。すなわち、今回作成の復元図は、大鳥郡に所属した高石市域の条里復元を試みられた『高石市史』第1巻図75・76を再確認したことにもなる。図78に比べ1坪分ほど北にずれた点に留意が必要である。

なお、高石正里を本貫地とするのは高石(高志)氏である。ところが当時は大鳥郷上条の上村刀禰とのおであり、高石村刀禰は草部郷中条を本貫地とする殿来氏とのきであった(高石市:1986中世30)。大鳥郷、草部郷の複雑な入り組み関係を示すようである。また、高石市域における式内社は4社で、葦田正里に羽衣浜神社、高石正里に高石神社、取石に等乃伎神社とのき、そして、綾井に大歳神社があっただがこれは等乃伎神社に合祀された。いずれも今後里を考える上での資料となろう。

3. 伽羅橋遺跡周辺に存在した古代寺院

伽羅橋遺跡では、平安・鎌倉・室町・戦国時代の瓦が出土した。平安、鎌倉時代の瓦は、所属年代によって大雄寺のものではないことが明白である。周辺部で古代寺院史料をみると、『行基年譜』がある。

安元元年(1175)成立の『行基年譜』行基57才の段(神亀元年(724))には、葦田里に清浄土院、高石村に清浄土尼院建立と記述されている(高石市:1986 古代54)。年譜には、すでに、別名高石村の称が使用されている。図81で見れば、やはり、尼院の所在地は砂堆上にあり、本遺跡居住区周辺部の砂堆安定地帯である可能性が考えられる。しかし、清浄土尼院が創建された8世紀で見れば、本居住区がすでにこの時代に存在したのであるのか現在の調査成果からは確定できない。調査地には奈良時代と確定された遺構がない。もっとも、出土遺物の中には、奈良時代前半の須恵器がごく少量ではあるが見受けられる。また、瓦に対応する平安時代後期の黒色土器も居住区内に検出される。高石正里は行基の父の出自、高志氏の本貫地の可能性があり、鎌倉時代の瓦も含めて調査地周辺部に清浄土尼院を引き継ぐような寺院が所在した可能性はあろう。なお、西取石に長安寺があり、平安時代後期創建とされる。これは現存しない。いずれにしても、今少し、史料の増加が望まれる。

4. 大雄寺について

伽羅橋遺跡が注目されるのは、南北朝時代・南朝後村上天皇の勅願寺として創建された臨済宗法燈派大雄寺が所在する地域にあると考えられたからである(参考 高石市:1989・神谷正弘:1997)。



図81 高石正里復元図 (参考 高石市:1989 図76・78)

大雄寺は、南朝後村上天皇の勅を得て正平2年(1347)頃に創建された。和歌山県日高郡由良町の臨濟宗法燈派興國寺住持、無本覺心(1207-98)の法嗣である孤峯覺明(1271-1361)が開山となった。法燈派は、密教との習合が特徴とされている。開山覺明は、後醍醐天皇に雲樹国済法師、後村上天皇より三光国師の号を賜った高僧である。過去には足利尊氏の寺院造営要請を固辞したり、大雄寺開創後も北朝の光厳上皇が覺明の受戒を受けたなど、北朝ともつながりがあったようである。

覺明が没したのち、大雄寺住持は古劍智訥が嗣いだ。後村上天皇は智訥に対しても帰依厚く、仏心慧燈国師の号を与え南朝顧問僧に遇し、また、大雄寺を京都南禅寺に並ぶ官寺に列した。後村上天皇の後に踐祚した長慶天皇は、正平23年(1369)、「三光国師御菩提料所」として河内国島頭庄内の吉近名(門真市)、また、和泉国山直郷国衙分(岸和田市)を合わせて寄進している。南朝とのつながりの深さがさらにわかる資料である。智訥は堂塔整備を行い、大雄寺中興と称される。智訥没後の弘和4年(1384)に長慶天皇院宣、明德3年(1392)に南北朝が統一され、その後の朝廷とのつながりは不明となった。

応永27年(1420)頃、南禅寺83世住持から転任した覺明弟子聖徒明麟が住持になっている。長祿2年(1458)に覺明の百年忌法要が行われ、東福寺や相国寺高僧が関係している。応仁の乱(1467～1477)を避けた一休禅師が宿泊した記録もある。堺の海会寺に住した東福寺僧季弘大叔は、文明16～18年(1484～1486)の大雄寺に関する記録を残している(『蔗軒日録』高石市：1986 戦国342)。当時、大雄寺には開山塔三光庵、2世智訥の明白庵、智訥弟子台岩龍秀の慈祥院、明麟の慶光庵の4寺庵があった。文明18年(1486)6月6日、慈祥院主が近く正覚新庵に移ると述べたもので大雄寺の記録は途絶える。当時の慈祥院主は堺の豪商泉屋道栄の一族であり、泉屋道栄自身も明麟の弟子であったとされる。慈祥院の光胤侍者は堺豪商高石屋の出身である。応仁の乱で日明貿易船の発着地となった国際貿易都市堺との関係が云々されるところである。寺の廃絶期については、大雄寺は応仁の乱で焼失したという伝承がある。しかし、文明18年(1486)までの記録が残る『蔗軒日録』によって、これは覆される。

大雄寺は以上のように、天皇の勅願寺、官寺に類した扱い、有力寺院僧との交流、堺豪商との関係など、やはり地域を越えた存在であったことがわかる。しかし、伽羅橋遺跡では、南北朝期の遺構は明確とはいえない。瓦の出土でみても、大雄寺に対応する室町時代のものは少ないという状況にある。

現有水路(カモガワ)より南は、現在、大王寺も所在する一画である。しかし、「作宗寺」の字名が多い。旧高石北村には近世の寺社書上帳の類が残らず、廃寺の状況がわからない。作宗寺についての伝承も地元にはない。室町時代に所属するのであれば、大雄寺塔中の一つの可能性がある。戦国時代の瓦については、石山合戦の時(天正7年(1579)終結)に綾井城主沼間任世が大雄寺に逃げ込み、これがもとで大雄寺は焼失したという旧綾井村専称寺の伝承がある点に関係するかもしれない。

大王寺(すなわち大雄寺)の字名は、紀州街道を西に越えた、式内高石神社の北側に集中する。大雄寺は、高石神社に隣接して建立されるが、作宗寺の区画まで広がっていた可能性はある。そして、門前には近世旧高石北村につながる新たな集落が形成されたと推測できるのではなかろうか。

5. 湊に関する史料

古墳時代の須恵器の積出湊であり、古代においても難波長柄豊前朝廷（孝徳朝）の津であった石津湊（高石市：1986 古代 95）に比べ、葦田川河口の湊は、古来、船泊り程度の小湊であったことが推測できる。

先にも述べた建永元年（1206）の『和泉国大鳥社神人等解案』の中に、「而希廻船之商人雖来著」（しこうして、まれに廻船の商人が来着すといえども）の語がみえる。また、正平8年（1353）2月、南禅寺僧義堂周信^{ぎどうしゅうしん}は、海南を発ち泉州沖を航行中に舟が転覆、かろうじて大雄寺に辿り着き、覚明に世話を得たことを記している（『空華集』高石市：1986 中世 231）。商船などの来着は、むしろ不時によるものであった。

高師浜周辺部一帯は、近世前期の和泉国絵図（高石市教育委員会蔵）にも「船かかり悪し」と付記される。古代より白浜が続く風光明媚の砂丘地帯であったことの方に意義が見いだせる地域である。

おわりに

調査で居住区が検出された伽羅橋遺跡調査地は、中世前期、高石正里の地であった可能性が考えられる。供菜浦の地にあり、とくに漁具の出土が多いのも傍証になるかもしれない。しかし、この居住区は、鎌倉時代の中で消滅してしまった。大雄寺はその後、南北朝期に創建される。これまで一部でいわれていたような「検出居住区と大雄寺との共存」⁵⁾は、あり得なかったのである。

第3節 総括

伽羅橋遺跡は、従来から発掘調査が積極的におこなわれ、中世の集落跡・寺院跡として著名となった遺跡である。当センターが実施した都市計画道路高石北線建設に伴う発掘調査が、今回をもって終了するにあたり、以下に簡単に総括する（図82）。

まず、弥生時代については、平成11・12年度の調査で弥生時代中期から後期にかけての土器が出土している。また、平成13年度調査では土坑や溝等が検出され、コの字に廻る溝は方形周溝墓状遺構として認識されており、この時初めて方形周溝墓の存在が確認された。平成16年度にはその続きと、新たに周溝を検出して、方形周溝墓の存在が具体的に明らかになったといえる。このことから、南西から北東方向にのびるこの砂堆上には、当調査区を中心に墓域が広がっていた可能性が高い。さらに、伽羅橋遺跡の北側には羽衣砂丘遺跡などの弥生時代の遺跡が位置していること、また、周辺の調査でも弥生時代の遺物が出土していることなどから、北側には集落の存在が想定される。

中世について見てみると、弥生時代以降、砂堆の形成が西の海側に向って進んだため、砂堆頂部に位置する平成11年度調査区西半では遺構は検出されなかった。その東側では建物跡や道路状遺構・溝などの遺構が検出され、溝からは瓦をはじめとして遺物が大量に出土している。これら瓦等の出土遺物は、近くに寺院の存在を示唆すべき遺物でもあったが、寺院に伴う遺構については明確には検出されなかった。

平成12年度調査区西半と平成13年度調査区1トレンチでは、ピットをはじめ、井戸・土坑・落ち込み・溝等が検出され、この付近に集落が広がっていたと考えられる。特に、平成13年度調査区1トレンチ中央部ではピット群が検出され、その部分では土坑があまり検出されなかったことから、建物が展開する集落の中心部に当たると推測される。

その周辺の状況を見てみると、西側に位置する平成16年度調査区では、これまでの調査と同様に中世の遺構・遺物が検出されたが、その遺構の密度は過去の調査よりも比較的希薄であることから、集落の縁辺部に該当する。また、東端に位置する平成12年度調査区東半では溝などの耕作に伴う痕跡が検出され、この付近には耕作地などに利用した生産域が広がっていたと考えられる。

従来から、伽羅橋遺跡では掘立柱建物・井戸・土坑などの遺構が良好に検出され、集落の存在が明らかになっていた。それらの遺構や出土遺物等の検討の結果、過去には「中世港湾都市遺跡」として広く周知されていた経緯がある。しかし、今回の調査成果を見る限りでは、港湾都市と呼ぶに値すべき遺構・遺物などを確認することはできず、具体的な考古学的資料としては乏しいのが現状であった。

さらに出土遺物を見てみると、土錘や蛸壺などの漁撈に関する遺物の出土も多く、海岸沿いに立地することを考え合わせると、砂丘上に展開したであろう、漁撈を生業とする集落（漁村）というのがふさわしいと思われる。そして、大雄寺に関しては、今回の調査ではこの付近にあったというべき考古学的証拠は確認できなかった。

伽羅橋遺跡は、海浜部の砂丘上に立地していることから、遺構面が良好に残存していない可能性もあったなかで、中世においては生産域をはじめ、集落の中心部から縁辺部までの連続した空間における考古学的資料を得ることができた。また、弥生時代においては方形周溝墓が検出され、この付近の砂堆上に墓域が展開していたことが明らかとなった。

以上のように、これまでの一連の調査によって、大きな成果をあげることができたと考えられる。

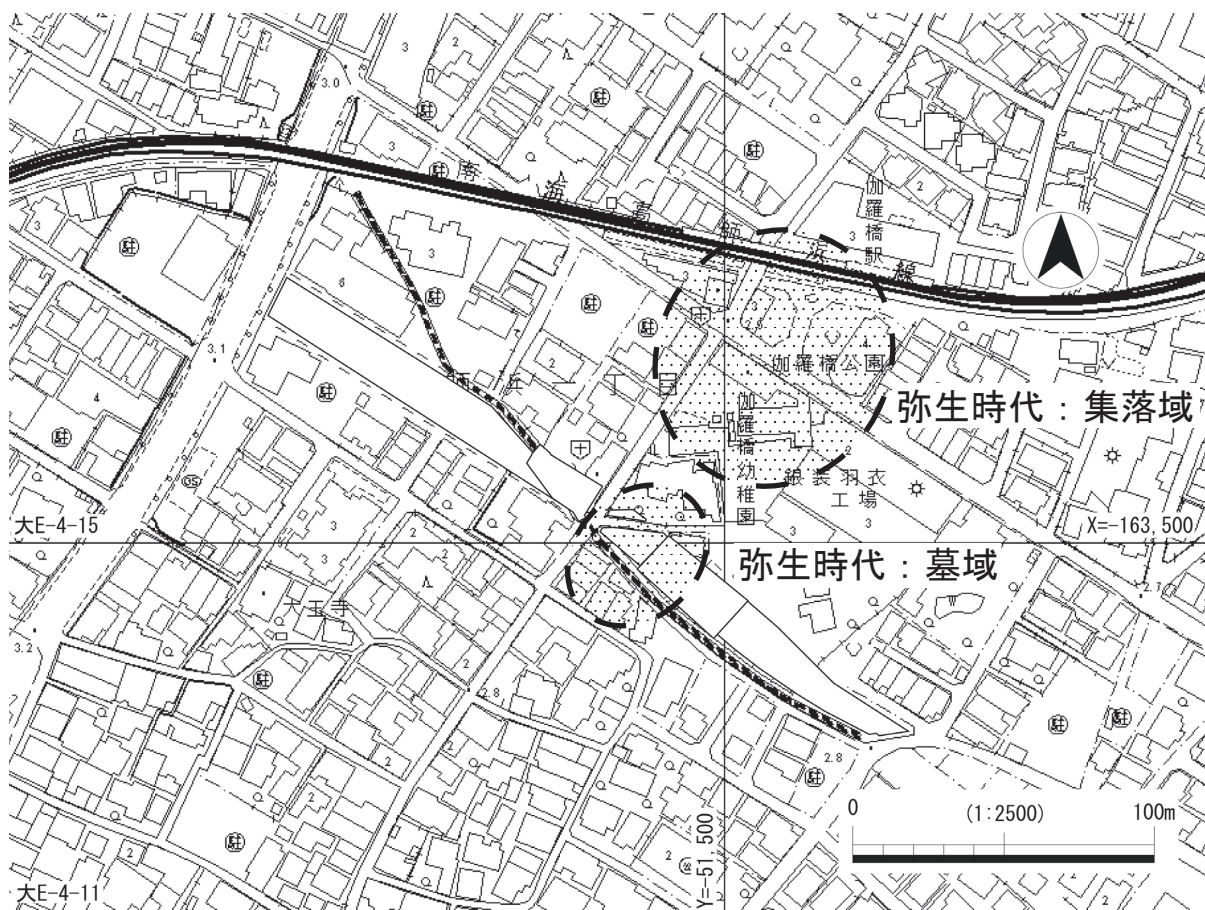
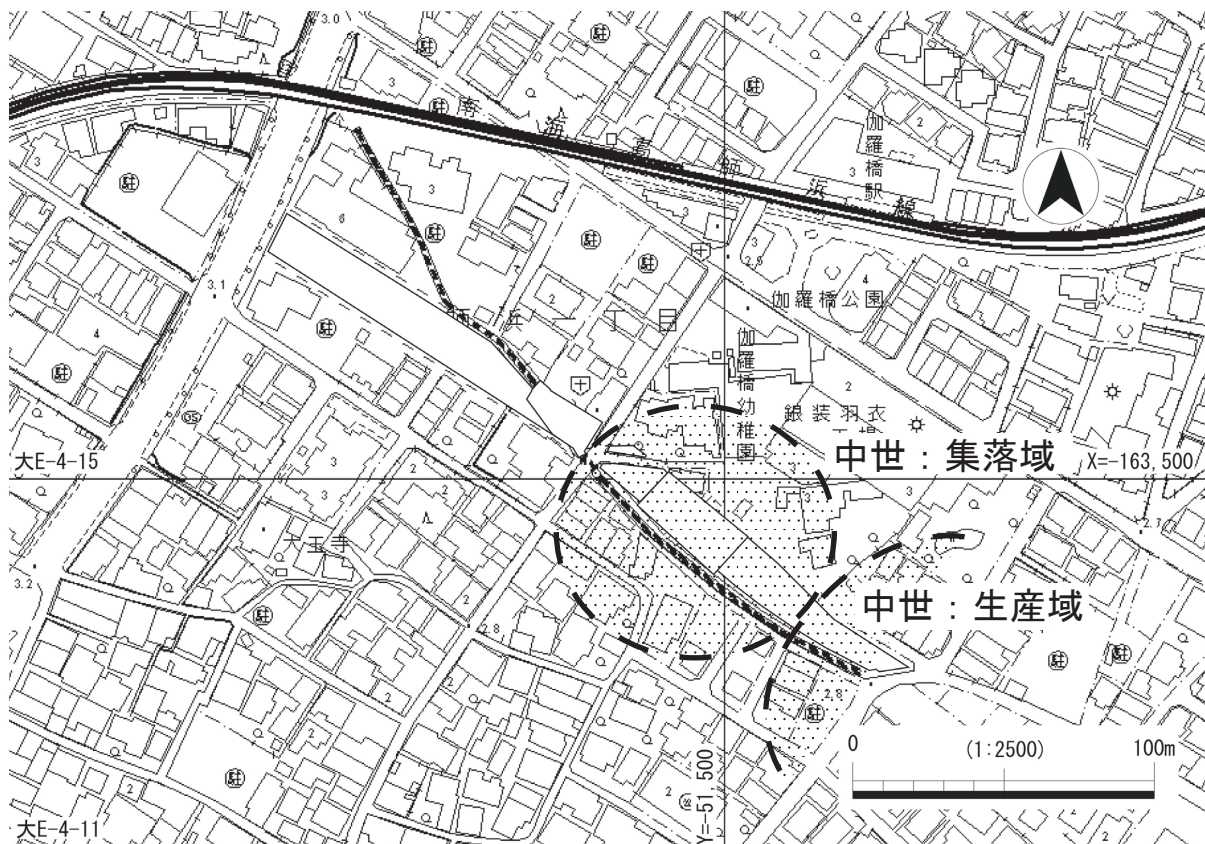


图 82 遺跡概念図（日本測地系使用）

注

- 注1 (財)大阪文化財センター：1985『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書1』
- 注2 (財)大阪府埋蔵文化財協会：1989『山直中遺跡』
- 注3 尼崎市教育委員会：2001『尼崎市埋蔵文化財調査年報 平成7年度(2)―大物遺跡第1次調査概要 その1―』
尼崎市教育委員会：2002『尼崎市埋蔵文化財調査年報 平成7年度(3)―大物遺跡第1次調査概要 その2―』
尼崎市教育委員会：2003『尼崎市埋蔵文化財調査年報 平成7年度(4)―大物遺跡第1次調査概要 その3―』
尼崎市教育委員会：2004『尼崎市埋蔵文化財調査年報 平成7年度(5)―大物遺跡第1次調査概要 その4―』
- 注4 (財)和歌山県文化財センター：1991『西田井遺跡発掘調査報告書―一般国道24号(和歌山バイパス)建設に伴う発掘調査―』
- 注5 伽羅橋遺跡(その2)発掘調査現地説明会資料((財)大阪府文化財調査研究センター：2001.12)、および、第4章第2節「中世伽羅橋集落の性格と消長」((財)大阪府文化財調査研究センター：2002)参照

参考文献

- 井上正雄：1922『大阪府全志』巻之五 清文堂出版株式会社
- (財)大阪府文化財調査研究センター：2001『伽羅橋遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第63集
- (財)大阪府文化財調査研究センター：2001「伽羅橋遺跡の発掘調査」府道高石北線建設に伴う伽羅橋遺跡現地説明会資料
- (財)大阪府文化財調査研究センター：2002『伽羅橋』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第70集
- 神谷正弘：1997「泉州高石大雄寺研究ノート」『堅田直先生古希記念論文集』
- 鋤柄俊夫：1998「伽羅橋遺跡の再検討」『古代探求 森浩一70の疑問』中央公論社
- 鋤柄俊夫：1999『中世村落と地域性の考古学的研究』大巧社
- 高石市：1984『高石市史』第3巻 史料編Ⅱ
- 高石市：1986『高石市史』第2巻 史料編Ⅰ
- 史料古代25：「日本書紀」持統3年8月丙申条
- 史料古代54：「行基年譜」
- 史料古代95：「和泉国大鳥神社流記帳」
- 史料中世29：「和泉国司庁宣案」元久3年3月24日
- 史料中世30：「和泉国大鳥社神人等解案」建永元年9月日
- 史料中世209：「孤峯和尚行実」
- 史料中世210：「国済三光国師塔之銘」
- 史料中世211：「雲州瑞塔山天長雲樹興聖禪寺開山兩朝特賜国済三光国師碑銘」
- 史料中世231：「空華集」
- 史料戦国342：「蔗軒日録」
- 高石市：1989『高石市史』第1巻 本文編
- 高石市教育委員会：1978『古老語り歩き』高石市郷土史研究紀要 第7号
- 高石市教育委員会：1991『高石の仏像』
- 高石市教育委員会：1992『綾井城と専称寺』
- 玉村竹二：1991『臨濟宗史』春秋社
- 森浩一・石部正志・宇田川誠一：1956「大阪府高石町伽羅橋遺跡調査報告」『古代学研究』第15・16号

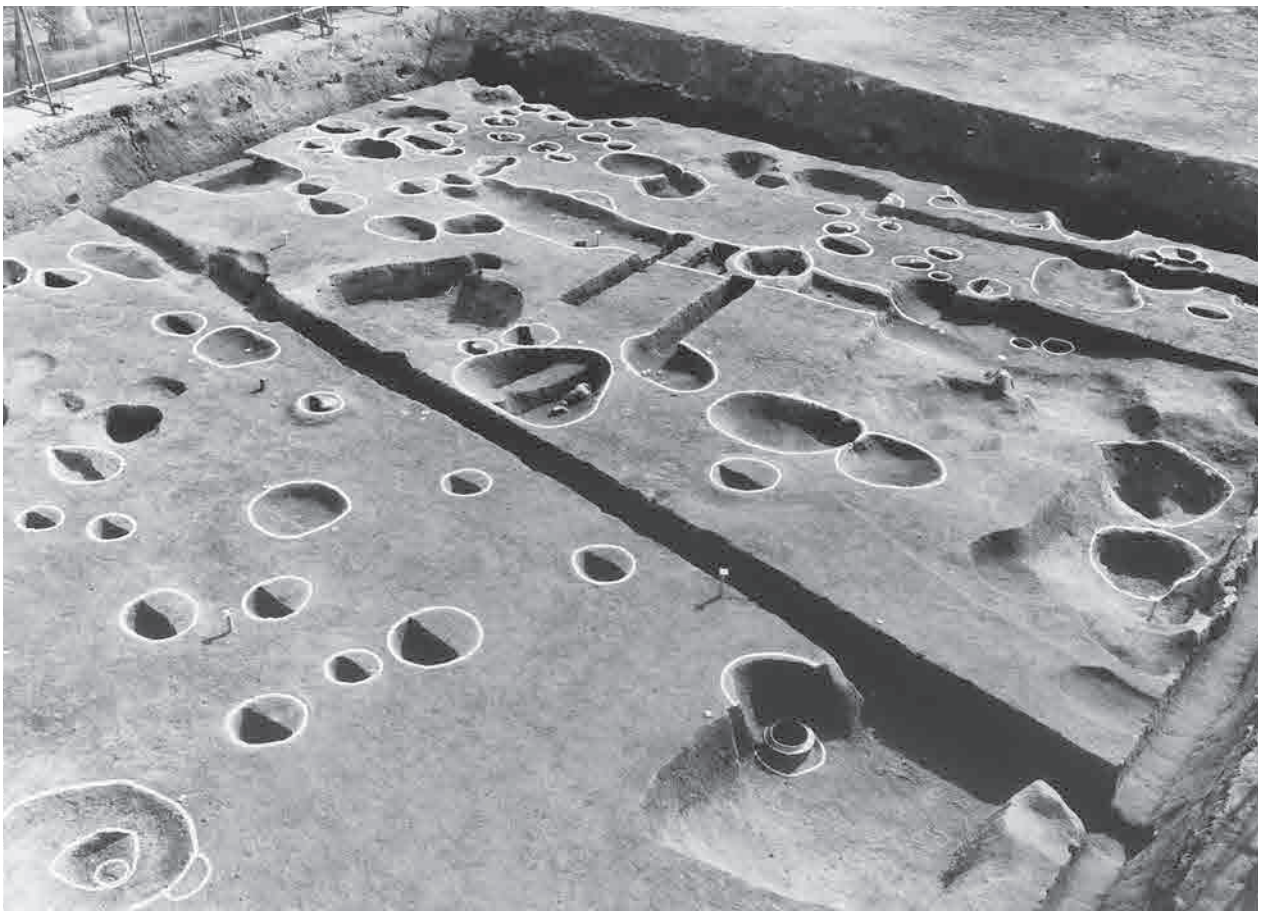
圖 版



伽羅橋遺跡周辺空中垂直写真



1 トレンチ 第1面 全景 (北西から)



1 トレンチ 第1面 (西から)



1 トレンチ 第2面 全景 (北西から)



1 トレンチ 第2面 (南から)



600-0W 検出状況（南西から）



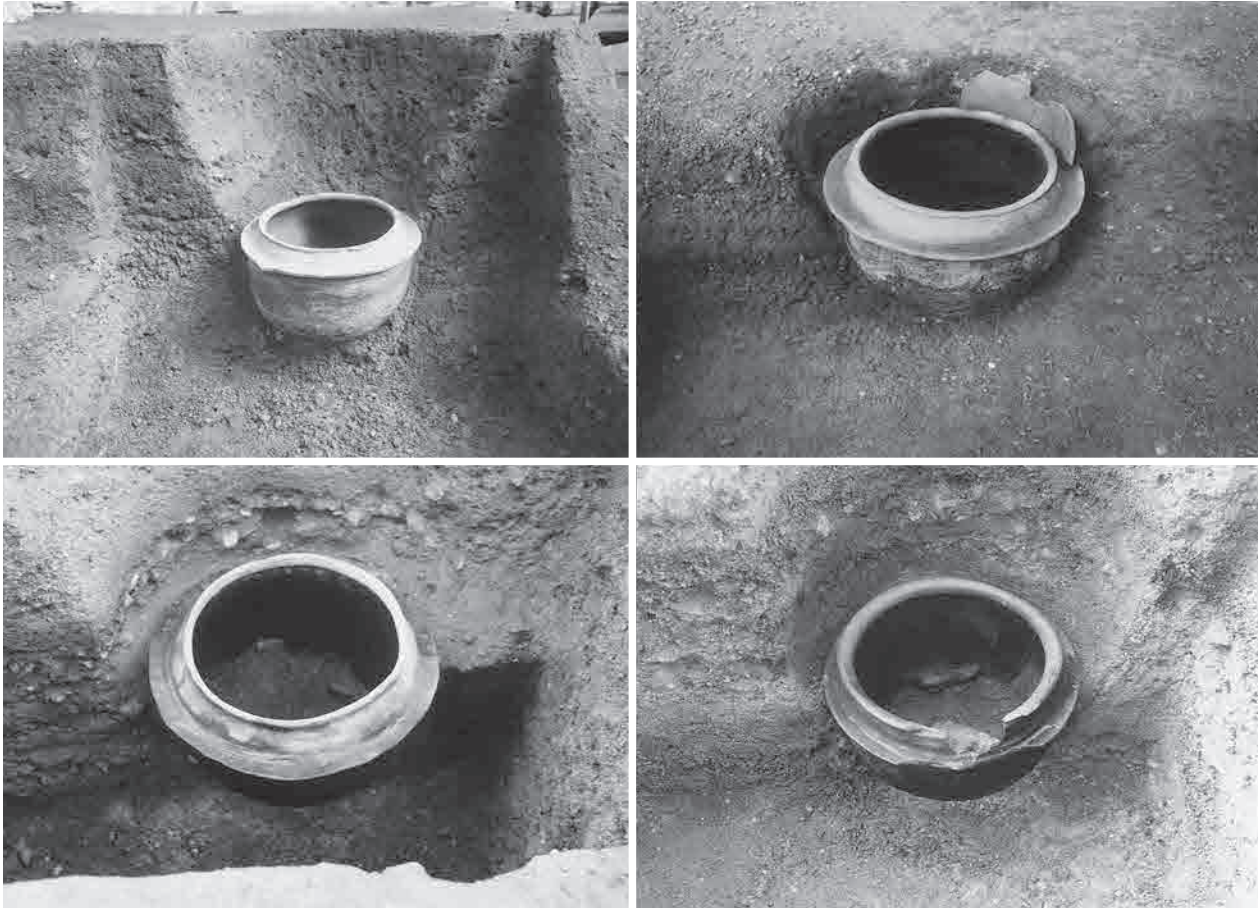
745-0W 検出状況（北西から）



606-0W 検出状況（北西から）



615-0W 検出状況（北東から）



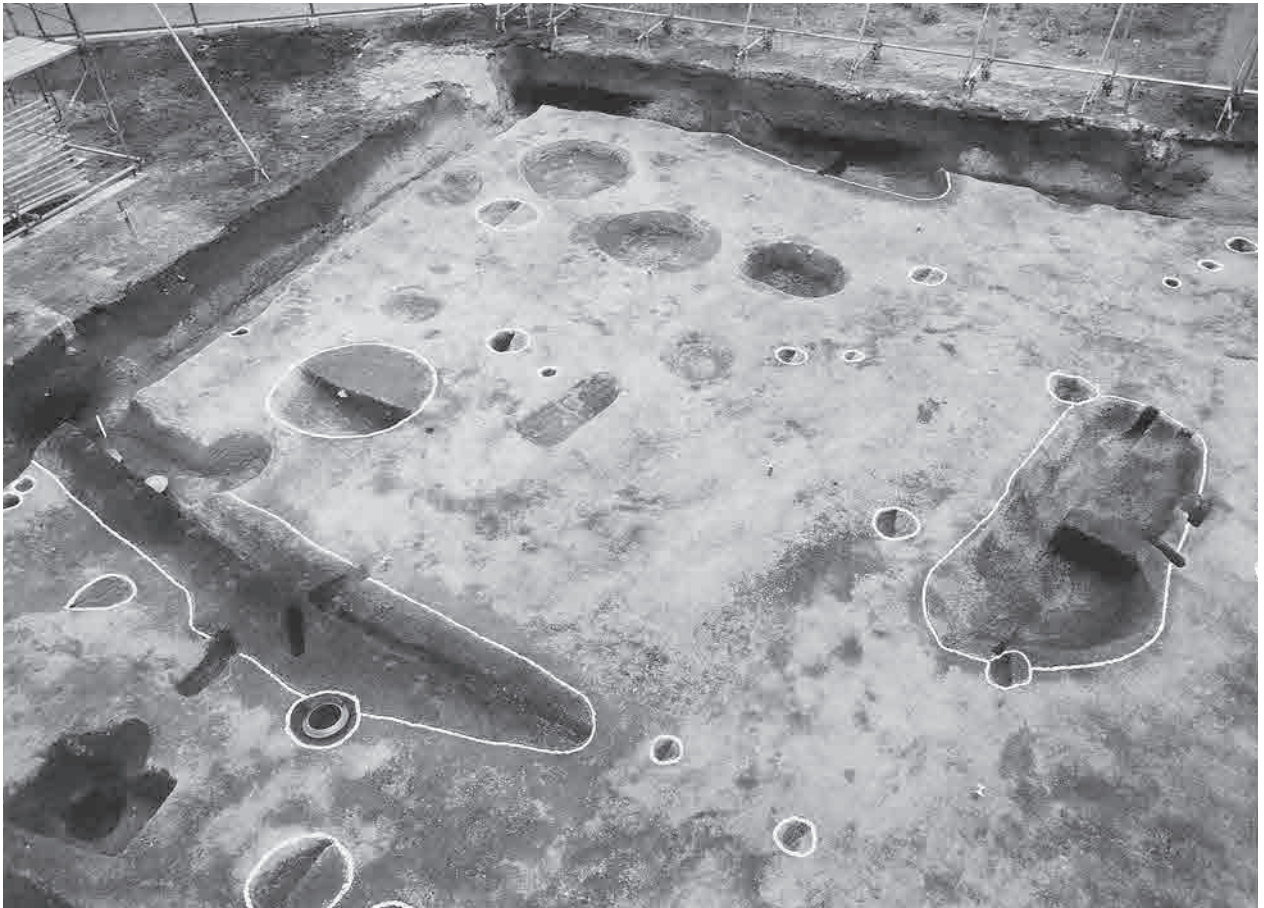
616・665・765・812-0W 検出状況



823・824-0W 検出状況（北東から）



738-00 遺物出土状況（南から）



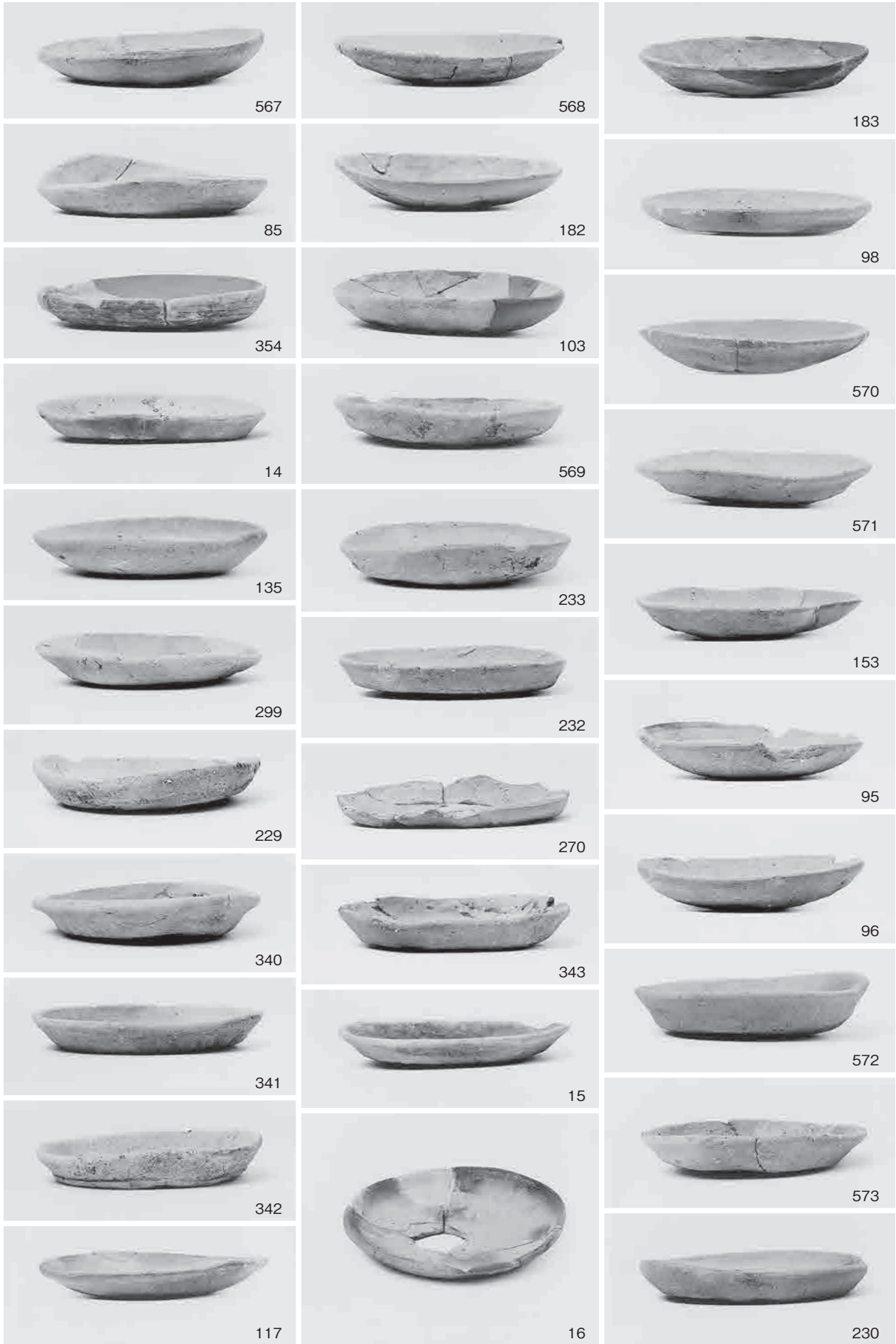
方形周溝墓状遺構（782・783・784-0S）（南から）



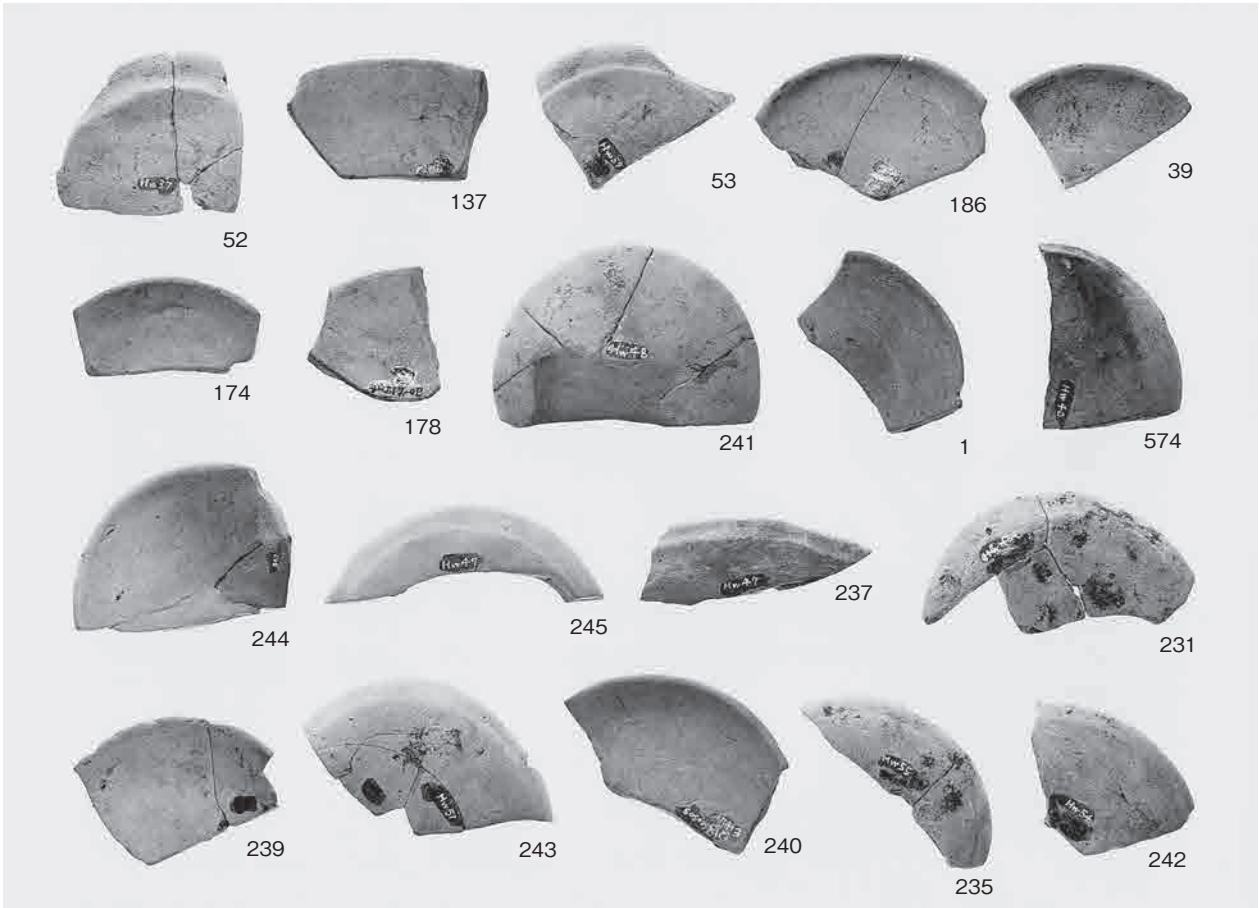
2トレンチ 第1面 全景 (北西から)



2トレンチ 第2面 全景 (北西から)



土師器小皿（1）



土師器小皿（2）



土師器大皿・椀・脚台



瓦器碗 (1)





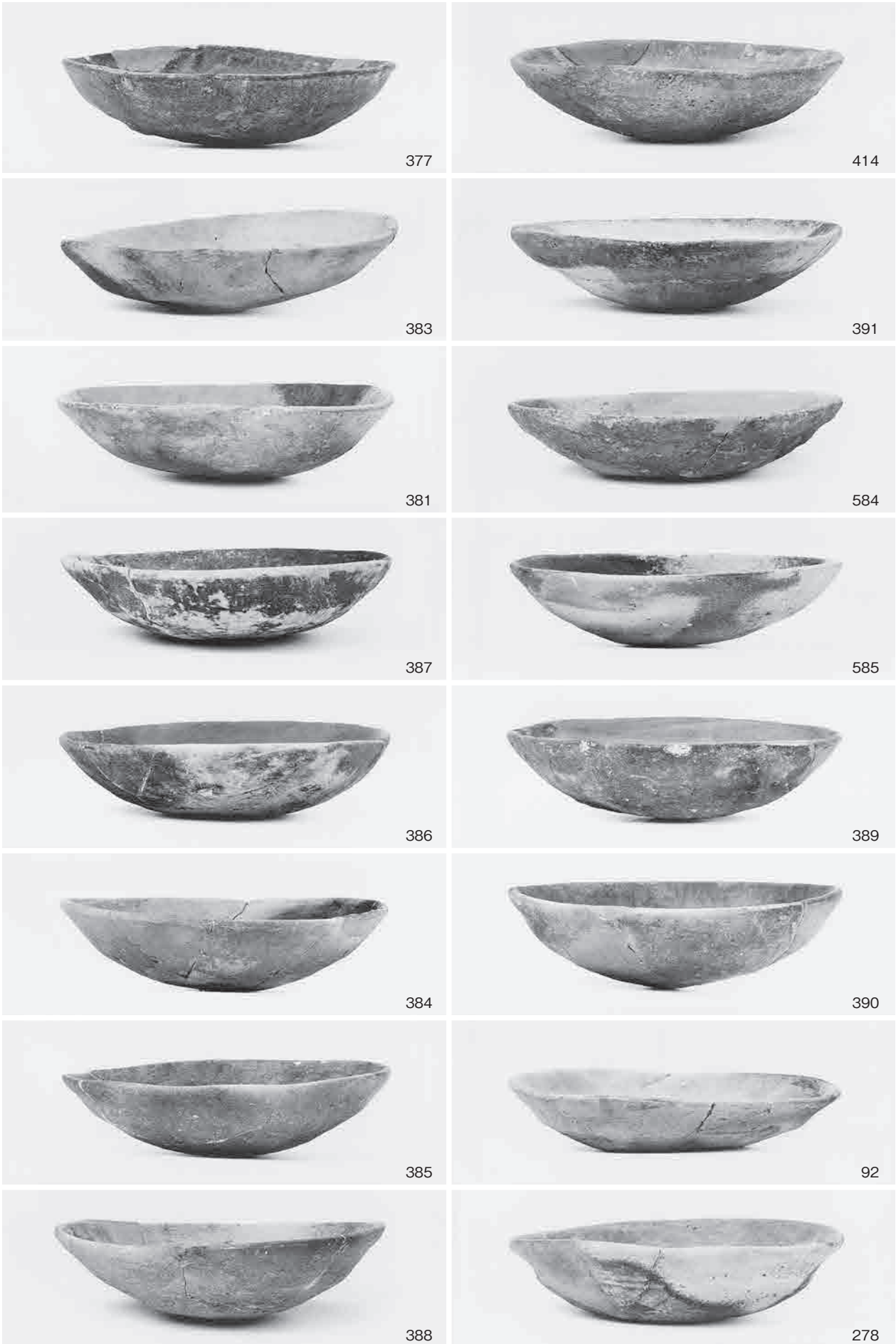




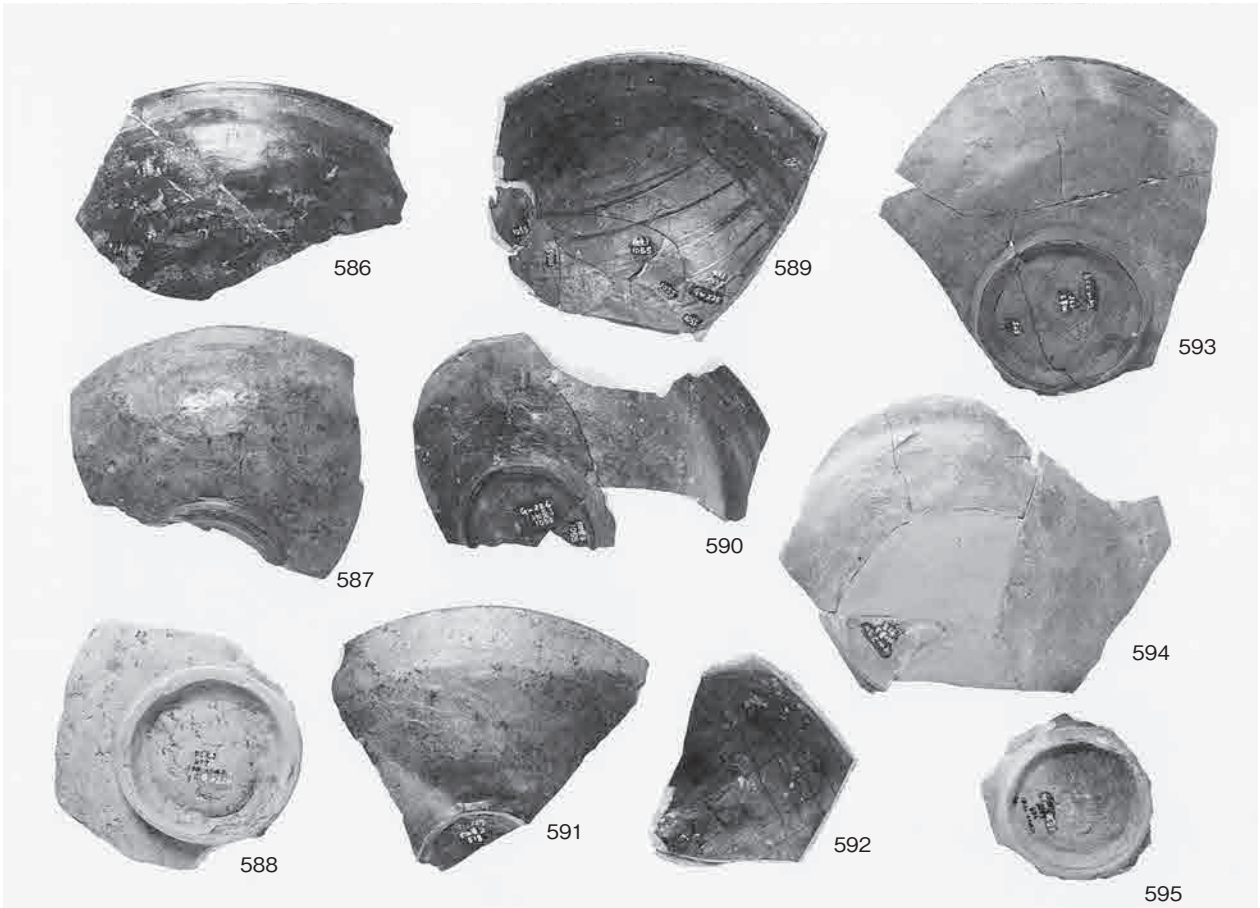
瓦器碗 (5)



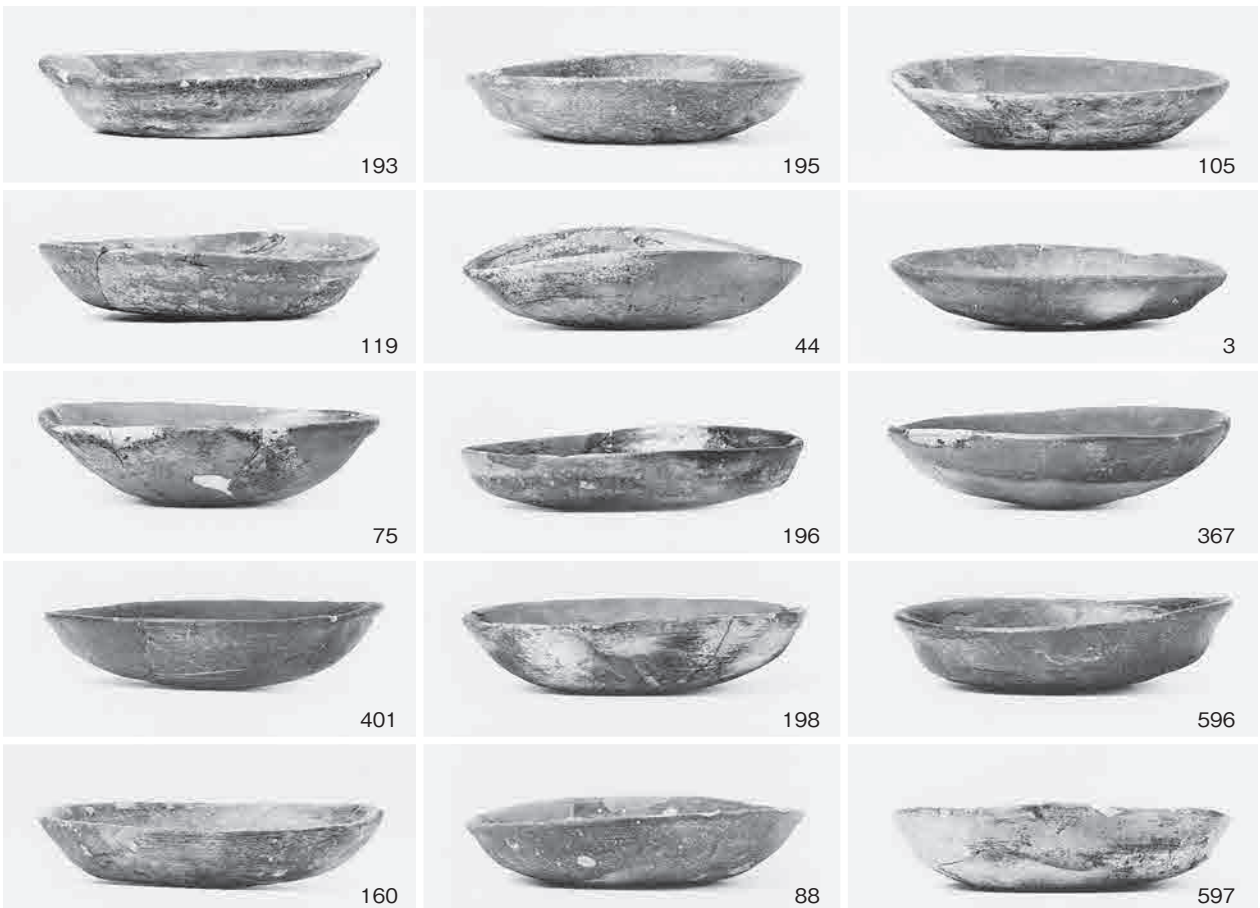
瓦器碗 (6)



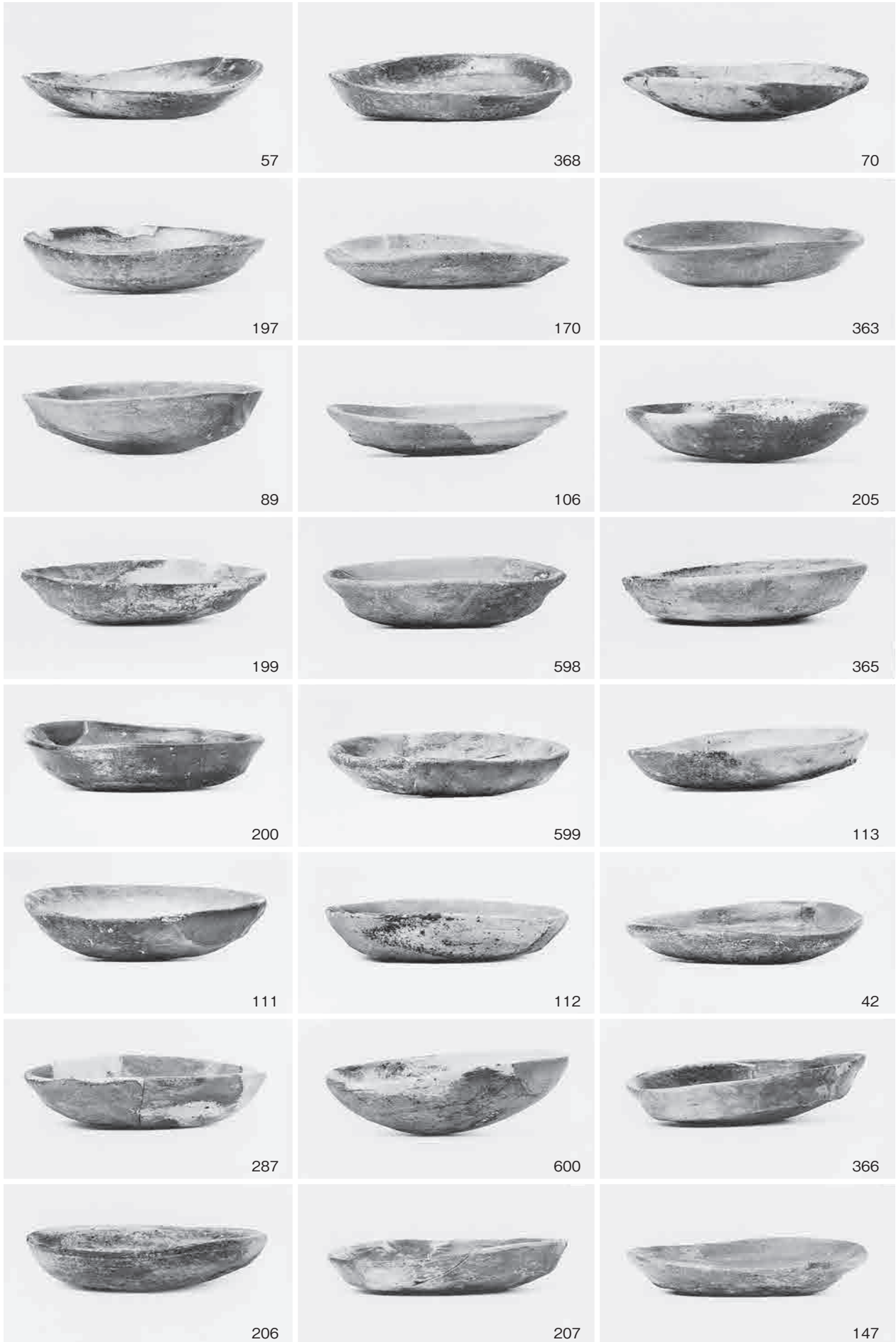
瓦器碗 (7)



瓦器碗 (8)



瓦器小皿 (1)



瓦器小皿 (2)



土師質羽釜（1）



土師質羽釜（2）



78



72



601

土師質羽釜（3）



51



49



38

土師質羽釜（4）



土師質羽釜（5）



28



29



32

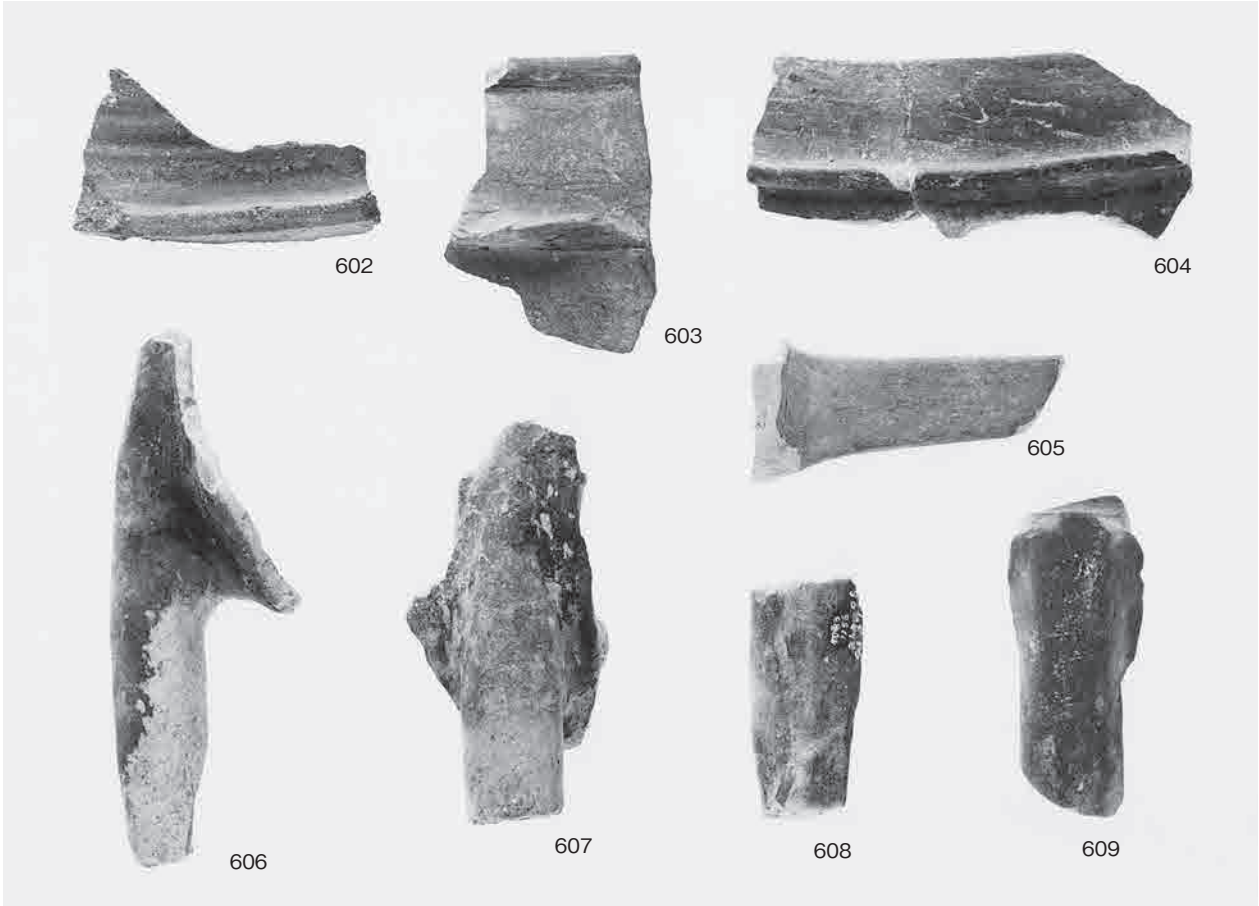
土師質羽釜 (6)



土師質羽釜（7）



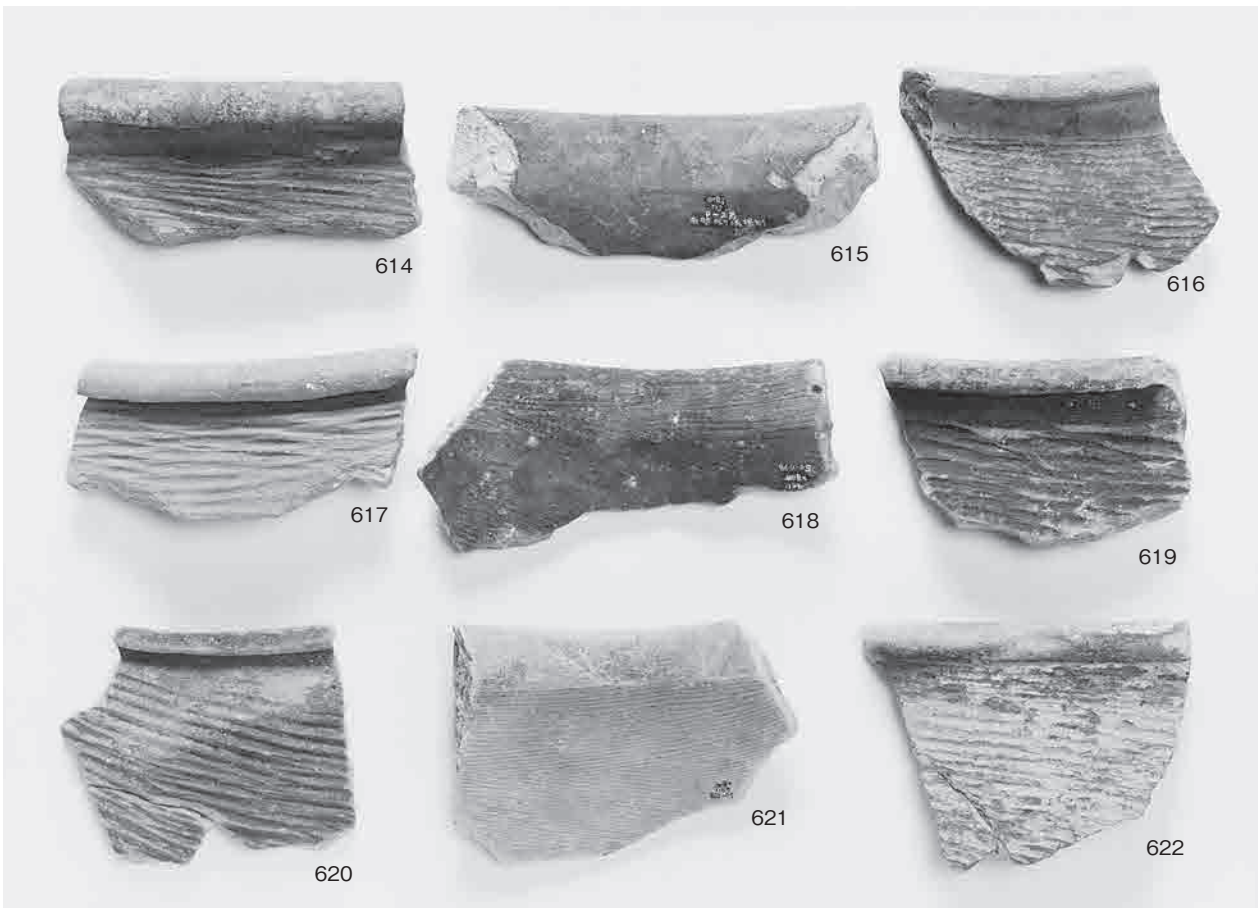
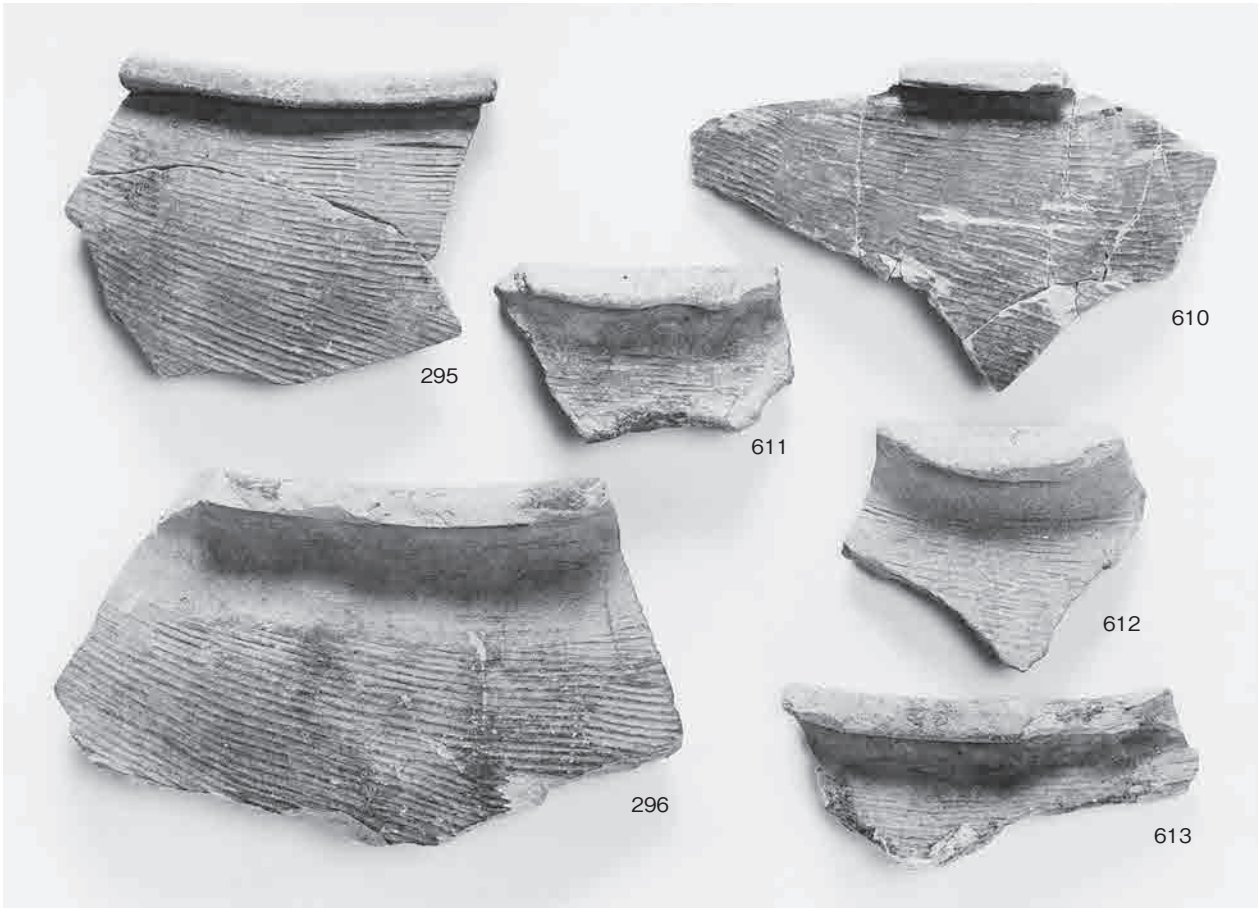
土師質羽釜（8）



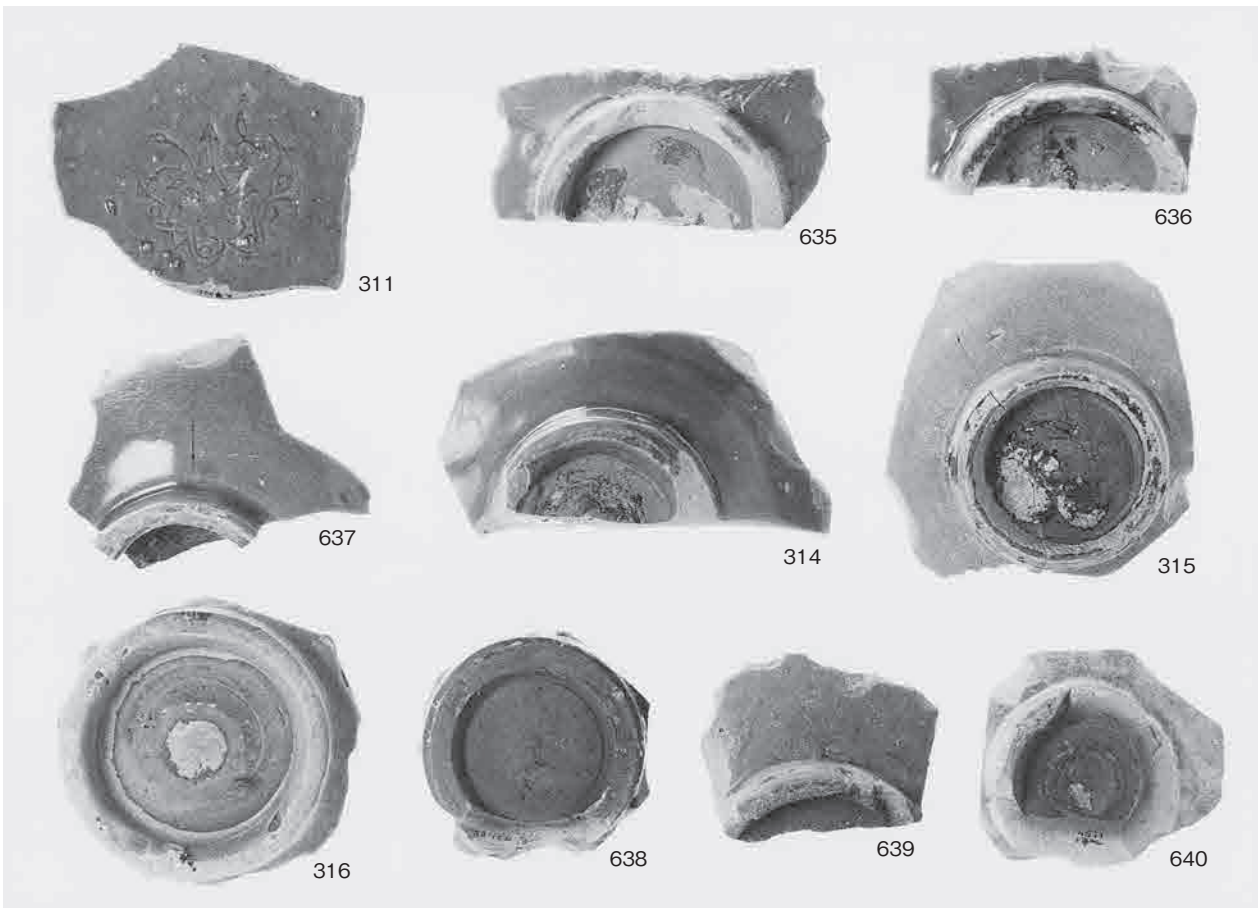
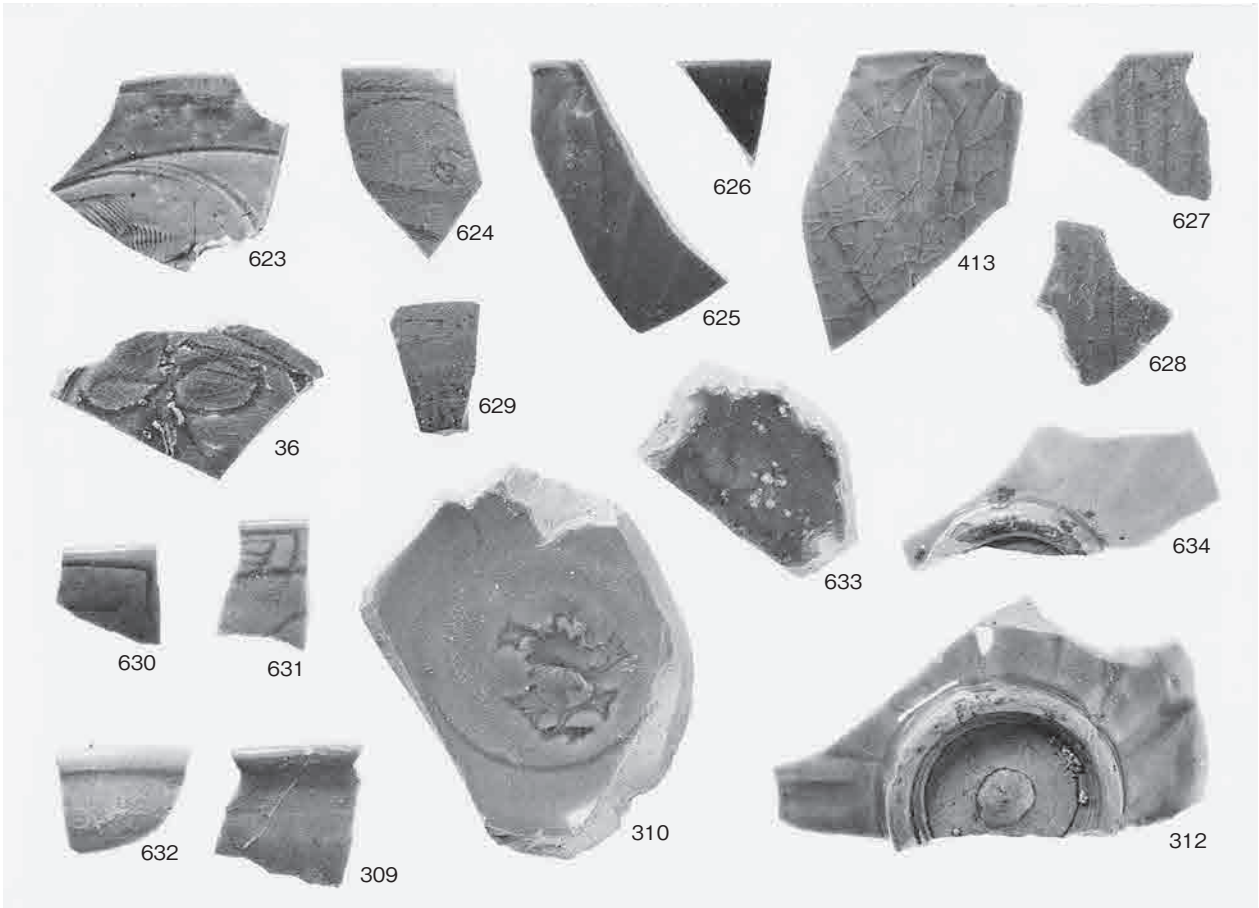
瓦質羽釜、瓦質脚



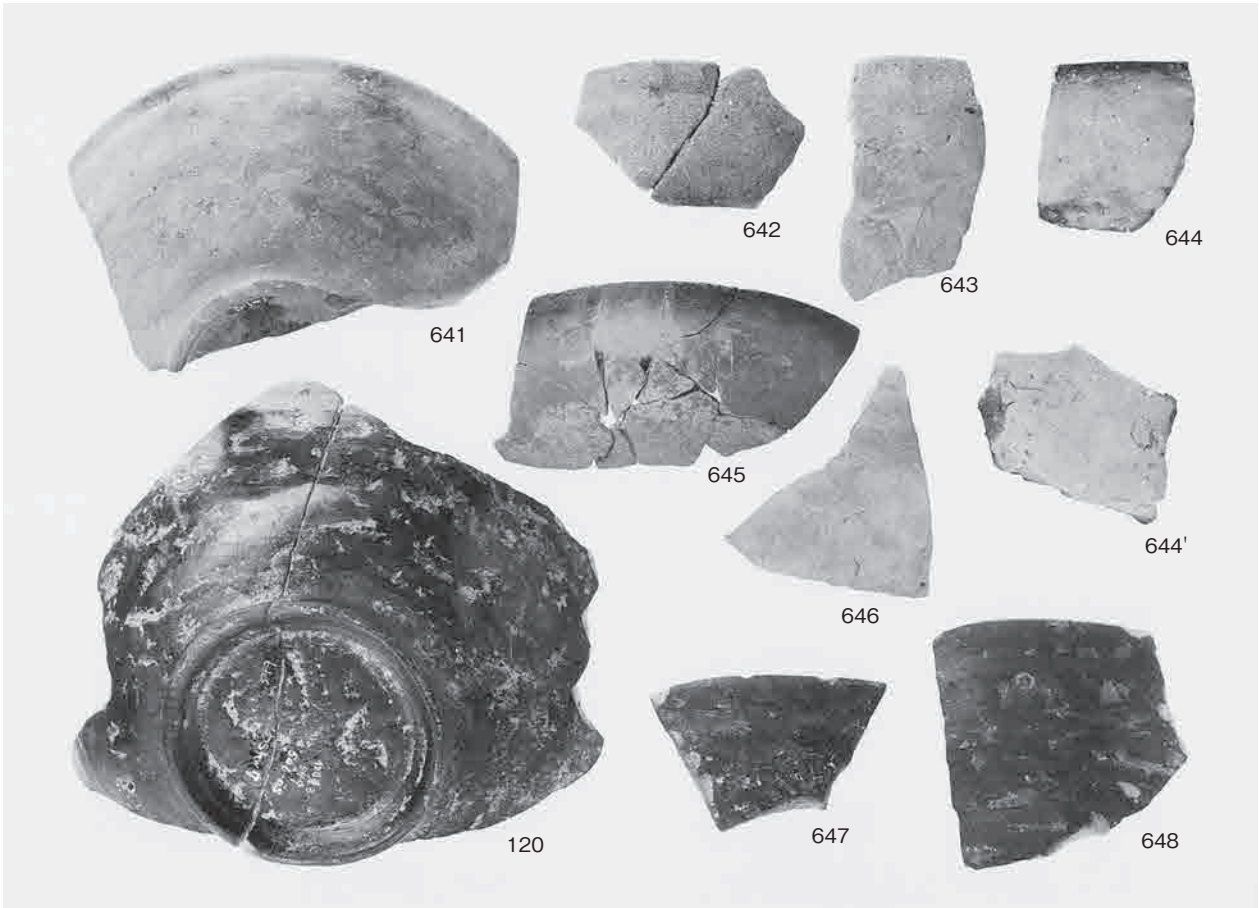
瓦質羽釜、瓦質甕 (1)



瓦質甕 (2)



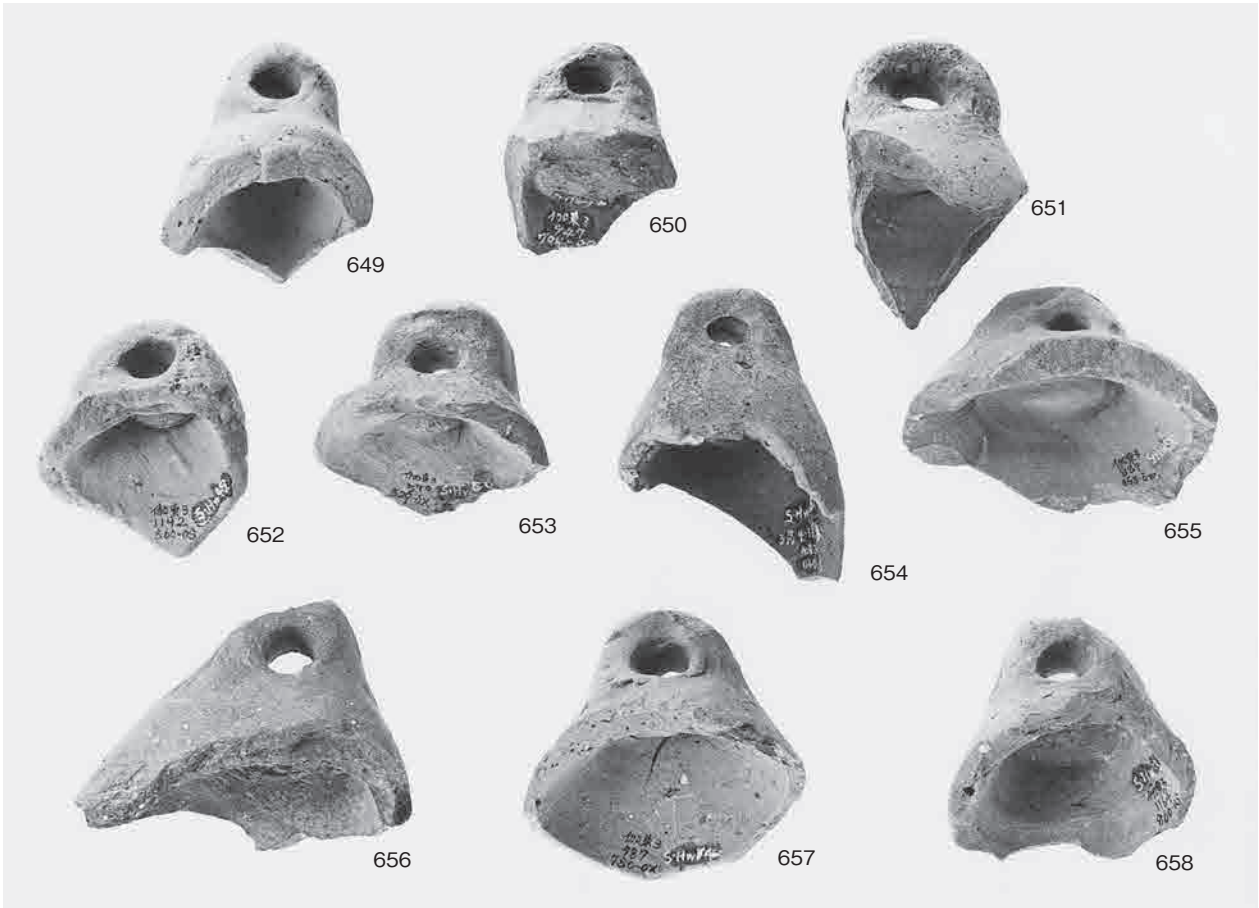
輸入陶磁器



黑色土器



須恵器

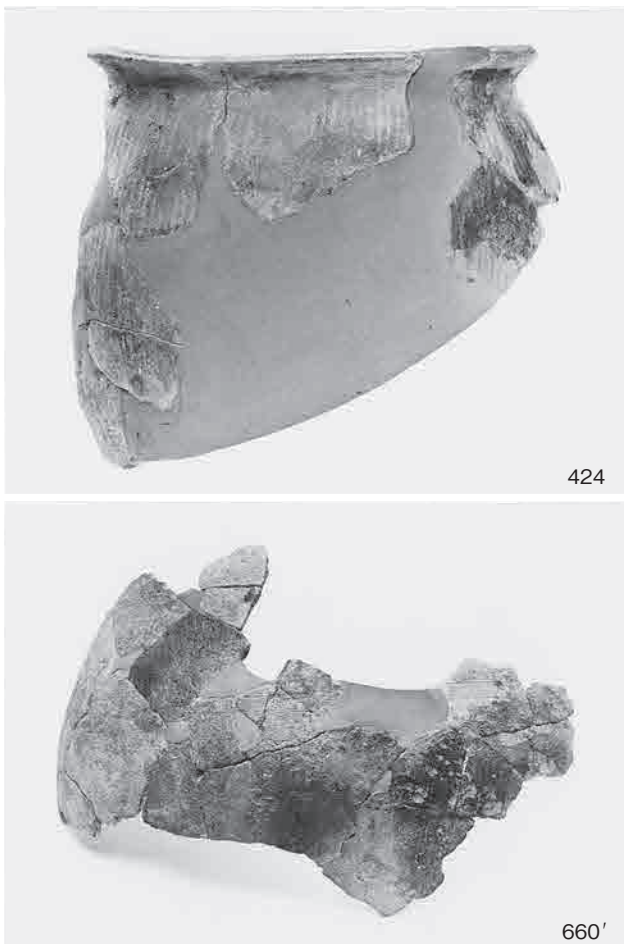
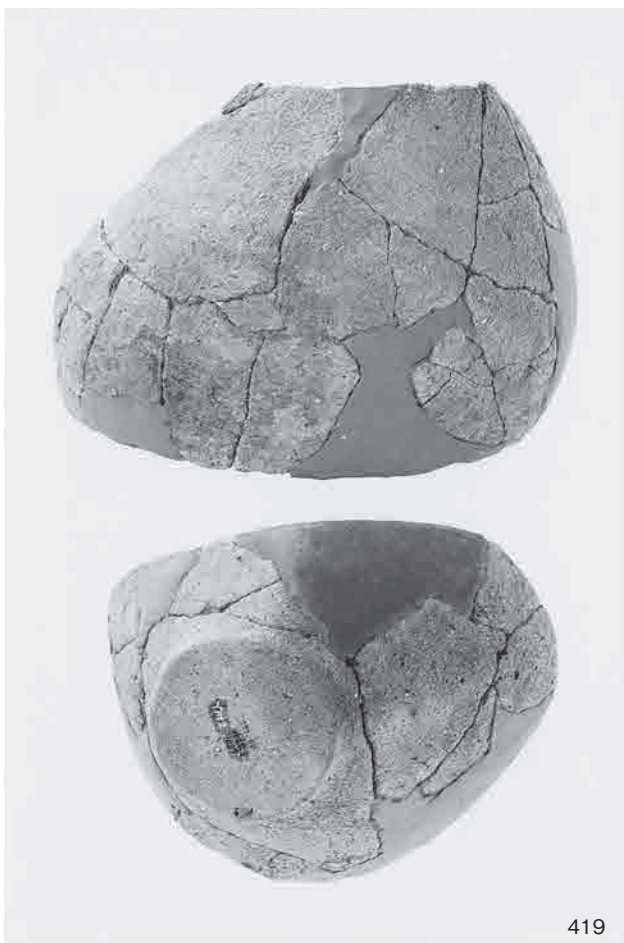


須恵器蛸壺



弥生土器 (1)

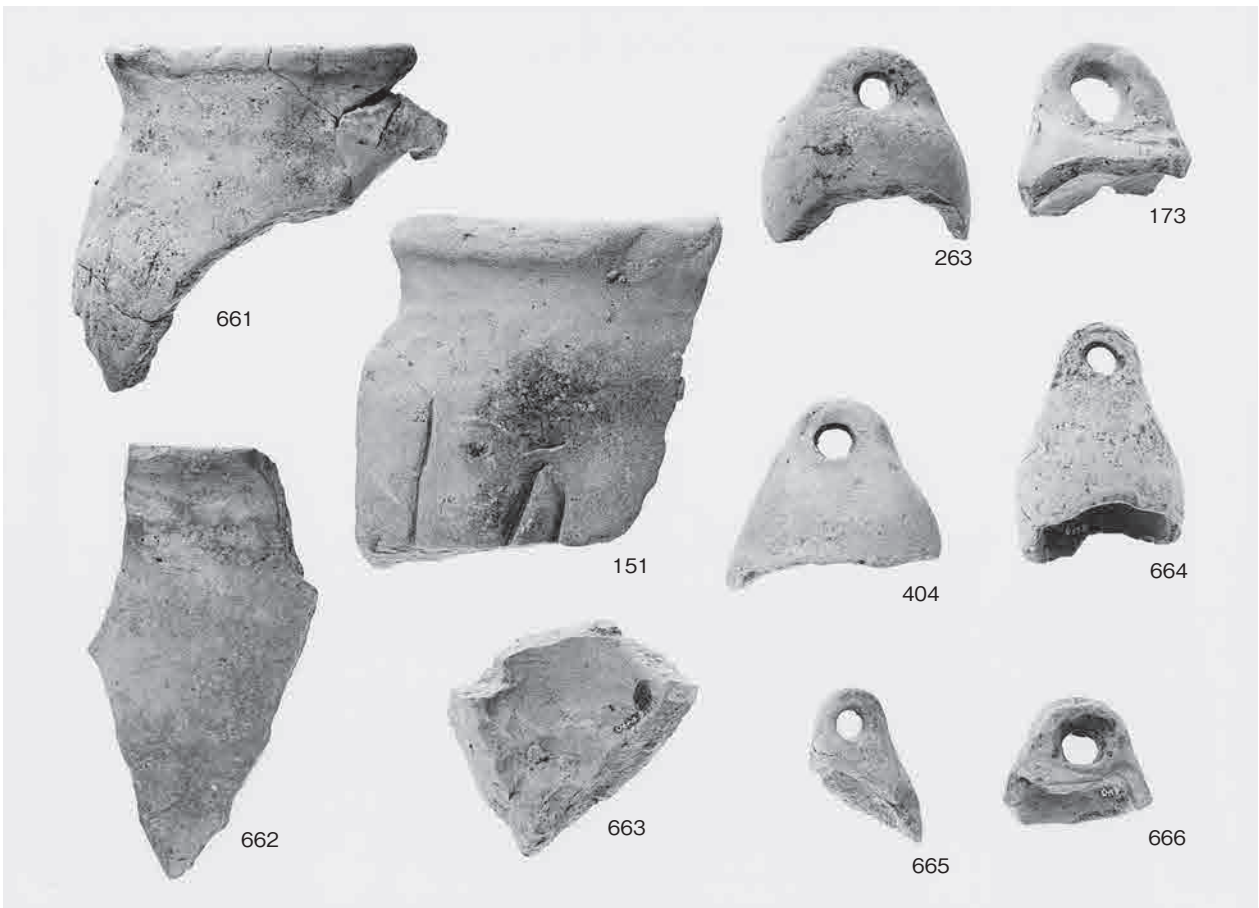




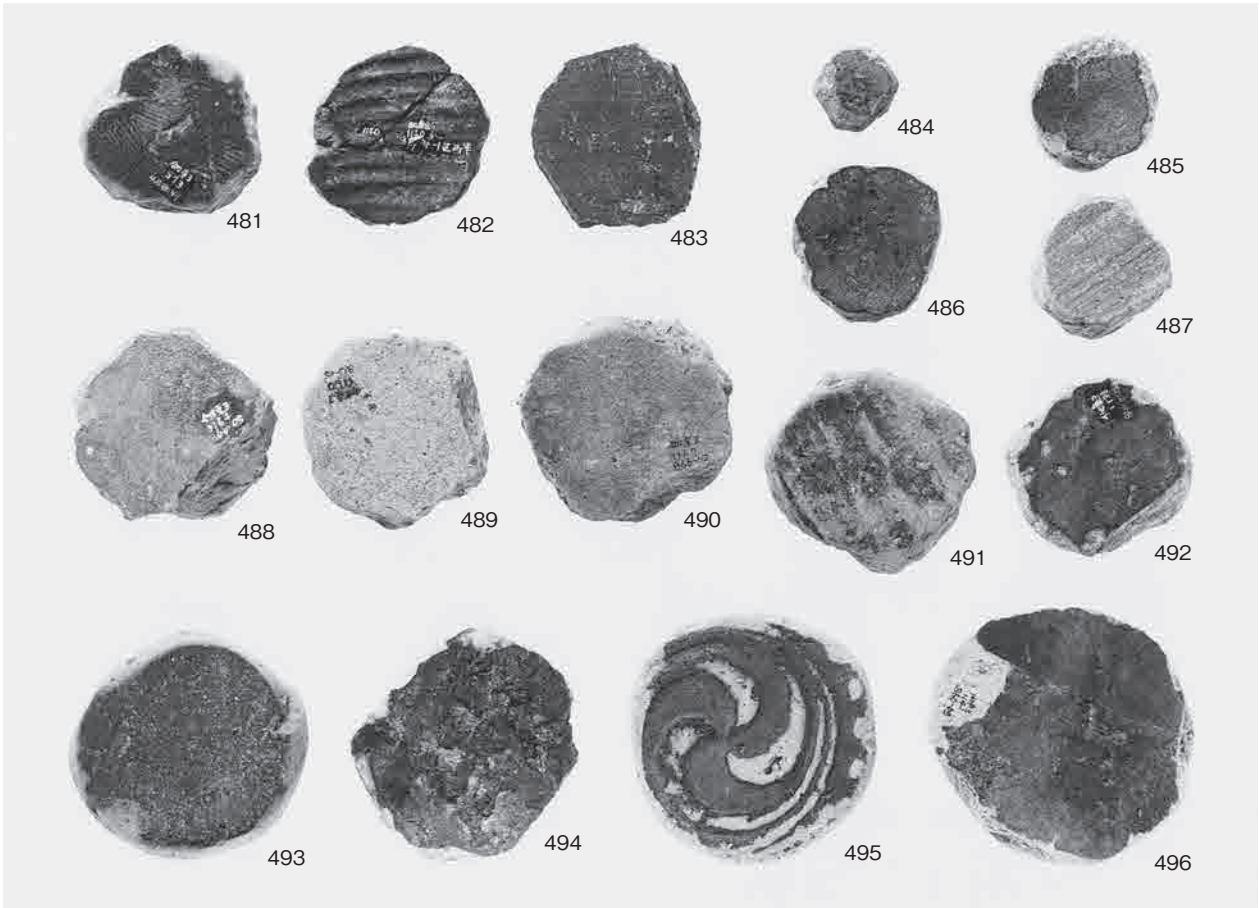
弥生土器 (3)



弥生蛸壺



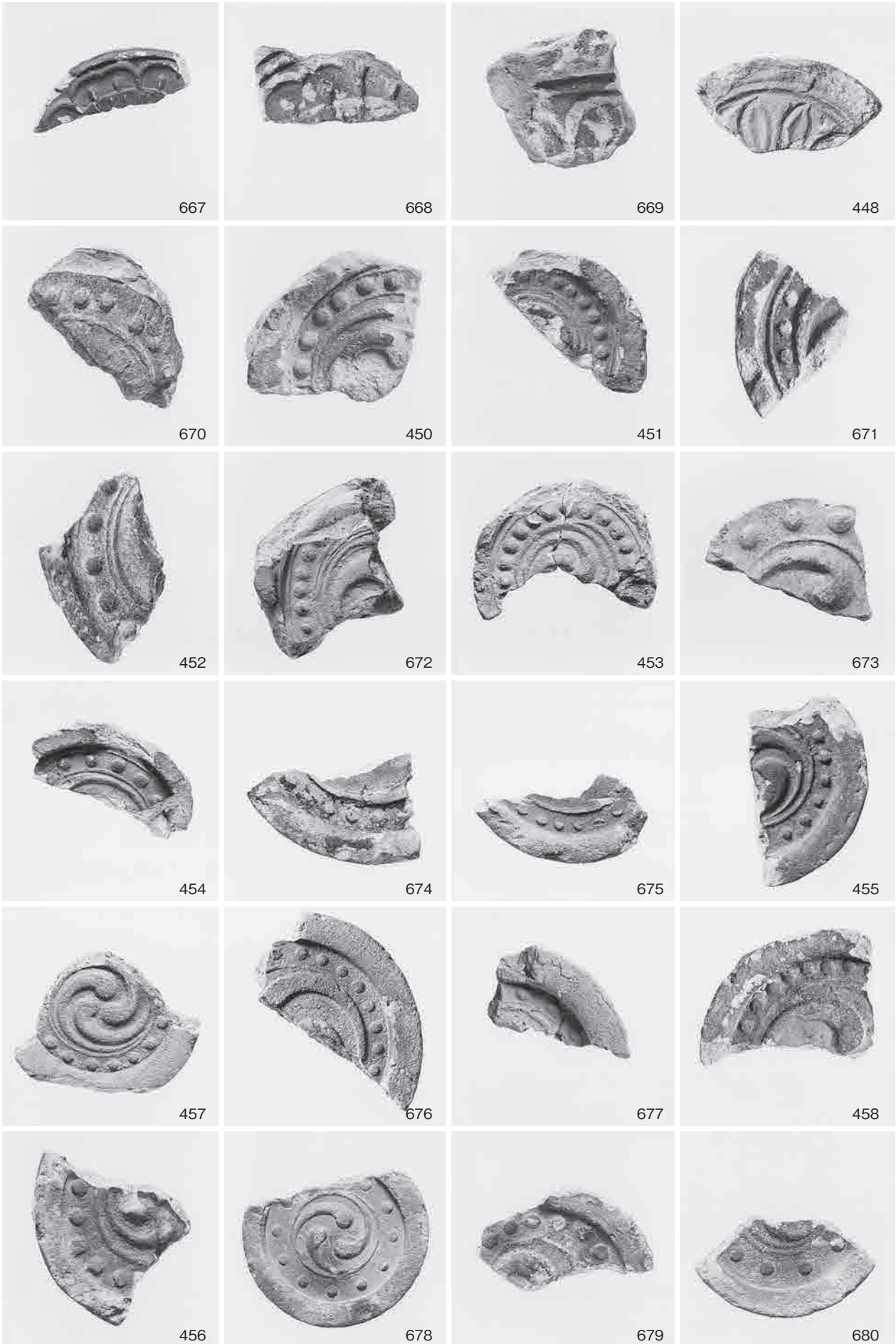
土師器蛸壺



円板状土製品



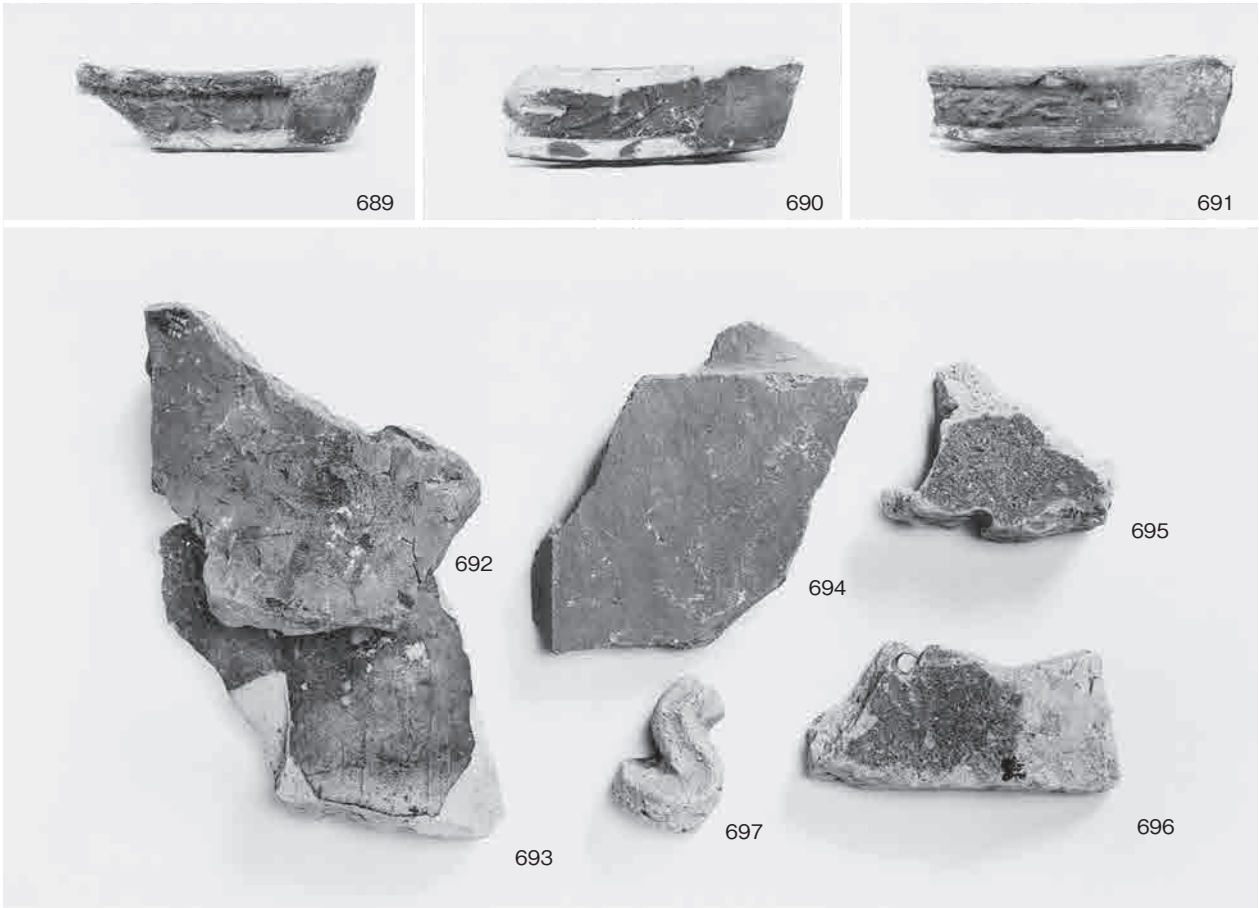
軒丸瓦 (1)



軒丸瓦 (2)



軒丸瓦 (3)、軒平瓦 (1)



軒平瓦 (2)、道具瓦他



478、698~707

丸瓦 (1)



708~721



477、722~726

丸瓦 (2)



727~731



479、480、732、733



734~738

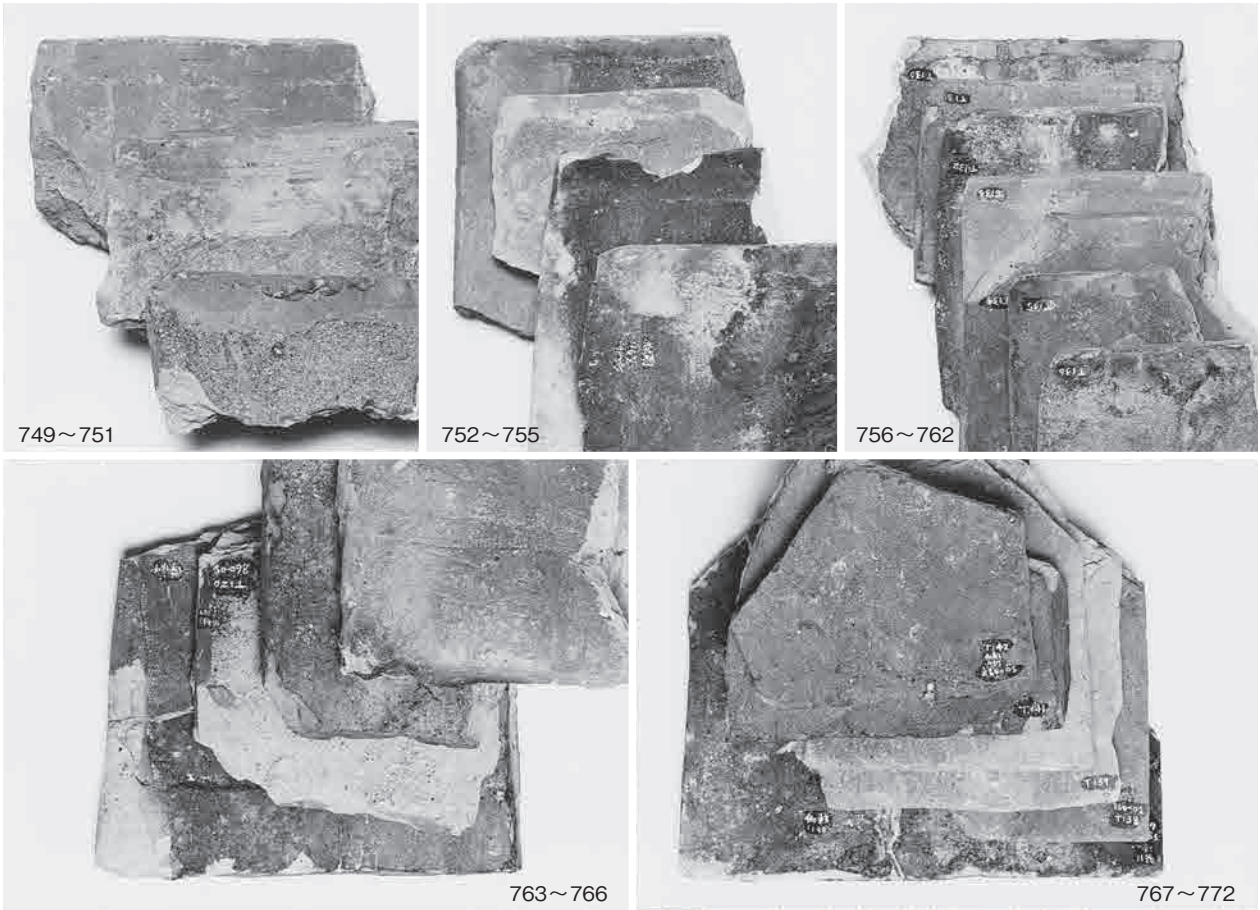


739~743

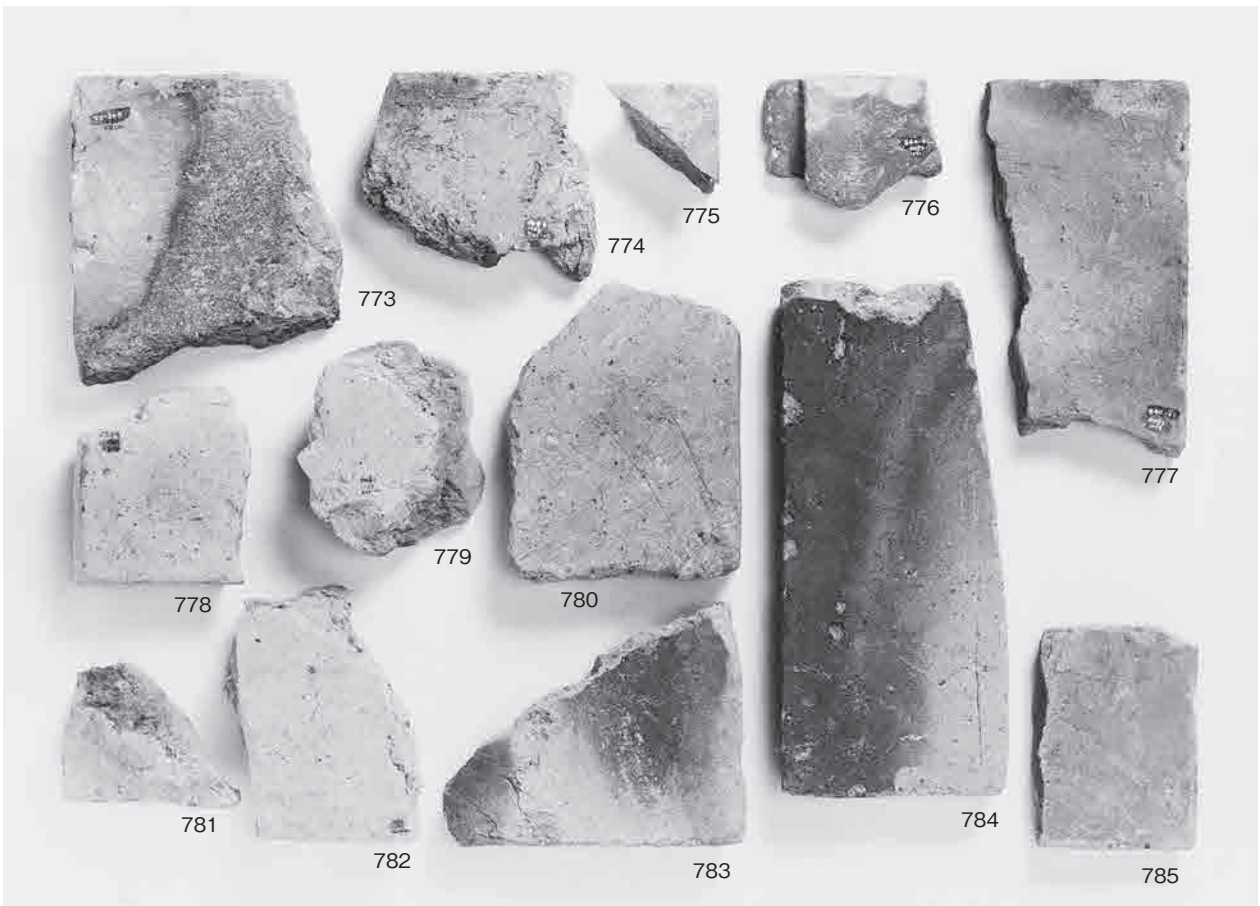


744~748

平瓦 (1)



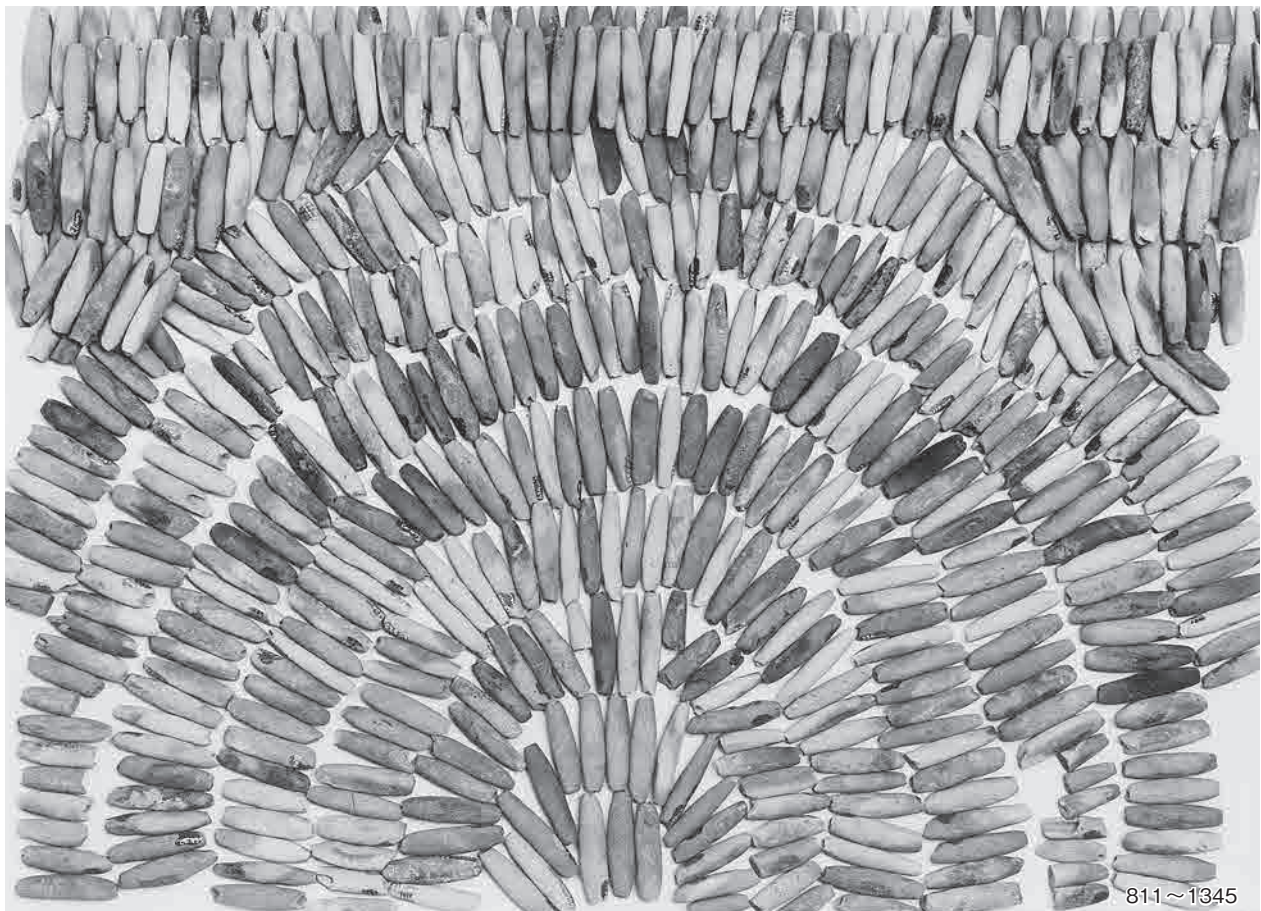
平瓦 (2)



博



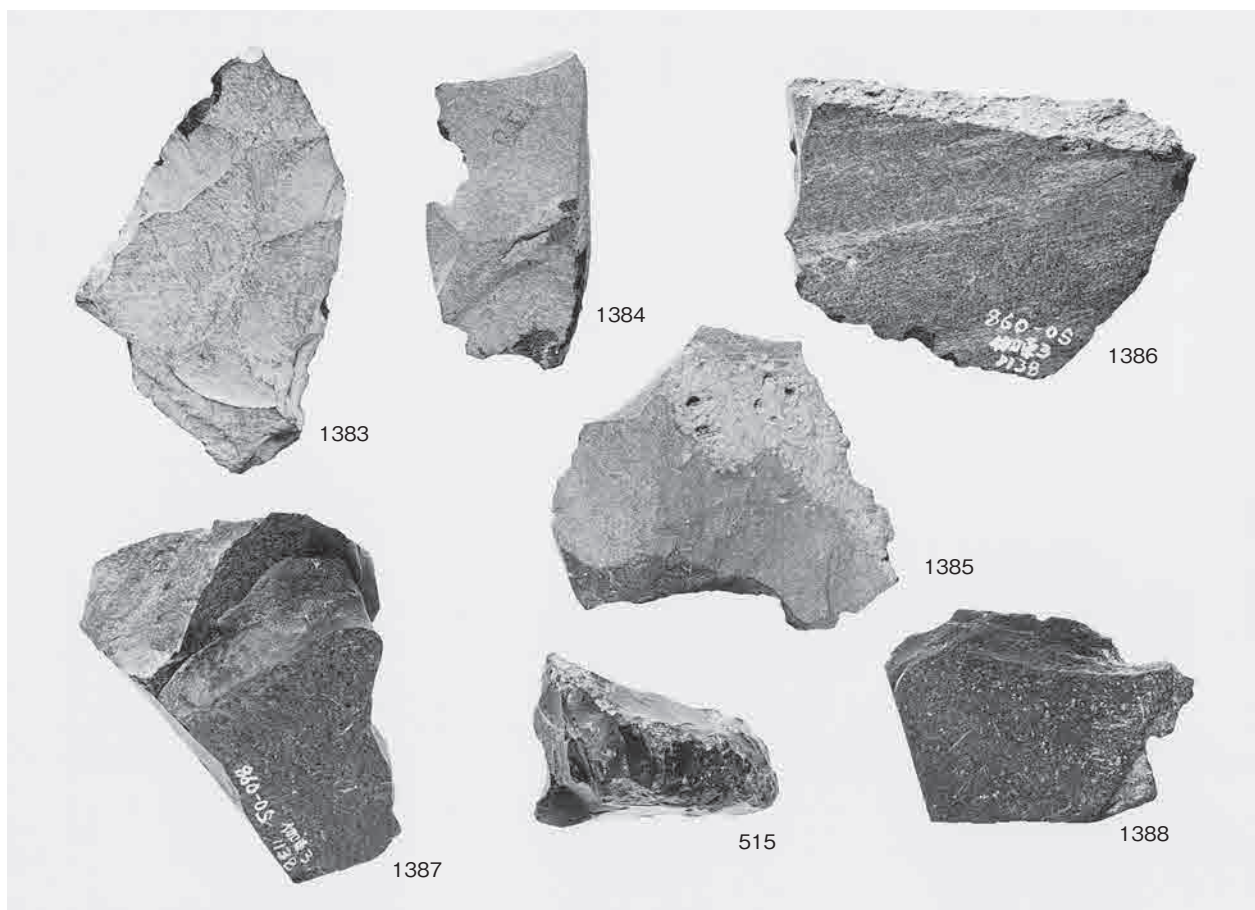
土錘 (1)



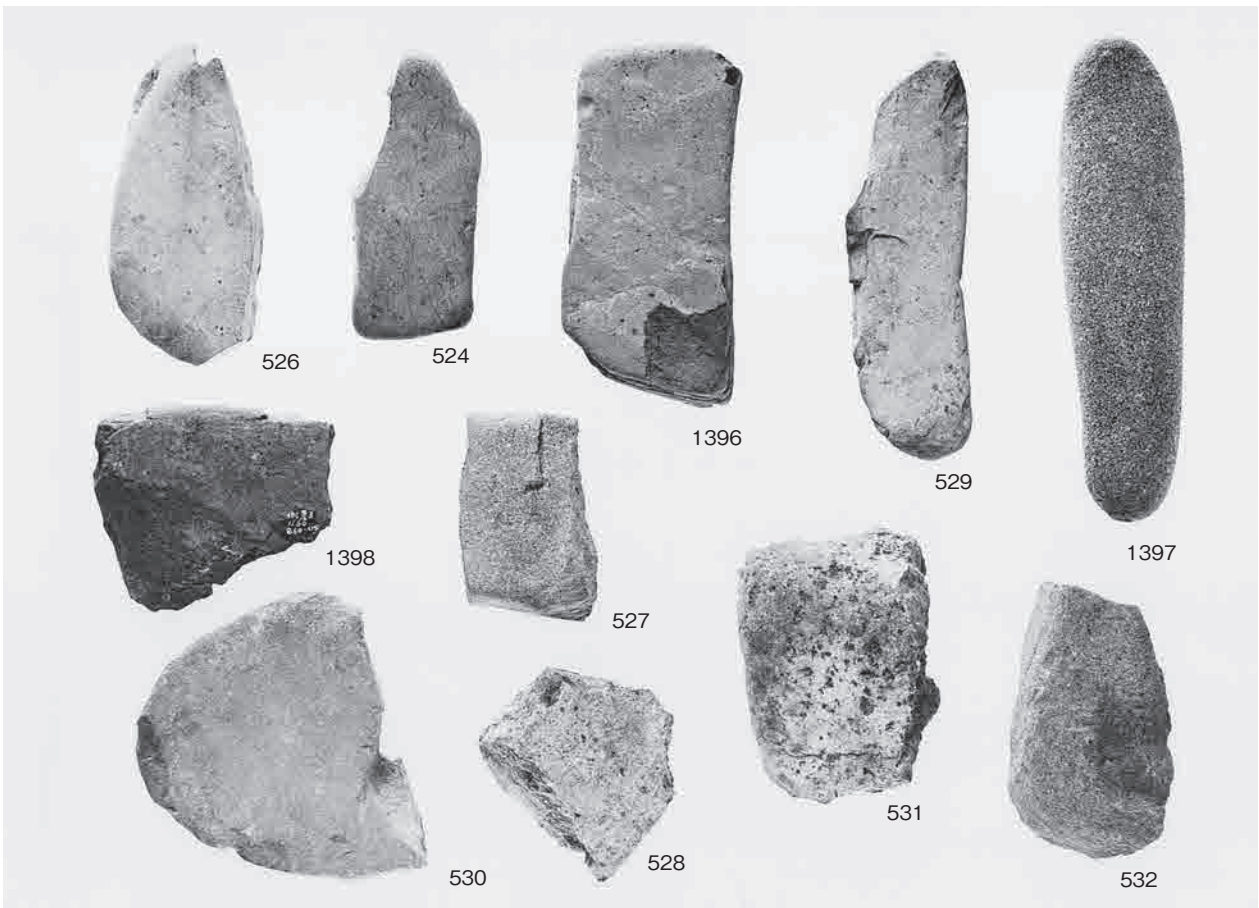
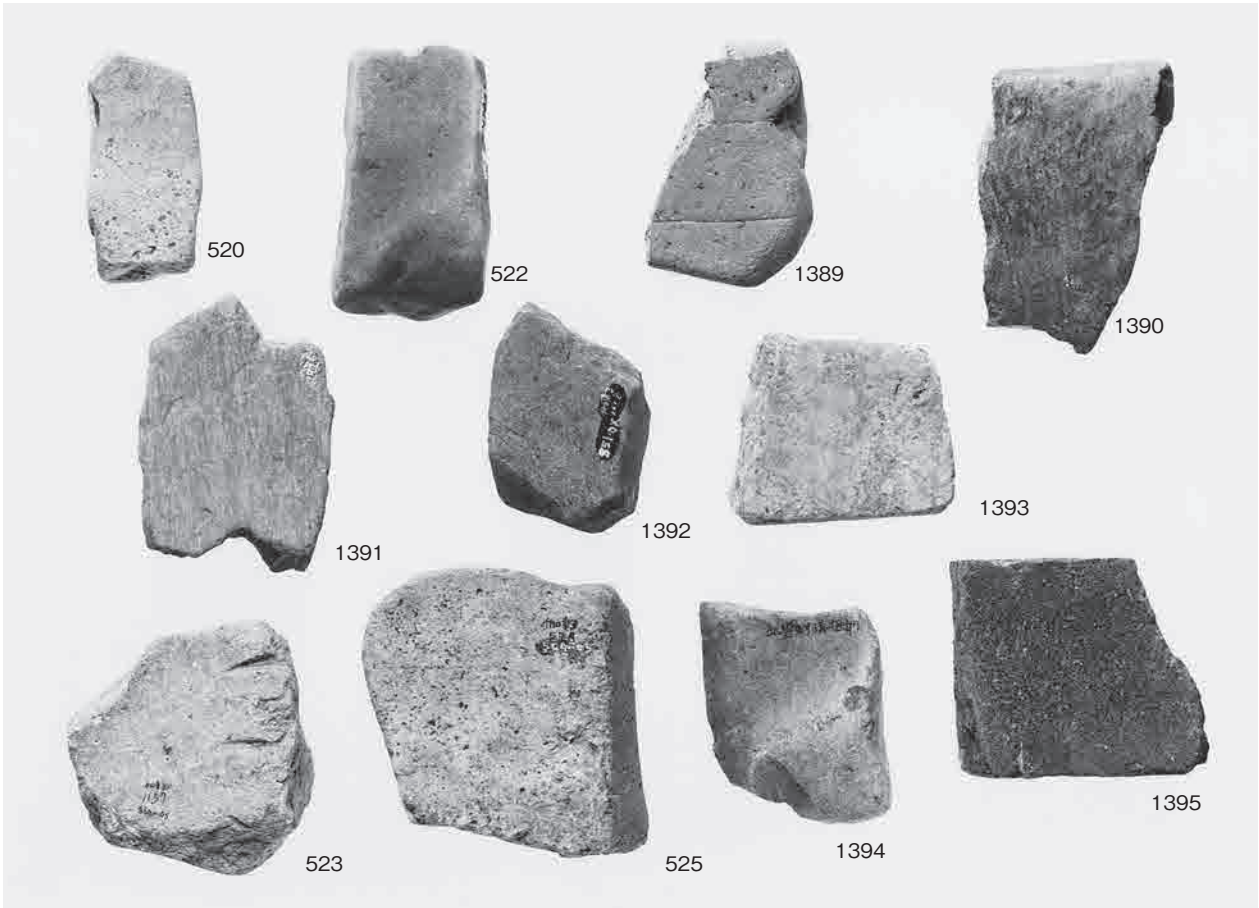
土錘 (2)



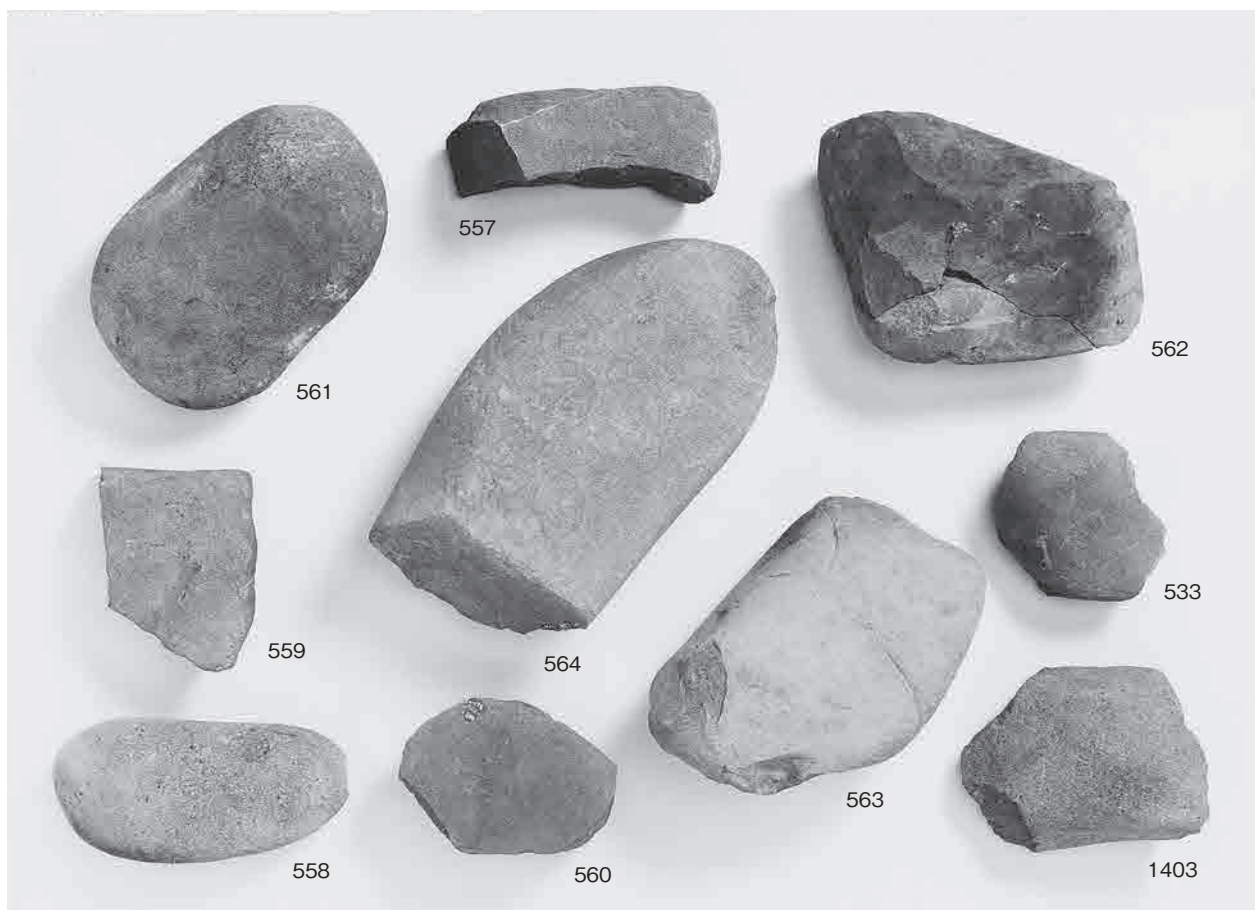
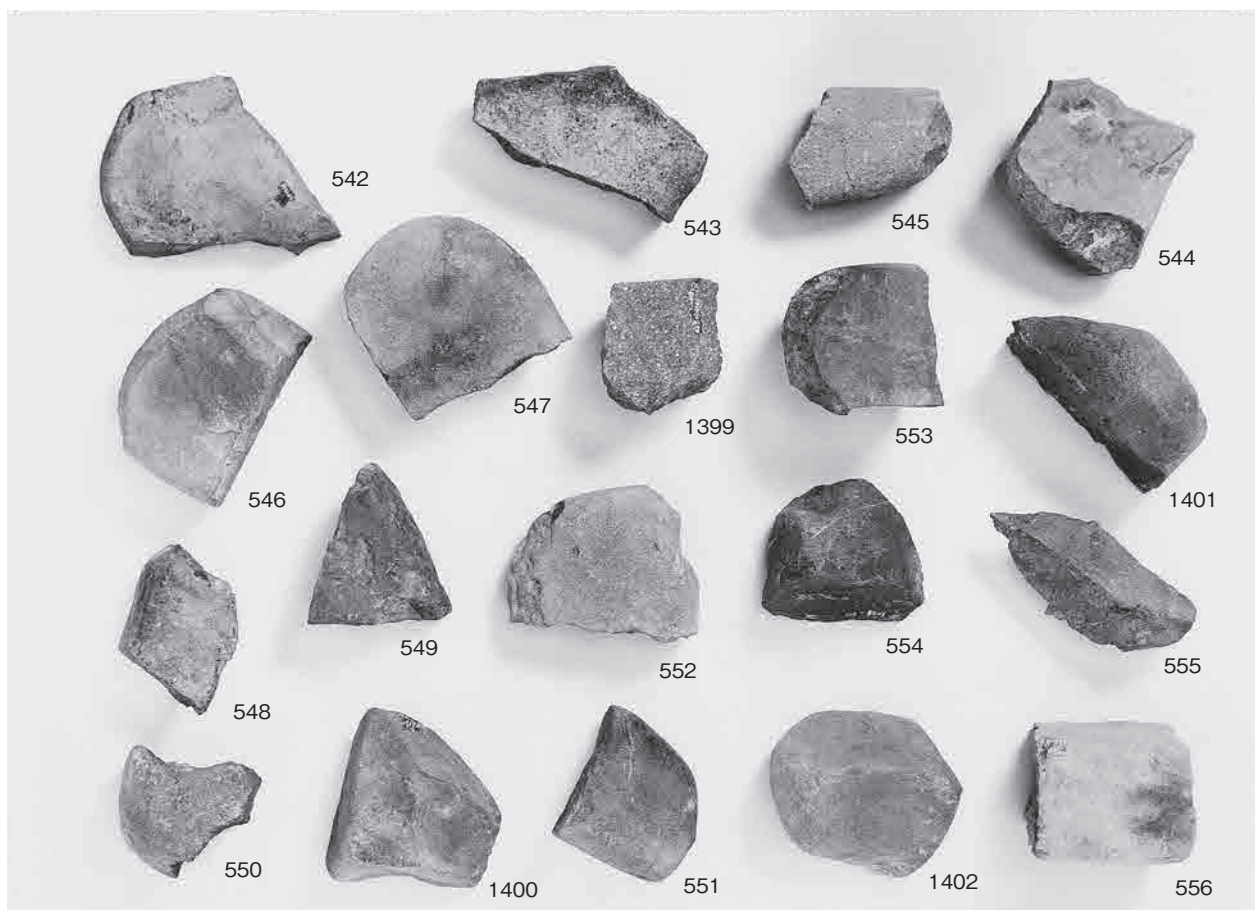
土錘 (3)



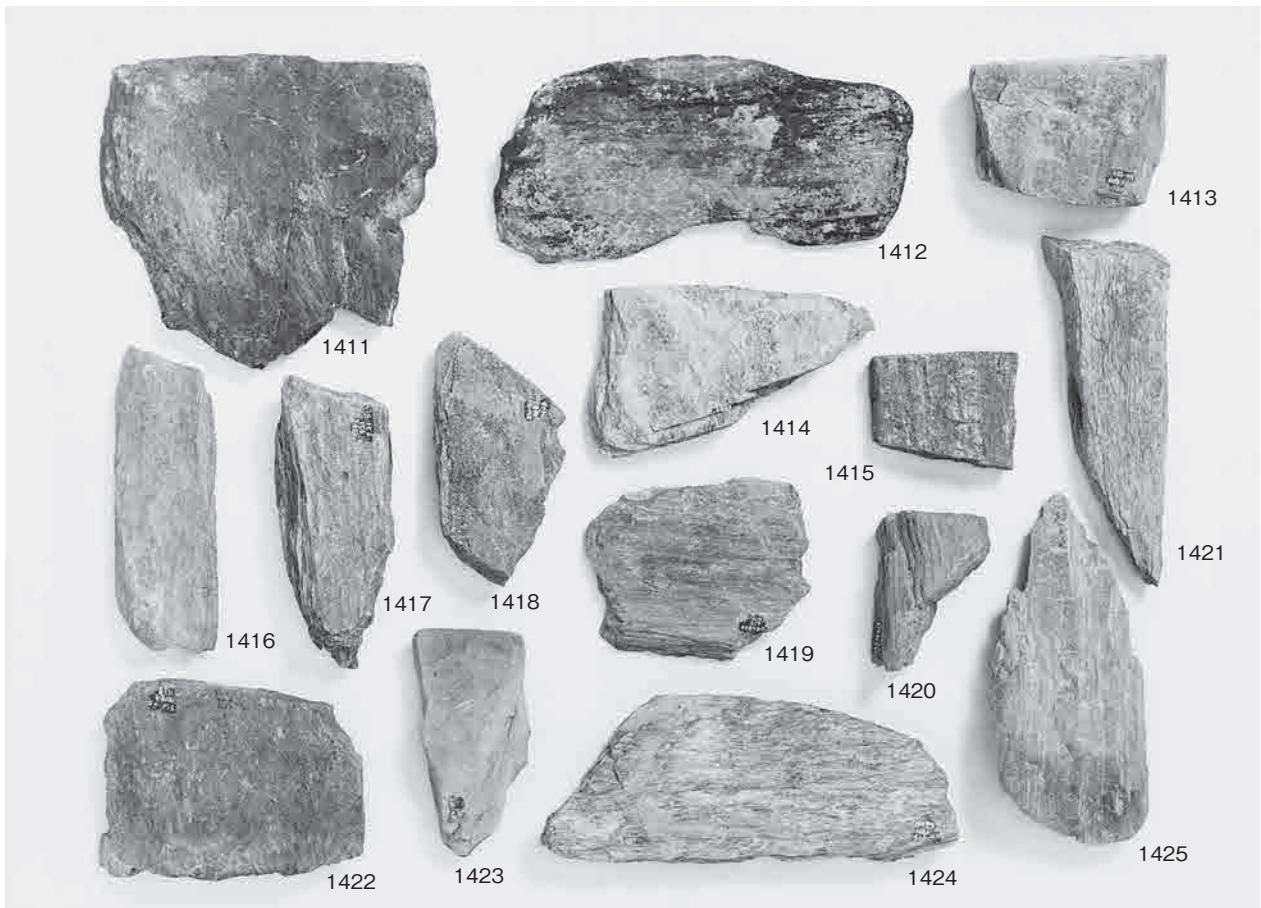
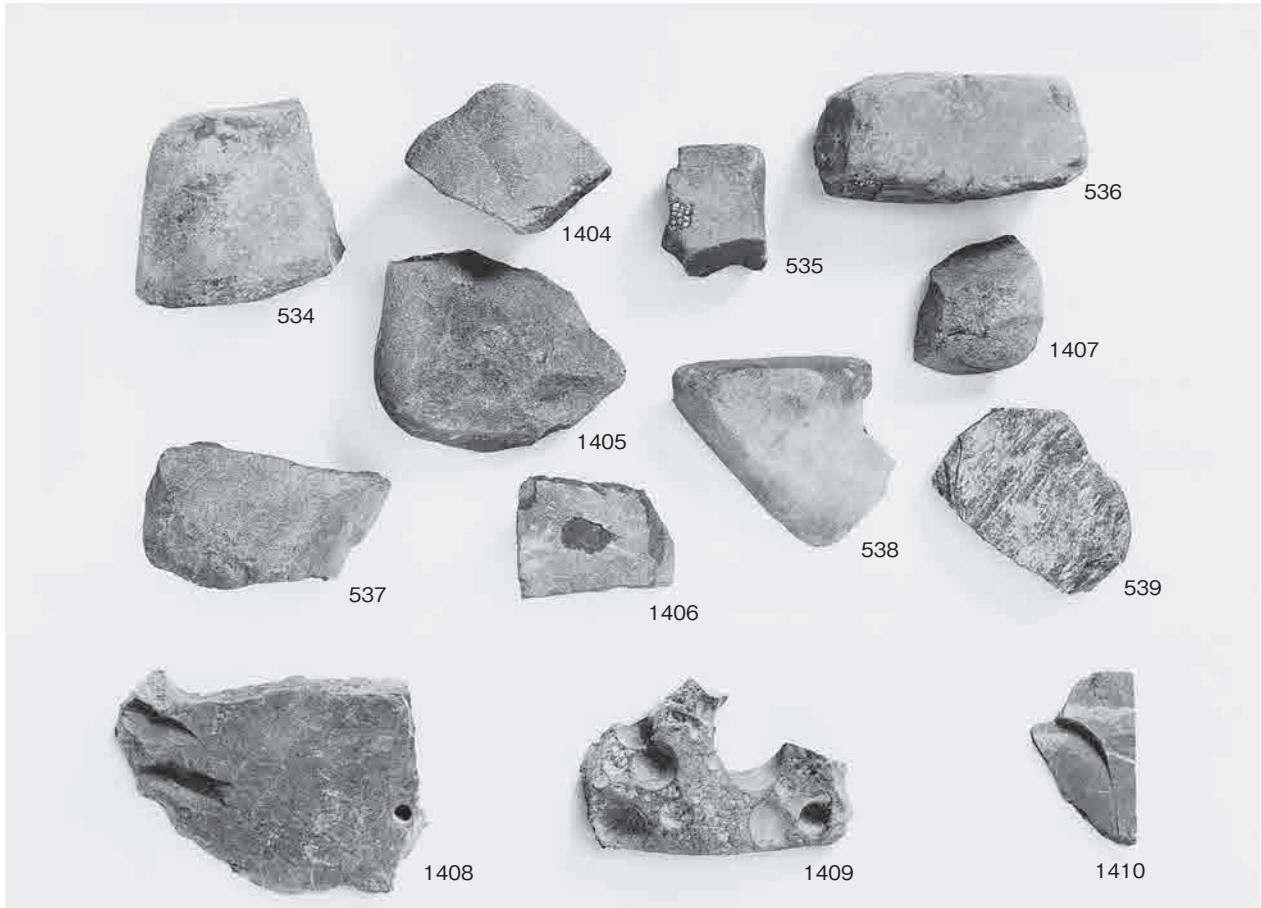
サヌカイト他



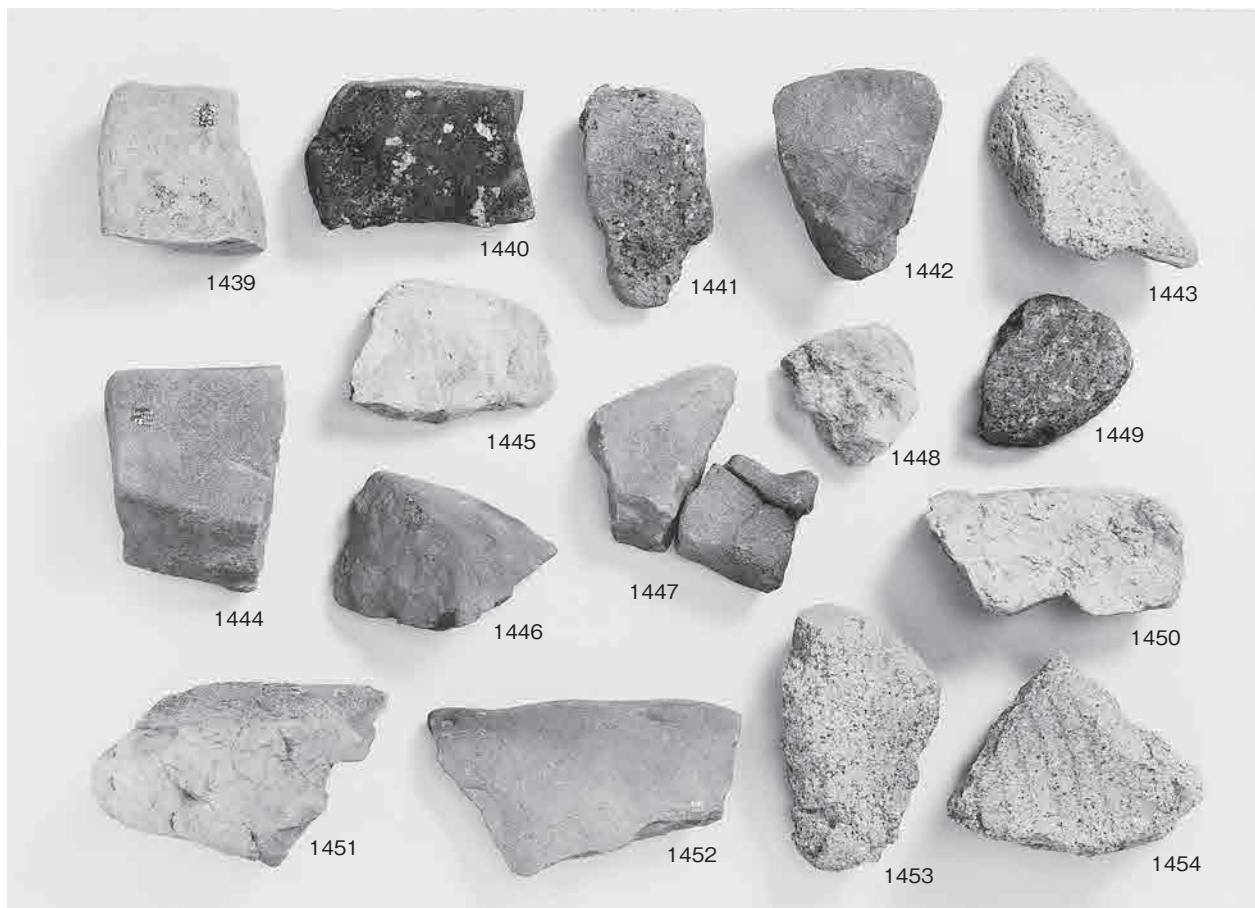
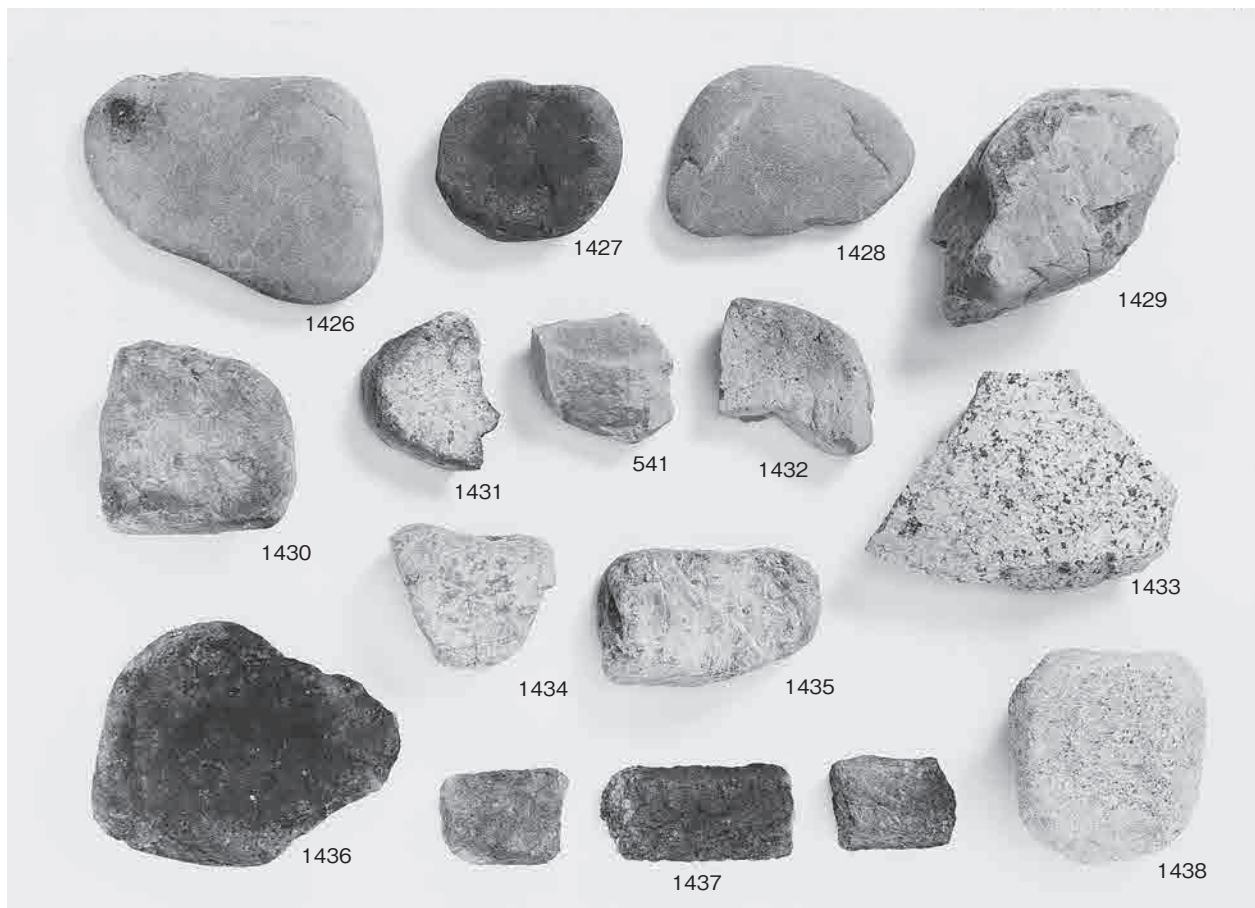
砥石他 (1)



砥石他 (2)



砥石他 (3)



砥石他 (4)



1 トレンチ 南壁断面 (北西から)



1 トレンチ 第1面 検出状況 (西から)



1 トレンチ 19土坑 断面 (北から)



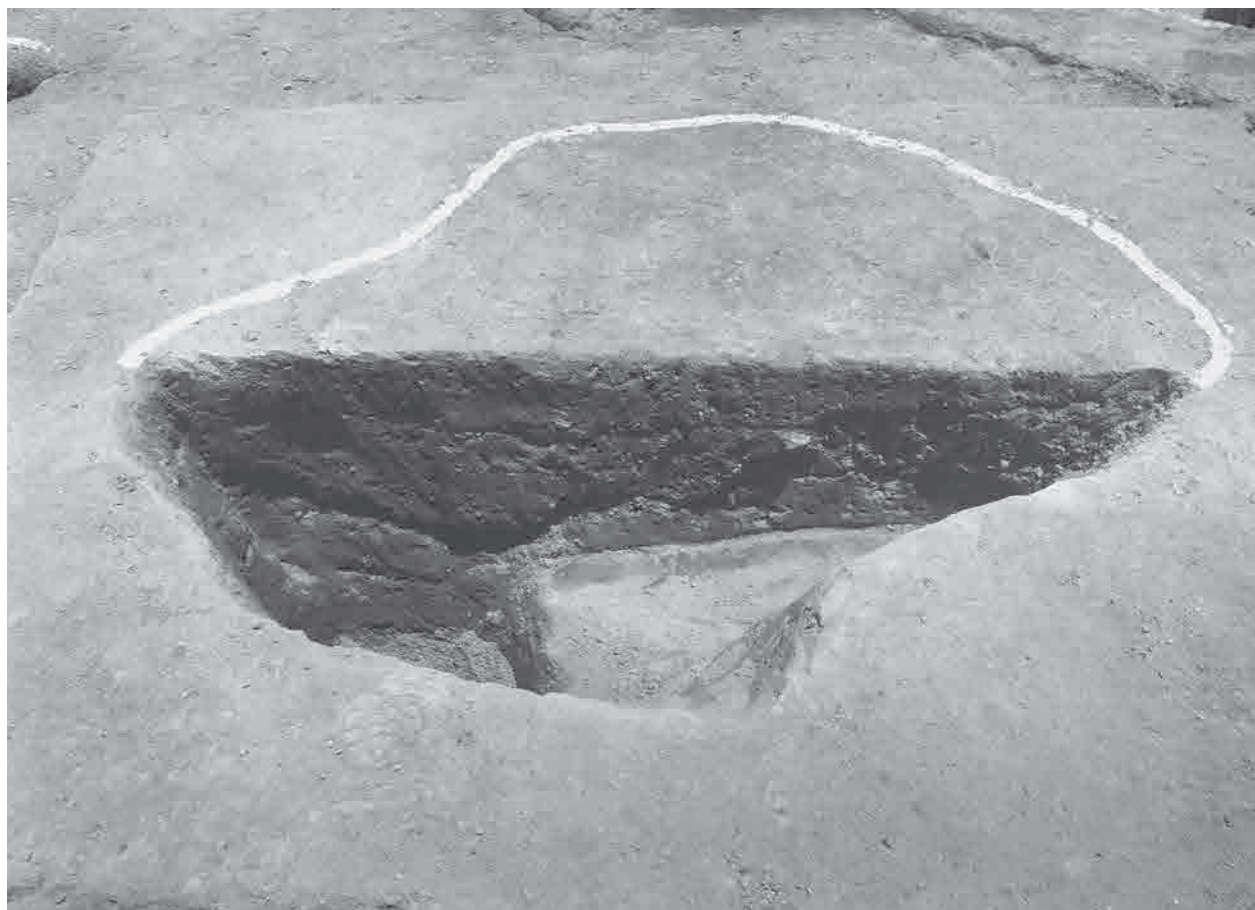
1 トレンチ 第3面 21土坑 完掘状況 (南西から)



2トレンチ 北壁断面 (南東から)



2トレンチ 第1面 全景 (東から)



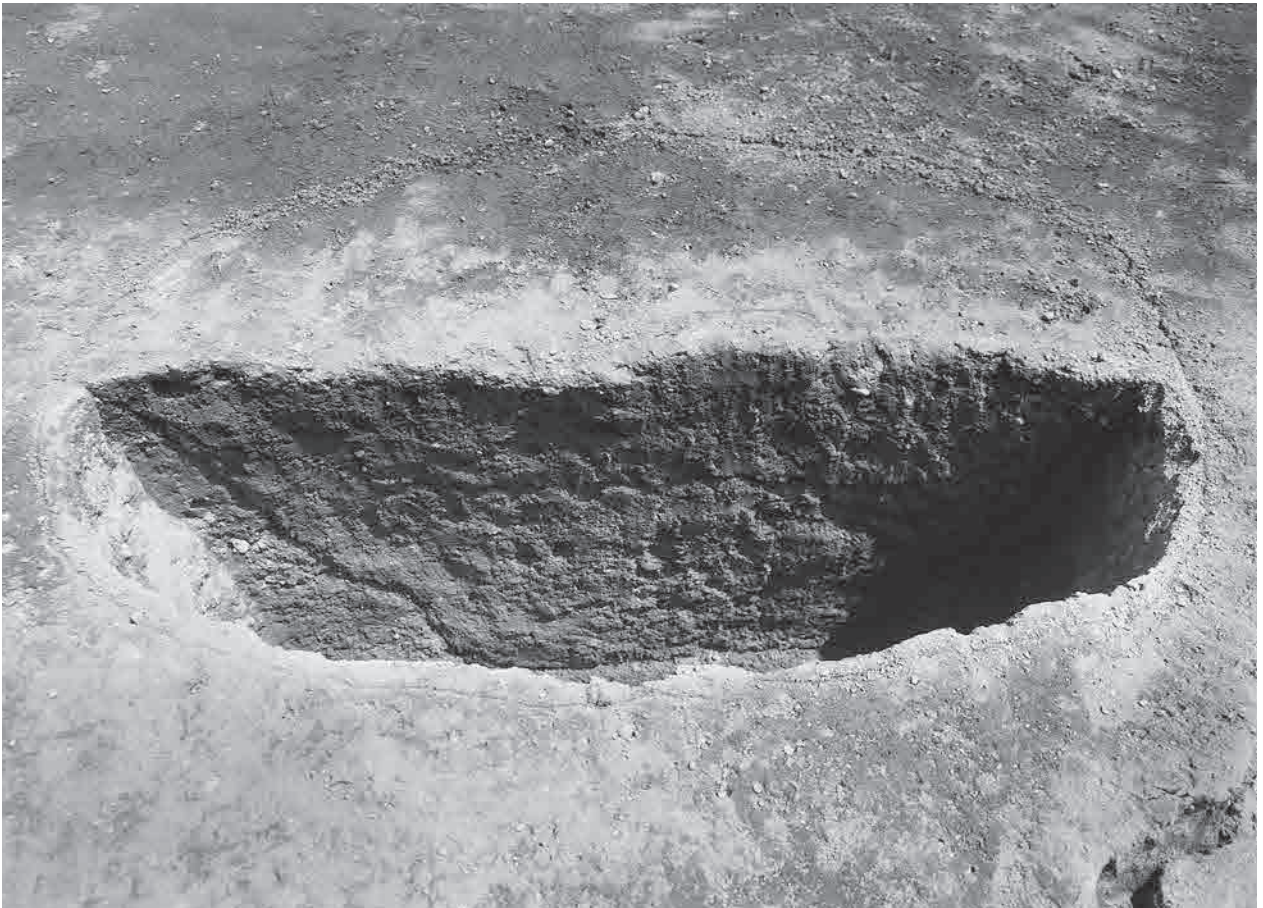
2トレンチ 第1面 1土坑 断面（南西から）



2トレンチ 第1面 2土坑 断面（北から）



2トレンチ 第1面 6土坑 断面 (東から)



2トレンチ 第1面 7井戸 断面 (南から)



2トレンチ 第1面 11井戸 断面 (南西から)



2トレンチ 第1面 11井戸 大甕検出状況 (南西から)



2トレンチ 第1面 11井戸 大甕検出状況（南西から）



2トレンチ 第1面 12土坑 遺物出土状況 (南西から)



2トレンチ 第2面 全景 (東から)



2トレンチ 第2面 10ピット 遺物出土状況（南西から）



2トレンチ 第2面 13井戸 羽釜検出状況（南西から）



2トレンチ 第2面・第3面 (東から)



2トレンチ 第3面 17溝 断面 (北西から)



2トレンチ 第3面 18溝 検出状況 (南から)



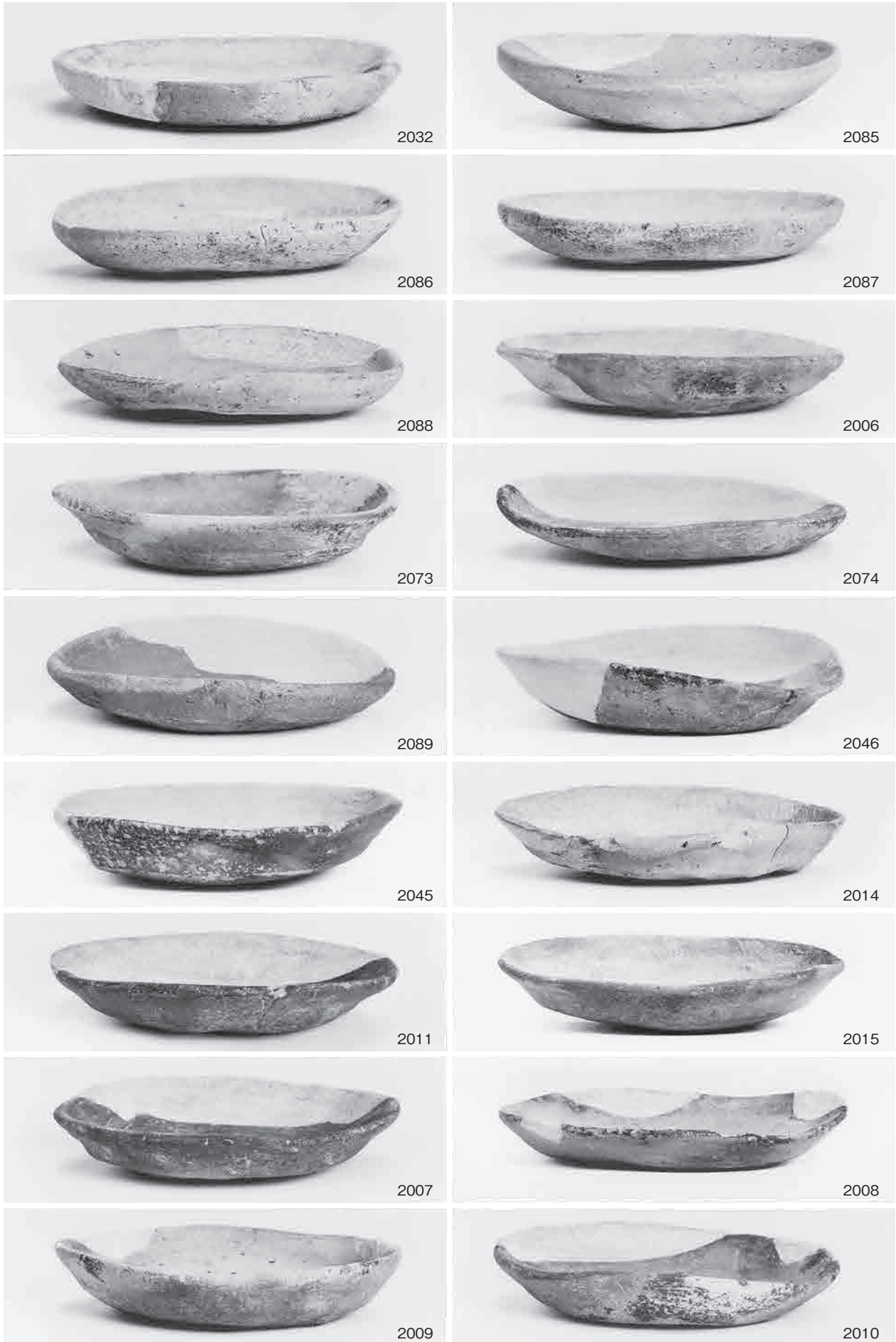
2トレンチ 第3面 18溝 遺物出土状況 (南から)



2トレンチ 第3面 18溝 遺物出土状況 (南から)



2トレンチ 第3面 18溝 断面 (南から)

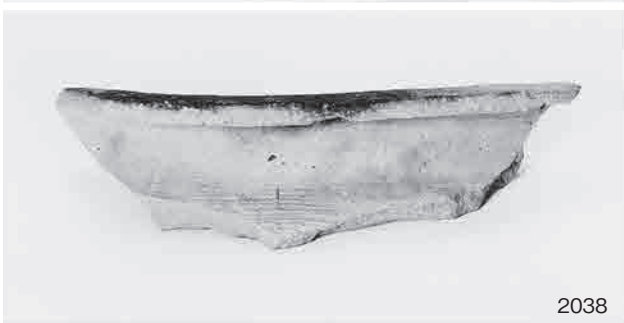


出土遺物 (1)

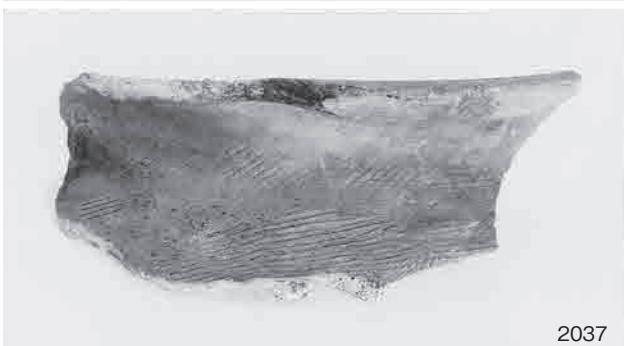




2030



2038



2037



2039



19土抗出土遺物



2084



2099



2101



2100

出土遺物 (4)

報 告 書 抄 録

ふりがな	きやらばしいせき 3							
書 名	伽羅橋遺跡 III							
副 書 名	都市計画道路高石北線整備事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター 調査報告書							
シリーズ番号	第136集							
編著者名	橋本高明・村上富喜子・井藤暁子・河端 智・黒田慶一・奥田 尚							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所 在 地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 TEL. 072-299-8791							
発行年月日	2005年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きやらばしいせき 伽羅橋遺跡 ・ きやらばしひがしいせき 伽羅橋東遺跡	おおさかふ 大阪府 たかいしし 高石市 たかしのはま 高師浜 ちょうめ 1丁目	27225	3 ・ 4	34° 31' 40"	135° 26' 12"	2001. 8. 8 } 2002. 1. 18 2004. 6. 18 } 2004. 8. 31	745 144	都市計画道路高石北線 整備事業に伴う工事
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
伽羅橋遺跡 ・ 伽羅橋東遺跡	墓 集落跡	弥生時代 中世	方形周溝墓 井戸 土坑 ピット 溝	弥生土器 須恵器 黒色土器 土師器 瓦器 羽釜 東播系須恵器 瓦 陶磁器		・砂堆上で方形周溝墓を3基検出 ・中世期の集落跡を検出		
要 約	<p>弥生時代においては、泉州地域の砂堆上で方形周溝墓を3基検出し、この付近に墓域が広がることを確認した。</p> <p>また、中世においては、建物として明確なまとまりは確認できないものの、ピット群が検出され、また周囲からは井戸・土坑、そして平行した溝等の遺構群が検出され、集落跡と考えられる。</p>							

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第136集

伽羅橋遺跡 III

都市計画道路高石北線整備事業に伴う発掘調査報告書

発行年月日 / 2005年9月30日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 明新社
奈良市南京終町3丁目464番地